銀河伝説―鋼鉄の咆哮―

C－62

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀河伝説―鋼鉄の咆哮―

【Ｎコード】
Ｎ４７７０Ｖ

【作者名】
Ｃ－６２

【あらすじ】
西暦２２０５年、新たなる侵略者に歴戦の名艦、宇宙戦艦ヤマトと修復竣工されたＳＤＦ－１　マクロスが立ち向かうが…

―プロローグ―（前書き）

初めまして、C―62と申します。このたび宇宙戦艦ヤマト　超時空要塞マクロス　機動戦士ガンダムシリーズのクロス小説を書く事になりました。
はっきり言ってどうなるのか作者次第ですので、気長に楽しんでいただければ幸いです。
それではお楽しみ下さいませ。

―プロローグ―

無限に広がる大宇宙…
そこは様々な生命に満ち溢れる世界…
我々の地球もまた、そのほんの一部に過ぎない…

２２世紀末以来、度重なる異星人の侵略を宇宙戦艦ヤマトの活躍によって退けた地球は今、繁栄の一途をたどっていた。

だが、史上最大最強の侵略者がその魔の手を伸ばしつつある事を人類は今だ知らない…

時に西暦２２０５年６月…
地球の守護神宇宙戦艦ヤマトと修復新造されたＳＤＦ―１マクロスが新たなる侵略者に立ち向かう！そしてニュータイプ部隊として知られるロンド・ベルと協力して戦う彼らの運命は！

第1話―ミステリアス・プレート―（その1）

―A．D．２２０５　６．１　１５：００　火星空域　ヤマト第１艦橋―

西暦２２０５年、宇宙戦艦ヤマトは艦長　古代進の指揮の下、第３輸送船団護衛艦隊旗艦として、太陽系から４．３光年離れたアルファ・ケンタウリ星系第４惑星リンボスからの帰途についていた。

「火星空域を通過した。相原、地球連邦軍本部に打電してくれ、“我が艦隊は明日ＡＭ１１：００に帰還予定”とな。」

「了解…でも古代さん、連絡先はそこだけでいいんですか？何か大事な所を忘れてません？」

通信班長の相原義一の一言で、古代はいぶかしげな表情で彼に聞いていた。

「何だ？他に連絡するところってあるのか？」

「とぼけないで下さいよ！大事な婚約者の所でしょーが！」

「お前なぁ…口を開けばそればかり！少しは自分のを心配しろっての！」

第1話―ミステリアス・プレート―（その2）

古代の発言で、第１艦橋の中は笑い声で満ち溢れていた。勿論、古代としても婚約者である森　ユキの事を忘れていた訳ではなく、この航海を最後に輸送船団護衛艦隊から、地球本星第１軌道艦隊に配置換えされのを機会に気持ちの整理をしておこうとあえて触れていなかった。

それよりも気になるのはリンボスで発見された一枚の古いプレートの事であった。そのプレートはリンボスの科学者から言わせると、かなり古い物で少なくても５０万年以上の物で、その頃にはすでに文明が栄えていたのではないかとの事だ。

（もしこれが事実ならば、人類の歴史を変える物かもしれない…とにかく科学局の真田さんに見てもらえば何か分かるかもしれない…）

古代がそう考えていると隣の操縦席にいる航海班長の島　大介が話かけてきた。

「おい古代、どうしたんださっきからボーっとして！さては愛しいユキちゃんの事でも考えてたのか？三ヶ月ぶりに顔を合わせるんだ、さてはアノ事でも…」

「お、おい島～！お前まで俺をおちょくるのか～！」

古代の発言で再び第１艦橋の中は爆笑の渦に満ち溢れていた。

第1話―ミステリアス・プレート―（その3）

―同日　同時刻　東京　連邦軍本部―

その頃、森　ユキは連邦軍本部で忙しく仕事をこなしていた。ここ最近は地上勤務に専念しており、以前のように宇宙に出ることもなかったものの、それでも三ヶ月おきに帰って来る古代とは順調に愛を育み、この一週間後には念願だった結婚式を挙げることになっていた。

そんなユキの後ろからいつもの如く、アナライザーがそっと近づき盛大に彼女のスカートをめくっていた。

「ちょっとアナライザー！いい加減にしてよ～っ！ここは司令部なんだからそういう事止めてって何度も言ってるでしょ～が～！」
「イヤーユキサン今日モ一段トオキレイデ！」
「ダメよアナライザー！そんなとぼけた事言っても無駄よムダ！」
「アッソウデスカ！人ガセッカクイイ話ヲ持ッテキタノニ聞キタクナインデスカ？」

アナライザーが親切心でユキに何か言い出しそうになった時、彼女は先手を打って先に切り出していた。

「もうとっくに知ってるわよ！ヤマトが明日の午前中に帰還するんでしょ？私が何年この仕事していると思ってんの！」
「……ハァ～アナタノ仕事ブリニハ参リマシタ…」

アナライザーそれだけ言うとすごすごとその場を離れ、その様子をユキはクスクス笑いながら見送りながら考えていた。

（いよいよ明日、古代君が帰ってくる…早く顔が見たい…）

第1話―ミステリアス・プレート―（その4）

―A．D．２２０５　６．２　１１：００　東京湾上連邦軍宇宙港―

翌日、ヤマトを含む護衛艦隊は定時に東京湾上の連邦軍宇宙港に着陸していた。
到着ゲートにはすでに大勢の人々が出迎えに来ており、ユキも古代の姿が現れるのをひたすら待ちわびていた。

（遅いなあ…艦長だからいつも最後に降りて来るのは分かるけど、たまには真っ先に降りて来てくれてもいいのに…）

ユキがそう思っていると後ろから誰かが彼女の肩を叩いてきたので振り向くとそこにはクローディア・ラサールと早瀬　未沙が立っていた。

「あら、どうしたの？あなたの大事な彼氏、まだ降りて来ないの？」
「あ、クローディアさん、それに未沙も…ひょっとして今から南アタリア島に？」
「ええ、本部での最後の打ち合わせが終わったので今から行くんです。」
「まあ、もっともあのタヌキ親父艦長は本部のお偉方と今夜は飲み会だろうけどもね！」

クローディアの発言で一同が笑い声を上げているところに古代がようやく姿を現していた。

「古代君！お帰りなさい！」
「ただいまユキ！あ、それにクローディアさんに早瀬君もお久しぶ

りです！」
「お疲れ様古代君！久しぶりに会うけど相変わらずね！それよりも今夜はたっぷりユキと二人、たっぷりお楽しみなさい！じゃあね～～！」
そう言うとクローディアは未沙を連れて真っ赤になった二人を置いてさっさとその場を後にしていた。

「クローディアさん、言うだけ言ってさっさと行ってしまった…全く余計な事言って…」
「そ、そうよね～変に気を使っちゃって…」

第1話―ミステリアス・プレート（その5）

―同日　１１：３０　地球連邦科学局―

それから３０分後、古代とユキは科学局にいる真田　志郎を訪ね、リンボスの科学者から預かっていたプレートを彼に手渡していた。

「どうでしょう真田さん、このプレートを見て何か感じませんか？」
「いや…特に何も感じないが…何か気になるのか古代？」
「ええ…リンボスの科学者はただの過去の遺物だと言ってましたが、僕には何か引っ掛かるものがあって…もしかしたら何かのメッセージじゃないかと…以前にも似たような事がありましたよね、イスカンダルのスターシャさんやテレサ…それに二年前の水惑星アクエリアスの存在を記した石版など…」
「ちょっと古代君、それはいくらなんでも考え過ぎよ！これはただの遺物にしか見えないじゃないの？」

古代の発言に横からユキが口を出していた。実際四年前にも宇宙の彼方からメッセージが入り、古代達ヤマトクルーは命令を無視してまでヤマトを発進させたのであった。

「まあユキの言う通りただの遺物かもしれないしな…あまり考え過ぎると熱が出るぞ古代…とにかくこれは俺が預かっとくから後は任せろ。それより古代、せっかく帰って来たんだ、少しはユキにサービスしたらどうなんだ？そのうちユキに愛想尽かされるぞ！」
「さ、真田さ～ん！？あなたまでそんな事言うんですか～～～！」

第1話―ミステリアス・プレート―（その6）

―同日　１３：２５　横浜中華街“明謝楼”―

それから約2時間後、古代とユキは横浜中華街のレストラン“明謝楼”で食事をとっていた。ここは二人がデートする時に決まって立ち寄る場所の一つであった。ひとしきり食事も終わり、この店のオーナー夫婦が食後のデザートを持って二人の前にやって来た。

「古代さん、ユキさん、いつもこの店をご利用いただきありがとうございます！いかがでした今日の料理は？」

「ええ、とても美味しくいただきました。……それより今日は娘さんのミンメイさんは？いつもなら真っ先に姿を見せるはずなのに？」

古代が不思議そうに尋ねるとオーナーは慌てふためきながら

「あ、すいません！ちょっと奥の方が忙しいので私はこれで…」

と、そそくさと奥の方に向かって行った。

オーナーが奥へ行ったのを確かめたその妻は小声で古代とユキに説明していた。

「実は…三ヶ月前に私達と喧嘩して家を出ちゃったんです…それも、“歌手になりたい、ミス・マクロスコンテストに応募して最終選考に合格したからそれに出たい”なんて言って…それを聞いた主人は手がつけられないくらい怒りまくって…私も考え直すように言ってその場を何とか納めたら…その夜置き手紙を置いて家を出ちゃったんです…」

「え…それで今何処にいるか心当たりはあるんですか？」

「はい…実は一週間前に私の携帯電話にメールが来まして…“今、

南アタリア島の叔父さんの店にカイフン兄さんと一緒にお世話になってる…心配しなくていいけどお父さんには内緒にしといて”と…」

その話を聞いた古代とユキはいたたまれない気持ちになっていた。
あれほど両親と仲の良かったミンメイが家出してまで歌手になろうとは思っていなかった。

「あらいやだ…こんな話するつもりなかったのに…せっかく来て頂いたのに嫌な話聞かせてごめんなさいね…」

第1話―ミステリアス・プレート―（その7）

―同日　２１：００　東京都内　古代進のマンション―

“明謝楼”を出た後、二人は横浜ベイエリアを散策し、その後都内にある古代のマンションに戻っていた。古代とユキは三年前の暗黒星団帝国との戦いの後、互いの傷ついた心を癒すかのように自然と同棲を始めたのだった。

古代は、ユキがバスルームにいる間に今度の配置換えに伴う人事異動に関する資料に目を通していた。

「ええと…俺はヤマト艦長と第１軌道艦隊司令を兼任…真田さんは副長で復帰…おっ！揚羽と土門が戻って来るんだ！おまけに土門の奴、生活班から戦闘班に動いてしかも戦闘班長って…大丈夫か？それで後は…な、何だ？ユキまで復帰って、しかも第１艦橋レーダーオペレーター専任って…お～～いユキぃ～～これ一体どういう事だ～～！？」

古代はバスルームからリビングに戻って来たユキに向かって叫んでいた。

「ちょっと古代君、そんなに大声出さなくてもいいじゃない…見ての通り私もまたヤマトに乗り組みますのでよろしくお願いします古代艦長！」

「しかしなぁ～一週間後に結婚するんだぞ、何も夫婦で同じ艦に乗り組むってのはちょっと…」

「あらいいじゃない！結婚しても仕事は続けるんだし、それに旧姓

の森ユキで通すから問題は無いはずよ！」
「だけどなぁ…」
それでも何か言いたげな古代の様子を見て、ユキは何も言わずに自分の唇を彼の唇に押し当てていた。

「……ねぇ……そんな事よりも……久しぶりに……いっぱい愛してくれる……？」
ユキの妖艶な眼差しに古代も根負けし、彼女の体を抱き上げると耳元で囁いていた。

「了解、お姫様……今夜はたっぷり楽しませますよ……」

――その夜二人は情熱的な一夜を過ごしたという……

第1話―ミステリアス・プレート―（その7）（後書き）

次回、マクロスキャラが本格的に登場の予定…

番外編（その1）―世界観設定　ヤマト・マクロス編―

1　この物語で彼らが所属するのは“地球連邦軍”。どちらかと言うとヤマトシリーズに出て来る“地球防衛軍”のような感じ。

2　当然ながらヤマトクルーにも階級はあります。主なクルーの階級は以下の通り。

大佐…古代　進　真田　志郎

少佐…島　大介　山崎　奨
　　平田　一　幕ノ内　勉

大尉…森　ユキ　南部　康雄
　太田　健二郎　相原　義一
　加藤　四郎　坂巻　浪夫

中尉…徳川太助　仁科春夫　赤城大六

少尉…土門竜介　揚羽武

3　今回の主な舞台は地球と、「ヤマト3」に出てきたアルファ・ケンタウリ第4惑星です。この惑星をOVA「YAMATO2520」に出てきた「リンボス」と名付けました。（↑マイナー過ぎる作品なので誰も知らないと思う…）

4　今作品限定でヤマトの全長を原作の265mから「実写版ヤマ

ト」の５３４ｍ（映画パンフレットより）にします。（そうしないとガンダムシリーズの戦艦に比べると小さ過ぎて見劣りするんで…）同様にマクロスも少しサイズＵＰして１２００ｍから１５００ｍに延長します。
（劇中のマクロスは両腕にアームド０１＆ａｍｐ；０２を接続した劇場版）

５　マクロスキャラのロイ・フォッカーは以前、ヤマトに乗り組んでいたという設定。

…以上、世界観設定その１でした。多少の変更は少しずつ劇中で明かします。

番外編（その2）―世界観設定　ヤマト・マクロス編―（前書き）

主に前回書き忘れた話です…

番外編（その２）―世界観設定　ヤマト・マクロス編―

６　時代設定…この物語は「ヤマト３」及び「ヤマト完結編」後の設定です。但し「ヤマト３」第１８話でガルマン・ガミラスのフラウスキー少佐が行った太陽制御作戦は成功している設定のため、ボラー連邦との最終決戦がないおかげで土門と揚羽は生き延びています。（同様に平田さんも死んでません）
さらに「完結編」で起きるはずだった銀河大異変も起きて無いのでガルマン・ガミラスやボラーはそのままですが、アクエリアスの地球接近はあります。しかしこれも寸前で阻止成功。ヤマト自沈は無し。（完結編本編での古代の艦長辞任も無いため、沖田十三の復活も無し！↑少し強引かも…）

７　マクロスが地球に落ちて来たのは西暦２１９０年。修復まで１５年かかったのはガミラスを始めとする異星人の侵略もそうだが、地球の大企業が同艦の修復を巡って激しい競争をしていたため。（↑すごいリアルな展開）

８　今作品でのヤマトの艦載機はマクロスに搭載されたバルキリーＶＦ－１シリーズ。当然劇場版に登場したスーパーバルキリーも出ます！（それにしても、ヤマト復活編に出て来たコスモパルサーって何かスーパーバルキリーに似ているような…）

番外編（その2）―世界観設定　ヤマト・マクロス編―（後書き）

何か取って付けたような設定ですいません……
次回、やっと第2話へ…

第2話―ブービー・トラップ―（その1）（前書き）

この小説書くために初代マクロスをレンタルして見てますが、各話ごとにキャラの顔が違い過ぎて違和感ありまくり…

第2話―ブービー・トラップ―（その1）

翌日、南アタリア島では修復新造されたＳＤＦ―１マクロスの進宙式が行われていた。この艦は１５年前の西暦２１９０年、地球近辺に突然出現し南アタリア島に落下した全長１５００ｍにも及ぶ巨大な宇宙船であった。

その当時、地球はガミラスからの攻撃を受け始めており、全力でこの艦の修復作業を進めてはいたものの攻撃が激しくなるにつれて作業は中断に追い込まれていた。

結局、修復作業が再開されたのは、ヤマトがイスカンダルから帰還してからであった。そして今、マクロスは宇宙に向け飛び立とうとしていた。

―Ａ．Ｄ．２２０５　６．３　９：１５　南アタリア島マクロスメインブリッジ―

「早瀬中尉、グローバル艦長が式典会場に入られたそうです。」

マクロスメインブリッジオペレーターのヴァネッサ・レイアードが未沙に報告していた。

「式典開始まで後１５分…艦長ったら今朝方東京から帰ってそのまま会場入りするなんてどういう事かしら？」

未沙が半ば呆れた表情で自席の端末を調整しながらボソリと呟くと、同じく隣席で調整していたクローディアが言い返した。

「どーせ朝方まで飲んだくれてたんでしょ？あのタヌキ親父艦長…」

「あなたじゃあるまいし…フォッカー少佐との朝帰り、ちょっとした有名人よ？」
「大丈夫！私もロイもまだまだ若いんだから一晩寝ないでも平気よ！それとも何？そんなに気になるんならあげるわよ？何ならのし紙つけて！」
「あ、あなたねぇ…」

未沙が呆れた表情でクローディアに詰め寄ると、同じオペレーターのキム・キャビロフとシャミー・ミリオムが合いの手を入れていた。
「へぇ～っ！中尉も男性に興味津々なんですねぇ～知らなかったわ～」
「ええぇ～っ！嘘ぉ～っ！？」
「もうっ！そんな事言う暇あったらさっさと発進準備してちょうだい！」
「は～い！了解で～～す！！！」

第2話―ブービー・トラップ―（その2）

―同日　同時刻　月軌道―

それは、突然の出来事であった。月軌道周辺に重力異変が発生し、おびただしい数の正体不明の艦隊がその姿を現していた。その大きさは小型でも２０００m、大型ともなると４０００m級であった。その艦隊の先頭に立つ旗艦のブリッジでは二人の巨人がモニター越しに前方に見える地球を凝視していた。

「あの惑星か？監察軍の連中が乗った艦が墜落したと言うのは？」

二人の男のうち、背の大きな隻眼の男が呟くと、もう一人の背の小さな赤い髪の男が手元の端末を操作しながら答えていた。

「はい…報告によれば、１５周期前に監察軍の生き残りが乗った艦隊のうちの一隻があの惑星に墜落したとの事だそうで…」

「ふむ…ただの脱落艦かも知れないが万一と言う事もある…直ちに先行艦隊を出し、前方の惑星を調査せよ…」

その隻眼の男…ゼントラーディ軍第６７分岐艦隊司令ブリタイ・クリダニクは傍らにいた赤髪の副官の男…エキセドル・フォルモを通して命令を下すと、艦隊から二隻の小型艦が地球へと進路を取っていた。

―同日　９：２１　南アタリア島　進宙式典会場―

「……でありますから、このＳＤＦ－１　マクロスは、我が揚羽コンツェルンが心血を注いで修復新造された希望の星となる艦であります…」

南アタリア島の進宙式会場では、揚羽コンツェルンの総帥にして連邦議会の議長を務める揚羽　蝶人の演説が行われていた。その後ろでは居並ぶ来賓と共にマクロス艦長であるブルーノ・Ｊ・グローバルが落ち着かないそぶりで演説を聞いていた。
するとそこに一人の士官が彼に近付き、そっと耳元で報告していた。

「艦長、月基地より入電です…月軌道周辺に重力異変と発光現象を確認…さらに未知の大艦隊出現…との事です…至急ブリッジに向かって下さい…」
「重力異変…１５年前と同じだな…分かった、すぐにブリッジに行こう…」

グローバルはすぐに決断するとその場を離れた。それと同時に演説していた揚羽会長が後ろを向いてグローバルを紹介しようとしていた。

「と言う訳で、栄光あるこの艦の艦長である……ってどこ行ってしまったんだあの男…」

第2話―ブービー・トラップ―（その3）

―同日　9：25　マクロスメインブリッジ―

その頃、メインブリッジではある異変が起きていた。マクロス修復時に発見された異星人の防衛システムが突然作動を開始していた。

「何これ！閉鎖したはずのシステムが勝手に…！」

「そ、そんな事ある訳ないでしょ！？とにかく出力をカットできないの！？」

クローディアの発言に未沙が、隣席の端末やスイッチ等を操作したものの、システムは相変わらず点滅を続け、さらに間の悪い事に艦首前方の主砲発射システムまでが作動を開始していた。そこにようやくブリッジにたどり着いたグローバルが慌ただしく二人に問いただしていた。

「一体どうした！何が起きているんだ！」

「閉鎖したはずの旧システムが勝手に…艦首主砲発射システムまで動き始めて！」

クローディアが報告している間にも、艦首部分が左右に分かれ、その間をプラズマ粒子が輝き始め、その粒子エネルギーは臨界に達しつつあった。

「主砲が…発射されますっ！？」

クローディアが叫ぶと同時に主砲が発射され、その強大なエネルギ

ーの束はしばらく海上を走り、やがてそのビームは上空に舞い上がり衛星軌道周辺に近付きつつあった二隻の小型艦に命中し撃沈していった。

―同日　同時刻　月軌道周辺―

「先行艦隊、撃沈されました！」

観測員の報告を聞き、パネルに映し出された映像を見たブリタイは即座に命令を下していた。

「やはりあの惑星に潜んでいたのか…全艦隊に発令！第一級戦闘配備！」

「了解！全艦隊戦闘配備！バトルポッド隊は全機出撃準備に入れ！」

第2話―ブービー・トラップ―（その4）

―同日　9：28　マクロスメインブリッジ―

「主砲管制システム…元に戻りました…」

クローディアが呆然とした表情で報告すると同時にヴァネッサも監視衛星からの入電をキャッチしていた。

「監視衛星からの報告によると、主砲ビームは大気圏外４００Ｋｍ地点で宇宙艦らしき物体を撃破…さらに後続の艦隊が接近中との事です！」

その報告に騒然となる中、グローバルはぽつりと一言呟いた。

「ブービー・トラップだ…どうやら我々は嵌められたようだな…」

「……ブービー……トラップ……それってどういう事ですか艦長…？」

「かつてこの星で２５０年ほど前に行われていた世界大戦で、旧ドイツ軍がよく使っていた手だ…戦場で目立つ物…ぬいぐるみや万年筆などに爆発物を仕掛けておき、それを敵が拾い上げると……という訳だ……大方、この艦もそんなものだろうな……」

グローバルはそう言うと胸ポケットからパイプを取り出し火を付けようとした時、シャミーが立ち上がるなりヒステリックに叫んでいた。

「艦長～～～っ！ブリッジは禁煙ですぅ～～～～！」

「わ、分かっとるわい！くわえてるだけだ！総員第一級戦闘配備！」
並びにマクロス発進準備だ！」

「了解！全艦戦闘配備！本艦はこれより異星人との交戦に入る！これは演習ではない！繰り返す、これは演習ではない！」

第2話―ブービー・トラップ―（その5）（前書き）

今回は、ヤマトクルー側からの話です。

第2話―ブービー・トラップ―（その5）

―同日　９：１５　東京　連邦軍ドック　ヤマト第１艦橋―

東京湾上の連邦軍ドックに停泊中のヤマト第１艦橋では、第１軌道艦隊の業務引き継ぎと新たに配属になったクルーの顔合わせが取り行われていた。

「艦長、お久しぶりです！またお世話になります！」

土門　竜介が古代に着任の報告をすると、古代もまた感慨深げに土門に話かけていた。

「土門、またよろしく頼む。今度からは念願の戦闘班所属…それも戦闘班長だ。とにかく頑張ってくれよ！」

「はい！ありがとうございます！頑張らせていただきます！それに森さんとまた一緒に働けるなんてうれしいっす！」

土門のその一言に古代以外のクルーから笑い声が上がり、その様子を見ていた島が土門にクギを刺していた。

「おい土門、あまりそんな事言うなよ！約一名嫌な顔をしている奴がいるからな、気をつけておけよ！？下手すりゃ射撃の的になるぞぉ～！」

その一言にまた一同から笑い声が上がると、アナライザーが土門に向けて言い放っていた。

「オイ土門！ユキサンハ俺ノ女ダ！ヘタニ手ヲ出スンジャネェ！」

そう言うとアナライザーはユキの側に近付き、やおら彼女の制服のスカートを盛大にめくっていた。

「も～～～っアナライザー！いい加減にしてよ～～～！ねぇ古代くぅ～～ん、艦長としてアナライザーにその癖止めるようにか言ってやってよ～！」

「あ、いや……その……俺としてはだな……これはもうヤマト艦内名物の一つだし……その……」

「はい！？何か言いました？」

ユキの鋭い視線に圧倒された古代は思わず咳ばらいした後アナライザーに命令していた。

「あ～あのぅアナライザー……今後一切このような事はやらないように……」

「ハイハイ！分カリマシタヨ古代艦長ドノ！」

アナライザーの一言で第１艦橋内は再び笑い声に満ち溢れていた。その時、航法レーダーを担当している太田健二郎が緊迫した表情で報告を入れていた。

「艦長！南アタリア島から放たれた高エネルギー弾が、大気圏外の所属不明艦に命中！さらに所属不明艦隊多数接近中！」

「何だって！相原、連邦軍本部からの指示はあるか！？」

「はい、今入りました！ヤマト率いる第１軌道艦隊は直ちに出撃との事です！増援として、土星空域で待機中の主力艦隊が間もなくワープするとの事です！」

「分かった！本艦は直ちに出撃する！土門、発進総指揮はお前に任せる！」

「了解！全艦発進準備！」

次々と指示を出す土門の声を聞きながら、古代は艦長席で一人想いを巡らせていた。

（また始まるのか戦いが……俺とユキが結婚を決めようとする度にいつもこの有様だ……）

第2話―ブービー・トラップ―（その5）（後書き）

土門がユキに憧れている様子は他の二次創作でよく取り上げてますが、この小説でも取り入れました。

ちなみに、今回ユキの制服はヤマト本編で着用していたボディースーツタイプの艦内服ではなく、「永遠に」「完結編」で着用していたタイトミニのスーツです。（いくら何でも未沙や三人娘達には、ボディースーツを着せる訳にはいかないし、第一彼女達に似合うかどうか…）

第2話―ブービー・トラップ―（その6）（前書き）

リン・ミンメイの登場です！

第2話―ブービー・トラップ―（その6）

―同日　９：２５　南アタリア島進宙式典会場―

南アタリア島マクロス進宙式典会場の一角にある控室では、式典後に開かれるミス・マクロスコンテストに出場する参加者がその出番を待っており、その中にはリン・ミンメイの姿があった。

ミンメイは幼い頃から歌手に憧れ、中学を卒業後高校に通いながら歌のレッスンを始めていた。そして三ヶ月前に両親に内緒でミス・マクロスコンテストに応募して最終選考に見事合格。その事を両親に伝えると当然の如く反対され、大喧嘩の末に家を飛び出したミンメイは南アタリア島の叔父夫婦の経営している中華料理店に転がりこみ、同じくミュージシャンを目指して家出していた兄のカイフン共々世話になっていた。

「ミンメイ、もう少しでコンテストが始まるけど大丈夫なのか？」
「う～～ん……何か緊張して来た……ちょっとトイレ！！」
「ありゃまた行っちゃったよ……本当に大丈夫なのか……これで三回目だぞ……」

カイフンがミンメイの消えた先を見ながら呟くのと同時に外からけたたましい轟音が鳴り響き、強い揺れが控室を包み込んでいた。

第2話―ブービー・トラップ―（その6）（後書き）

今回、ミンメイとカイフンは劇場版同様兄妹の設定です。

本当はＴＶ版仕様で反戦活動家として出演させて、地球の守護神たるヤマトに反感を持つ人物にしたかったのですが、ストーリーがややこしくなるので止めました。

次回、一条輝とロイ・フォッカーがやっと登場…

輝は最初から軍人として登場です。

第2話―ブービー・トラップ―（その7）

―同日　９：３１　南アタリア島基地格納庫―

『デルタ1より基地航空隊へ！現在本艦は異星人と交戦中です！速やかに各機体の出撃準備を済ませ、直ちに出撃して下さい！』

マクロスメインブリッジの未沙からの指示により、新鋭可変戦闘機のバルキリーＶＦ―1が出撃準備を急いでいた。

中でも航空部隊長である、ロイ・フォッカーはこれまで数多くの敵機を撃墜してきたエースパイロットであり、かつてはヤマトにも乗り組んでいた猛者でもあった。

（久しぶりの戦闘か……まだ腕は鈍って無いだろうな……）

フォッカーがそんな事を考えていると、機内のモニターにこの度連邦軍に入隊したばかりの一条輝からの通信が入っていた。

『先輩！何か緊張して来ました！大丈夫ですかねぇ？』

「下手に緊張しても仕方ね～だろ輝！もうちょっとリラックスしろ！」

『は、はあ……』

輝がなおも不安気なまま返事をすると同時に、再び未沙からの通信が入って来た。

『こちらデルタ1！スカル大隊は直ちに出撃して下さい！』

「了解！スカルリーダーより各機へ！聞いての通りだ、これより出撃する！」

「了解！！！」

第2話―ブービー・トラップ―（その8）（前書き）

未沙の父、早瀬提督の登場です。

マクロスＴＶ版では「提督」の肩書を持ってたものの、実際艦隊を率いるシーンは無しでした。

今回は、土方さんの後任として地球艦隊司令にしましたが、実力のほどはいかに……

第2話―ブービー・トラップ―（その8）

―同日　９：４０　月軌道周辺―

「ワープ終了！現在位置、月軌道より１０宇宙キロ地点です！」

改アンドロメダ級戦艦ブルーノアを旗艦とし、ドレッドノート級戦艦を中心とする連邦軍主力艦隊は土星空域からのワープ終了と同時に情報収集を開始していた。

その旗艦ブルーノアのメインブリッジでは、未沙の父で艦隊総司令である早瀬　隆司中将が現時点での状況報告を見て溜息をついていた。

（……しかし、マクロスが先制攻撃をかけたと言うのはどういう事だ……以前の会議で決定された事を忘れてた訳ではあるまい……）

この時点で、マクロスの旧システムが勝手に作動を始めた事を早瀬は知る由もなかった。

「提督、第１軌道艦隊旗艦ヤマト艦長古代大佐から通信が入ってます！」

「分かった、メインに繋いでくれ。」

通信員が操作すると、パネルには古代の姿が映し出されていた。

『お久しぶりです早瀬提督、お元気そうで何よりです！』

「うむ……ところでそちらでもキャッチしていると思うが、敵の出

方が分からん……ここはひとまず様子を見てからだ……マクロスが無事に大気圏外に出るまでは充分警戒するように……」

『了解です！また何かありましたらこちらから連絡します！』

パネルから古代の姿が消えると同時に観測員からの緊張した報告があった。

「提督！南アタリア島に敵の地上部隊が上陸！基地守備隊と交戦の模様！」

第2話―ブービー・トラップ―（その8）（後書き）

劇中登場した改アンドロメダ級戦艦は、「ヤマト2」に登場したアンドロメダを拡大改良したものです。主な武装は二連マルチモード波動砲です。これは拡散・集束モードを任意で選択できると言う、ある意味優れた兵器の1つです。

ドレッドノート級戦艦は、「復活編」に出ていた主力戦艦を拡大したものです。この戦艦にもマルチモード波動砲が装備されています。

次回、やっとマクロス発進ですが……

第3話―スペース・フォールド―（その1）（前書き）

「ヤマト3」に一度だけ出ていた揚羽会長の登場です。この人、これから度々出て来ますが、かなりのトラブルメーカーになりそうな予感……

第3話―スペース・フォールド―（その1）

―A．D．２２０５　６．３　９：４４　マクロスメインブリッジ―

マクロスメインブリッジでは、発進準備と島内にいる市民の避難状況の対応に追われていた。そんな慌ただしい状況の中、一人の男がブリッジ内に入って来た。

「グローバル君、一体いつになったらこのマクロスは飛ぶんだね！」

「これはどうも揚羽会長…」

揚羽会長は入るなり、持っていた葉巻にライターの火を点けようとした時、シャミーが自席から立ち上がり叫んでいた。

「申し訳ありませんが、ここは全面禁煙ですッ！！」

揚羽会長はシャミーをジロリと睨むとグローバルに言い放っていた。

「グローバル君、ここのクルーは教育がなっとらんな！来客に対して口の聞き方が悪いぞ！」

「はぁ……ですが……」

「言い訳は聞かんぞ！第一、この艦は我が揚羽コンツェルンが心血を注いで建造したのだ！南部重工で作られた出来損ないのアンドロメダ級やドレッドノート級…廃艦寸前のヤマトとは違うのだよ！もし私が連邦軍司令長官ならば、これらのクズ鉄艦はさっさと廃棄してマクロス級を数多く建造して……」

揚羽会長の発言を黙って聞いていた未沙が口火を切って反論していた。

「演説の最中申し訳ございませんが、本艦は現在警戒態勢の最中です！直ちにここから退出して頂けますか！？」

未沙の発言に揚羽会長は臆する事もなく、彼女を睨みながら反論に転じていた。

「貴様！口の聞き方がなってないぞ！事と次第によっては貴様を含めたこの艦のクルーを全員クビに出来るんだぞ！名前を名乗れ！」

「……早瀬未沙……中尉であります。」

「早瀬……あの連邦艦隊提督の……娘！？」

未沙の名前を聞いた揚羽会長は言葉を失っていた。それに追い撃ちをかけるようにグローバルが切り出していた。

「……とにかく、我々は発進準備中です。一般市民を守るのが我々の任務ですから。今ここでクビを切られれば、マクロスは発進出来ませんぞ！ここはとにかくおとなしくお待ち願えますかな？」

グローバルのその一言に揚羽会長はすごすごとブリッジを後にしていた。

第3話―スペース・フォールド―（その2）

―同日　９：５１　地球衛星軌道―

地球の衛星軌道周辺に接近していたゼントラーディ艦隊旗艦のブリッジでは、ブリタイとエキセドルが地上に展開中の部隊から送られて来た映像に見入っていた。

「一体何だ……この規律性のない土地の使い方は……全くの未開種族らしいなこの星の住人達は……やはりここに潜んでいたのかあの艦は…」

「はて……私の記憶にはあのタイプの艦には見覚えがありませんが…」

「何！？記憶に無いだと…記録参謀のお前がか？」

エキセドルのその発言にブリタイが驚いていると、レーダー要員から報告が入った。

「艦隊後方よりミサイル群多数接近中！」

「直ちに迎撃せよ！」

このミサイル群は月軌道周辺に展開中の地球連邦主力艦隊より発射されたもので、ヤマトの装備している波動カートリッジ弾を改良し射程距離を大幅延長した代物であった。ゼントラーディ艦隊の一部は波動エネルギーの熱効果により大爆発を起こし、消滅していった。この様子を見ていたブリタイとエキセドルはしばらくの間、言葉を失っていた。

「な、何だ…今のは……」

「ま、まさか……幻と言われる反応兵器では……」

「馬鹿な……こんな未開種族が失われた修復技術や反応兵器を保有しているなどとは信じられん！」

「これはただ相手を一方的に殲滅する訳にはいかなくなりましたな……ここはとにかく調べる必要が出て来たようですな……」

第3話―スペース・フォールド―（その3）

―同日　９：５５　マクロスメインブリッジ―

その頃、マクロスメインブリッジでは、発進準備が次第に整いつつあった。

「メインエンジン、間もなく最大出力に到達…重力制御システム作動開始！」

「早瀬君、島内の市民の様子はどうかね？」

「はい！現在の所、９５パーセントまでの市民がシェルターに待避しているようです！」

「そうか…島の人々が無事に待避完了してくれればそれでいい……」

「重力制御システム、最大出力に到達しました！」

「よし！マクロス浮上開始！」

「了解！マクロス浮上開始します！」

全長１５００ｍ、総重量２０００万ｔの巨体は１５年振りに大地を離れ、遥かなる空へとその艦体を向けようとしていた。だが艦自体に大きな揺れを生じるとブリッジクルーは床面に投げ出された。

「な、何があったんだ！？」

グローバルが叫ぶと同時に、未沙が信じられないといった表情で前方を凝視していた。

「艦長！重力制御システムが…」

グローバルが艦首方向に目をやると、甲板を突き破り数本の重力制御システムが回転しながら空へ上昇していった。

「こんな馬鹿な事が…総員ショックに備えろ！地面に叩きつけられるぞ！」

グローバルが叫ぶと同時に、マクロスはもの凄い轟音とともに地表に叩きつけられていた。

「全員……怪我は無いか…？」

「はい……何とか……」

「とにかく、本艦の被害状況を調べてくれ……全くこの艦は酷い艦だな…」

「宇宙から落ちてきたものを拾って使うからです…」

第3話―スペース・フォールド―（その4）（前書き）

一条輝とリン・ミンメイの初めての出会いです。

第3話―スペース・フォールド―（その4）

―同日　１０：０１　南アタリア島市街地―

ゼントラーディ軍の攻撃により、市街地はもはや瓦礫と化していた。その中をミンメイはひたすら走り続けていた。シェルターに避難する途中、忘れ物に気付いた彼女は兄のカイフンと叔父夫婦に先に行くように頼むと、進宙式会場にあるミス・マクロスコンテスト控室に戻っていた。

控室にたどり着き、化粧台の上に置き忘れた一枚の写真を手に取り持っていたポーチの中に入れたミンメイは、すぐに外に出てシェルターに向かおうとした時、バトルポッドの一群に取り囲まれてしまった。

（――私、もう駄目かも……）

ミンメイがそう思った時、一機の戦闘機が現れてたちまちのうちにそのバトルポッド群を撃破していた。その戦闘機のコクピッドが開くとパイロット……一条輝がミンメイに声を掛けていた。

「大丈夫ですか!?早くこれに乗って下さい！」

「えっ……でも……」

「いいから早く!敵がまたやって来るんだ！」

輝の催促にミンメイが従い、ナビシートに座ると前席の輝が自分のヘルメットをミンメイに手渡した。

「あの～私がこれを被ったらあなたはどうするの?」

「僕は大丈夫！すぐに発進するからしっかり掴まってて！」

輝がそう言うと同時にいきなり一機のバトルポッドが現れ、彼のバルキリーに攻撃を加えていた。輝はすぐに回避したものの、ビルの残骸に機体を打ちつけてしまった。それでも輝はガトリング砲を撃ち続けると、ようやくそのバトルポッドは崩れ落ちていた。

「フーッ……やっとの事で撃ち落としたよ……それより後ろの女の子、大丈夫かな……」

輝が後ろに目を向けると、ミンメイは先程の衝撃で気を失っていた。

「ありゃ…気絶しちゃってるよ…仕方ない、とにかく近くのシェルターに連れて……え、ええっ！？」

先程撃墜したはずのバトルポッドの中から身長１０ｍ以上はあるかと思われる宇宙服を着た巨人が現れていた。

（……やっぱり……以前士官学校で教えられた通りだ……ってそんな場合じゃない！）

輝は反射的にガトリング砲のスイッチに手を伸ばし、押そうとしたものの反応がなく弾切れである事にようやく気付いていた。

「や、やっば～！」

輝がそう叫ぶのと、その巨人が輝のバルキリーに襲いかかるのと同時に間一髪で駆け付けたフォッカー機のガトリング砲が火を噴き、その巨人はその場で息絶えた。

「せ、先輩！ありがとうございます！」

「なーに、いいって事よ！……しかし…ここまで“奴ら”が俺達人類にそっくりとはな……」

第3話―スペース・フォールド―（その4）（後書き）

次回、ヤマトキャラとマクロスキャラの本格的な絡みですが…どうなる事やら…

第3話―スペース・フォールド―（その5）

―同日　１０：１５　マクロスメインブリッジ―

「技術部より報告です！重力制御システム再設置完了！並びに破損箇所の修復も完了したとの事です！」

「よし！直ちに発進準備を再開してくれ！」

グローバルの決断に未沙が不安気な表情で切り出していた。

「艦長、今度は大丈夫でしょうか……」

「心配する事はない…今度設置した物は地球上で製造された物だ早瀬君…いたずらに心配しても始まる訳でもあるまい…」

「そうですね…あ、連邦軍本部より入電です。“当艦は、大気圏外にて待機中の第１軌道艦隊と合流せよ”との事です！」

「分かった。それでは本艦は直ちに発進する！バルキリー隊に直ちに集結するように伝えてくれ！」

「了解！マクロス発進します！」

さすがに今度は何事もなく、マクロスはその巨体を浮上させ宇宙へと進路を向けていった。

―同日　１０：２０　南アタリア島上空―

輝とフォッカーの二機のバルキリーはマクロスからの通信で、南アタリア島市街地から飛び立ち今は上空６０００ｍ地点を飛行中であ

った。

「先輩！マクロスが第１軌道艦隊と合流するって言ってましたけど、確か旗艦は…」

「そうだ！地球の危機を何度も救ったあのヤマトだ！そして昔、俺が乗っていた艦でもあり、お前が乗艦を希望していた艦だ！」

「何処の誰かは知りませんけど、余計な事をしてくれたおかげでマクロスに乗る羽目になっちゃいましたけどね！」

輝のその一言のおかげで今まで気を失っていたミンメイが目を覚まし、辺りをキョロキョロと見ていた。

「あの……ここは今何処なんですか？」

「あ、やっとお目覚め？当機はただいまマクロスに向けて飛行中！」

「え～～～っ！？島には帰らないんですか～～～？！島のシェルターには私の兄と叔父夫婦がいるんですけど～～～！？」

不安気に輝に尋ねるミンメイに通信を聞いていたフォッカーが、彼女を安心させるように諭していた。

『シェルターなら問題無い！あそこなら水素爆弾が落ちようが隕石が落ちようが大丈夫だ！戦闘が終わったらこの私が島まで送って行きますよ！』

「その方が余計危険ですが先輩！？」

フォッカーの発言にすかさず輝が突っ込みを入れると、当のフォッカーは咳払いをして輝を睨み返していた。

『あ～輝～！何か言ったか！？』

「い～え！別に何も！……あ、先輩！第１軌道艦隊が見えて来ま

したよ！」

輝が話題を逸らすとすぐそこまで、ヤマトを始めとする第１軌道艦隊が姿を現していた。

『よ～し！ちょっくらヤマトの連中に挨拶でもしとくか！……こちらＳＤＦ－１マクロス航空隊所属、スカル大隊のロイ・フォッカーだ！ヤマトの連中、聞こえるか！』

第3話―スペース・フォールド―（その6）（前書き）

輝と未沙の初遭遇です。

第3話―スペース・フォールド―（その6）

―同日　同時刻　ヤマト第1艦橋＆amp;マクロスメインブリッジ―

その頃、ヤマト第1艦橋では接近してくるマクロスの姿をメインパネルに映し出していた。

「いやぁ～でっかいよな～ヤマトもでかいと思ってたけど、こうやって見るとマクロスもかなりでかいよなぁ～！」

砲術班長の南部康雄がメインパネルを見ながら溜息をついていると、隣席の相原がマクロスからの通信をキャッチしていた。

「艦長！マクロスのグローバル艦長から通信が入っています！パネルにチェンジします！」

相原が操作すると、メインパネルにはグローバルの姿が映し出されていた。

「お久しぶりですグローバル参謀次官…あ……すいません艦長！」

古代が慌てて言い直すと、グローバルは苦笑しながら切り出していた。

『いや構わんよ古代君…何しろ参謀本部に長く居過ぎたおかげで現場に慣れないので無理も無い……ここでは経験の長い君の指揮に従うつもりだ。よろしく頼む…』

「い、いえ…こちらこそよろしくお願いします！」

この二人の会話を聞いていたマクロスメインブリッジのシャミーはキムにこっそりと話し掛けていた。

「やっぱりぃ～古代艦長って格好いいわぁ～～ファンになっちゃいそ～～！」

「あんたねぇ……こんな時に何言ってんのよ……」

「だってぇ～格好いいのは確かでしょ！？いっその事ファンクラブ作っちゃおうかな？当然会長はこの私で決まり！」

「はいはい……勝手にすれば……」

そんな中、ヤマト第１艦橋にフォッカーからの通信が入って来ていた。

『こちらマクロス航空隊所属、元ヤマト艦載機科クルーのロイ・フォッカー少佐だ！ヤマトクルーの諸君、元気か！？』

ヤマトのメインパネルにはフォッカーの姿があった。第１艦橋の一同は思わず呆然とした表情で彼を凝視していた。

『よう古代！相変わらずだな！元気にしてたか！？』

「フォッカー、お前まだ現役の戦闘機乗りをしてるのか！？何処かの艦の艦長か教官でもやってるのかと思ってたが…」

『な～に、前にも言った事があるだろうが！俺は生涯一パイロットでやって行くつもりだってな……ところで話は変わるが…古代、ゆうべユキちゃんと……シタのか！？』

フォッカーの発言にヤマト第1艦橋一同は元より、マクロスメインブリッジの一同の表情は凍りついていた。中でも三人娘は顔を手で覆いながら叫び、グローバルは思わず椅子からずり落ち、クローディアは内心舌打ちをしていた。

ヤマト第1艦橋では、ユキがこれ以上無いくらい顔を真っ赤にしながら艦長席の古代を見ると、普段着用しない艦長帽を目深に被っていた。

この様子をフォッカーは自機のモニターで見ながら思っていた。

(図星だな古代の奴……相変わらず分かりやすい男だ……ここはとにかく話題を変えるか…)

『そうだ、俺の部下を紹介しよう!今度ウチの部隊に配属された新人だ!』

『初めまして!スカル大隊所属の一条輝少尉であります!古代先輩の事はフォッカー先輩からよく聞いています!』

輝が敬礼していると、ナビシートにいるミンメイが身を乗り出していた。

『あ~っ、古代さぁん!お久しぶりで~す!お元気ですか~!』

「ミ、ミンメイ!?何で君がそこにいるんだ!?」

『あははっ!それは~色々ありまして~』

「ちょっとミンメイ!何が“あはは~”よ!あなたご両親に……」

ユキが身を乗り出して発言しようとした時、未沙が通信に割り込んで来た。

『こちらデルタ1！スカルリーダー並びにスカル11番機、着艦していないのはあなた方だけです！早くアームド01に着艦して下さい！』

『先輩、誰です？このおばさん？』

『お…おば……！？』

輝の発言に未沙が絶句しているとフォッカーが笑いながら説明していた。

『マクロス航空管制オペレーターの早瀬未沙中尉さ…しかし、早瀬も輝から見ればただのおばさんか～！』

フォッカーの発言で、ヤマトとマクロスの両クルーは呆気にとられていた。未沙は咳払いをして指示を何とか出していた。

『とにかく！無駄話してないでさっさと着艦して下さい！』

『了解！指示頼んますよ、お・ば・さ・ん！』

『了解！そちらも死なない程度に気をつけて……それから古代艦長！あなたも指揮官らしくして下さい！それでも栄光あるヤマトの艦長ですか！？』

「……了解しました、早瀬中尉…」

通信が切れると、古代はどっと疲れた表情で思っていた。

（はぁ……疲れた……これだからお固い女って……あれでユキより年下って信じられるかよ……）

第3話―スペース・フォールド―（その6）（後書き）

輝の未沙に対する「おばさん」発言でした。でも、マクロスＴＶ版放映当時にこの二人が愛し合う関係になるとは誰も思ってなかったはずです。

第3話―スペース・フォールド―（その7）

―同日　１０：２５　衛星軌道上ゼントラーディ艦隊旗艦―

「敵大型戦艦、惑星軌道上に展開している艦隊と間もなく合流する模様！」

ゼントラーディ艦隊旗艦のブリッジでは、観測員がブリタイに報告していた。

「いかが致しますかブリタイ司令？」

エキセドルが、先程から腕組みをしたまま前方のパネルを凝視しているブリタイに切り出していた。

「うむ……あの大型戦艦には興味がある……ただ潰すには勿体ない……よし……あの戦艦を手に入れよう……その前に邪魔な敵艦隊を叩く！全艦隊砲撃用意！ただし、戦艦には当てるな！」

ブリタイの指示の下、展開していた艦隊から砲撃が開始されていった。

―同日　同時刻　ヤマト第１艦橋―

「高熱源体多数接近！敵艦隊からの砲撃です！」

ユキの報告に古代は即座に反応していた。

「全艦隊！急速回避！島、右舷下方に転舵！」

「了解！右舷下方に転舵！」

島の的確な操作で、ヤマトは何とか危機を乗り切ったものの、第１軌道艦隊の半数以上の艦が砲撃で撃沈されていた。

「本艦の被害状況は！？」

『左舷装甲板大破！』

『左舷パルスレーザー３番、６番大破！！』

「機関室！被害は無いか！？」

機関長席の山崎奨が機関室に連絡を入れると、即座に副長の徳川太助から連絡が入っていた。

『波動エンジンには異常ありません！』

真田はというと出て来たデータをチェックしていた。

「う～む……不思議だな……あれだけの砲撃にも関わらず、マクロスには直撃弾がない…もしかしたら敵はマクロスを無傷で手に入れるつもりらしい……）

―同日　１０：２９　マクロスメインブリッジ―

マクロスでも同様の報告がなされ、グローバルはしばらく考えた後命令を下していた。

「クローディア君！進路を南アタリア島に向けてくれ！島に着陸すると見せかけて上空で空間転移に入る！」
「空間転移……フォールドですか？！それも上空で！？まだテストもしていないのに……」
「やむを得ないだろう！このままでは敵にやられるだけだ！」
「でもこのシステムは異星人のものですよ！我々にはまだ未知の部分が……」
「クローディア君！最初はみんなそうだ！かつてイスカンダルから提供された波動エンジンだってそうだったじゃないかね！？」
「了解しました……」

押し問答の末、クローディアは渋々了解し、フォールドの準備に入った。

「全艦非常態勢！本艦はこれよりフォールド航行に入る！デフォールド地点は月軌道周辺に設定します！」

「動力システムチェック！降下態勢に入る！」
「ヴァネッサ君！ヤマトの古代艦長に打電してくれ！“本艦はこれより島上空でフォールド航行に入る。それまでの護衛を頼む”と！」
「了解！」

マクロスは再びその艦体を南アタリア島に向け降下を始め、やや遅れてヤマト率いる第１軌道艦隊も降下を開始した。

「フォールドシステム作動まで後３分！現在位置、島上空３０００ｍ！」
「島上空２０００ｍでフォールドを開始する！」

やがてマクロスは目標地点である島上空２０００m地点に近付きつつあった。

「フォールド突入秒読み開始…5、4、3、2、1、ゼロ！フォールド突入！」

マクロスを中心に赤い光が広がりつつあった。それは南アタリア島を包み、上空を護衛していた第1軌道艦隊も包み込み、その光は全てを巻き込んだまま消え失せて行った。

―同日　１０：４０　衛星軌道上ゼントラーディ艦隊旗艦―

マクロスがフォールドした様子は、遠く離れたゼントラーディ艦隊でもキャッチしていた。

「な、何だ…地上付近でフォールドするとは！」
「さあ…彼らは何を考えているやら…」
「とにかく奴らのデフォールド地点を割り出せ！」
「了解しました！」

第3話―スペース・フォールド―（その8）

―同日　１１：０１　マクロスメインブリッジ―

宇宙空間にそれは突然現れた。フォールドを終了したマクロス、南アタリア島、第１軌道艦隊がそっくりそのまま出現していたのであった。

マクロスメインブリッジでは、一時的に気を失っていたクルーがようやく目覚めていた。

「ぜ、全員無事か…？」

「はい…何とか…」

グローバルが未沙に尋ねると、彼女はふらつきつつ前方に目をやるとそこにはいるはずの無い第１軌道艦隊が姿を見せていた。

「艦長！前方に第１軌道艦隊が…おそらくフォールドの巻き添えになったと思われます！」

「何だと！？そんな馬鹿な…？」

グローバルが信じられないといった表情で前方を凝視していると、ヴァネッサが報告を入れていた。

「艦長！本艦下方に物体が…」

「当然だろう…ここは月面基地上空だ…」

「いえ…それよりも小さな物で…とにかくパネルに投影します…」

メインパネルに映し出されていたのは南アタリア島…それも周囲を

凍りついた海水が浮遊していた。誰が見てもマクロスのフォールドが全てを巻き添えにしたのは明らかであった。

「それにしてもこんな事になるとは…連邦軍本部とは連絡はついたのかねシャミー君？」

「何度も呼びかけてはいるんですが繋がらないんですぅ…」

「通信機器の故障ではないのかね？」

「いえ…第１軌道艦隊の各艦とは連絡がついています…」

グローバルとシャミーの会話にキムも加わり現状報告していると、ヴァネッサが信じられない表情で加わっていた。

「あの…現在位置が判明したんですけど…」

「それで…今の位置は！？」

「それが…バーナード星系とアルファ星系のほぼ中間地点かと…」

「ええ～！？そんなぁ～」

「だからフォールドなんて…」

「「艦長！！」」

シャミー、クローディア、キム、未沙が口々に叫びとグローバルは一同を制していた。

「まあ待ちなさい。ここまで来れたんだ、もう一度フォールドすれば必ず帰れるはずだ…」

その時、艦長席のインターホンが鳴り響きグローバルが出てしばらく話していたが、やがて気落ちした様子で受話器を下ろしていた。

「機関室からだったのだが…フォールドシステムが消滅したそうだ

…おまけにメインエンジンの出力が上がらんそうだ…」
「そ、そんなぁ～」
「消滅って…艦長…」

シャミーとキムが次々叫び声を上げると、未沙がそれを制していた。

「キムにシャミー、まだ望みはあるわ！マクロスがフォールド出来なくても第1軌道艦隊はワープ出来るはず…だからあの人達にワープしてもらって地球にある予備のシステムを取りに行って貰えれば…」

未沙がそこまで言った時、ヤマトから通信が入っていた。グローバルが一連の出来事を古代に話していたものの、続いて彼が衝撃的な発言をしていた。

『実は……ヤマトを含めた第1軌道艦隊の波動エンジンの出力が上がらないんです…その原因が不明でワープ出来ず…切り札の波動砲も発射不能で……』

「そ、そんなの嘘でしょ…」
「それじゃ地球に…」
「帰れない…」

三人娘が口々に叫ぶのを聞きながらグローバルは溜息をつきつつ呟いていた。

「長い旅に…なりそうだな…」

第3話―スペース・フォールド―（その8）（後書き）

フォールド失敗の巻き添えを喰らい、ワープも出来ず切り札の波動砲も撃てなくなったヤマト……
という設定にしました。
一度くらい伝家の宝刀を使えなくても構わないかと……

できればこの状態でラストまでお送りします！

古代進
「それだけは勘弁してくれ～」

第4話―リンボス・エクスプレス―（その1）

―A．D．２２０５　６．３　１２：４６　地球衛星軌道上ブリタイ艦―

地球衛星軌道上では、ブリタイ艦隊が今だ居座りを続けていた。近くには監視を続けている地球連邦艦隊が航行し、それを横目に見ながらブリタイは南アタリア島で繰り広げられた戦闘映像をチェックしていた。

「これは…この星の住人はマイクローンではないか！？」

「はい、そのようですな……どうやら我々は来てはならない場所にたどり着いたようです……」

「それはどう言う事だ…？」

“手を出してはならぬ場所には近付くな、手を触れたる者は必ず滅びる”と言い伝えが古くからあります。我々はもうこの星には関わらない方がよろしいかと……今後はあの戦艦だけにターゲットを絞るのがよろしいかと…」

エキセドルの忠告をブリタイは受け入れる他なかった。下手に手を出せば自分達が滅びると思ったからであった。

「とにかく、例の戦艦だけを追撃した方が良さそうだな…奴らのデフォールド地点は分かったのか？！」

「はい、ここから約５光年離れた星系にいるものと思われます！」

「よろしい！全艦隊直ちにフォールド開始せよ！」

ブリタイの指揮の下、ゼントラーディ艦隊はすぐさまフォールドして行った。

―同日　１２：５１　地球衛星軌道上旗艦ブルーノアブリッジ―

「敵艦隊、全艦フォールドした模様！」

旗艦ブルーノアブリッジでは、レーダー要員が早瀬提督に伝えていた。地球本星に手も出さずに早々に姿を消した謎の艦隊の行動に違和感を感じつつ、早瀬提督は内心安堵の表情を浮かべていた。

「マクロスの消息は分からないのか？」

「はい……それに第１軌道艦隊と南アタリア島とも連絡がつきません……」

通信員の報告に早瀬提督は深い溜息をついていた。マクロスに乗っている娘の未沙の事を何よりも心配していた。

（こんな事になるのならマクロスに配属させるのではなかった…未沙…とにかく無事でいてくれ……）

第４話―リンボス・エクスプレス―（その１）（後書き）

次回、雑誌「マクロスエース」に連載中のリメイク版マクロスに登場している技術士官のジーナ・バルトロウ少佐が登場！真田さんと一緒に何かやらかすかも！？
そしてあの名ぜりふが出てきます！

第４話―リンボス・エクスプレス―（その２）

―Ａ．Ｄ．２２０５　６．３　１７：１４
　マクロス艦内大会議室―

太陽系から５光年離れたその場所では、マクロスを中心にしてヤマト率いる第１軌道艦隊が南アタリア島の残骸の回収作業を行っていた。また、島内にあったシェルターに避難していた延べ８万人もの民間人もマクロスに収容されており、同艦と第１軌道艦隊の将兵と合わせると何と１０万人規模の大所帯となっていた。
将兵はともかく、民間人の扱いをどうするか――
マクロス艦内の大会議室では第１軌道艦隊各艦の艦長、並びに各セクションのスタッフが議論を交わしていた。

中でも、進宙式典に出席してフォールドの巻き添えになった揚羽コンツェルン会長の揚羽蝶人は、強硬に地球への帰還を主張していた。

「……であるから、先程から何度も申し上げるように、一刻も早く地球に帰らなければならんのだ！お前達は何故それが分からんのだ！」

上から目線の揚羽会長の発言に、各艦の艦長は辟易としていた。―現場の苦労も知らないエリートがその場を掻き乱すのは止めるべきだ――
と進言しようものなら、かえって彼の怒りを買うため誰も発言を控えていた。

そんな中、今まで会議の席で端末を操作していた真田が沈黙を破り、

揚羽会長に切り出していた。

「会長、今すぐ地球に帰り着きたいお気持ちは分かりますが、ここはとにかく一番近いアルファ星系のリンボスに進路を取りましょう。ここからなら一ヶ月半で到達出来ます。そこでエンジンの修復をすれば地球には二ヶ月目に帰り着きますがね…」

真田の発言に揚羽会長を除く一同が感嘆の声を上げていた。だが揚羽会長は納得せず、反論に転じていた。

「……と言う事は、あの企業に修復作業を依頼するとでも言う事かね？我社の最大のライバルである“アナハイム・エレクトロニクス”に……冗談ではない！敵に塩を送るとでも言うのか！？我社が心血を注いで建造したこの艦を他社に修復させるとでも言うのかね！？グローバル艦長、君の意見はどうかね！？」

揚羽会長に意見を聞かれたグローバルは既に態度を決めていたらしく、即座に切り出していた。

「私としては、アナハイムに頼っても構わないと思いますがね。この際自社がどうの、他社がどうのと言っている場合ではありません。利用出来る物はしたほうがいいと私は思いますが？」

「私もグローバル君の意見に賛成だな…」

そう発言したのは、やはり進宙式典に出席し揚羽会長同様騒ぎに巻き込まれた連邦軍司令長官の藤堂平九郎であった。

「……とにかく、議論していては何も始まらん…ここは一致団結しなければならんのですよ会長…」

「……分かった……君らの好きにすればいい……」

ようやく揚羽会長の了解が得られると、藤堂は真田に切り出していた。

「早速だが真田君、アナハイム社に連絡をとってくれるかね？」

「大丈夫です長官！実はこんな事もあろうかと、先程アナハイムには連絡をしておきました！」

この真田の発言を聞いていた古代は内心ガッツポーズをとりながら思っていた。

（さすが真田さんだ…いつも一歩先を見据えている……これなら何とかなりそうだ…）

第４話―リンボス・エクスプレス―（その３）

―同日　１８：２８　マクロス艦内技術開発部―

その頃、マクロス艦内にある技術開発部では一人の女性技術士官が目前のパネルに映し出されたマクロスの全体図を前にして何かを計算していた。
そこに会議を終えたグローバル、古代、真田の三人がやって来た。

「どうかねバルトロウ技師長、主砲は使えそうかね？」

グローバルに尋ねられたその女性技術士官…ジーナ・バルトロウ少佐は三人に敬礼すると、パネルに目をやりながら説明を始めた。

「はい…結論から申し上げると現状のままでは発射は不可能です…これを見て頂くと分かりますが、メインエンジンと主砲発射システムの間を特殊金属のパイプがフォールドシステムを介して繋がっていた訳ですが…」
「そのフォールドシステムの消滅で主砲が撃てなくなった…と言う事ですね。」

ジーナの発言を古代が繋ぐと、彼女は頷きさらに続けた。

「ええ…これ程大きなエネルギーパイプの予備は艦内工場でも作れません…ですが、マクロスの船体がいくつものブロック構造で構成されているので、これを利用します…」

ジーナがパネルに映し出していたのは、各ブロックを組み変え、戦

艦の形から巨大な人型へと変わっていく映像であった。
古代はこの映像を見て思わず口に出していた。

「何かこれ……大昔のロボットアニメに出て来そうですね……」
「古代艦長がそう思うのも無理ありませんわ…あれこれ動かしたらたまたまこうなっただけでして…今後はこの変型を“トランスフォーメーション”と名付ける事にしました。」
「しかし…主砲を撃つ度にこれを行うのはいいが…これから建設する市街地に多大な被害が及びのではないかね？」

心配顔のグローバルに、ジーナは余裕の表情で答えていた。

「大丈夫です！多分こんなこともあるんじゃないかと思って、市街地の建設は被害を少しでも出さないようにと企画しています！あ、それと単に主砲と言うのはつまらないので、勝手に“マクロス・キャノン”とネーミングしました！」
「ま、まあ…君が名付けたのならそれでも構わんよ…」

グローバルが苦笑しながら答えていると、古代の携帯電話が鳴り響き、しばらく話した後血相を変えて走り出していた。

「おい古代、どうした！？」
「今ユキからだったんですが、避難民の中にユキのご両親がいたんです！これから会いに行ってきますんで後の事はよろしくお願いします！」

第４話―リンボス・エクスプレス―（その４）

―同日　１８：４０　マクロス艦内―

「あ、古代君！こっちよ！」

大勢の避難民で溢れ返っているマクロス艦内の中で、ユキはようやくたどり着いた古代に手を振っていた。

「ユキ、どうして君のご両親がここに？」

「私達マクロスのフォールドに巻き添えになったこと、一応ママ達に連絡しておこうと思ってダメ元でケータイからメールしたの…そうしたらすぐ返事が返って来て“この艦に乗ってる”って…」

二人が話しているそばから、ユキの両親…森　浩二と晴美が近付いて来た。

「おや進君、君もこの騒ぎに巻き込まれたのかね？」

「はい…僕とユキはヤマトに乗っていて、この艦のフォールドに巻き込まれてしまって…と言うよりどうしてお二人がここに…？」

古代の問いに浩二が答えようとすると、晴美が凄まじい勢いで話し始めていた。

「そうなの！パパの退職記念に世界一周しようってことで一ヶ月前から世界中見て回って！パリにローマ、ロンドン、ニューヨーク…それで最後の締めに南アタリア島のマクロスを一度でいいから見た

いと思って立ち寄ったのよ！以前から宇宙戦艦を間近に見てみたくてユキに何度もヤマトを見せてくれって言ってるのに、この娘ったら全然…」

「ちょ、ちょっと待ってママ！前から言ってるでしょ！？ヤマトを始めとする艦船は原則として一般公開してないの！マクロスの場合は、たまたまああいう状態だったから仕方ないんだけど…それよりもさっきの旅行の件、私全然聞いてなかったんだけど？」

「あら？そうだったかしら？私はあなた達の家にメールしたはずだけど…もしかして家のパソコン、見てないの？」

「あ…もしかしたら見てないかも…この所残業続きで帰りが遅くて、帰ってからはすぐ寝てたし、それに古代君もずっと宇宙にいたから…」

ユキは自分の行動を棚に上げ、母親の晴美を責めた事を反省し顔が赤くなっていた。

ちょうどそこに、ミンメイを連れたフォッカーと輝がその場にやって来た。

「古代、ここにいたのか…さっき真田さんに聞いたらここだって言われたんでな…」

フォッカーが言うと、後ろからミンメイが申し訳なさそうな表情で古代とユキに切り出していた。

「古代さん、ユキさん…心配かけてすみませんでした…昨日、横浜の私の実家に行ったそうで…」

「ああ…でも良かったよ無事でいてくれて…でもまさか君が家出す

るとは思っても見なかったよ…」

「ホント…でもあなたのお母様なんか涙ボロボロこぼしてらしたわよ…」

ユキの発言に、ミンメイの目から涙がこぼれていた。それを見ていた古代は自分のハンカチを渡しながら呟いていた。

「……とにかく、艦隊が無事地球に帰ったら、一度横浜の家に顔を出した方がいい…その時は俺達もついて行くから……」

第４話―リンボス・エクスプレス―（その４）（後書き）

ユキの両親…ヤマトパート１で二度出て来ましたが、特に第１０話で母親が何枚ものお見合い写真を見せて、ユキを困らせていたのが印象的でした。

ヤマトが地球に帰還した後、ユキが古代の事をどうやって紹介し婚約まで漕ぎ付けたか…あの強烈な性格の母親をどうやって説得したか、一度本編で見たかった……

第４話―リンボス・エクスプレス―（その５）

―同日　２１：０２　ヤマト艦長室―

ヤマト艦長室で、古代は航海日誌を記入しつつ、今日一日で起きた出来事に想いをはせていた。

（……今日ほど色々あった一日は無かった…今朝自分の家で目覚めたら、夜にはバーナード星系とアルファ星系の中間地点…おまけに延べ１０万人もの人々がいる…この人々の命が俺の肩にのしかかると思うと…）

そう考えていると、目に見えないプレッシャーが艦長室の窓外から押し寄せて来るような感じであった。古代は思わず身震いし、デスクの上に置いてあるティーポットからレモンティーをカップに注ぎ、一息に飲み干していた。これは先程ユキが艦内食堂から持参したものだったが、一人で考えたいからとユキを帰していた。
そのティーポットを見つめながら、再び物想いにふけっていた。

（以前の航海では、ヤマト単艦だったからヤマトクルーの事だけを考えていれば良かった…だが、今回の航海は１０万人もの人々がいる…生半可な気持ちだけでは航海の成功はない…ここは僕が全てを掛けてやるしかない…あのイスカンダル遠征時の沖田さんの気持ちが良く分かる気がするよ…とにかく、誰かに頼っているようでは駄目だ…ここは自分の力だけでやって行こう…）

第4話―リンボス・エクスプレス―（その5）（後書き）

古代のレモンティー好きは、他の二次小説でも有名なのでここでも取り上げました。それよりも、ユキの煎れるコーヒーは、完結編以降もマズかったのではないかと…復活編での別居の理由はひょっとしてそれもあったりして（笑）

次回、やっとガンダムシリーズのキャラ登場です！

番外編（その3）―世界観設定―ガンダムシリーズ編（前書き）

ガンダムシリーズ編突入前の予備知識（？）です。

番外編（その3）―世界観設定―ガンダムシリーズ編

1　次回からの舞台、アルファ星系第４惑星リンボス……ここに宇宙世紀ガンダムシリーズのキャラが揃っています。

2　出て来る作品は次の通り。

機動戦士ガンダム００８０
―ポケットの中の戦争―

機動戦士ガンダム００８３
―スターダストメモリー―

機動戦士Ｚガンダム

機動戦士ガンダムＺＺ

機動戦士ガンダム
―逆襲のシャア―

……の５作品ですが、多分増えるかも？
（ちなみにシャアはクワトロ・バジーナとしてロンド・ベルにいます。）

3　この部隊はラー・カイラム、ネェル・アーガマ、アルビオンを中核とした艦隊です。
（ネェル・アーガマの艦長はヘンケンさんにしました。）

4　この部隊に敵対する勢力はネオ・ジオン。ただし単なるテロリストでかつてのジオン軍の栄光は微塵もなし！
（ティターンズも出ます）

5　ガンダムシリーズの艦船にも波動エンジンを搭載しているので、ワープは可能。ただし波動砲は装備してません。（理由については後ほど劇中で）

番外編（その3）―世界観設定―ガンダムシリーズ編（後書き）

うだうだ書いて来たけど、細かい所は劇中で後付けします。

次回、「ＺＺ」のジュドー達ガンダムチーム総登場！

第5話―シャングリラ・チルドレン―（その1）

アルファ星系第４惑星リンボス……ここは２１世紀半ばに発見された、太陽系に最も近い人類が生存に適した惑星である。

当時既に１００億の人口を抱えていた地球は、ようやく全世界の統一を果たし、ある程度の恒星間航行の技術を確立していた。

２１世紀後半に人類の移住計画が進み、２２世紀初頭には自治政府が発足、全ては順調に進んでいたが、２２世紀後半に地球がガミラスからの攻撃を受け始めた頃から事態は急変していった。

ガミラスの遊星爆弾攻撃による放射能の汚染が進み、地下都市を築き防戦に追い込まれつつあった地球本星をよそに、内戦が起きていた。

地球本星に残った人類を受け入れるべく、建造を開始したスペースコロニー群を巡って紛争が多発していた。

当初、紛争を治めるべく反対勢力の中の穏健派代表のジオン・ダイクンの元、話し合いを進めている最中に何者かに暗殺され、後を引き継いだデギン・ザビが突如コロニーの独立を宣言、ジオン公国を名乗り更なる内戦へとエスカレートしていった。

ジオン軍は当初、人型機動兵器、モビルスーツを開発し、電撃作戦で戦況を優位に進めていた。

一方の連邦軍駐留部隊も同じ人型機動兵器を開発して対抗し、独立

機動艦隊ロンド・ベルの活躍と反撃に転じた連邦軍の活躍でジオン公国は敗北し、首謀者のザビ家は全員死亡して戦闘は終結。
だが一部の残党は各地でゲリラ戦を起こして自治政府側を翻弄し、２２０５年現在でも今だ終息の兆しは見られてはいない。

第5話―シャングリラ・チルドレン―（その1）（後書き）

この説明は、１ｓｔガンダムのナレーター永井一郎さん風で読んで下さい。（笑）

第5話―シャングリラ・チルドレン―（その2）

―A．D．２２０５　８．１７　１１：０２　サイド１　シャングリラコロニー―

「畜生！ネオ・ジオンの奴ら、何だってこんなコロニーに攻め込むんだ！？」

ジャンク屋を営むジュドー・アーシタは、次々侵攻して来るネオ・ジオンのＭＳ部隊に怒りを表わしていた。
彼はかつて仲間と共にロンド・ベルに参加してＺＺガンダムを駆り、歴戦の英雄アムロ・レイや、ティターンズからガンダムＭｋ－Ⅱを奪取したカミーユ・ビダンと共に戦っていた。

「一体連邦軍は何やってんだ！？入り口にはＭＳ隊がいたはず何だけど！？」
ジュドーの横でジャンク屋仲間のビーチャ・オレーグがいらつきながら呟くと、ジュドーはある決断を口にしていた。

「こうなったら俺が戦うしかないか…」
「でも、戦うったってＺＺはないんだろ…どーやって戦うんだよ……」

同じジャンク屋仲間のイーノ・アッバーブが不安気に呟くと、ジュドーは平然とした表情で返していた。

「今、エルとモンドがジャンク屋仲間の所に行っている…もうすぐ戻って来るはずだ…」

言った側からＭＳを積み込んだトレーラーが到着し、エル・ビアンノとモンド・アガケがトレーラーから出て来て、後部に掛けられたシートを取り去った。

「ジュドー、あんたから頼まれたモン持って来たよ！」

「何だよこれ、ジム・カスタムって…おまけにガンタンクにザク＝が二機って…せめてジェガンの中古でもあれば…」

「つべこべ言わない！これでも状態のいい奴持って来たんだから！とにかくジュドーはジム・カスタムに乗って！」

「分かった！やるっきゃねーな！モンドお前はガンタンク、ビーチャとエルはザク＝にスタンバってくれ！」

「ジュドー……何かその言い方、ブライトさんみたいなんだけど…」

モンドの突っ込みをかわしながらジュドーがジム・カスタムに乗り込もうとした時、妹のリィナが駆け込んで来た。

「お兄ちゃん！何でまた戦わなければならないの！？」

「リィナ、危険だから下がってろ！イーノ、リィナを連れてシェルターへ行け！」

「分かった！気をつけてな！」

イーノが嫌がるリィナを連れてその場所を離れると、ジュドーはコクピットの中で気合いを入れていた。

「さーて…そんじゃいつものやつやりますか……ジュドー・アーシタ、ジム・カスタム行きまーす！」

第5話―シャングリラ・チルドレン―（その3）

―同日　１１：１９　ラー・カイラムブリッジ―

その頃、サイド1空域を航行中のロンド・ベル艦隊の元にシャングリラコロニーからの救援要請を受けていた。

「艦長！シャングリラコロニーからの救援要請です！」

ロンド・ベル旗艦ラー・カイラムブリッジでは、通信員が緊迫した表情で艦長のブライト・ノアに報告をしていた。

「よし、全艦戦闘配備！各ＭＳ隊は出撃準備！急げよ！」

ブライトが命令を下すと、ＭＳデッキにいるアストナージ・メドッソが報告を入れていた。

「艦長、もう少し時間を頂けますか？ＭＳ隊の損傷が激しくて整備が追い付きません！」

「とにかく早くしてくれ！その間、他の部隊を先行させる！」

この所、ネオ・ジオンの攻勢は活発化し、そのお陰でＭＳ部隊の損傷率は増加しつつあった。

「アルビオンより入電！バニング隊並びにモンシア隊、間もなく出撃完了との事です！」

「分かった！二人によろしく頼むと伝えてくれ！」

―同日　１１：２５　アルビオンＭＳデッキ―

強襲揚陸艦アルビオンのＭＳデッキでは、既に各ＭＳが出撃準備を終えつつあった。
中でも、ベルナルド・モンシアは愛機ジェガンのコクピットの中でぶつぶつ文句を垂れ流していた。

「くっそ～ウラキの奴め～！さっきニナさんに投げキッス何かされやがって…今に見てろよ！あいつのガンダムもニナさんも全部俺の物にしてやらぁ！」

『何文句垂れてんだい、このスケベ親父！さっさと出やがれ！』

整備班キャップのモーラ・バシットがモニター越しに叫ぶと、モンシアはいつもの如くやり返していた。

「うるせーっこのデカ女！言われなくても行かせて貰うぜぇ！モンシア機、行くぜ～～～っ！」

第5話―シャングリラ・チルドレン―（その3）（後書き）

モンシア中尉、相変わらずのテンション…ガンダムに対するこだわりはこの作品でも見せてくれるはずです。

次回、シーマ様の出番です。３０歳過ぎてますが大丈夫？

シーマ・ガラハウ
「おい！そんな馬鹿な事言ってると……コロニー落としちゃうよ……」

第5話―シャングリラ・チルドレン―（その4）

―同日　１１：３２　シャングリラコロニー内―

シャングリラコロニー内では、ネオ・ジオン軍のＭＳ部隊が破壊の限りを尽くしていた。そんな中、愛機ガーベラ・テトラを駆っていたシーマ・ガラハウが、その様子を満足気に見ながら呟いていた。

「……全くここの連中と来たら軟弱だねぇ…全然手応えがありゃしない…」

『シーマ様！ここの陥落は時間の問題ですぜ！』

部下の一人が楽観的になるのを聞くと、シーマは苦笑しながら釘を刺していた。

「……でも油断するなよ…戦いってのは何が起きるか分からんからねぇ…何処かの馬鹿共が現れるかも知れないから、用心に越した……って早速現れたよ…しかも旧式の機体で……」

シーマ達の目前にジム・カスタムを先頭に、ザク＝が二機とガンタンクが行く手を阻んでいた。しかもそのジム・カスタムから通信が入っていた。

『やい！そこのネオ・ジオンの連中！これ以上好き勝手にさせねーぞ！』の声と共にジュドーの姿がガーベラ・テトラ内のモニターに映し出されていた。

「フッ…誰かと思ったらロンド・ベルの坊やじゃないか…あんたよ

くそんな旧式の機体でこの私に対抗出来るねぇ…」

『何だよ…シーマのおばさんじゃないか…まだ現役やってたのかよ…あ、嫁ぎ先が無いからこんな事やってんだ！』

ジュドーのその発言にシーマは思わずブチ切れ、ビームライフルの照準をジム・カスタムの後方にいるガンタンクに合わせながら叫んでいた。

「うるさいね！良い子はさっさと昼寝しちまいな！？」

―同日　同時刻　ジム・カスタムコクピット―

まばゆい閃光がした後、ジュドーが目にしたものはガンタンクのキャタピラが破壊され、横向きに倒されている姿だった。

「モンド大丈夫か！？とにかくお前達は下がってろ！ここは俺が引き受ける！」

そうは言ったものの、たった一機のジム・カスタムで延べ１０機以上の敵ＭＳを相手にするには、いささか無理があった。

（……やっぱジム・カスタムじゃ無理かも…これがＺＺならハイメガキャノンで一発逆転なのに…）

ジュドーがそう考えていると、突然敵のＭＳギラ・ドーガが爆発を起こしていた。

「な、何だぁ…敵のＭＳが爆発したぞ…一体どうして…！？」

ジュドーが呆然としていると、上空をサブフライトシステムに搭乗しているＭＳ群が近付きつつあった。

『おい！そこのおんぼろジム・カスタムに乗ってる奴下がれ！後はこのモンシア様に任せとけい！不埒な奴らは成敗してやらぁ～～～！』

『……中尉……時代劇の見過ぎです……』

『ほっとけアデル……まあそんな訳でそこのジム・カスタム、聞こえてるか！？』

「……聞こえてますよベイトさん……モンシア隊の皆さんって相変わらずお笑いトリオなんですね……」

『な…何だぁ！ジュドーなのかぁ！？お前さん何でそんなもん乗ってんだ！？』

「詳しい事は後！今はとにかく、シーマのおばさん達を……っていつの間にいなくなったんだ…？」

第5話―シャングリラ・チルドレン―（その5）

―同日　１２：０１　シャングリラコロニー宇宙港―

コロニー宇宙港で、ジュドー達はブライト以下ロンド・ベル一行と再会を果たしていた。

「とにかくお前達が無事で良かった。まさか廃棄寸前のＭＳを持ち出して抵抗しているとは思わなかったぞ…」

「まあねぇ～！これもジャンク屋やっていたおかげですよ！」

ブライトの問い掛けにモンドが答えていた。するとジュドーがある疑問を投げ掛けていた。

「でもブライトさん、何でこんなコロニーにネオ・ジオンの連中が攻めて来るんだ？」

「分からん…とにかく連中はここだけではなく、他のコロニーまで攻撃しているんだ…我々は連日その対応に追われているんだ…」

「そればかりではない…最近はティターンズの連中も何かを画策しているとの情報もある…」

ブライトの発言の後、クワトロ・バジーナも憂鬱な表情で呟くと、ジュドーが切り出していた。

「……ブライトさん、俺達をもう一度ロンド・ベルに参加させてくれないか…さっきの戦いとクワトロさんの言った事が妙に引っ掛かるるんだ…もしかしたら近いうちに大きな戦いが起きる気がするんだ…頼むよ…」

今にも土下座しそうな勢いのジュドーに、ブライトは困惑していた。

「それはいいんだが…軍からは給料は出ないぞ…」

「金の問題じゃない！これは俺達…いや、地球圏全体に関わる事なんだぜ！」

ジュドーの発言にブライトがなおも困惑していると、アムロが助け舟を出していた。

「艦長、彼らを“善意の協力者”として迎え入れるのはどうだろう？それに前回の戦いでは、彼らの力があったから最悪の結果にならずに済んだんだ…」

「まあ確かにな……分かった、君達を快く迎え入れる…ただし、これだけは言っておく！何をしても構わんが、最低限の規律だけは守ってくれ！」

ブライトのその決断にジュドー達は小躍りして喜んでいた。中でもビーチャとモンドのはしゃぎようは凄い勢いであった。

「イヤッホー！さっすがブライトさん！話が分かる！」

「そうそう！なんせ俺達もニュータイプだからな！いい仕事やりまっせ！」

「ニュータイプだからってあまり甘く見ない方がいいぞ、そんな考えだと命を落としかねないんだ！」

アムロの一喝で、ビーチャとモンドは一瞬のうちに静まり返っていた。それを横目にしながら、ブライトはついて来たリィナに問い掛けていた。

「リィナ、君はどうする？」
「私もお兄ちゃん達について行きますよブライトさん！」
「お前は駄目だ！学校があるだろうが！？」

リィナの意見にジュドーが反対すると、クリスチーナ・マッケンジーが逆に問い掛けていた。

「ジュドー君、学校の勉強なんていつでも出来るわ…それに危険なコロニーにいるよりはロンド・ベルにいた方が安心でしょ？」
「そりゃまあ…クリスさんの言う通りかも……すいませんでした…俺が間違ってました。リィナゴメンな…」
「心配してくれてありがとうお兄ちゃん……それよりブライトさん、相変わらずロンド・ベルって人手不足らしいから家事全般、手伝います！」
「ああ、そうしてくれると助かるよ…」

一同が話していると、クワトロの携帯電話が鳴り響き、彼が一言二言話すとブライトに切り出していた。

「艦長、悪いが用事が出来た…しばらく出掛けるが構わないかね？」
「ああ、当分連中も攻撃して来ないようだから、ゆっくりして構わん…」

ブライトの一言でクワトロはそそくさとその場を後にしていた。それを見ながらジュドーは思っていた。

（あの人って相変わらず謎が多いよな……）

第5話―シャングリラ・チルドレン―（その6）

―同日　13：28　シャングリラコロニー内市街地―

クワトロ・バジーナ……彼の正体は、亡くなったジオン・ダイクンの息子キャスバル・レム・ダイクンであり、かつてジオン公国軍に所属していた“赤い彗星”シャア・アズナブルでもあった。

彼はザビ家に父を殺された恨みからシャアの名前を名乗ってジオン軍に入り、復讐の機会を狙いそれを達成した後は再び名前を変えて地球本星に潜伏していた。

潜伏中は様々な情報収集に当たっていたが、やがて襲い掛かるであろう巨大異星人の情報を得ると、彼は地球圏の将来を真剣に考え始め、再びアルファ星系へと舞い戻りロンド・ベルに参加していたのであった。

市街地にあるカフェテリアに到着したクワトロは、一足先に来ていた一人の男に声を掛けられていた。

「お久しぶりですシャア大佐…」

「……キグナン…久しぶりなのはいいが今の私はクワトロ・バジーナだ…シャアと言う名前は既に捨てた…」

「私にとっては、今だにあなたはシャア大佐なのです…」

「……まあいい…それで例の件は進めてくれたかね…？」

「はい…現在アナハイムで建造中のアムロ少佐の新型ガンダムに使用される、サイコフレームの技術をジオニック社から横流ししておきました…」

「そうか…これでアムロ君もやっとまともな機体に乗れるな…思えばリ・ガズィ何て安っぽい機体は彼には合わんよ…後は私のサザビーをどうやって手に入れるかだな…」

「その件についてはもう少し時間を頂ければ……それに……」

キグナンが言うべきかどうか迷っていると、クワトロが先に切り出していた。

「何だ…他にも何かあるのか…？」

「はい……実は、地球本星の事なんですが…“奴ら”がついに現れたそうです…」

「何だって…それは本当なのか！？」

キグナンの告白にクワトロは強い衝撃を受けていた。彼の危惧していた事が、ついに現実になっていた。

「恐らく１５年前に落下して来た巨大戦艦の持ち主か、その交戦相手だと思われます…“奴ら”の攻撃を受けて、その巨大戦艦―ＳＤＦ－１マクロスと歴戦の名艦、宇宙戦艦ヤマトが行方不明だそうです…」

「あのヤマトが行方不明とは…」

クワトロは思わず絶句していた。地球本星で何度も見掛けたヤマトが行方不明とはにわかに信じられなかった。

「確か艦長は古代進大佐だったな…」

「ええ…亡くなられた沖田提督の愛弟子だそうです…彼をご存知で

すか？」

「いや、面識はない…一度会って今の現状をどうすべきか聞いてみたかったのだが……いや…近いうちに彼に会えそうな予感がする…」

クワトロはニュータイプの勘で、近い将来古代進に会えそうな気になっていた。事実、ヤマトを旗艦とする第１軌道艦隊はアルファ星系最外縁部までたどり着きつつあった……

第5話―シャングリラ・チルドレン―（その6）（後書き）

前話でジュドーが言った“地球圏”は本来なら地球近辺を指しますが、今作品では太陽系とアルファ星系をまとめて“地球圏”と設定しました。

次回、アムロがνガンダムをついに入手！チェーン・アギ初登場ですが、「逆シャア」を初めて見た時、チェーンのスカートの短さにドキドキしていましたが、単なるキュロットだったのでひと安心と言うか…（男って罪なもんです…）

第6話―アルファ星系波高し！？―（その1）

―A．D．２２０５　８．２１　１６：１１　グラナダアナハイム技術開発部―

「アムロ少佐ぁ～こっちで～す！」

リンボスの衛星グラナダにあるアナハイム・エレクトロニクス本社で、ラー・カイラム所属の技術士官チェーン・アギが、たった今到着したばかりのアムロに手を振っていた。

「やあチェーン、元気そうじゃないか！」

「ええ、おかげ様で…それより聞いて下さいよ！ここの人達、私がロンド・ベルの所属だって信用してくれなくて…仕方ないからニナさんからの紹介状を見せたら、やっと信用してくれて…困ったもんです！」

チェーンが少し困った表情で話すと、アムロが彼女の肩を抱き寄せて呟いた。

「それだけ君がチャーミング過ぎるからさ…」

「まあっ！少佐ったら人を褒めるのがお上手なんですね…ウフフッ！」

チェーンが顔を赤くしながら答えていると、アナハイムの技術官であるオクトバー・サランがやって来て、アムロと握手を交わしていた。

「お久しぶりですアムロ少佐！」
「オクトバーさんも元気そうで…ところでνガンダムの方はどうですか？」
「ええ、後は動かすだけですが、ご覧になりますか？」
オクトバーの案内で、二人はνガンダムが置いてある整備フロアへと向かった。
そこには、整備も済み後は動かす状態のνガンダムがその姿を見せていた。
「……少佐からの提案のあったサイコミュシステムなんですが、実はある所から最新の技術が提供されまして、それを駆動系に組み込むことにしたんです…」
アムロはオクトバーから手渡された資料に目を通しながら、彼にその出所を尋ねてみたものの、オクトバーは何も知らないと言うように首を横に振っていた。
するとそこに、一枚の電文を手にした一人のアナハイム社員が一同の側にやって来て、それをアムロに手渡していた。
「……ロンド・ベルへの帰還命令だ…第６惑星空域で地球本星第１軌道艦隊と巨大異星人が交戦中だそうだ……チェーン！直ちに帰還する！マスドライバーの準備をしてくれ、νガンダムをそれにセットする！」
「了解！」
アムロの命令にチェーンが動き出しそうとした時、オクトバーが異を唱えた。

「そんな無茶です！テストもしてないのにいきなり実戦投入だなんて！おまけに主兵装である、フィン・ファンネルがまだ…」
「ライフルとサーベルがあれば何とかなる…フィン・ファンネルは後で届けてくれればいい…」

第６話―アルファ星系波高し！？―（その１）（後書き）

リンボスの衛星をガンダムシリーズでお馴染みの、グラナダと名付けました。他にもリンボスの地名を多少アレンジして出す予定ですが、それはまた別の話…

次回、第１軌道艦隊がアルファ星系第６惑星空域にまでたどり着きましたが、彼らの苦難はまだまだ続きます…

第6話―アルファ星系波高し！？―（その2）

地球を離れてから二ヶ月が過ぎ、第一軌道艦隊はようやくアルファ星系第６惑星空域に差し掛かっていた。その間にも、ゼントラーディ軍による様子見のような攻撃はあったものの、比較的被害は最小限に留まっていた。

この二ヶ月の間に、進宙式で行われる予定だったミス・マクロスコンテストが開かれてミンメイが選出されていた。
そして彼女は念願の歌手デビューを果たし、日々多忙なスケジュールをこなしていたのであった…

―A．D．２２０５　８．２１　１６：５９　アルファ星系第６惑星空域―

『デルタ1より全機へ！艦隊より１５０宇宙キロ周辺に敵バトルポッド群が展開中！哨戒中の部隊は直ちに迎撃に向かえ！』

「スカルリーダーより全機へ！聞いての通りだ、“奴ら”を艦隊に近付けるな！」
『『『了解！！！』』』

この日、フォッカー率いるスカル大隊は、いつもと同じような敵の襲撃に備えるため哨戒任務についていた。あまりにも敵の数が多いため、マイクロミサイル搭載のブースターパックが開発されて戦力

と機動力の増強が図られていた。

「スカルリーダーより全機へ！敵バトルポッド群をキャッチした！これより全機、ミサイル発射せよ！」『『了解！！！』』

フォッカーの指示で全機からミサイルが発射されていった。輝は自機のモニターでミサイルの行方を息を殺しながら見つめていた。

やがて、ミサイル群がバトルポッド群を一斉に破壊するとそれを見ていた柿崎早雄が歓喜の声を上げていた。

『ヤッホー！どんなもんだ！』

『喜ぶのはまだ早い！全機散開して残りの敵を叩け！』

フォッカーの指示により、各機が散開し、戦闘機モードからバトロイドモードに変型してそれぞれ残敵を掃討していった。

中でもマクシミリアン・ジーナス（通称マックス）は、僅かな時間で5機のバトルポッドを撃墜して輝を唸らせていた。

（さすがマックス…やるじゃないか…俺だって負けてたまるか！？）

ほぼ敵を掃討しつつあった時、未沙からの通信が入っていた。

『デルタ1より全機へ！艦隊前方５０宇宙キロに敵戦艦１０隻接近中！直ちに迎撃に向かって下さい！』

「ええっ…それじゃこっちの敵はただのオトリかよっ！？」

輝は機内で叫ぶと直ちに自機を艦隊へと方向転換　し、フルスピー

ドで向かっていった。

第6話―アルファ星系波高し！？―（その2）（後書き）

マックスと柿崎の初登場でした。マックスは天才的なパイロットで、結構奇抜な戦いで敵を圧倒していたのが印象的でした。

一方、柿崎はと言うとムードメーカー的存在でしたが、ＴＶ版＆劇場版共に非業の死を迎えたのは少し残念…

果たして今回はどうなる！？

第6話―アルファ星系波高し！？―（その3）

―同日　１７：０５　第一軌道艦隊―

第一軌道艦隊では、迫り来る敵のバトルポッドの迎撃に追われていた。

マクロスを中心に周囲を第一軌道艦隊の艦船で取り囲み、防御網を敷いていた。艦隊上空はヤマトの加藤四郎と、揚羽武両名率いるバルキリー隊が守りを固めていた。

そんな中、数機の敵バトルポッドがマクロスメインブリッジ周囲に飛来し、攻撃を仕掛けようとしているのを加藤機が発見、これをミサイルで撃墜したものの一機だけをとり逃がしていた。

「マクロスのブリッジが危ない！急がないと…」

加藤が叫び声を上げた時、一機のバルキリーが飛来し、ブリッジをかばうようにガトリング砲を撃ちまくって撃墜していた。

（……ブースターパックにドクロのマーキング…フォッカー少佐率いるスカル大隊のメンバーなのか…？）

加藤がそう思い、相手に感謝の意を表わそうと通信を送ろうとした時、マクロスメインブリッジからその機と通信をやり取りしていた。

『スカル１１番機！あなたの担当は敵艦隊の迎撃のはずよ！ここはヤマトのバルキリー隊に任せて速やかに向かいなさい！』

『敵機が攻撃して来たんだ！助けてやったのにそんな言い方ないだ

ろう！』

ブリッジとその機体が誰であるか、加藤はすぐに合点がいった。

（始まったよ…一条と早瀬中尉の口喧嘩が…）

加藤がそう思っていると、未沙はより厳しい口調で輝に切り出していた。

『あなた、新人のくせに命令違反するつもり！？とにかく持ち場に戻りなさい！』

『女の指図なんて聞けるか！！本機はこれより、艦内に侵入した敵の迎撃に向かう！以上！』

輝のバルキリーはブースターパックを切り離し、艦内へと向かっていった。その様子を見ていた未沙は思わず叫んでいた。

『もうっ！男と女のどっちが偉いって言うのよ！？』

この未沙の発言を聞いた加藤は心の中で溜息をつきながら思っていた。

（やだねぇ早瀬中尉って…せっかく助かったってのにあれじゃ一条が可哀相だよ…せめてお礼の一つでも言えば、可愛気があるのに…）

第６話―アルファ星系波高し！？―（その３）（後書き）

ヤマト艦載機隊隊長、加藤四郎の登場でした。この人とフォッカーが並んで話している姿をアニメで見たかった！中の人が同じなので、どう演じたか…まああの人なら何とか出来るでしょう。
（例…ヤマトパート１、第２５話の徳川機関長と佐渡先生の場面…）

次回、輝とミンメイが再び出会います…

第6話―アルファ星系波高し！？―（その4）

―同日　17：15　マクロス艦内市街地―

この日はミンメイのファーストコンサートが、市街地のドーム球場で開かれていた。開始当初から観客は総立ち状態であったものの、突然の空襲警報発令と、5分後にトランスフォーメーションを行うと艦内放送が流れたため、コンサートは中断の憂き目にあっていた。そして、ミンメイはマネージャーである兄のカイフンやスタッフと共に控え室に待機していた。

「兄さん…大丈夫かしら…ここは危険だからどこか別の場所に避難した方が…？」

「いや、下手に動かない方がいい…いつものようにすぐ治まるさ…」

ミンメイが不安がるのをカイフンがなだめていたが、艦内に侵入した敵バトルポッド群のうち一機が、控え室の建物に頭から落下し天井を破壊して内部に突っ込んで来た。

カイフンとミンメイは手を取り合って逃げ出し、その様子を落下したバトルポッドを操縦していた兵士が見て驚愕していた。

『な、何だこれは…男と女のマイクローンが一緒にいるなんて…』

その兵士の発言をどうにか着地に成功したバトルポッドの兵士が聞き、モニターを確認するなり彼もまた呆然として呟いた。

『ヤック……デカルチャー……』

その兵士の発言を耳にしていた隊長らしき兵士は二人に指示を出していた。

『とにかく、資料を手に入れて攻撃は別の隊に任せ、我々はここを撤退する！』

『『了解！！』』

一方、ミンメイとカイフンは別のバトルポッド隊に追われ、必死に逃げていたが、ふとしたはずみでミンメイが転んでしまった。

カイフンがミンメイの側に近づこうとした時、運悪くトランスフォーメーションが始まってしまい、二人はシャッターを介して別々に別れる羽目になっていた。

カイフンと離れてしまったミンメイが、バトルポッド隊に取り囲まれそうになった時、艦内にようやく入り込んだ輝のバルキリーがガトリング砲をバトルポッド隊に浴びせ、逃走を図ろうとした残り一機を追撃しようとした。

その時、市街地の重力が急にゼロとなり、店のショーウインドウから品物がガラスを破って外に飛び出し、道路に停めてあった車も宙に浮いて一斉に下方向へと落ちて行った。

むろんミンメイも浮いて下方へと落ち始め、それに気付いた輝のバルキリーは全速力でミンメイに追い付こうと歩道橋や車にぶつかりつつも、アームを伸ばして何とか彼女の体を掴んでいた。

（ふーっ…何とか無事に……！！！）

輝が安心したのもつかの間、輝のバルキリーはふとした弾みからエアロックに突入してしまい、さらに間の悪い事に非常用シャッター

が下りてそのまま閉じ込まれてしまった。

第6話―アルファ星系波高し！？―（その4）（後書き）

劇中、出て来た三人のゼントラーディ兵士は言わずと知れたスパイ三人組…ワレラ・ナンテス、ロリー・ドセル、コンダ・ブロムコの三人です。（今回の設定はＴＶ版にしています。）

でも、三人の名前を続けて言うのはどうかと思いますが、当時のスタッフのセンスって一体…

それと、彼らが使っていた台詞“デカルチャー”ここだけはゼントラーディ語にしました。（日本語の“そんな馬鹿な！”では、彼らの衝撃度が伝わりにくかったので…）

第6話―アルファ星系波高し！？―（その5）

―同日　同時刻　サイド2　ロンデニオンコロニー空域―

その頃、アムロはチェーンと共にνガンダムを駆り、サイド2空域に展開中のロンド・ベルへと帰投していた。旗艦ラー・カイラムのMSデッキから艦内のブリーフィングルームに直接入った彼は、ブライトに現在の状況を聞いていた。

「艦長、どうなんだ？今の状況は？」

「ああ…現在、第一軌道艦隊は第6惑星空域で“奴ら”と交戦中だそうだ…」

クワトロは二人の会話を聞きながらしばらく考えていたが、やがておもむろに切り出していた。

「艦長、この際ロンド・ベルで彼らの救援に行こう…今は少しでも“奴ら”の情報を収集しなければならないと思うのだが？」

「救援に行くのは構わんが…その隙を狙ってネオ・ジオンの連中が攻勢を強めたらと思うと…」

ブライトが困惑していると、緊急ミーティングのために来ていた各艦艦長やメンバーのうち、ネェル・アーガマ艦長のヘンケン・ベッケナーが名乗り出ていた。

「ブライト君、だったら我々の部隊が残ろう…ネェル・アーガマなら何とかなるし、他の艦も歴戦をくぐり抜けた者ばかりだしな…」

「分かりました。では頼みますヘンケン艦長…それでは改めて説明

する…我が艦とアルビオンを中核とする艦隊は直ちに第６惑星空域に向けてワープする！残りの艦はネェル・アーガマと行動を共にしてくれ！以上だ！」

ブライトが宣言し、各々所定の配置につこうとした時、ヘンケンがアムロに尋ねていた。

「アムロ君、そう言えばνガンダムを持って来たのはいいが肝心の新型ファンネルはどうしたのかね？」

「その事なんですが、急いでいたので後からドック艦ラビアンローズで運んでもらえるように、手配をしておきました。」

「……ラ、ラビアンローズ……」

アムロの発言にブライトが思わず反応すると、それを見たジュドー達がすかさず突っ込みを入れていた。

「ブライトさ～～ん！そう言えばあの艦に愛しいあの人が乗っていますよねぇ！？」

「そーそー！一番会いたいか・の・じ・ょ・！」

ジュドーとビーチャの突っ込みにブライトは赤くなりそうになりながらもひたすら反論していた。

「な、何を言うか！私には女房と子供達がいるんだ！べ、別にエマリーの事は……」

「聞いたかよ！？エマリーだってさ！」

「何だかんだ言ってもやっぱりブライトさん、エマリーさんの事気にしてんだよなぁ～！？」

「お、お前ら～～～っ！さっさと準備を急がんか～～！？」

ビーチャ達とブライトの会話を聞いていたアムロは溜息をつきつつ苦笑していた。

（……ったくブライトは…冗談だって分かりそうなものを…あいつらの掌の上で遊ばれているのにまだ気がつかないのかよ…）

第6話―アルファ星系波高し！？―（その5）（後書き）

ブライトとエマリー…ＺＺ本編や、スパロボでもお馴染みの“イケナイ”カップルですが、今作品は少し面白い展開にしたいと思います。何と、エマリーさんがブライト以外の男性に目をつけますが、その相手とは……？
今後の展開に要注目！

第6話―アルファ星系波高し！？―（その6）

―同日　17：28　マクロスメインブリッジ―

「敵艦隊、我が艦隊より30宇宙キロまで接近！」

トランスフォーメーションが終了し、強攻型へと変型完了したマクロスメインブリッジでは、主砲――マクロスキャノンの発射準備が進められていた。

「マクロスキャノン発射スタンバイ！目標、前方の敵艦隊！」

強攻型態勢のマクロスの二つに分かれた上向きの艦首が、前方に展開しているゼントラーディ艦隊を捉えるべく下方へとスライドを始めていた。

「発射コース右15度方向に修正、並びに上下角プラス2度へ修正します！」

「対閃光防御シールド展開完了！」

「全艦隊、本艦後方に待避完了！」

「マクロスキャノン発射！目標敵艦隊！」

グローバルの指令で、クローディアが発射ボタンを押したものの、何故か発射されず何度押してみても何の反応も無かった。

「一体どうしたのだ！何故発射できないんだ！？」

グローバルが声を荒げると技術開発部のジーナ技師長から連絡が入

っていた。

「どうしたのだ技師長！何かトラブルでもあったのか！？」

『はい、重力制御システムが一部不調のために、発射システムに異常をきたしまして…修理に３０分ほどかかりますが……』

―同日　同時刻　ヤマト第一艦橋―

「一体どうしたんだ！？一向にマクロスキャノンが発射されないぞ！！」

ヤマト第一艦橋では、艦長席の古代がメインパネルに映し出されたマクロスを見て声を荒げていた。

「艦長、マクロスより入電です。“マクロスキャノン発射システムが不調のため修理に時間がかかる”だそうです！」

相原の報告に、古代は思わず唇を噛み締めていた。

（……何て事だ…波動砲が撃てない今、頼りになるのはマクロスキャノンだけだというのに…どうすればいい……？）

古代はしばらく考えた後、ふと思いついて相原にフォッカーへの連絡を依頼すると、ものの１分もしないうちに彼から連絡が入っていた。

『どうした古代、何か用事か？』

「フォッカー、済まないがマクロスの主砲発射システム修復作業が終わるまでの間、全機を指揮して敵艦隊を引き付けてくれないか…

？」

古代は駄目で元々と思ってフォッカーに問い掛けると、彼は即座に返答していた。

『かつての戦友からの頼みだ！心良く引き受けよう！』

「ありがとうフォッカー……だが、そちらの航空管制オペレーターにも一応……」

と古代が言った時、未沙から通信が入っていた。

『こちらデルタ1…古代艦長とフォッカー少佐の話はこちらでも聞いていました…ここはとにかく、時間稼ぎをよろしく頼みます…』

未沙の発言に古代は少し面食らっていた。何事にも固い性格の未沙をどうやって説得するかしばらく考えていただけに、思わず拍子抜けしていた。

『よ～し！そうと決まれば一丁行きますか！スカルリーダーより全バルキリー隊へ！聞いての通りだ、マクロスキャノンが撃てるようになれるまで時間稼ぎだ！心して行けよ！』

『『『了解！！！！！』』』

フォッカーの命令の下、全バルキリー隊は前方に展開するゼントラーディ艦隊方向へと向かって行った。

第6話―アルファ星系波高し！？―（その6）（後書き）

本日（8／31）、笑っていいとものテレフォンショッキングに伊武雅刀さん（ヤマトのデスラー役の方）が出演されました。

この方、料理を作るのが大変上手だそうで、自分の中ではデスラー総統が自ら台所に立っいる姿が思わず目に浮かび…

（↑んなこたぁない…ｂｙタモリ）

デスラー繋がりで、「ヤマト3」のベムラーゼ首相や「ヤッターマン」のドクロベェ役をされていた声優の滝口順平さんがお亡くなりになりました……

謹んでご冥福をお祈りします……

第6話―アルファ星系波高し！？―（その7）

―同日　17：45　マクロスメインブリッジ―

『こちら技術開発部のバルトロウです！マクロスキャノン発射システム修復完了しました！いつでも発射出来ます！』

マクロスキャノン発射システムの修復作業を陣頭指揮していたジーナ技師長から連絡が入ると、メインブリッジ内は再び活気に溢れていた。

「よし！早瀬君、敵艦隊を攻撃中の全バルキリー隊に連絡してくれ！」

「了解！全バルキリー隊へ！本艦はマクロスキャノンの修復完了、これより発射態勢に入るので直ちに射程外に退避せよ！」

「敵艦隊、現在位置本艦より25宇宙キロまで接近！」

「マクロスキャノンへのエネルギー注入率、現在85パーセント！」

「全バルキリー隊、全機射程外への退避完了！」

「よーし行くぞ！マクロスキャノン発射！！」

「了解！マクロスキャノン発射します！」

クローディアが発射ボタンを押すと、艦首砲身からプラズマ粒子が発生し、やがてそのエネルギーの束は前方に接近しつつあったゼントラーディ艦隊に突き刺さり、あっさり消滅させていった。

―同日　１７：４６　ヤマト第一艦橋―

ヤマト第一艦橋では、前方のゼントラーディ艦隊が消滅した事を受けて、メインスタッフが歓喜の渦に舞っていた。

土門と島、真田と山崎が握手を交わし、相原・南部・太田の“スリーアミーゴ”が万歳を繰り返していた。

古代も艦長席から下りて、レーダー席のユキにそっと微笑むと、彼女もまた微笑み返していた。

その時、航法レーダーに反応があり、慌てて自席に戻った太田が切羽詰まった表情で報告していた。

「艦長！１０時方向、２５宇宙キロ地点に重力振を確認！」

「何だって!?新手の敵艦隊か!?」

「いえ…これは波動エネルギー反応、ワープアウト反応です！」

「ユキ、艦籍は分かるか?」

「はい……艦籍出ました…リンボス駐留の連邦軍です…所属は第１３独立機動艦隊ロンド・ベルです…」

「ロンド・ベル…“ニュータイプ部隊”と噂されているあの部隊が救援に来てくれたのか…」

―同日　１７：５１　第５惑星空域ゼントラーディ艦隊旗艦―

その頃、第５惑星空域で待機中のゼントラーディ艦隊旗艦では、第一軌道艦隊をおびき出すべく先行艦隊を派遣していたものの、あえなく全艦全滅の報告が入りブリタイとエキセドルを呆然とさせていた。

「……増援部隊を呼ばねばならんようだな……敵のマイクローンを少し甘く見ていたようだな……」

「……そのようですな……おまけに、この星系のマイクローン達が彼らの艦隊に合流したようで……事態は一刻を争うようですな……」

第６話―アルファ星系波高し！？―（その７）（後書き）

次回、いよいよヤマト・マクロス・ガンダムキャラ揃い踏み！

第6話―アルファ星系波高し！？―（その8）

―同日　１８：１５　マクロス艦内大会議室―

「初めまして。私は第１３独立機動艦隊ロンド・ベル司令を務めるブライト・ノア大佐であります…」

マクロス艦内にある大会議室では、ロンド・ベルメインスタッフと第一軌道艦隊の各艦メインスタッフの初顔合わせが行われていた。

「私の右隣にいるのが、第一軌道艦隊司令、並びに宇宙戦艦ヤマト艦長の古代進大佐……そして左隣にいるのがこのマクロス艦長を務めるブルーノ・Ｊ・グローバル准将です。」

藤堂長官に紹介された古代とグローバルは立ち上がり、ブライトに敬礼していた。

「古代艦長、ヤマトの活躍はかねてから聞いております。それにこのマクロスは凄い艦ですね…艦内に市街地があるとは…先程到着した時には思わず驚きました…」

「ええ…我々もまさかこうなるとは思っても見ませんでしたよ……それに“ニュータイプ部隊”と噂されるあなた方と会えるとは思いませんでしたよ……」

古代が正直な感想を述べると、ブライトは笑いながら答えていた。

「そんなことはありませんよ…たまたま部隊にそういった人物がいただけの事ですよ…大半は普通の人物が所属しています…そうだ、

紹介しておこう。私の右隣にいるのがアムロ・レイ少佐、ロンド・ベルのＭＳ部隊長を務めている。そして私の左隣にいるのが、クワトロ・バジーナ大尉、この部隊の総参謀的な役割をしている…」

「初めましてクワトロ大佐…」

古代はクワトロが持つ独特の雰囲気で、思わず彼を“大佐”と呼んでしまい、彼に苦笑されまくっていた。

「古代艦長、私は“大佐”ではありません…“大尉”なんだが…」

「ああすいません…自分より年齢が上だと聞いていたのでつい……」

「いや、構いませんよ…何しろ自分は不器用なもので…３０過ぎても昇進できないもので…おまけに嫁さんもいない…ブライト大佐なんか私と同年齢なのに、二人の子持ちですからね…」

「そうなんですか？とてもそんなふうには見えませんが…」

「二人も子供がいると色々と大変ですよ…そう言えば古代艦長は結婚の方はまだ…？」

ブライトの問い掛けに、古代が答えようかどうか考えあぐねていると、藤堂が即座に答えていた。

「ブライト君、実はいるのだよ婚約者が…同じ艦内でレーダーを担当している森ユキ大尉と言う、当代一の美人がね…」

「ちょ、長官！何もそれを今言わなくてもいいじゃないですか！？」

藤堂がユキの話題を振ると、古代は思わず絶句し、周囲を笑いの渦に巻き込んでいた。

笑い声が治まると、ブライトがある提案を始めていた。

「実はここに来る途中、みんなと話し合いをしていたが…あなた方第一軌道艦隊を我々ロンド・ベルに編入しようと思うのだが、どう

だろうか？」

ブライトの提案に、古代は藤堂やその他のスタッフとしばらく話し合いをしていたが、結論が出ると即座に回答していた。

「今、藤堂長官やその他の人達と話し合いをしましたが、その話をお受けしましょう。これから先、行動を共にするには何かと都合がいいですからね……」

古代の回答にブライトは満足し、さらにある提案を出していた。

「そうですか、色良い返答を頂きありがとうございます。それともう一つ提案があるのだが…新生ロンド・ベルの司令を古代艦長にお願いしたいのだが……引き受けて貰えないだろうか？」

ブライトの突然の提案に、古代は困惑していた。
自分にこのような大役が務まるのかどうかいささか不安であったからだ。

「あの…ロンド・ベルの司令はブライトさんがやってこその部隊ですよ…とても自分には……」

「いや、これから先の戦いはあの巨大異星人を相手にしなければならない…私にはその経験はないし、古代艦長ならこれまでの経験があるので適任だと思った次第で…」

なおも古代が困惑していると、グローバルが助け舟を出していた。

「古代君、ここはとにかく引き受けたまえ…君一人に責任を押し付けるつもりはない…ブライト君とこの私が副司令として君を支えるつもりだ…」

「古代艦長、グローバル准将の言う通りだ…ここはとにかく引き受けてくれないか？」

「……分かりました…お二人がそう言うのなら引き受けます…」

ブライトとグローバルの説得でようやく古代は、ロンド・ベル司令の就任を引き受けたのであった。

第6話―アルファ星系波高し！？―（その8）（後書き）

ついに古代進がロンド・ベル司令に就任……
実はこの小説を書き始めた理由の一つがこれでした。

ブライトさん以外の人物が、ロンド・ベルを指揮したらどうなるかをやって見たかったのですが、古代ならそつなく出来るはずです！

次回、輝とミンメイが閉じ込められた状況から始まります。

第7話―ラバーズ・コンチェルト―（その1）（前書き）

時間はマクロスキャノン発射前にさかのぼります…

第7話―ラバーズ・コンチェルト―（その1）

―A．D．２２０５　８．２１　１７：３９　マクロス艦内閉鎖空間―

「はぁ～……これでオシャカになったバルキリーは3機目だよ……」

マクロス艦内の閉鎖空間で、輝は壊れたバルキリーのコクピットから出るなり呟いていた。

この二ヶ月の間、些細なミスから自機を喪失する事が二回あり、“次に撃墜されたら減俸だ！？”とフォッカーにきつく説教されたばかりとあって、輝の気分は今またひどく落ち込んでいた。

しかし、それよりも先程救助した女性（ミンメイ）の様子が気になり、バルキリーの左手に握られた彼女を、持っていたライトで照らしていた。

（ミ、ミンメイじゃないか…そう言えば今日はファーストコンサートだったよな…）

輝が思っていると、ライトの光が当たったおかげでミンメイがいきなり目を覚ましていた。

「あ、あなた……あの時の……」

「はっ、はいっ！自分は……」

「一条輝少尉……ですよね……」

「そうです！覚えてたんですね！？」
「ええ、あの時古代さんと話しているのを聞いてたから…それよりここはどこなのかしら？」

ミンメイは、不安気な面持ちで周囲を見渡しながら輝に問い掛けていた。

「どうも閉鎖空間に入ってしまったようで…通信機も壊れているので何処にも連絡しようがなくて…」
「じゃあこの壁、壊せませんか？」
「無理です…特殊金属で作られてるんで…」

輝の発言にミンメイは諦めたらしく、その場に座り込み履いていたヒールを脱ぎ始め、勢いよく背伸びをしていた。

「ま、いいか……過密スケジュールはもううんざり…これで一息つけるわ…」
「あの～もし良かったら…これにサインを…」

輝はポケットからハンカチを出し、ミンメイにサインをせがむと彼女は持っていたサインペンを取り出して、自分の名前を記入していた。

「ゴメンね…今だにサイン書くの下手くそだから…」
「あっいいよ…記念にするから……ってあれ……重力が……」

輝がそう言った途端、二人の体が突然宙に浮き始めていた。ミンメイは突然の出来事に驚き、衣装の間から見えそうになる下着を必死になって隠そうとしていた。

「いやぁ～～～ん！？ど～なっちゃってんのよ～～～～っ！！」
「重力制御が効かないんだ　！」
「もう～～っそんなことよりど～にかしてよ～～～～！？」

どうにもならずに泣き叫びながらくるくる回るミンメイを止めるべく、輝は彼女に叫んでいた。

「とにかく、脚を思いっきり前に振って！！」
「こ、こう！？」

輝のアドバイスのおかげか、ミンメイはどうにか体を浮かせる事に成功し、逆に先程よりも浮いている事を楽しんでいた。

「あははっ！何か楽しい～～～！」
「――――！？ちょ……ちょっと君！？そっちは危険……」

輝が止めようとしても、ミンメイは何処吹く風といった具合に無重力浮遊を楽しんでいた。

「それにしても色んなものが浮いているね～？」
「ホント……みんな街から落ちて来たんだ……」

二人が周囲を見渡すと、衣服や車、自動販売機、あげくの果てにはマグロの巨体までが浮遊していた。
それらを利用して、二人はいつ終わるとも知れないサバイバル生活を始めていた……

第7話―ラバーズ・コンチェルト―（その1）（後書き）

輝とミンメイが閉じ込められるシーンの再現でした。ＴＶ版では宇宙に浮かぶマグロを取ろうと輝が四苦八苦した揚句、頭だけになったシーンはかなり可哀相……
この作品中では丸ごと艦内に浮いていたので、二人は腹一杯食べてるかも……？

次回、モンシアが三人娘をナンパ！？

その結果はいかに……

第7話―ラバーズ・コンチェルト―（その2）

―A．D．２２０５　８．２４　１６：１５
マクロス艦内市街地―

「はぁ～……何かいつも行ってるクラブ…最近つまんないしぃ……」
「そうよねぇ…来ている男の子達、いつも同じメンツだし……」
「仕方ないわよ…マクロス艦内の市街地の中じゃねぇ……」

この日、久々に休暇を取ったシャミー・キム・ヴァネッサの三人娘は、市街地のメインストリートをただあてもなく缶コーヒー片手に歩いていた。

日頃のウサ晴らしをしようと、いつも訪れているクラブに繰り出したものの、結局いつものメンバーしかおらず、仕方無しにただ街中をぶらついていたのだった。

「おまけにさぁ～、ユキさんに頼み込んでセッティングしてもらったヤマトクルーとの合コンもちょっとねぇ…」
「ホント…“ちびクマ”に“江戸っ子モドキ”に“宇宙のトラック野郎”……相手が悪過ぎたわ……」
「そうそう…あの三人組、あげくの果てに喧嘩始めて同席していた古代艦長に怒鳴られたし……ユキさん、後で私達に頭下げてお詫びしてくれて…何かユキさんに悪い事しちゃったかも……」

三人娘は以前行われた合コンを思い出して落ち込んでいると、背後から一人の男に声を掛けられていた。

「そこのお嬢さん達……ヒック！……これからどちらまで……ウィーッ～～～……」

三人娘が振り返ると、そこにはウィスキーの瓶をぶら下げた髭面の男――モンシアが立っており、その向こうには若い二人の青年――コウ・ウラキとチャック・キースが顔をひきつらせつつこちらに走って来るのが見えた。

「お嬢さん方～もし良ければ俺達三人と付き合わないかぁ～？」

三人娘はモンシアのあまりの酔っ払い振りに呆然としつつも、丁重に彼の誘いを断っていた。

「あ、あのぅ……私達これから行く所があるんでぇ……」

シャミーが今にも泣き出しそうな表情で断ると、モンシアはそれにも構わず誘い続けていた。

「まあいいじゃねぇか！ちょうど三対三だしよ…カラオケにでも…」

モンシアはそう言いつつ、シャミーの尻を撫で回すと彼女はいきなり泣き出していた。

「ふえ～～～ん！この人今私に手ぇ出した～～～～！」

シャミーの泣き声にキムはついにモンシアにブチ切れていた。

「ちょっとオッサン！私の同僚に何すんのよ！？アンタもいい軍人なら、やっていい事と悪い事くらい分かるでしょ～がっ！！」

「なんだと～！？人が親切に誘ってればいい気になりやがって！」

「ちょ、ちょっとモンシア中尉…ここはとにかくこの人達に謝った方がいいですよ…」

キースがモンシアをなだめすかしたものの、逆にモンシアはキースを度突き回していた。

「やいキース！この俺様の楽しみに口出すんじゃねぇ！？」

そう言ってキースを張り倒すと、それを見ていたコウも口を出していた。

「中尉！いい加減にして下さい！ここは市街地なんですよ！？」
「ウラキぃ～！てめぇヒヨッ子のくせしてこの俺に説教するってか！？」

いつ終わるか知れない喧嘩を見て、ヴァネッサがシャミーを慰めているキムにそっと囁いた。

「私…早瀬中尉を呼んで来る……」

第7話―ラバーズ・コンチェルト―（その2）（後書き）

劇中、三人娘が合コンした三人組は順番に…徳川太助　坂巻浪夫
赤城大六
でした…

太助の“ちびクマ”　赤城の“宇宙のトラック野郎”は分かりやすいにしても、坂巻の“江戸っ子モドキ”……

自分で書いてるのも何ですが、坂巻役の声優さんが何となく“べらんめぇ口調”に聞こえるのは自分だけ……？

第7話―ラバーズ・コンチェルト―（その3）

―同日　16：26　マクロス艦内市街地カフェテリア―

「――とにかく、まだ死んだと決まった訳じゃない……輝の奴はこの艦内の何処かに居るはずだ…」「はい…では今から西側ブロックを捜してみます…」
「ああ…頼む…」

マクロス艦内市街地にあるカフェテリアで、フォッカーがマックスと柿崎に輝の捜索に関する打ち合わせをしていた。

マックスと柿崎がその場を離れると、フォッカーは浮かない表情でコーヒーに口をつけて溜息をついていた。

「一条君、まだ見つからないのね…」
「もう今日で3日目よ…あの坊や、今頃何やってんだか……」

ユキとクローディアが話していると、未沙が突き放した発言をしていた。

「軍に入ってみたけど、やっぱり怖くて逃げ出したんじゃないの？大体彼は軍人向きじゃないし、人の話は聞かないわ、命令違反はするわ、揚げ句の果てには私をおばさん扱いするわ……」
「ちょっと未沙、あなたがおばさんなら私やクローディアさんはどうなるのよ…」
「そうよ未沙！私達まだまだ若いのよ！？今からそんな事言ってたんじゃ……」「“いつまで経っても彼氏が出来ない”って言いたい

んでしょ？いいのよ…私は仕事一筋で生きて行くから…」

未沙の達観したような発言を聞いていたユキは、半ば呆れながら思っていた。

（全く未沙ったら…恋の一つや二つくらい経験すればいいのに……でもこういう真面目タイプの子が恋にハマったらどうなるのかしら……）

そんな時、ヴァネッサがカフェテリアに息せき切ってやって来た。

「た、大変です！シャミーが酔っ払いに絡まれて…それを止めようとした人と酔っ払いが喧嘩してて……」

「何ですって!?それでシャミーは？」

「今、キムが慰めてるんですが…」

「分かったわ！私が止めに行ってくる！」

ユキがそう言うなり、カフェテリアから一目散に出て行こうとすると、未沙もそれに続いて立ち上がっていた。

「ユキさん！一人じゃ何だから私も行きます！」

二人が出て行き、後を追いかけようとしたヴァネッサに、フォッカーが問いただしていた。

「ヴァネッサ、その酔っ払いの男ってどんな奴なんだ？」

「はい…髭が生えてて酒瓶をぶら下げていて、連邦軍のフライトジャケットを着ている３０前後の男の人ですが……」

その言葉を聞いたフォッカーの中で、ある人物が思い浮かんでいた。

「もしかして…あいつかも…とにかく俺も行く！案内してくれ！」

「了解です少佐！」

第7話―ラバーズ・コンチェルト―（その4）

―同日　16：30　マクロス艦内市街地―

ユキと未沙が現場にたどり着くと既に野次馬で溢れ、その中でコウとモンシアは口喧嘩を続け、そのかたわらではシャミーがキムとキースに慰められながらしゃくり上げていた。

「ちょっとあなた達、いい加減にしなさい！市街地のど真ん中で喧嘩とはどういう事ですか！？」

ユキのその一言で二人が振り向き、中でもモンシアはいぶかしげな表情で見つめ、コウはユキの制服についていた階級章を見て思わず敬礼していた。

モンシアはコウのその態度を横目にユキに毒づいていた。

「何だよねーちゃん！女の癖に喧嘩の仲裁か！？」

「ここは市街地です！周りの迷惑を考えてないんですか！？とにかくあなた方の所属は！？」

「はい！自分は強襲揚陸艦アルビオンクルー、コウ・ウラキ少尉であります！」

「同じく、俺はベルナルド・モンシア中尉だ！てめぇこそ何処の誰だ！？」

「私は宇宙戦艦ヤマトレーダーオペレーター、森ユキ大尉です！」

“ヤマト”と言うユキの言葉にコウは思わず直立不動になり、改め

て敬礼し直していた。

彼にとってヤマトは、ＭＳに継いで憧れの存在であり、その歴戦の艦を間近に見たいと何度も願っていたのが、今回それが実現するとは思ってもみなかったのであった。

「ウラキ少尉、この喧嘩の原因は？」

ユキが問いただすとコウは今までの経緯を彼女に説明していた。

「……どうやら原因はモンシア中尉にありそうね…中尉、ここはとにかくシャミーに謝罪して下さい！それに夕方近いとはいえ、酒瓶持ってうろつくのはどうかと思いますが！？」

「じゃあお聞きしますが大尉殿、アンタの艦にも同じよーな奴がいるって話じゃないか！？それも医者だって言うじゃねぇか！？」

モンシアの反論に、ユキは思わず言葉を詰まらせていた。ヤマトの艦医である佐渡酒造はかなり有名で、愛飲している日本酒を所構わず持ち歩くのはヤマトの名物であった。

（まあね……確かに先生はヤマト艦内を酒瓶片手に歩いてるから……って言うか、どうやって言い訳すればいいのよ……）

ユキがそう思っていると、モンシアが追い打ちをかけていた。

「それとも何か？アンタがその泣き虫娘に代わって俺と付き合ってくれたら、この事は不問にするんだがな…さぁ！どーするんだよ！？」

「そこまでだモンシア！！」

声のした方向を一同が見ると、見物客の中からフォッカーと、会議を終えたばかりの古代が姿を現していた。

「古代君！それにフォッカーさん！」

「ありゃりゃ…フォッカー少佐じゃないですか…こりゃどーも……」

モンシアが恐縮していると、フォッカーが彼に説教を始めていた。

「お前なぁ！今ナンパしていた女の子達はみんな俺の部下だ！それに、お前が怒鳴り散らしていた森大尉はここにいるヤマトの古代艦長の婚約者だ！
下手に手を出したら、この俺が許さんぞ！」

「はあ…しかしですね…」

「これ以上の言い訳は止めたまえモンシア中尉！」

人混みの中から姿を現れたのは、アルビオン艦長のエイパー・シナプスであった。

「話は聞かせてもらった…とにかく、ここにいるお嬢さん方に謝罪したまえ…」

シナプスの一言で、モンシアは三人娘とユキに謝罪していた。

「中尉、君はアルビオンに戻った後、罰として艦内清掃を命じる…」

「はあ……了解しました……」

モンシアはそう言うと、ガックリと肩を落としその場を離れ、それを見ていたコウはシナプスに進言していた。

「艦長、自分もこの騒ぎには責任があります！自分も艦内清掃に加わります！」
「いいだろう…君もやりたまえ…」
「ありがとうございます！キース、君も手伝ってくれ！」
「……了解……」

コウとキースは古代達に敬礼すると、モンシアの後を追っていた。

「早瀬中尉、うちのクルーがお宅のクルーにご迷惑をおかけしました…グローバル艦長には、私が謝っていたと伝言を頼みます。」
「了解しました。艦長に伝えておきます。」

シナプスが未沙に伝言した後、彼は古代の傍に近づくと耳元で囁いていた。

「しかし…あなたのフィアンセは気が強いですな…くれぐれも尻に敷かれないように…」
「……あの……実はとっくに……」

古代が小声で呟くと、シナプスは苦笑しながらそのばを離れて行き、シナプスの苦笑を見ていたユキが不思議そうな表情で古代に問いただしていた。

「古代君、シナプス艦長が苦笑いしてたけど…？」
「え？いや、別に……それよりユキ、大丈夫かい……」

「ええ…実はね、ホントはどうなるかと思ってた……でもフォッカーさんがモンシア中尉と知り合いだったなんて……」
「ああ…奴とは飲み仲間で同じ部隊にいたんだ……パイロットとし

ての腕は確かだが酒と女には目がなくてな……二年前に人事異動でリンボス駐留軍に転属になったのは聞いていたが、まさかこんな所で再会するとは思わなかった……それにしてもまあ……ユキの意外な一面を見るとは…おい古代！お前気をつけないと、将来怖いぞ！ハッハッハッハッ！」

第7話―ラバーズ・コンチェルト―（その4）（後書き）

古代がユキの尻に敷かれる……本編でも見たかった！

今までユキに散々心配かけてばかりいたから、彼女に頭が一生上がらないはず……

もしかしたら、復活編での別居の理由その2になるのかも……

第7話―ラバーズ・コンチェルト―（その5）

―同日　２１：４６　アルビオンＭＳデッキ―

「あ～疲れたぞ～っ！！どうして俺が艦内清掃しなきゃならねーんだ！？」

アルビオンのＭＳデッキでモンシアがモップ片手に文句を垂れ流していた。

マクロスから帰ってきて5時間以上艦内清掃に専念していたものの、全長３５０ｍのアルビオン艦内を三人だけで清掃するのはいささか広すぎた。

「中尉～！文句を言ってるヒマがあったら手を動かして下さいよ～！」

「うるせーキース！こうなったのもみ～んなあのミニスカねーちゃんのせいだ！今度会ったらギャフンと言わせてやる！」

今にもモップの柄を折りそうな雰囲気のモンシアに、キースは半ば呆れながらユキの印象を話し始めていた。

「まあまあそう言わずに…でも俺から見て森大尉って、優しそうですけど？」

「馬鹿かお前は！？あんな性格のきつそうな女、俺は願い下げだ！」

「そうですかぁ？森大尉って見た目は華奢に見えますけど、なかなかナイスバディじゃないですか…こう出てる所は出ていて、身長はそんなに高くなくて……あれで古代艦長の婚約者じゃなかったらな

～～～！とにかくどっかの誰かとは大違い！」
「そのどっかの誰かって……アタシのことかいキース！？」
「へ！？……モ、モーラ……いたの！？」

キースが後ろを振り向くと、モーラが腕組みをして凄まじい形相で仁王立ちしていた。

「アンタねぇ！森大尉の話しばかりしていると、終わるものも終わらなくなるってーの！？さっさとやってしまいな！」
「ひっ……ひぇ～～～！？」

モーラがキースを怒鳴りまくっていると、それを見ていたモンシアは“ザマー見ろ”という表情を浮かべていた。

「ちょっとスケベ親父！アンタもさっさと終わらせるんだね！ウラキ少尉なんか、とっくに自分の受け持ち区域を終わらせたんだからね！」
「ぬわにぃ～～～！？あのヒヨッ子野郎、いつの間にぃ～～～～！？」

モーラの発言にモンシアが切れかけると、ＭＳデッキ上の通路からベイトとアデルが声を掛けていた。

「お～いモンシア！さっさと終わらせろよ！」
「そうですよ中尉！我々は先に休みますんで！後はよろしくお願いします！」
二人がそう言ってその場から立ち去ると、下にいたモンシアは思わず叫び出していた。

「クソッたれ～～～っ！！どいつもこいつも勝手にしやがれ～～～

「ぐっ！！

第7話―ラバーズ・コンチェルト―（その6）

―A．D．２２０５　８．２５　１５：３５
マクロス艦内閉鎖区域―

輝とミンメイが閉鎖区域に閉じ込められてから既に4日たっていた。
絶望的な状況の中、二人は相変わらずたわいない話をして気を紛らせていた。

「――――それでね、父さんが私にこう言ったの…“お前には歌手なんて無理だ！お前は家出したカイフンの代わりにこの店を継げ！それが出来ないなら、親子の縁を切るぞ”ってね…」
「それで結局どうしたの？」

「私、頭に来ちゃって！その晩書き置き残して家を飛び出しちゃって、そのまま南アタリア島にいる叔父さん達の所に転がり込んだって訳…」
「す、凄いじゃないか……」
ミンメイの告白に、輝は思わず絶句していた。自分より二歳しか年齢が離れていない彼女の行動に舌を巻いていた。

「でもね…ちょっとやり過ぎたかなって…あの後母さんにメールしたら、泣き顔が載った写メールが返ってきて……それにこの前はその事に関して古代さん達に色々言われたし…」

ミンメイが淋し気な表情でうつむいているのを見た輝は、別の話題を振っていた。

「それより、聞いてもいいかなこの前のドラマ…あれで共演した人気俳優との仲、ホントの事？」

「あぁ、あの事？輝も本気にしてたんだ…あんなの芸能雑誌のデッチ上げよ！？」

「いや…だってあのキスシーン、凄いリアルにしていたから…」

「アハハっ！！あんなのは演技！ただのビジネスよ！」

「う…嘘ぉ～～～！？」

「じゃあ……やってみせましょうか……」

ミンメイはそう言うとおもむろに輝に迫り、衣装から見える胸元をわざと強調していた。

「ねぇ輝……私……あなたの事が…好きなの……」

「え……っと……その……」

「ねぇ…あなたは私の事…愛してる……？」

「いや……あの……」

「私はずっと前から……あなたを愛してる…」

ミンメイはまるでドラマのヒロインのように輝に迫り、彼の方は突然の展開にただ押し黙るほかなかった。やがてミンメイの唇が輝の唇と重なり、やがて無重力状態が解除されて二人の体は下へと落ちていった。

ちょうどそこに、今まで閉じていた非常扉が開くとカメラを持ったマスコミ陣が待ち構え、一斉にフラッシュを二人に浴びせていた。

「こいつは凄い！」

「ホント！こいつはスクープだ！」

第7話―ラバーズ・コンチェルト―（その6）（後書き）

劇場版―愛・おぼえていますか―の再現でした。

これを見ていて不思議に思ったのは、扉の向こうになぜマスコミ陣が待ち構えていたのか…？

何回ＤＶＤを見ても今だに分かりません……

どなたか知ってる方がいたら教えて下さい……

第7話―ラバーズ・コンチェルト―（その7）

―A．D．２２０５　８．２６　９：３２
マクロス艦内ブリーフィングルーム―

翌日、輝はブリーフィングルームで未沙から、ミンメイを助けた事により命令違反を取り消すという軍広報部からの通達を受けていた。

「――ただし、今後命令違反を犯したらただではおきません。厳しく処罰するのでそのつもりで…」
「はあ…」
「一条少尉！聞いているんですか！？」
「はい！！！以後気をつけますっ！！！」

事務口調の未沙に対し、輝はおもむろに立ち上がりつつ敬礼すると、未沙はムッとした表情でブリーフィングルームから立ち去って行った。

「……ったく！あれでも女かよ！？　森大尉の方がよっぽど女らしいよ！」

輝は未沙の出て行った先を身ながら文句を言っていると、フォッカーとマックス、柿崎が入れ違いに入って来た。

「やったな輝！この色男が！？どうだった我等のアイドル、ミンメイちゃんのお味は！？」

開口一番、フォッカーは輝の頭を小突き、ミンメイとの事を突っ込

んでいると、当の輝は困惑していた。
それに追い打ちを掛けるようにマックスがさらに突っ込みを入れた。

「仮にですよ…もし一条先輩とミンメイさんがそう言う関係になったのなら……これは絶対責任を取るべきです！」
「そうそう！マックスの言う通り！」

柿崎までもが茶々を入れると輝がムッとした表情で否定した。

「言っておきますが、自分は何もしてません！」
「何だぁ！？４日も一緒にいて何も無かっただぁ！？お前、それでもオ・ト・コか！？」

フォッカーを始め、マックスと柿崎に睨まれた輝は、ただ押し黙るほか無かった。

―同日　１０：０８　マクロス艦内市街地カフェテリア―

その頃、市街地のカフェテリアでは三人娘がお茶を飲みながら、輝とミンメイの記事が掲載された雑誌片手に盛り上がっていた。

「やぁねぇ今時の芸能人は…人気が出たらすぐこれだから…」
「ホント！今度の男だって何人目なんだか？」

ヴァネッサとキムが雑誌を見ながら噂しまくっていると、シャミーがうらやましいと言う表情で呟いていた。

「なんかぁ～そういうのってちょっとうらやましいって感じ！？」
「アンタねぇ…そんな事言ってるから彼氏が出来ないの…分かる？」
「別にぃ～そのうちいい人が見つかるからいいの～」
そう言いながらシャミーは、別の週刊誌を手に取り中をめくり、ある記事に目が止まるといきなり騒ぎ出した。

「ええ～～～～っ！？こんなのありぃ～～～～！？」
「ちょっとシャミー！いきなり大声上げないでよ……う、嘘でしょ～」
「どれどれ……こんなのあり～！？」

三人娘が騒ぎ立てたのは無理も無かった。この記事の見出しには次のようなタイトルが書かれてあった。

――宇宙戦艦ヤマト艦長古代進大佐、人気歌手リン・ミンメイと密会！？

第7話―ラバーズ・コンチェルト―（その7）（後書き）

次回、この記事を巡ってヤマトクルーが大騒ぎ！？
一体どうなる？古代とユキの仲は！？
是非お楽しみに！

第7話―ラバーズ・コンチェルト―（その8）

―同日　１０：４６　ヤマト第一艦橋―

「ちょ、ちょっと古代艦長！これは一体どういう事なんですか！？」

第一艦橋で土門が、例の週刊誌を片手に古代に詰め寄り、島や南部、相原も思わず呆然としながらその週刊誌を食い入るように見ていた。

「ええと…“喫茶店で二人きりになった古代艦長とリン・ミンメイ…お互いの目を合わせ、今にも手を握りそうな雰囲気”……って古代！お前、ユキと言う婚約者がいながらミンメイと浮気かぁ！？」

「ちょっと待て島！それは誤解だ！ここは喫茶店じゃない！ミンメイのコンサート会場にあるホールの一角だ！それにあの時、兄貴でマネージャーのカイフンもいたんだ！」

古代の話によると、コンサート前日にミンメイを激励するために訪れ、カイフンも交えて話に花を咲かせていた。
途中カイフンはスタッフに呼ばれて席を中座した時に二人でいる所を撮られた…との事であった。

「――とにかく、明日にでも軍広報部の連中と一緒にこの週刊誌編集部を訪ねて抗議するつもりだ…ユキ、済まないが広報部に連絡してくれないか…」

「はい……分かりました……」

ユキは古代に何か言いたげな表情を浮かべ、第一艦橋から通信室へと向かって行った。

「――――？どうしたんだユキは……何か言いたそうな顔をしてたけど？」

古代の発言に、第一艦橋の一同は思わず呆れ返っていた。この二ヶ月の間に、古代とユキが会話を交わしたのはほんのわずか…それも任務中のみであると言う事実は周知の通りであった。

（……ったく古代の奴は……いい加減ユキの気持ちも考えてやれよ…）

島は心の中で呟き、溜息をつきながら古代に切り出していた。

「なあ古代、お前最近ユキとマトモに話した事あるのか？」

「ああ、二日前に例の騒ぎがあった時は、ちゃんと話したぞ…それがどうかしたのか？」

古代が不思議そうな顔で島に問い掛けると、呆れた表情の真田が何か言いたげな島を制して代わりに答えていた。

「古代、この前ユキが俺にこぼしていたぞ…“最近、彼の考えている事が分かりません…まるで私を遠ざけているようで……”とな…お前、何か心当たりがあるだろ？」

真田の問い掛けに、古代は思わず絶句していた。

総数１０万人にも上るこの艦隊の人々をどうやって守り抜くか……という事が絶えず頭の中にあり、任務以外のプライベートを切り捨てていたのであった。

（……確かに真田さんの言う通りかもしれない…任務にかまけてユキの事など全然考えてなかった…だからこんな写真を撮られるんだよな……）

古代はそう考えると真田に切り出していた。

「真田さん…色々心配かけてすみませんでした…確かに僕は任務にかまけてユキの事を考える余裕がありませんでした…」

「分かってくれればそれでいい…今はとにかくユキのいる通信室に行ってこい…それと明日とあさっては休暇を取れ！どうせこの二ヶ月マトモに休んでないからな…この機会にユキと二人、羽を伸ばすんだな…」

古代はそれこそ異議を唱えようとしたものの、真田の厳しい表情を見て思わず頷いていた。

「分かりました…二日間休みを取らせてもらいます…その間業務の方よろしくお願いします！」

古代はそう言うなり、そのままユキのいる通信室へと向かっていった。

後に残された一同からは思わず笑い声が上がり、その中でも相原が大ウケしていた。

「いやぁ～これじゃどっちが艦長か副長か分かりゃしませんよねぇ～」

―同日　１１：０２　ヤマト艦内通信室―

その頃通信室のユキは、広報部との打ち合わせを終えた後一人溜息をついていた。
先程の週刊誌の件は気にしてはいなかったものの、これがミンメイではなく他の女性だったらただでは済ますつもりは無かった。あの場で泣きわめき立てて古代を困らせるくらいやりかねなかった。
それでもユキは、ここ最近の古代の自分に対する態度が冷たいと思うようになり不安になっていたのだった。

（古代君の馬鹿……週刊誌の事はどうでもいいから、明日一日私に付き合ってよ…）

実を言えば、ユキは明日から二日間の休暇を取っており、その事を先程古代に話したいと思っていたが結局話せずじまいになっていた。その事を思い出し、自然に涙が出て来そうになった時、古代が通信室に入って来た。

「あのさユキ…明日とあさって…空いてる？」
「私は明日から二日間休暇なんだけど……どうかしたの古代君……？」
「実は…僕も休みを取った…君と同じ日程で…ここ最近君とじっくり話せずにいたから…ごめん……」「いいの……私の方こそ色々話したい事があっても、古代君最近忙しいから…でもうれしいっ！！そう言ってくれるのをずっと待ってたの！！」

そう言うとユキは古代に抱き着き、彼の胸元に頬を寄せていた。

「とにかく、マクロス艦内の士官専用ゲストルームの予約をしてくれ…担当は確かクローディアさんだったな…」

「うん、そうする！ありがとう古代君！だぁ～～～い好きぃ～～～～！！！」

ユキが古代にキスをしようとした時、一人の通信班員が室内に入って来たが、古代達がいるのに気付きあたふたとその場を立ち去り、残された二人は笑い転げていた。

第7話―ラバーズ・コンチェルト―（その8）（後書き）

前回、派手な予告の割に展開が少し地味だったかも……

次回、時間は少しさかのぼり、舞台をリンボスの衛星グラナダの中心都市フォン・ブラウンに移します……

第8話―策謀のフォン・ブラウン―（その1）

―A．D．２２０５　８．２４　１１：５６　フォン・ブラウン第一宇宙港―

リンボスの衛星グラナダの中心都市、フォン・ブラウン……ここは数あるグラナダの都市では最大の人口５００万人を擁する中心都市である。
この街の中心近くにある第一宇宙港に、ネェル・アーガマを中心とするロンド・ベル残留艦隊が、補給と休養を兼ねて入港していた。
そのネェル・アーガマのＭＳデッキでは、愛機ザク＝の整備に掛かり切りのバーナード・ワイズマン（通称バーニィ）にクリスが声をかけていた。

「ねぇバーニィ！せっかくフォン・ブラウンに来たんだから、たまには美味しいものでも食べに行きましょうよ！」
「ごめんクリス！僕はこれから馴染みのジャンク屋にザクの部品を貰いに行くから、君はリィナちゃん達と行ってくれれば！？」

バーニィの発言に、クリスはまたか…と言う表情をしていた。
かつてバーニィはネオ・ジオンに所属していたものの、ふとしたきっかけでクリスと知り合い、彼女が敵対しているロンド・ベルの一員とは知らずに何度もデートする仲になっていた。
それがたまたま戦場でクリスの乗るアレックスガンダムと交戦した際、通信モニター越しに相手の顔を見た途端にその場で、愛機のザク＝ごと投降したのだった。それ以来、フォン・ブラウンに寄港す

る度にジャンク屋で部品を調達するのが彼のお決まりのコースになった。

「クリスさん、もういい加減諦めた方がいいですよ…どうせバーニィさんはザクにしか目が向いてないんですから……」

「そうよねぇ……この際バーニィとの結婚の件、考え直した方がいいかも……」

リィナに諭されたクリスは深い溜息をついていた。

ほんの数ヶ月前、バーニィにプロポーズされた時は思わず有頂天になったクリスだったが、よくよく考えて見れば彼は自分よりも年下で、しかも元敵兵士だと言うハンデもあり、離れて暮らしている両親にどうやって紹介しようかと思案していたのだった。

「あれこれ考えても仕方ない！リィナちゃん、シンタ君とクムちゃんも誘って四人で美味しいもの食べに行きましょう！」

「は～い！それじゃ二人を呼んで来ま～す！」

第8話―策謀のフォン・ブラウン―（その1）（後書き）

「００８０」に出て来たバーニィが初登場です。
彼のザク好きは、スパロボではかなり有名ですが、この作品でも取り上げていきます。

原作では、互いに敵味方である事を知らずに戦ってしまった二人……せめてこの作品では幸せそうなクリスとバーニィを描きたいです…（多分バーニィのザク好きは、ヒートアップしてクリスをヤキモキさせるはず…）

次回、再びシーマ様登場！ついでにオサリバン常務も登場して、キツネとタヌキの腹の探り合い！？

第8話―策謀のフォン・ブラウン―（その2）

―同日　１２：１６　フォン・ブラウン旧宇宙港―

フォン・ブラウンのかつての宇宙港……現在では数えるほどの貨物船が発着するだけの古い港に、一隻のみすぼらしい貨物船が到着し一人の女が降り立った。
それを出迎えたのは、スーツ姿の中年男性……アナハイム・エレクトロニクスのオサリバン常務がその女…シーマをうやうやしく出迎えていた。

「これはシーマ様…よくお出でになられまして…」
「フン……アナハイムもよくやる……メインポートにロンド・ベルの連中を入港させておいて、私達には古びた宇宙港……相変わらず商売が上手な事で……」
「あらかじめ連絡はしておいたはずですが……？」
「フッ…まあいい……もし今後同じ事をしたら、今度こそ本気でグラナダにコロニー落としをするからねぇ……」
「……心得ておきましょう……それよりもこれをご覧下さい……」

そう言ってオサリバンが胸元から二枚の紙切れを取り出し、シーマに手渡した。

「なるほど…行方不明だった地球本星第一軌道艦隊がこの星系に現れたそうじゃないか……おまけに艦隊旗艦があのヤマト…それに１５年前に地球に落下して修復されたＳＤＦ－１マクロスもいるらしい…」
「そうです…おまけにロンド・ベルと行動を共にしているようで…

…」

「それと…もう一枚の紙切れには波動エネルギーコンバータの在庫確認依頼が書かれてあるが……どうやら本星のマヌケ共はエンジンがイカレてるらしいな……」

「どうやらそのようで…情報によればあと二週間ほどでリンボス空域に到達するようですな……」

「……で、あんたはどうするつもりだね…連中の艦を修復するのかい…？」

「いいえ…私個人としてはそんな事はさせるつもりはありません…例えカーバイン会長の命令があったとしても…」

「その方がいい…何せ私らは二年前の“星の屑作戦”であのヤマトに酷い目に遭わされたからねぇ…」

二年前、ネオ・ジオン軍はリンボスとその周辺空域で大規模な作戦を実行し、地上で連邦駐留軍の行動を釘付けにするのと同時に、スペースコロニー群を襲撃して戦力の分断を謀っていた。

そしてスペースコロニーの一つ、アイランド・イーズを奪取して核パルスエンジンを点火してリンボスにコロニー落としを実行しようとした。

だが、連邦軍総司令部からの要請を受けて出撃したヤマトの波動砲によってアイランド・イーズは消滅、そのせいでシーマ達は撤退を余儀なくされたのであった。

「全くあの時程悔しい思いをした事はない…せめて我々にもあの波動砲があればヤマトを逆に潰せたものを…」

「致し方ありませんな…何しろ本星の連中はセコ過ぎますよ……我々には波動エンジン運用技術だけを伝えて、波動砲の製造技術を秘密にするとは…おまけに南極条約の追加事項に波動エネルギー兵器の所有禁止まで明記して……何処まで本星の連中はセコいのか…どうせならいっその事、地球本星が潰れてくれれば…」

オサリバンの発言を聞いたシーマは、何やら意味有り気にニヤリとして彼に切り出していた。

「常務…ここだけの話なのだが、我々はもう一度“星の屑作戦”をやろうと思う…それも規模は前回以上の物をね…それには今一度あなたの協力が必要なんだがね……」

「いいでしょう…是非とも何なりと協力させて頂きますよ……」

第8話―策謀のフォン・ブラウン―（その2）（後書き）

以前、世界観設定でガンダム系戦艦が、波動エンジンを持っていても波動砲を持たない理由を劇中で明かすと書きましたが、今回の話で明らかにしましたがどうだったでしょうか？
いかにも取ってつけ感は否定できませんが、そこの所はご容赦を……

次回、「００８３」に出て来たケリィ・レズナーが登場！ジャンク屋としてバーニィと顔合わせしますが……

第8話―策謀のフォン・ブラウン―（その3）

―同日　１２：４５　フォン・ブラウン工場街―

その頃、バーニィはフォン・ブラウンの工場街の一角にあるジャンク屋を訪れていた。

「ケリィさんご無沙汰です、また来ました！ザクのパーツ、良いの入ってますか！？」

「来たかバーニィ…その辺のパーツの山にあるから適当に持って行け…客が来るんでな、あまり散らかすなよ…ところでウラキの奴は元気か…？」

「ええ、相変わらずニンジンは食べられませんが…」

バーニィの発言を聞いたケリィ・レズナーは少し笑みを浮かべると、作業小屋へと入っていった。

彼もまたジオン軍に所属していたものの、以前の戦闘で左腕を失う重傷を負い、やむなく退役してつてを頼ってジャンク屋を営んでいたのだった。

バーニィが重機を動かしパーツの山からお目当てのザクの部品をより分けていると、この工場街には似つかない一台の高級車がケリィの家の前に止まり、その中から一人の女性が現れて作業小屋へと入っていった。

バーニィは重機を動かしつつその女性の横顔を見て、誰かに似ているような気がしてしばらく考えていると一人のある女将校に思い当たった。

（あの女…変装してるけど…シーマ中佐じゃないか！？）

バーニィは重機をオートモードにしてその場から作業小屋にそっと近付くと、内部の話に聞き耳を立てた。

「……それで、このモビルアーマー　ヴァル・ヴァロはいつ納入出来るのだ…？」

「細かい調整さえ済めば、明日の夕方にでも…」

「分かった…代金はその時と言う事で…ところでケリィ、お前さんは現役に復帰するつもりはあるかね……？」

「悪いがそのつもりはない……今のネオ・ジオンはただのテロリストだ…信念や理想を忘れた所に戻るつもりはない……それに俺には今、身重の妻がいる…彼女やその子供のために、俺は一生ジャンク屋の親父として生きて行くつもりだ…」

「フッ…今のお前さんの発言、耳に留めておくよ…それよりもこのヴァル・ヴァロは新しい作戦のために必要な機体だ、手抜かりがあっては困る…」

（新しい作戦…一体何だ…）

バーニィは作業小屋から重機に戻る間ひたすら考えていたが、やがてある考えに思い当たり、重機を止めて乗って来た軽トラックの場所までたどり着いた時、ケリィの妻であるラトーラと鉢合わせした。

「あらバーニィさん、いらしてたんですか？」

「ああどうもラトーラさん…僕は急用が出来たので帰ります…ケリィさんによろしく！」

バーニィを乗せた軽トラックがすぐさま走り去ると、ラトーラは不思議そうな表情で作業小屋の中にいるはずのケリィの側に行こうとした時、彼とシーマが外に出て来ていた。
とっさにラトーラは表情を固くしてシーマを睨むと、シーマは不敵な表情でラトーラと相対した。

「おや…可愛い奥様じゃないか…せいぜい大事にするこったね……」

そう言うとシーマは先程乗って来た高級車でその場を後にした。
それを見送ったケリィはラトーラの側に寄り添いながら呟いた。

「心配するなラトーラ…何があっても俺はお前とこの子を守る……」

第8話―策謀のフォン・ブラウン―（その3）（後書き）

「００８３」中盤に出て来た、ケリィとラトーラの登場でした。この二人、本編では一緒に住んでいても夫婦なのか恋人なのか明確にされてませんでしたが、今作品では結婚しているという設定にしました。

劇中で、コウのニンジン嫌いの話題が出ましたが、次回以降度々このネタが出て来ますのでお楽しみに！

第8話―策謀のフォン・ブラウン―（その4）

―同日　１３：２８　ネェル・アーガマブリーフィングルーム―

「本当なのかバーニィ!?このフォン・ブラウンにあのシーマが来ているのは!?」

ブリーフィングルームではヘンケンが、工場街から戻って来たバーニィからシーマの件について報告を受けていた。

「それでバーニィ、シーマが言ってた“新しい作戦”ってどんな内容だったんだ?」

「あまり詳しい内容は聞けなかったんですが…“星の屑”がどうとか…」

「――!?　連中、また二年前の再現をするつもりなのか!?懲りない奴らだ!」

それを聞いたヘンケンは、思わず怒りを表わにし、ジュドーは納得したように呟いていた。

「それでか…この前シャングリラコロニーにシーマのおばさんが攻め込んで来たのは…やっぱりブライトさんが言ってた事はホントだったんだ…」

「でも艦長、この事を早急にヤマトの古代艦長に知らせないと…何かあってまたコロニー落としでもされたら…いくらネェル・アーガマのハイパーメガ粒子砲でも防ぎ切れません!ここはやはりヤマトの波動砲でなければ…」

心配そうな表情のエマ・シーンをよそに、ヘンケンは深刻そうな表

情で切り出していた。

「実は…先程ヤマトの古代艦長から連絡が入ったのだが…ヤマトを含む旧第一軌道艦隊は全て波動エンジンの出力低下の影響でワープはおろか…切り札の波動砲が使用不能だと言う事だ…おまけに追撃して来る“奴ら”の目を欺くために、進路を迂回するそうだ…そのおかげでリンボス空域到着予定が一ヶ月後だそうだ…」

ヘンケンの告白に、その場にいた一同は思わず絶句していた。

――もしこの一ヶ月の間に、コロニー落としが実行された場合、どのように対応すればいいのか――

その場にいた全員がそう考えていたのだった。

第8話―策謀のフォン・ブラウン―（その5）

―A．D．２２０５　８．２５　１６：０４　フォン・ブラウン工場街―

翌日夕刻近く、フォン・ブラウンの工場街の一角にあるケリィの作業小屋前で、ラトーラがヴァル・ヴァロを引き取りに来たシーマ一行に凄まじい勢いで抗議していた。

「あなた達いい加減にして下さい！もうこれ以上私のような戦争孤児を増やさないで下さい！」

「しかしねぇ奥様…約束は約束なんだがね…」

「お金なんていりません！私は主人と昨夜話し合って決めたんです！だから帰って下さい！」

ラトーラのその発言にシーマは困惑しつつも、それが真実であるかをケリィに問いただしていた。

「おいケリィ…今あんたの奥様から聞いたが本当の事なのかい…」

「本当の事だ…これ以上悲しみに溢れた人々を増やさないためにも、あれを渡す訳には行かない…悪いがこれから鉄屑にする…」

「フン…そうかい…あんたがその気ならこちらにも考えがある……おい、やれ！」

シーマの命令で、その場にいた部下がラトーラを捕まえ、銃口を彼女の頭に押し付けた。

「――！！　シーマ…貴様！！」

「このシーマ・ガラハウを裏切った報いだよケリィ！悪いがこの娘と共にお前さんも死んで貰うよ！！」

「ケリィ！私に構わずあなたは逃げて！」

銃口を突き付けられながらも、ラトーラは気丈に振る舞い、それが癪に触ったのかシーマはラトーラの頬に唾を吐いていた。

「フン…素晴らしい夫婦愛じゃないか…だけどねぇ、このシーマにはそんなもん効きやしないんだよ！さぁどうするんだい！渡すものさっさと渡しちまいな！あたしゃ気が短いんだよ！」

シーマの脅迫にケリィが困惑していた時、「お前達、いい加減にしろ！」の声とともにバーニィがライフルを片手に現れ、その後ろからジュドー、カミーユ、クリスがコスモガンを手にして立っていた。

ケリィとラトーラが心配なため、前日のブリーフィングの後にバーニィが三人に声をかけて様子を見に来たところ、案の定シーマ一行が来ていた…と言う次第であった。

「貴様は…確か裏切り者のバーナード・ワイズマン…おまけにロンド・ベルの坊や達まで…」

「やいシーマのおばさん！その人をさっさと離してやれ！」

ジュドーの怒りに満ちた表情にもかかわらず、シーマは平然と呟いた。

「どうやらこの辺りが潮時のようだね…お前達、ここはとにかくずらかるよ！！」

「「了解！！！」」」

シーマ一行は、ラトーラを捕らえたままその場を離れようとした時、ケリィが隙を見てラトーラを捕らえている兵士に体当たりをしようと試みた。
だが、その兵士がケリィを銃撃しようとした時、ラトーラが身を持ってケリィを庇って銃弾に撃たれていた。
ケリィは何とか倒れたラトーラを抱き起こしたものの、彼女は既に虫の息だった。

「ラトーラ…大丈夫か？今すぐ病院に連れていく！」
「ケリィ…私はもう駄目……短い間だったけど……幸せでした……」
「ラトーラ、もういい…何も喋るな……」
「あなたと私……の……子供……産……ご……めん」
その言葉を最後にラトーラは事切れ、クリスが慌てて彼女の脈拍を採ろうとしたものの時既に遅かった。

「ケリィさん…ラトーラさんは…息を引き取りました…」

クリスの涙混じりの告白に、ケリィはラトーラの側に座り込み彼女の死を悼んでいた。
すると、工場街の一角から爆発音が起こり周囲は煙に包まれていた。

「な、何だぁ！？工場街が爆発した！？」
「シーマのおばさん達…置き土産に工場街に爆弾仕掛けて行きやがって…」

バーニィとジュドーの発言で、うつむいていたケリィが思い出した

かのように呟いていた。

「あの辺りは確か…波動エネルギーコンバータの製造ラインがある工場だ…それにしても奴らは一体…」

―同日　１６：３６　輸送船ブリッジ―

『しかしまあ……随分派手におやりになりましたなシーマ様…』

資源搬入港から飛び立ったみすぼらしい輸送船のブリッジのメインパネルには、やや呆れ顔のオサリバンが映し出されシーマと会話していた。

「言ったはずだ常務…我々はどんな手段を使ってでも、ロンド・ベルの行動を止めてみせると…」

『だからですか…大量の波動エネルギーコンバータを持ち出した上で、その工場を爆破したのは…？』

「まあ…こうでもしないと我々の今後の作戦に響くのでねぇ…」

『それで…今後はどのようにするおつもりで？』

「フン…それは時が来てからのお楽しみという事で…」

『まあいいでしょう…それでは……』

オサリバンからの通信が切れると、シーマは一人ほくそ笑みながら

呟いた。

「今に見ていろ地球本星の奴らめ…そのうち息の根を止めさせてもらうよ……」

第8話―策謀のフォン・ブラウン―（その5）（後書き）

ラトーラを死なせるのは少し抵抗がありましたが、これもストーリーを進めるためにあえて書きました。

登場人物が誰も死なずにストーリーが進むのは違和感があります。これからも登場人物の誰かが死ぬかもしれませんが、そこの所はご容赦を…

（もしかしたら登場人物全員死亡も展開によってはありかも…↑伝説巨神イデオンかっ！？）

次回、ケリィが重大決意！？

第8話―策謀のフォン・ブラウン―（その6）

―同日　17：25　フォン・ブラウン市街地中央病院―

バーニィ達は工場街爆破によって発生した負傷者で溢れ返る中央病院にいた。
先程の事故の後、真っ先に駆け付けた彼らは負傷者の救助に当たり、また数多くの犠牲者を見るにつけ改めてシーマ一行の残忍な行為に怒りを新たにしていた。

一方、ラトーラを改めて診てもらったものの、本人と懐妊していた子供共々死亡か確認されていた。

霊安室でラトーラの亡きがらに付き添っていたケリィは、しばらくの間うつむいていたものの、やがて何事かを決意したのかやおら立ち上がり、その場を立ち去ろうとした。
それに気付いたバーニィが彼を止めようとしていた。

「ケリィさん、何処に行くんですか！？」
「バーニィ、俺はラトーラや犠牲になった人々の無念を晴らすために、今からヴァル・ヴァロに乗ってシーマを叩きに行く！」
「そんな無茶です！シーマ中佐はあなた一人でどうこうできる人じゃないんです！」
「そうです！バーニィの言う通りです！」

バーニィに続いてクリスも止めに入ったものの、ケリィは頑として聞く耳を持っていなかった。

「お嬢さん、止めないでくれ…これは俺の戦いだ…今までの償いをしなければならないんだ…例えこの俺の命が無くなるとしても…！」
「だったら…生きて償いをすればいいじゃありませんか……もしあなたさえ良ければ、ロンド・ベルに来ていただけませんか…？」

クリスの突然の提案に、ケリィは正直困惑していた。かつて自分達と戦ってきた敵が自分に手を差し延べるとは思ってもみなかったからである。

「いいのか…俺はお前達の敵だった男なんだぞ…それをお前達の仲間は簡単に受け入れるのか…？」
「大丈夫ケリィさん！よく言うじゃないか…“昨日の敵は今日の友”ってね！」
「ジュドーの言う通りですケリィさん…前例としてここぬいるバーニィさんがそうでしたから…」

ジュドーとカミーユの発言に、バーニィは頭をかきながら笑みをうかべていた。その様子を見たケリィはふと溜息をつきながら呟いた。

「フッ…確かにバーニィでも多少は役に立っているんだな……バーニィに出来て俺に出来ない訳がない……分かった、ここはお前達の世話になる…あのモビルアーマー　ヴァル・ヴァロも一緒にな…」

第8話―策謀のフォン・ブラウン―（その6）（後書き）

ケリィ・レズナーがロンド・ベルに加入しました。今後の彼の活躍にご期待下さいませ！

次回、ゼントラーディ軍に増援部隊が派遣されて来ます。部隊長はあの迷惑男！

第9話―激戦！第5惑星リング―（その1）

―A．D．２２０５　８．２６　１８：５６
第５惑星空域ブリタイ艦―

ブリタイ艦のブリッジでは、ブリタイが先程から苛々しながら歩き回っていた。日頃あまり感情を表に出さない彼が、この日に限って苛立ちを見せるのはよほどの事らしく、側に控えていたエキセドルが恐る恐る切り出していた。

「あのブリタイ司令…いかがなされました？」
「ふむ…実は増援部隊が今日着任するはずだったのだが…まだ合流せんのだよ…」
「はて…一体何処の部隊が合流するのですか？」
「ボドル基幹艦隊、第１０９分岐艦隊所属第７空間機甲師団だ…」

その部隊名を聞いた途端、エキセドルは思わず慌てふためき、持っていた端末を落としそうになった。

「まさか…あのカムジン・クラヴシェラの部隊ですか…？いけません！彼の通り名はご存知のはずですぞ！」
「分かっている…“味方殺し”だろ…」
「知っておられるなら何故彼の部隊を……私は知りませんぞ！何があっても一切関知しませんぞ！」

エキセドルが叫ぶのと同時に、ブリタイ艦の艦体に衝撃が走るとレーダー要員から報告が入った。

「友軍艦隊デフォールド！近過ぎますっ！！」
「だ…だから言わんこっちゃない…」

エキセドルが床にへたり込むのと同時にカムジンから通信が入って来た。

『第１０９分岐艦隊第７空間機甲師団カムジン・クラヴシェラ、ただ今着任致しましたーっ！！』

通信パネルに姿を現したカムジンは、Ｖサインを出しながらブリタイに着任の報告を行っていた。
その横から副官のオイグルがカムジンにそっと囁いていた。

『団長、ぶつかった艦は５隻ですぜ…賭けは俺の勝ちって事で…』
『やめとけオイグル…今、ブリタイ司令殿に挨拶しているんだ、少しは控えろ…』

これを見ていたブリタイは少し顔をひきつらせながらも、カムジンに切り出していた。

「カムジン！せっかくやって来たチャンスを不意にするつもりはあるまい！今後は私の指揮下に入るのだから、命令は順守するように！さもなければ送り返す事になるのだからな…」
『……分かったよ…で、俺は何をすればいい？』

「前方に見える惑星リング上にマイクローンの艦隊を誘い込み、奴らを捕獲して欲しい…できれば無傷でな…」
『了解……それで作戦はいつ決行だ？』
「これから具体的な事を決めねばならん…遅くても２４時間以内には作戦開始できるはずだ…」

『了解！そんじゃ楽しみに待ってるからよ！』

第９話―激戦！第５惑星リング―（その１）（後書き）

“味方殺し”ことカムジンの初登場でした。
マクロスＴＶ版では暴れまくっていたカムジン…
今回の作品中でも大いに暴れまくるでしょう！

カムジン・クラヴシェラ
「今回もこの俺様が主役だ～～～っ！！！今度こそマクロスの連中をぶっ潰す！」

第9話―激戦！第5惑星リング―（その2）

―A．D．２２０５　８．２７　１０：５６
マクロス艦内市街地カフェテリア―

その頃、ロンド・ベルは第5惑星に近付きつつあった。そんな中、古代とユキは朝早くからマクロスに出発していた。
この日は珍しく敵襲も無かったため、そのおかげで二人は早く出発する事が出来たのであった。

古代が軍広報部員と共に週刊誌編集部を訪れている間、ユキはクローディア、フォッカー、それに三人娘とお茶を飲んでいた。

「これ、頼まれてた映画のチケット…それとレストランの予約、入れといておいたわよ…」
「すいませんクローディアさん…何か急に無理言ったみたいで…」

ユキがクローディアにペコリと頭を下げていると、シャミーがうらやましそうな表情で呟いた。

「いいなぁ～ユキさん！これから古代艦長と一泊二日のデートだなんてぇ～！」
「こらシャミー！アンタ何物欲しげに言ってんの！？」

キムの突っ込みにシャミーが小さくなると、その場にいた一同から笑い声が上がっていた。

「でもまあ良かったじゃないかユキちゃん！アイツもやっと休む気

になったんだ、せめて今夜は……ムフフ…！！」
「もうっ！フォッカーさんったら相変わらずエッチ何だからぁ！」
フォッカーの意味ありげな発言にユキが赤くなって抗議している所に、古代が姿を現した。
「あ～っお帰りなさい古代艦長！お疲れ様で～す！」
「……シャミー君…君はどこかのメイド喫茶の店員か？」
シャミーの発言に古代が呆れるのと同時に再び一同から笑い声が上がっていた。それが落ち着くとフォッカーが古代に編集部との事を切り出していた。
「それでどうだった…上手くいったか？」
「ああ、万事全て解決さ…編集長が平謝りして、来週発売の週刊誌にお詫びの記事を掲載するってさ…」
「じゃあ、あのスクープ写真はヤラセみたいなもんか？」
「どうやらそうらしい…カメラマンが、俺とミンメイが二人きりになるチャンスを待ってたらしい…」
意外な事の成り行きに、その場にいた一同は思わず椅子からずり落ちそうになっていた。そんな中、ユキが手元の時計を見て古代に催促していた。
「ねぇ古代君、そろそろ映画始まるわ…早く行きましょうよ…」
「ああ、そうだな…じゃあそういう事で…」
二人がいそいそとカフェテリアを後にすると、再びシャミーが呟いていた。

「あ～あ…行っちゃった…映画見て食事してそれから……いやぁ～ん！？」

「シャミー……アンタ妄想し過ぎ…」

第9話―激戦！第5惑星リング―（その2）（後書き）

ふと思ったのですが、シャミーは何となくメイド喫茶の店員にいそうなタイプではないかと…
初代マクロスは今時のアニメを先取りした感がします。

次回、輝と未沙が再び喧嘩!?

第9話―激戦！第5惑星リング―（その3）

―同日　１１：０９　マクロスメインブリッジ―

メインブリッジで未沙は、一枚の人事発令書を目の前にして気分が重くなっていた。その書類には、ミンメイを助けた事により少尉から中尉への昇進が書かれており、自分と同階級となるために思わず絶句していた次第であった。

（何であの命令違反男が昇進しなきゃならないのよ…これじゃ世も末ね…）

未沙がそう思っている所に、先程偵察に向かった当の本人から通信が入っていた。

『バーミリオンリーダーよりデルタ１へ！艦隊周囲５０宇宙キロ圏内の偵察完了！これより帰艦します！』

（偵察に飛び立って３０分しか経っていないのにもう帰艦！？……少しお灸を据えなきゃ…）

そう思った未沙は早速輝に返答を開始した。

「こちらデルタ１、あなたちゃんと偵察したんでしょうね！？万一と言う事もあるんだからもう一度偵察して来なさい！」

―同日　同時刻　輝のバルキリーコクピット―

輝は未沙の通信を受けたものの、釈然としない気分になっていた。

（一体何言ってんだあのおばさん…人が報告してんのにあんな言い方無いだろう！）

一瞬のうちにそう思い、反論するべく未沙に返答を開始した。

「あのですね！異常が無いんだから帰艦するって言ったんです！それをもう一度ってどういう事なんですか！？」

『あなたね、念には念を入れた方がいいの！とにかくこれは命令です！さっさと行きなさい！』

「……ったく…分かりました！もう一度偵察しますっ！以上！」

『ちょ…ちょっと…』

未沙からの返答もそこそこに通信モニターを切り、輝はマックスと柿崎にもう一度偵察に向かう旨を告げると、柿崎が溜息をつきながら呟いていた。

『隊長…あの中尉、なんか嫌な感じっすねぇ…せめてヤマトの森大尉だったら喜んで従うんすけど…』

『柿崎君、ぼやかないぼやかない…』

マックスからも通信が入ると、輝まで溜息をつきながら呟いていた。

「まあ、とにかく仕方ない…もう一度偵察しますか……」

第9話―激戦！第5惑星リング―（その3）（後書き）

輝と未沙、相変わらずの仲の悪さですが、そのうち二人の間が接近してくるはずです。この作品では、それまではかなり時間がかかりますのでご容赦を…

第9話―激戦！第5惑星リング―（その4）

―同日　21：15　ゲストルーム―

「今日は楽しかったわぁ！映画も良かったし、お食事も美味しかったし！」

マクロス艦内にある士官専用ゲストルームでは、ユキが今日一日を振り返り、飛び切り上機嫌で古代に話し掛けていた。
彼女の首元には、古代からプレゼントされたネックレスが光り輝いていた。

「それにこのネックレスまで買って貰って…高かったでしょ？」
「そんな事ないよ…君が店先のショーウィンドウを見て欲しいそぶりしてたからね…プレゼントしたかいがあったよ…」
「ええっ本当に？ありがとう古代君！」
「別にいいよお礼なんて…たまにこういう事しないと“釣った魚に餌やらない”って言われそうだからな！」

古代の発言にユキは思わず彼に突っ込んでいた。

「私はお魚かいっ！？そんな事言うならお仕置きだべぇ～～！」
「……君は昔のアニメキャラか？……それよりもそのお仕置きってどんなのだよ？」

古代が呆れた表情で呟くと、ユキは赤くなりながらも呟いた。

「とっても…エッチな…お仕・置・き……今夜は寝かさないわ…」

「それ…僕が言うべき台詞なんだけど……まあいいやお姫様…ご要望に答えて…」

古代がユキにキスをしようとした時、彼の携帯電話が鳴り響き出てみると、相手はフォッカーだった。

『いよ～っ古代！俺だぁ～～！もしかしてお邪魔だったかぁ～！？』

フォッカーのあまりの酔っ払い振りに内心呆れつつ、不満顔のユキを目にしながら古代は切り出していた。

「一体何の用事だフォッカー……俺達これから…」

『わあ～～ってるよ！でもその前に久々に一杯やらないか！？』

「いや…しかしなぁ…」

『ユキちゃんの事だろ？大丈夫！今、隣にクローディアに早瀬、それにニナさんにウラキもいるから一緒に来ればいい！場所は市街地のど真ん中にあるラウンジバー“カサブランカ”だ…そこで飲んでるからな、待ってるぞ！』

フォッカーが話すだけ話すと一方的に電話を切られ、古代は少し困惑していた。

「……全くアイツは昔からこうだ…まあお楽しみは後回しにして行きますか？」

「仕方ないわね…でも一杯だけよ…そうじゃないと…ね…」

第9話―激戦！第5惑星リング―（その4）（後書き）

実はこの作品、数年前に大学ノート5冊というボリュームで完成したものを公開しています。
特に、古代とユキのラブシーンはここでは公開できないくらい過激なもので、この作品発表にあたり内容を大幅に改めてお送りする事にしました。

次回、マクロス劇場版をほぼ再現します。

第9話―激戦！第5惑星リング―（その5）

―同日　２１：３０　ラウンジバー“カサブランカ”―

古代とユキが指定されたラウンジバー“カサブランカ”にたどり着くと、ニナ・パープルトンが立ち上がって二人を迎えていた。

「古代艦長、それに森さん、せっかくの休暇のところを御呼び立ててすみません…フォッカー少佐がどうしても二人を呼べって言うので…」

ニナが申し訳なさそうに言うと、古代もまた切り返していた。

「いやぁいいんです…アイツは昔からそうでしたから…やっぱりニナさん達もそうだったんですか？」

「ええ…実はさっきまでいたモンシア中尉に連れて来られたんですけど…それが中尉と後から来た早瀬さんが揉めちゃって…」

古代がそっと未沙の方を見ると、ムッとした表情でソファに座っているのが見てとれた。その様子をみたユキはニナにそっと耳打ちしていた。

「それでそのモンシア中尉は今どこにいるの？」

「運良く佐渡先生がいらして、中尉を外に連れ出しました。今頃二人でどこかで飲んでいると思いますよ…」

「何か佐渡先生にまで迷惑掛けちゃったらしいな…」

古代達三人が立ち話をしていると、既に出来上がった状態のフォッカーが話しかけてきた。

「うお～いそこの三人！立ってないでさっさと座れ！改めて乾杯するぞぉ～」

三人はフォッカーの勧めでようやく席に座り、乾杯すると、コウが青い顔をしてテーブルの上を凝視していた。それに気付いたユキがコウに話し掛けていた。

「どうしたのウラキ君、顔色が悪いわよ？」

「あの森さん…実はコウはニンジンが苦手なんです…ここの名物の野菜スティックを頼んだらこれが出て来たと言う訳で…」

ニナの説明にコウを除いた一同が爆笑していると、輝が書類を片手に現れた。

「少佐、明日のパトロール予定表をお持ちしました…」

「ん…ご苦労…まあお前も一杯やって行け…」

「はあ…しかし…」

輝はそう言いながら未沙の方を見ると、ムッとした彼女の表情が目に入り、思わず気兼ねしていた。

未沙の方もそんな輝の態度に気付くと、即座に席を立っていた。

「私帰ります…お邪魔でしょうから…」

「ちょ、ちょっと未沙…」

慌ててユキが未沙を止めるのを見たフォッカーは輝と未沙を一喝していた。

「こら輝！とにかく座れ！それに早瀬！お前もだ！」

未沙は無言のまま席に座り直し、輝はその隣にそっと座っていた。
相変わらずムッとした表情の未沙を見て、フォッカーは彼女に話を振っていた。

「何だ早瀬そのツラはぁ…仕事を離れたら少しは女らしくしろ！見てみろ…ユキちゃんやニナさんなんか一段と綺麗じゃないか…」

フォッカーに話を振られた二人は思わず赤くなったものの、相変わらず無言のままの未沙にフォッカーがさらに続けていた。

「いいか早瀬…いくらお前さんが女性初の士官学校首席卒だからってお前は女だ……時には男の言う事が間違いであっても素直に認めるのも大事なんだ…」

それでも未沙が無言でいるのを見ると、今度は古代に話を振っていた。

「おい古代！お前はいつになったらユキと結婚式を挙げるんだ！いつまでもも先伸ばしじゃあ彼女に対して失礼だぞ……それに輝とウラキ！男ってのはなぁ…時には強引さが必要なんだ！好きな女がいたら力付くでもモノにしなきゃイカン！」

フォッカーの演説に困惑する一同を見たクローディアは、彼を止めるために切り出していた。

「ちょっとロイ…飲み過ぎよ…話がだんだんくどくなってるわ…」

クローディアの忠告にもかかわらず、フォッカーはさらに話を続けていた。

「いいか、今からお前達に男と女の愛の素晴らしさを見せてやる…目を開いてよーく見とけ……クローディア…愛してるぜ…」
「ちょっとロイ！みんなが呆れて……」

クローディアの抗議にもかかわらず、フォッカーは強引に彼女を押し倒し、それを見ていた一同はただ呆然としていた。
するとそこに携帯電話が鳴り響き、思わず全員が自分の携帯電話を取り出していた。（その場にいた全員の着メロが、ミンメイの持ち歌“私の彼はパイロット”だった…）

鳴り響いていた持ち主の輝が話し始め、やがて切羽詰まった表情で電話を切ると一同に切り出していた。

「あの…家族の者が急病で…とにかく失礼しますっ！」

そう言うと足早にその場を去っていった輝を見たフォッカーは不審な面持ちで呟いた。

「――あぁ！？家族だぁ！？」

第9話―激戦！第5惑星リング―（その5）（後書き）

今回、携帯電話ネタを使ってみました。着メロが同じなら、その場の人々は必ず一度は手に取るでしょうから…

何かタイトルに偽りありの状態が続きますが、今一度お待ち下さいませ…

第9話―激戦！第5惑星リング―（その6）

―同日　２１：５５　マクロス艦内展望室―

誰もいない展望室に、サングラスを掛けたミンメイが一人ベンチに座っていた。そこに輝が息せき切ってやって来た。

「お待たせミンメイ…」
「やだ…分かっちゃった？」

ミンメイはサングラスを外しつつ、照れ臭そうに微笑んでいた。

「だって誰もいないし…それに私服姿で写ってる写真集、持ってるから…でも僕のケータイ番号、よく知ってたね？」
「あら忘れたの？この前閉じ込められた時、番号とアドレス交換したじゃない…」

輝が電話のメモリーを確認すると、確かに番号とメールアドレスが載っており、やっと以前の事を思い出していた。

「あ、ゴメン！今思い出した……それよりも今日はどうしたの？」

輝が尋ねると、ミンメイは淋しげな表情で呟いていた。

「私…疲れちゃった…今の生活に…この前の件でマスコミに追いかけられるし、それにまた古代さんに迷惑掛けちゃって…」
「あぁ、あの件なら大丈夫！古代先輩が軍広報部の人と掛け合って、週刊誌編集部とは話がついたってさ…」

「そう…それならいいんだけど……あ、あれ……」

ミンメイは、展望室の窓外に見える第５惑星のリングに思わずくぎづけになっていた。

「綺麗ね……行って見たいな……あんな所に…」

―同日　２２：１５　第５惑星リング上―

その頃第５惑星リング上では、カムジン達の部隊が集結し、ロンド・ベルを誘い込む準備を完了しつつあった。

「団長！全員配置に着きました！いつでも行けます！」

「よ～し野郎共！これより作戦を開始する！Ａ部隊はこれよりマイクローンの艦隊を攻撃しつつ、この惑星リングに誘い込め！後は俺達の部隊がマイクローンの奴らを捕らえてブリタイの親父の所に連れて行く！」

その時部下の一人が、接近しつつある所属不明機を捉えていた。

「団長！所属不明の小型機が一機こちらにやって来ます！」

「何だって！？……フン、俺達が行かなくても連中からやって来たじゃねぇか……よ～し野郎共！作戦変更だ！あの小型機を狙う！行くぞ！」

第9話―激戦！第5惑星リング―（その6）（後書き）

ようやく話が動き出しました。これから先はマクロス劇場版のストーリーに沿って進む予定です。

原作劇場版通りの展開になるかどうか…是非お楽しみに！

ロイ・フォッカー
「え……俺やっぱり戦死!?」

作者
「さあ…どうでしょう…」

第9話―激戦！第5惑星リング―（その7）

―同日　２２：１６　第５惑星リング上―

「うわぁ～綺麗！やっぱり来てよかった！」

輝が操縦するバルキリーの機内で、ミンメイが着けていたヘルメットを外しながら歓声を上げていた。
しかし、急に不安になったのかそっと彼に問い掛けていた。

「ねぇ……勝手に持ち出して、後で怒られるんじゃないの？」
「平気平気！どうにかなるって！それっ行くよ！」

輝はバルキリーのエンジンをフルスピードにするとリング内に突入し、縦横無尽に動かしているとミンメイは思わず目を伏せていた。
やがて二人を乗せたバルキリーは氷塊を抜けると、前方には虹が見え、輝に促されたミンメイが見ると思わず歓声を上げていた。

「うわ～っすごぉ～い！宇宙に虹が出来てるぅ～！」

上機嫌になったミンメイは、自分の持ち歌である“サンセットビーチ”をアカペラで口ずさみ、それを聞いた輝もまた上機嫌でバルキリーを操縦し、つかの間の時間を過ごしていた。
だが、そんな時間も突然の通信が入って終わりを迎え、ミンメイはモニターに映し出された未沙から逃れようと、持っていたヘルメットで思わず自分の姿を隠していた。

『隠れても無駄ですよミンメイさん…』

「すみません……」
「早瀬中尉…」

輝も思わず申し訳なさそうな表情で未沙を見ていた。モニターに見える未沙は呆れた表情で切り返していた。

『呆れたわ…バルキリーを私用で使うなんて…』
「輝が悪いんじゃないんです…私が無理矢理…」

ミンメイが自分が悪いと説明しようとした時、未沙の横からカイフンが顔を出していた。

『ミンメイ！早く戻るんだ！』
「兄さん…」
『一条君、今度の事がマスコミにばれたらミンメイの歌手生命は終わりだ……軍上層部には手を打ったが、君に対しては容赦しないからな！』
「分かっています…厳罰は覚悟の上です…」
『何て軍人だ！早く戻りたまえ！』
「分かりました……帰ろう、ミンメイ……」

輝が後ろにいるミンメイの方を振り向くのと同時に、レーダーから敵襲の警告音が発せられていた。

「や、やっば～～！？」

敵襲の報は、未沙とカイフンの乗っている内火艇にももたらされていた。
カイフンは、不安のあまりに未沙に向かって叫んでいた。

「な、なんとかしたまえっ！」
「分かっています！……こちら早瀬です！フォッカー少佐の部屋に繋げて下さい！」

―同日　２２：２５　第５惑星リング上―

一方、カムジンの部隊は接近してくる二機の小型機を的確に捉えていた。

「野郎共！マイクローンの連中を逃すなよ！Ａ部隊はあの小型機を、俺の隊は戦闘機を狙う！」
「「「了解！！！」」」

第9話―激戦！第5惑星リング―（その8）

―同日　２２：３０　マクロス艦内士官居住区―

「全くロイったら飲み過ぎなんだから…」

フォッカーの部屋で、クローディアが呆れた表情でソファに寝転ぶフォッカーを見て呟いていた。
傍らには、先程のラウンジバーからここまでフォッカーを抱き抱えて運んだ古代とコウ、それに心配してついて来たユキが立っていた。

「全くコイツは昔からこうだ…全然変わりゃしない…」
「しかしウチのモンシア中尉もそうですけど、フォッカー少佐も凄い飲みっぷりでしたね…ニナなんか呆れ果てて先に帰っちゃいましたから…」

古代の発言にコウも同意していると、ユキがベッドから枕と毛布を持って会話に入っていた。

「でもこれで佐渡先生が加わったら、地球圏一の酒飲みトリオになるわよね…」

「ユキ、それを言うなら“宇宙一”よ……とにかくゴメンなさいね最後まで付き合ってもらって……とにかくみんな“いい夜”を…」

クローディアがそう言った時室内の電話が鳴り響き、彼女が取りしばらく話すと緊迫した雰囲気に包まれていた。それに気付いた古代がクローディアに問い掛けていた。

「どうしたんですかクローディアさん！？」
「未沙からなんだけど、一条君とミンメイさんを連れ戻しに出たら敵襲にあったって…それでロイに出撃してくれって言ってるけどこの状態じゃ…」
「悪いけど代わってくれ……早瀬君、古代だ！フォッカーに代わって俺が出る！」

古代の突然の申し出にその場にいた一同は勿論の事、電話の向こう側にいる未沙も驚いていた。

『でも古代艦長…』
「とにかく事態が切迫しているんだ！今からならまだ間に合う！それまで持ちこたえてくれ！」
『了解！急いで下さい！』

未沙からの連絡が切れると、古代はクローディアに切り出していた。

「クローディアさん、悪いがバルキリーの用意を頼む！それからマックスと柿崎に出撃命令を出してくれ！指揮は俺が執る！」
「分かった！アームド０１に連絡して古代君の乗るバルキリーを用意させるわ！」

「あの、古代艦長！自分も同行させて下さい！」

コウは今までのやり取りを聞いて、自分も出撃する事を決意し、古代に切り出していた。

「しかし…君のガンダムは…」
「大丈夫です！自分のガンダムフルバーニアンなら、ブースターパ

ック付きのバルキリーに十分付いて行けるはずです！」
「分かった…この際少しでも戦力が多い方がいい…頼んだぞ！」
「了解！」

コウがそう言って一目散にフォッカーの部屋を出て行くと、ユキが不安そうな表情で古代に呟いていた。

「古代君…大丈夫なの…？」
「ユキ…僕は必ず帰る…それまで待っていてくれ…」

古代はそう言うとすぐさまアームド０１へと向かって行った。なおも不安そうな表情のユキにクローディアが切り出していた。

「ユキ、私はブリッジに上がるけどあなたも行く？」
「はい…そうさせて下さい…ゲストルームで待つよりかはブリッジにいた方が…」

クローディアは頷くとユキを伴いブリッジへの道のりを急ぐべく、フォッカーの部屋を後にした。
しばらくしてフォッカーがソファから起き上がり、冷蔵庫にあった水を飲み干して呟いた。

「……ったく古代の奴…相変わらずお人よしだな…」

第９話―激戦！第５惑星リング―（その９）

―同日　２２：３９　マクロスメインブリッジ―

クローディアとユキがブリッジにたどり着くと、シャミーがおぼつかない様子で管制業務を代行していた。その様子を見たクローディアはシャミーに切り出していた。

「シャミー、管制業務をユキに代わって！ユキだったら連邦軍本部で何度も経験してるから！」

「分かりました！ユキさんお願いします！」

シャミーに代わってユキがインターカムを付けると同時に、アームド０１にいる古代から連絡が入っていた。

「こちら古代！早瀬中尉達の現在位置は！？」

「デルタ１より古代大佐へ！早瀬中尉達の現在位置は、艦隊右舷３時方向５０宇宙キロ、ポイントＮ－２５第５惑星リング上です！急いで下さい！」

「了解した！それと今後はこちらのコールサインは“イーグル１”で頼む！」

古代とユキが会話している間に、連絡を受けたグローバルがブリッジに到着していた。

「済まんな古代君…フォッカーの奴が酔っ払ってなければこんな事は無かったのに…」

『酔っ払いで悪かったっすね～艦長～！！！』

突然聞こえてきたフォッカーの声に、ブリッジ一同は思わず絶句しやっとの事でクローディアが問い返していた。

「ちょっとロイ！あなた今どこに…」

『アームド０２の格納庫さ！とにかく俺も出るからユキちゃんよろしくな！』

「了解です！フォッカー少佐は、ウラキ少尉のガンダムと共に古代大佐達の後に発進して下さい！」

『了解した！古代、先に行け！後で追い付く！』

『分かった！イーグル１、及びマックス・柿崎機発進する！』

古代及びマックス・柿崎がアームド０１から発進するのをブリッジで確認していたユキは、祈るような想いで念じていた。

（古代君、無事に帰って来て…）

―同日　２２：４５　第５惑星空域　古代のバルキリーコクピット―

アームド０１から発進した古代は、早速マックスと柿崎に通信を入れていた。

「イーグル１からマックス、柿崎機へ！一条中尉に代わって俺が指揮を執る！くれぐれもよろしく頼む！」

『了解です！歴戦の勇士のお手並み拝見させて頂きます古代大佐！』

『そうですよ！大佐は自分達にとって英雄ですからね！勉強させて頂きます！』

マックスと柿崎の返答に、古代はフォッカーが普段彼らにどんな教育をしているか思わず納得していた。

（さすがだなフォッカー…ちゃんと教育してるじゃないか…さすがヤマトの元クルーだ…）

そう思っている間に、フォッカーのバルキリーとコウのガンダムフルバーニアンが追い付いていた。

「イーグル1よりスカルリーダーへ……お前、大丈夫なのか…？」

『なぁに、これくらいどうって事はない……それよりも古代、こうやって並んで飛んでると昔を思い出すなぁ…ヤマトがイスカンダルに行った時の事を…あの時お前さんはまだ士官学校を出たてのヒヨッ子で、よく沖田のオヤジに怒られてたっけな…』

「ああ…そのおかげで今の俺がいる……って思い出話してる場合じゃないだろうが！」

『そうだった！それじゃ俺は先に行ってるからよ！』

そう言うとフォッカーのバルキリーはフルスピードを出してその場を離れ、古代は呆気にとられながら呟いた。

「……ったく…こういうところも昔から変わりゃしない……」

第9話―激戦！第5惑星リング―（その9）（後書き）

この小説を書きたかった理由その2――古代進をバルキリーに乗せてみたかったからです。
彼の愛機はコスモゼロですが、それ以外の機体でも難無く乗りこなせるだろうと思ったからです。

コスモゼロは今現在、ヤマトの艦載機格納庫に保管されており、物語中盤辺りにある人物が搭乗する事になりますが…
果たして誰が乗るのかご期待下さいませ！

次回、第5惑星リング上は大混戦！

第9話―激戦！第5惑星リング―（その10）

―同日　22：51　第5惑星リング上―

「畜生！しつこい奴らだ！」

輝は押し寄せるバトルスーツ隊を巧みにかわしながら叫んでいた。
今更ながら訓練用のバルキリーに乗っている事を後悔していた。
一方、未沙の方はなかなか攻撃してこない敵の動きに不審に思い始めていた。

「おかしいわ…敵は何で撃ってこないのかしら……ええっ！？」

未沙とカイフンの乗っている内火艇は、とうとうバトルスーツ二機に組み付かれ、身動きが取れなくなっていた。

―同日　同時刻　カムジンのバトルスーツコクピット―

『団長！小型機一機確保しました！』

カムジンの乗る指揮官用バトルスーツ“ヌージャデル・ガー”のコクピットに部下の一人から報告が入っていた。

「よ～し上出来だ！あと一機の戦闘機モドキさえ確保出来れば後は言う事無しなんだが……あの野郎ただ者じゃねぇ！こっちの動きを熟知してやがる！何がなんでも奴を捕まえろ！」

『了解……！！！？』

「おいどうしたっ!?返事をしろっ!」

カムジンの問い掛けに、別の部下が切羽詰まった表情で切り返していた。

『団長!3時方向からミサイル群キャッチ!おそらくマイクローンの増援だと思われます!』

―同日　２２：５６　輝のバルキリーコクピット―

それは突然の出来事だった。今まさに輝のバルキリーに接近しようとしたバトルスーツが、いきなり爆発四散していたのであった。

「一体何だ…何が起こったんだ…?」

輝が叫ぶのと同時に、機内のモニターに反応があり、そこにはフォッカーの姿が映し出されていた。

『くぉら～輝～～～!!!散々面倒かけやがって～～～!』

「せ、先輩～～!来てくれたんですか!?」

『だけどよくやった!男たる者、こうでなくちゃイカン……ヒック!!!』

「あの先輩……もしかしてまだ酔ってます……?」

『バーロゥ～～～!酒が怖くて戦争なんか出来るかって～～～の!?』

輝と会話をしている最中にも、フォッカーは巧みに機を操縦しつつ、敵部隊を的確に攻撃していった。

そんな中、古代、マックス、柿崎のバルキリー三機並びにコウのガンダムフルバーニアンが追い付いていた。

―同日　同時刻　古代のバルキリーコクピット―

フォッカーに遅れながらも、古代率いる臨時編成のバルキリー隊“イーグルチーム”とコウのガンダムフルバーニアンは、ようやく戦場に到着しつつあった。

「一条！無事か！？」

古代が通信モニターを開くと、輝とミンメイの姿が映し出された。

『古代先輩まで……それにマックス、柿崎…それにウラキ少尉のガンダムまで……』

輝が申し訳なさそうな表情をすると、古代は彼に切り出していた。

「一条、ここは俺達に任せてお前はマクロスに帰還しろ！」

『ええ…ですが、早瀬中尉とカイフンさんが敵に捕らえられて……』

「とにかく、二人は俺達が救助する！お前は早く戻れ！これは命令だ！」

『了解…くれぐれも気をつけて下さい古代先輩！』

古代の命令により、輝は直ちにバルキリーをマクロスに向けて行った。

「イーグル1より各機へ！これより部隊を二つに分ける！俺と柿崎、

ウラキは早瀬中尉達を救助に向かう！フォッカーとマックスは敵の目を引き付けてくれ、以上だ！」

『『『了解！！！！』』』

古代達三人はフルスピードで、捕らえられた未沙達の乗る内火艇を追撃して行った。

第9話―激戦！第5惑星リング―（その11）

―同日　２３：０５　第５惑星リング上カムジン機―

「クソッたれ！あの戦闘機モドキを追いかけろ！」

カムジンは、自機のコクピットで部下達に叫んでいた。ほぼ目的が達成されようとした時に、突然敵の増援が現れたものだから慌てふためくのは当然の事であった。

「あんにゃろぅ～！このカムジン一家を舐めるんじゃねぇ～！今にギャフンと言わせてやる！」

カムジンが叫んでいると、戦闘機モドキ（輝の訓練用バルキリー）を追跡していた部隊が後方から来た二機の戦闘機（フォッカーとマックスのバルキリー）がミサイル群を発射し、追跡部隊をあっという間に全滅させていた。

気が付けば、自分以外にいるのはほんの数機だけという事に気付いたカムジンはしばしの間呆然としていた。

「やるなマイクローンめ…まあいい…今回だけは見逃してやらぁ…さっきの小型機だけでもサンプルは手に入れたからな…ここはおとなしく引き揚げるぜ…」

―同日　同時刻　ブリタイ艦内格納庫―

一方、古代達は未沙達の乗っている内火艇を追って、ブリタイ艦内

に侵入していた。
ミサイルやビームライフルで周囲を破壊しつつ格納庫に侵入した三人は、どうにか内火艇を発見していた。
未沙の方もバルキリー二機とガンダムを確認すると、古代に連絡を入れていた。

「大佐達…無事ですか！？」
「ああ…何とかな…とにかく早く降りてくれ！」

古代の問い掛けに応じ、未沙とカイフンが内火艇から降りていると、大勢のゼントラーディ兵士が姿を現し、逃げ遅れた未沙を捕らえるとカプセルの中に放り込んでいた。
そんな中、カイフンが柿崎のバルキリーに何とか乗り込むのを確認した古代は、柿崎に切り出していた。

「柿崎、ミサイルを発射してその破壊口から脱出しろ！早瀬君は俺とウラキで救助する！」
『了解！大佐、ご無事で…』

柿崎は直ちにミサイルを発射しその破壊口から艦外へと脱出して行った。
その間にも格納庫内では激戦が繰り広げられ、古代のバルキリーとコウのガンダムフルバーニアンは次第に追い詰められていた。
やがてガンダムフルバーニアンのブースターと頭部が破壊され、コウはやむなく脱出せざるを得ない状況に陥った。
いつも出撃する度にコウはニナから“私のガンダム、必ず持ち帰ってよ…”と何度も言われていたものの、今回だけはその約束は果たせそうになかった。

（ごめん、ニナ…今回はとても持ち帰れない…せめてデータだけで

も…）

コウは何とかデータを取り出し、ノーマルスーツの胸ポケットにしまうとすぐさまコクピットから脱出したと同時に大爆発を起こしていた。

古代のバルキリーも、天井から突然現れたブリタイが鉄パイプを振り降ろし、バルキリーの頭部を破壊していた。

ブリタイは古代のバルキリーを壁面に押し付け、装甲を安々と引き剥がしてなおもバルキリーを痛め付けていた。

（――――!?何て奴だこいつらは…とにかく脱出だ…）

古代は咄嗟に脱出レバーを引き、コクピットから出ようとしたもののブリタイに捕らえられしまい、その瞬間今まで乗っていたバルキリーは大爆発を起こし、ブリタイはその衝撃で床に転がっていた。

「大丈夫ですか司令!?」

駆け寄って来た部下達にブリタイは平然と立ち上がり、捕らえたままの古代を見ながら指示を出していた。

「心配するな…お前達とは作りが違う…とにかくこのマイクローンと先程の二人を別部屋に運べ…」

「了解!」

―同日　２３：１１　第５惑星空域フォッカーのバルキリーコクピット―

『フォッカー少佐…古代大佐のバルキリーとウラキ少尉のガンダムの識別信号…消えました…』

柿崎が沈痛な表情で、フォッカーに報告していた。その発言を受けて、マクロスに帰還途中に引き返して来た輝が切り出していた。

『まさか…古代先輩とウラキ少尉が…死んだ…』

「いや…古代達は生きている…」

フォッカーは即座に否定してさらに発言を続けていた。

「……さっきから敵の攻撃を見て気付いたんだが…奴ら今回の目的は、初めから俺達を捕らえる事だったと思う…もし古代達が死んだとしたら、今頃俺達を追ってきてもおかしくないはずだ…」

事実、フォッカーの言う通り、ゼントラーディ軍からの追撃は無かった。

やがてマックスが意を決してフォッカーに切り出していた。

『少佐！自分はこれから古代大佐達を救助に向かいます！』

「……分かった…くれぐれも気をつけてな…」

フォッカーの許可が下り、マックスはすぐさま自分の機をフルスピードでブリタイ艦へと向けて行った。

その様子を輝の後ろにいたミンメイはうつむきながら呟いた。

『どうしよう…こうなったのもみんな私のせいだわ……どんな顔でユキさんに会えばいいか分からない……』

「ミンメイ…ユキには俺から詳しく話す…お前さんは心配する事はない…」

今にも泣き出してしまいそうなミンメイを見つめながら、フォッカーは思っていた。

（しかし…何て説明すればいいんだ…古代を必ず連れて帰るとユキに約束したのに……）

第9話―激戦！第5惑星リング―（その１１）（後書き）

カムジンの本来の愛機は“グラージ”ですが、両腕がミサイル発射口でどうやって格闘すればいいのやら……
従って今作品では、劇場版で彼が乗っていた“ヌージャデル・ガー”に変更しました。

次回、古代、未沙、コウの運命はいかに……

第１０話―ファースト・コンタクト―（その１）

―Ａ．Ｄ．２２０５　８．２７　２３：３６　アームド０１格納庫―

「古代君達が敵の捕虜に……そんな……」

フォッカーからの連絡を受け、ユキはグローバルと共にアームド０１の格納庫に来ていた。そこには古代達が行方不明との知らせを受けヤマトからは島が、アルビオンからはサウス・バニングとモーラが駆け付けていた。
そしてニナもユキからの連絡を受けて、駆け付けていたのだった。

「とにかく古代の事だ…心配は無いと思う…これまでだって何度も死線をかいくぐって必ずヤマトに帰って来てたじゃないかユキ…」

島は以前までの事を持ち出しユキを励ましていたが、当の彼女はそれでも不安感で満ち溢れていた。

「でも島君、今回は…」

「乗っていたバルキリーが爆発したからって言っても、死んだと決まった訳じゃない…あいつの事だ、必ず戻って来る…信じようユキ…」

「でも……やっぱり信じられないっ！」

ユキがそう叫ぶと、手で顔を覆いながら足早にその場から走り去っていった。島はそんなユキを追い掛けようとしたが、フォッカーに止められていた。

「そっとしておけ島…今はこうするしかないんだ…」

そしてフォッカーはグローバルの方に向き直り、ある提案を切り出していた。

「艦長…しばらくユキをマクロスに滞在させてはどうでしょう？ヤマトに帰っても仕事に集中出来そうにないと思うのですが…」

「私は構わないが…島君、君はどう思う？」

「確かにフォッカーの言う通りです…ここはグローバル艦長にお任せします…」

「分かった、森君には早瀬君の業務をやって貰おう…さっきも見事な仕事振りを見せてくれたからな…」

一方、ニナはコウの行方よりもガンダムフルバーニアンの事を心配していた。

「私のガンダムが……ガンダムが破壊されたなんて……嫌よそんなの！」

そんな事を言いつつ泣きじゃくるニナを見たフォッカーは、思わず彼女を平手打ちしていた。

「おいフォッカー！お前いくら何でもやり過ぎだぞ！」

フォッカーのその態度にバニングは抗議し、モーラが倒れ込んだニナを介抱していると、フォッカーが切り返していた。

「すいませんバニングさん…ただこれだけはニナさんに聞いてもらいたいんです……ニナさん、ガンダムやバルキリーの代わりはいくらでも作れる…だが、古代や早瀬、ウラキと言った優秀な指揮官や

パイロットはそう簡単に作れるものじゃないんだ…」

その言葉にニナは思わず衝撃を受け、フォッカーに謝罪していた。

「すみませんでしたフォッカー少佐…私が間違ってました…本当ならコウの事を心配しなきゃいけないのに、つい仕事絡みでガンダムの事ばかり…」

「分かりゃいいんだ…スマンなニナさん…つい手が出てしまった…」

「いえ、いいんです…あれで私も目が覚めました…これからアルビオンに帰って、みんなでこの先の事を考えます…」

第１０話―ファースト・コンタクト―（その１）（後書き）

本日９月２５日は、古代進やタイガーマスクの伊達直人役を演じた富山敬さんの命日です。

富山さんが亡くなって今年で１６年…

もし富山さんが存命で、ヤマト復活編で３８歳の古代進を演じていれば、また違った印象になったと思います。（決して山寺宏一さんがダメと言う訳ではないので……）

第１０話―ファースト・コンタクト―（その２）

―同日　２３：４１　ブリタイ艦メインブリッジ―

古代、未沙、コウはブリタイ艦内の一室に収容されており、未だ気を失ったままの三人をブリッジからブリタイとエキセドルがその様子を伺っていた。

「閣下、分析の結果敵のマイクローンは骨格から遺伝子に至るまで、全て我々がマイクローンになった時と同じといった結果が出ました…」

エキセドルの報告に、ブリタイはしばしの間考えた後切り出していた。

「ふむ……これはもはや我が艦隊で処理出来るような問題ではなくなったな…直ちにこの事をボドルザー閣下に連絡を取ってくれ…」

「お言葉ですが…ボドルザー閣下は慎重なお方です…考え直されてはいかがかと…」

「いや、事は一刻を争うのだエキセドル…直ちにフォールド航行の準備を急がせてくれ…」

「分かりました…直ちにフォールド航行の準備をします……どうやらマイクローンが目を覚ましたようですぞ…」

―同日　２３：４５　ブリタイ艦内の一室―

古代達三人はようやく目を覚ますと、自分達の置かれている状況に直面していた。
中でもコウは、ガンダムフルバーニアンを失ったショックでこれ以上ないくらいに落ち込んでいた。
（ニナにどうやって説明しよう…いや、それ以前にここからどうやって逃げ出せるんだろうか…）

古代の方もまたひどく落ち込んでおり、ユキには“必ず帰る”と約束したのにそれが果たせずにいたのであった。
（ユキ…君にはもう会えないのか…今度ばかりは自信がない…）

未沙はと言えば、何故このような状況になったのか、ただひたすら冷静に口に出していた。

「捕虜か…どうしてこうなったのかしらね……」

それを聞いた古代は、即座に未沙に切り返していた。

「大体早瀬君が武装もない内火艇で飛んだからこういう結果になったんじゃないか？」
「そもそものきっかけは、一条中尉がミンメイさんを勝手に連れ出したからなんですよ！それに私はフォッカー少佐に出撃命令を出したのに、何で古代艦長が出て来るんですか？あなたは休暇中だったはずですよ！」
「フォッカーが酔い潰れてたんだ！俺が出なければ、君達はとっくの昔に…」

古代と未沙の激しいやり取りに、コウは堪らずに口を開いていた。

「今ここで言い争いをしている場合ですか…こうなった以上、これ

からどうするかを考えるべきじゃないんですか…？」

コウの発言で古代と未沙が沈黙していると、部屋の外から見える宇宙空間が突然白く輝き始めた。

未沙はそれに気づいて思わず呟いていた。

「これは…この艦がフォールドしようとしてる…」

―同日　２３：５１　マクロスメインブリッジ―

「敵艦隊の一部、フォールド開始した模様…」

ヴァネッサの報告にグローバルを始めとするブリッジメンバーが、レーダーに映し出されたフォールド反応を注視していた。

「ヴァネッサ君、敵がフォールドした地点は？」

「はい…古代大佐達が行方不明になった地点と同じ第５惑星のリング上です…」

「そうか……ところでクローディア君、森君は今どこにいるかね…」

「はい…先程メールしたら、ゲストルームにいるそうです…多分今夜は眠れそうにないでしょうね…それよりも艦長、これからどうするつもりですか…？」

「明日の朝、森君と一緒に艦長室に来てくれ…話はそれからだ……」

第１０話―ファースト・コンタクト―（その２）（後書き）

この小説を書きたかった理由その３――マクロスＴＶ版第１１話＆１２話を見ていて、これを未沙と後から救助に来るマックス以外のキャラを、他のキャラでやったらどうなるかを見たかったからという理由からです。

今作品内では、古代とコウのどちらかがボドルザー達の前でキスするか…
それは後々までのお楽しみ！

次回、ロンド・ベル本隊に合流するネェル・アーガマ艦隊の活躍を描きます。
そしてジュドーがやっとあの機体を手に入れる！？

第１０話―ファースト・コンタクト―（その３）

―Ａ．Ｄ．２２０５　８．２８　８：１５　ネェル・アーガマブリッジ―

ロンド・ベル本隊に合流するべく、ネェル・アーガマ艦隊はグラナダを発進し、リンボス軌道を時計回りに航行していた。

既に彼らの元にも現ロンド・ベル司令の古代が行方不明との知らせが入っており、ヘンケンはもとよりジュドー達も沈痛の想いで溢れていた。

今もブリッジのメインパネルには、ブライトの留守を預かるアムロとクワトロの姿が映し出されていた。

「それよりもこちらでも問題が起きてな…グラナダの波動エネルギーコンバータ製造工場がシーマ・ガラハウの連中により爆破されてな…」

『本当なんですかヘンケン艦長!?』

「おそらく彼らは何かを始めようとするらしいな…」

『シーマ・ガラハウ……あのデラーズフリートの生き残りか……これは厄介な事になりそうだ…』

パネルの向こう側でクワトロが呟くのと同時に、レーダーオペレーターのファ・ユイリィが何かをキャッチしていた。

「艦長！艦隊進行方向８０宇宙キロにネオ・ジオン艦隊をキャッチしました！数およそ２０隻！」

「何だと……済まんアムロ君、また後でな！」
『はい！そちらも気をつけて下さい！』

アムロとの交信を終えると同時に、前方のネオ・ジオン艦隊からの通信が入っており、モニターには司令官であるマ・クベの姿が映し出されていた。

『久しぶりだねロンド・ベルの諸君……』
「やい！マ・クベのオッサン！今頃何しに来やがった！？」

たまたまブリッジにいたジュドーが、相変わらず不気味な印象のマ・クベに怒りを現わしていた。

『フッ……お前は確かニュータイプのジュドー・アーシタ……相変わらず威勢のいい男だ……』

そう言うとマ・クベは、傍らに置いてある自身のコレクションである壷を愛でていた。

「ヘッ！相変わらず趣味の悪いオッサンだなあんたは！？」
「ジュドー控えろ……それでマ・クベ司令、一体何の用事かね？」

ジュドーを一喝したヘンケンは、単刀直入にマ・クベに切り出していた。

『早速だが用件を言わせて貰うよ……諸君達と行動を共にしている宇宙戦艦ヤマトとＳＤＦ－１マクロスの引き渡しを要求する…』

マ・クベの突然の要求に、その場にいた一同は思わず絶句し、しばらくしてジュドーが口を開いて拒否していた。

「冗談じゃない！そんな要求に答えられる訳無いだろうが！言っとくけどな、ヤマトとマクロスは俺達……いや、宇宙全体の希望の星だ！テメーらに渡す訳に行かないんだよ！」

『フッ……そんな事を言っていられるのも今のうちだぞ……今からお前達に見てもらいたい物があるのでね……』

そう言うと別のモニターには、旗艦であるグワジン級戦艦の下部発進口からワイヤーに吊された二機のモビルスーツ　キュベレイが現れた。

「あれはもしかして…プルとプルツーのキュベレイ！」

メインパネルを見ていたジュドーが思わず叫ぶと、その二人から通信が入っていた。

『ジュドー！助けてぇ～！』

『アタシもいるぞ！何とかしてくれってーの！？』

「プルにプルツー！大丈夫か！？でもなんでマ・クベのオッサンに捕まっちまったんだ！？」

『あんた達がシャングリラからロンド・ベルに合流したって聞いたんで、プルと一緒に行こうと思ったらこのザマだ！』

「とにかく俺が今からお前達を助けに行く……待っていろ！」

そう言うとジュドーはブリッジから一目散に走り去り、ヘンケンは呆気にとられていたもののすぐさま命令を出していた。

「……ったくジュドーの奴は……全艦戦闘配備！ネオ・ジオン艦隊を叩く！」

第１０話―ファースト・コンタクト―（その３）（後書き）

１ｓｔガンダムに出ていたマ・クベの登場でした。
ＴＶ版では第３７話でＭＳギャンに搭乗して戦死した彼ですが、劇場版では生き残っている設定で、今作品ではそれを活かしました。

彼の趣味である骨董品集め…劇中ジュドーに散々こき下ろされましたが、それでもヤマトパート１に出て来たゲールの趣味よりはマシかなと……

第１０話―ファースト・コンタクト―（その４）

―同日　８：２５　リンボス軌道上ネェル・アーガマ―

ネェル・アーガマのＭＳ格納庫内では、ジュドーがジム・カスタムに乗り込み出撃準備をしていると、モニターからクリスの声が聞こえてきた。

『ちょっとジュドー君！そのジム・カスタムはアポジモーターがおかしくなりかけてるの！これから修理するって言うから降りてくれる！？それでもすぐに出たいなら、私のアレックス貸してあげるから！』

「クリスさん！気持ちだけは受け取っておくよ！とにかく出るから下がって……ジュドー・アーシタ、ジム・カスタム行きまーす！」

クリスが止める間もなく、ジュドーを乗せたジム・カスタムは、ネェル・アーガマの中央カタパルトを発進して行った。

その後を追うように右舷カタパルトでは、バーニィのザク＝が発進準備を行っていた。

『ちょっとバーニィさん、大丈夫なのかよ？いくらジオンの識別信号がまだ残ってるからって言うけど、奴らの新型機に対抗出来るのかよ？』

ザク＝のモニターに、心配そうなモンドが映し出されるとバーニィは多少緊張しながらも切り返していた。

「そんなの気合いでなんとかなるって……それじゃザク＝出ます！」

バーニィのザク＝が出るのと同時にカミーユのＺガンダム、エマのガンダムＭＫ－＝、クリスのアレックスガンダムが発進、他の艦からもジェガンが発進して行った。

―同日　８：３６　ネェル・アーガマブリッジ―

戦闘開始から１０分が経過し、戦況は一進一退の状況になりつつあった。

ネェル・アーガマに同行しているクラップ級巡洋艦のほとんどが損傷しつつあり、ネェル・アーガマ自体も艦体に傷を追っていた。

「巡洋艦エクゼター、ボストン、撃沈されました！」

「本艦左舷パルスレーザー第一群損傷です！」

次々入る報告に、ヘンケンは次第に焦りの色を濃くしていた。そんな中、格納庫にいるケリィがブリッジに通信を入れていた。

『艦長、俺も出る！』

「まさか…あれで出ると言うのか…ヴァル・ヴァロで大丈夫なのか…」

『大丈夫です！あんなＭＳの弾ぐらい平気ですから…ケリィ、ヴァル・ヴァロ出ます！』

ネェル・アーガマの下部からその姿を現わしたヴァル・ヴァロは、艦隊周囲に迫っていたネオ・ジオンのＭＳ群をメガビーム砲で一掃し形勢を逆転させていき、ブリッジでこの様子を見ていたヘンケン

は驚きの表情で呟いた。

「凄いなあいつは…よし、直ちに反撃に出る！」

「艦長、バーニィより入電！プルとプルツーの救出に成功したそうです！」

「了解した！本艦をネオ・ジオン艦隊に向けろ…軌道修正が済み次第、ハイパーメガ粒子砲の発射準備に入る！」

―同日　８：４３　ジム・カスタムコクピット―

「あ～っ糞ったれ！ちゃんと動いてくれよジム・カスタム！？」

ジュドーは自分の思い通りに動かないジム・カスタムのせいで、思わぬ苦戦を強いられていた。

そんな中、敵将校ラカン・ダカラン率いるＭＳドライセン部隊が近付きつつあった。

『おいそこのニュータイプ！大分難儀しているようだな…何なら俺達が引導を渡してやろうか！？』

「うるせーよラカンのオッサン！あんた達にやられる程、このジュドー・アーシタは落ちぶれちゃいないぜ！」

『フン…そんな事をほざくのも今のうちだ！』

ラカンからの通信が切れると、ドライセン部隊か直ちに行動を開始し、まともに動かないジム・カスタムを翻弄していた。

ジュドーは何とか動かそうと必死になっていたものの、一機のドラ

イセンが放ったハンドガンによってアポジモーターが損傷し、完全に動きを止められた。

（じょ…冗談だろ…完全に動けなくなっちまった…俺、ここで終わりかな…）

ジュドーが動きの止まったジム・カスタムのコクピットの中でそう考えていると、とどめを刺そうとしたそのドライセンがどこからともなく飛来したミサイル群によって破壊されていた。

その様子を見たジュドーは、何が起こったのか半信半疑でいると一機のコアファイターが飛来し、その搭乗員…ルー・ルカから通信が入って来た。

『ジュドー、大丈夫？間に合って良かった！今、ラビアンローズからＺＺガンダムを持って来たからまずはコアファイターに乗り換えて！』

「本当か！？よっしゃ～～～っ！鬼に金棒とはこの事だ！早速乗り換えないと……ってまた来やがった！」

ジュドーがジム・カスタムを降りようとルーの乗るコアファイターに近付こうとした時、別のドライセンが飛来しジム・カスタムにとどめを刺そうとしていたが、カミーユのＺガンダムが攻撃を加えてそのドライセンを破壊した。

「カミーユさん、サンキューです！」

『ジュドー、敵は俺が引き付ける！早くルーのコアファイターに乗り換えろ！』

「了解！後でお礼はしま～す！」

第１０話―ファースト・コンタクト―（その５）

―同日　８：５０　コアファイターコクピット―

ジュドーはどうにかコアファイターに乗り換え、ルーはナビシートに移りラビアンローズと連絡を取っていた。

「こちらルー・ルカ、ラビアンローズのエマリー艦長聞こえますか？」

『こちらラビアンローズのエマリーです！今からＺＺガンダムのコアベースとコアトップを射出します！ジュドー！ちゃんと合体してよ！』

いつものエマリー・オンスの口調を聞き、ジュドーはちょっとした悪戯心を出していた。

「了解ですエマリーさん！あ、そうそう！この前ブライトさんが逢いたいって言ってましたけど！」

『あっそう…』

いつにないエマリーの口調に、ジュドーは思わず呆気にとられていた。

「“あっそう”って……エマリーさん、ブライトさんに逢いたくないの？」

『ブライト艦長はもういいわ……でもその代わりいい人見つけちゃった！新しくロンド・ベル司令になった宇宙戦艦ヤマト艦長の古代大佐なの！ウフッ！』

「……あの…言っときますけど、古代さんにはちゃんと婚約者がいるんですが…」
『それでもいいの…いつかあの人を振り向かせたいの…』
エマリーのいつ終わるか分からない惚気話に苛立ったルーは、少しキレ気味になってエマリーに催促していた。
「ど～でもいいけどエマリー艦長！さっさと射出して下さい！」
『ごめんなさい！今から射出しまーす！』
「了解！コアチェンジ開始！」
二人の乗るコアファイターは変形し、まずコアベースと合体、さらにコアトップと合体してＺＺガンダムへと変形して行った。
「よっしゃ～っ！一丁いったるかい！ターゲットスコープオープン、電影クロスゲージ……」
「ちょっとジュドー……あんたまさかあのセリフ言うつもりじゃないでしょうね…？」
「あ、バレた！？一度でいいから波動砲の発射シーン言ってみたかったんだよね～！」
ジュドーのその発言に、ナビシートのルーは呆れ果てていた。
「そんじゃ改めて……一気に行くぜ！ハイメガキャノン発射ぁーっ！！！」
ＺＺガンダムの頭部からおびただしい光芒を放ちハイメガキャノンが発射され、ドライセン部隊と応援に駆け付けた他のＭＳ部隊を一掃していた。

―同日　８：５６　グワジン級戦艦ジークフリートブリッジ―

「ぜ、全滅たと…」

旗艦であるジークフリートのブリッジでは、マ・クベが副官のウラガンから報告を受けていた。

「はい…残ったのはラカン少佐のドライセンと数機のＭＳだけとの事です…」

ウラガンの素っ気ない報告にマ・クベは思わず椅子からずり落ちそうになっていた。

「あ…あれだけのＭＳがいながら３０分持たないとは…ロンド・ベルの連中は化け物か！？」

マ・クベが呟いた時、レーダーオペレーターからさらに報告が入っていた。

「敵旗艦に高エネルギー反応増大中！」

「ハイパーメガ粒子砲だ！直ちに回避！並びに撤退だ！」

マ・クベが発言するのと同時に、ネェル・アーガマからハイパーメガ粒子砲が発射され、そのエネルギーはジークフリートを掠めて半数の艦を撃沈していた。

「艦隊の半数が壊滅！どうします！」

「と…とにかく逃げるんだ…撤退して次の機会を伺うしかない…」

マ・クベは壺を大事そうに抱えながら指示を出すしかなかった。甘く見ていたネェル・アーガマ艦隊に手酷くやられたために、ここはひとまず撤退するしかなかったのであった。

第１０話―ファースト・コンタクト―（その５）（後書き）

ＺＺガンダムがやっと登場しました。しかもネェル・アーガマ共々ハイメガキャノンとハイパーメガ粒子砲を発射とはなんて贅沢な…

ＺＺが放映された当時、ハイメガキャノンやハイパーメガ粒子砲の発射シーンを見るたびに、ヤマトの事を思い浮かべたのは自分だけではないはず…

次回、残されたユキやニナ達の心情をお送りします。（↑と言っても、作者の下手くそな文ではたいした事は書けないと思いますが…）

第10話―ファースト・コンタクト―（その6）

―同日　7：23　ゲストルーム―

結局ユキは一睡もできずに朝を迎えていた。何度も眠ろうとしたものの、古代の事が思い出されていたのだった。
ユキは部屋のカーテンを開け、窓外に広がる街並を見ながら涙を浮かべていた。

（古代君…本当に無事だといいんだけど……）

その時携帯電話が鳴り、出てみると相手はクローディアだった。

『ユキ、起きてる？』
「はい…今起きたばかりです…あの…どこからかけてるんですか？」
『あなたの部屋の前からよ…』

ユキが部屋のドアを開けると、そこには電話を持ったクローディアとフォッカーが立っていた。

「よう…眠れたかユキ…？」

「いいえ…あれから彼の事ばかり考えてて全然…」
「ねぇユキ、朝ご飯まだなら一緒に食べない？サンドイッチ作ってきたから…」

クローディアの手には、サンドイッチを入れたビニール袋がぶら下がり、それをユキの前に差し出したものの、彼女は首を横に振って

断るそぶりをしていた。
フォッカーはその様子を見ると、困惑した表情で切り出していた。

「なあユキ…こんな時だからこそ何か食べとかないと身が持たんぞ……昔からよく言うじゃないか…“腹が減っては戦さができぬ”ってな…ここはひとまず腹ん中に何か入れとかないと……」
「……分かりました…確かにフォッカーさんの言う通りですね……じゃあお言葉に甘えていただきます……」
「よし！そうこなくちゃ！上手いもん食ってこれから乗り切らなきゃな！そんじゃクローディア、うまいコーヒー煎れてくれ！ユキが煎れたんじゃまずくて飲めたものじゃ……」
「ちょっとフォッカーさん！何て事言うのよ～～っ！私だってちゃんと美味しいコーヒーの煎れ方、勉強してるんですからねっ！！！」

ユキのあまりの怒りっぷりに、フォッカーは思わず恐縮していたものの、内心ではどこかホッとしていたのだった。あえてコーヒーの話題を出す事によって、ユキを元気付けようというフォッカーなりの気配りだった。

―同日　９：１６　アルビオンＭＳデッキ―

その頃ニナは、ＭＳデッキで忙しく立ち働いていた。破損箇所のチェックやコクピット内のコンピュータソフトの書き替えなど、あえて忙しくしていないとコウの事を思い出しそうになるからであった。
前夜、フォッカーに殴られるまでガンダムの事しか頭になかった彼女は深く反省していた。
モーラはそんなニナを見るといたたまれない思いであった。

「ニナ、あまり無理しないでよ…」

「分かってるモーラ…でもこうしていないと、コウの事を考えてしまいそうで…それに辛い思いは私だけじゃない……森さんの方がもっと辛いはずよ…さっきもマクロスメインブリッジと通信したけど、森さんも必死になって任務に打ち込んでいるし……」

「話を聞いてるだけでもこちらも涙目になってきちゃった……それに引き換えあのスケベ親父、デリカシーのかけらもないのかね!?上の通路でアデル少尉とベイト中尉の三人でトランプなんかやってんの!」

モーラが話すのと同じタイミングで、モンシアが上から覗き込み叫んでいた。

「うるせーこのデカ女!?人が何やってようと勝手じゃないか!?」

下に向かって叫んでいるモンシアに、ベイトとアデルは呆れ果てていた。トランプで勝負したのはいいが、次第に負け続けたモンシアは怒鳴り散らすタイミングを伺っていると、たまたまモーラが話しているのを聞いたためにすぐさま行動に移していたのだった。

「中尉、気持ちは分かりますがここは落ち着いて…」

「全く……日頃のうっぷん晴らしのウラキがいなくなったからって、でっかい姉ちゃんにまで当たるのはどうかしてるぜ……」

アデルとベイトが溜息をついていると、モンシアは持っていたトランプを投げ捨て床に寝転びながら文句を垂れ流していた。

「大体な、ウラキの野郎が行方不明ってのは口実で、実はどっかに逃げちまったんだよ!二年前のあの時のようにな!」

「……それでどうしますか?ウラキがいない間にニナさんを口説き

ますか？」

「あほか！？恋のライバルもいないのにそんな事出来るか？ウラキの野郎が戻って来るまで勝負はお預けだ！」

珍しくまともな発言をしたモンシアに、二人は目を丸くしていた。
もっともモンシアには別の思惑があった。

（どうせそのうちまたガンダムが配備されるだろう…それまでにウラキの野郎が戻ってくればその時にまた勝負だ……今度はこの俺様が主役だ！）

第１０話―ファースト・コンタクト―（その７）

―同日　２１：１４　マクロス艦内展望室―

その晩、ユキは勤務を終えゲストルームに戻る途中、艦内の展望室を訪れていた。
寝不足ながらも何とか未沙の代行を務め、シャミー達三人娘と市街地で食事を済ませてゲストルームに戻る途中、ユキの足は自然と展望室に向かっていた。

広大な窓の外には果てしない星空が広がり、その中でも一際目立つオリオンの三ツ星にユキは願いを込めていた。
そこはかつてヤマトがイスカンダルへの航海途中、オリオン座空域を航行中にユキが三ツ星の一つα星に向けて、古代が自分の事を好きになってくれるようにと願いを込めていた星であった。

（あの時だって願いが叶ったんだもの…今回だって古代君達が必ず帰って来る事を願っていれば望みは叶うはずよ……）

ユキはそう思いながらも、どこか不安な気持ちが溢れ、涙がとめどなく流れていた。
その時ユキの携帯電話が鳴り響き、出てみると相手はミンメイだった。

「ミンメイ…どうしたの？」

『ユキさん…今回の件、謝らなきゃと思って…本当にすみませんでした…私がわがまま言ったからこんな事になってしまって……』

「いいのよ…いたずらに自分を責めないで…こうなってしまった以上、仕方ない事だから…」

ユキがそう言うと、電話の向こう側でミンメイがすすり泣いていた。

「泣かないでミンメイ…それに今仕事中なんでしょ…？」

『はい…今度出る新曲のレコーディングの最中で…』

「だったら泣くのはやめて…ベストの状態じゃないといい歌作れないでしょ？あなたには大勢のファンがいるんだからその人達の事も考えて…」

『分かりました…もう泣くのは止めます…だからユキさんも元気出して下さい…』

「ありがとう…私は大丈夫だから…彼の事はいつまでも待つつもりだから…」

『私も古代さん達が帰って来るのを信じてます…それじゃユキさん、お休みなさい…』

ミンメイからの電話が切れると、ユキは意を決して座っていたベンチから立ち上がっていた。

（もう泣くのは止めよう…私強くならなきゃ…このまま泣いていたらみんなに心配かけちゃう…）

第１０話―ファースト・コンタクト―（その７）（後書き）

オリオンの三ツ星…ヤマトパート１第１２話で舞台になった場所でした。
ユキが古代に向かって“ある人が私の事を好きに～”発言をしているのにもかかわらず、当の本人が全然気付かないシーンを見る度に、画面に向かって何度突っ込みを入れた事か…

次回、ボドル基幹艦隊に連れて来られた古代達が見た物は……

第１０話―ファースト・コンタクト―（その８）（前書き）

時間は半月後に進みます。
古代達三人の運命はいかに！？

第10話―ファースト・コンタクト―（その8）

―A．D．２２０５　９．１１　１１：０６　ブリタイ艦内―

フォールド航行中のブリタイ艦内の一室では、未沙がある物を手にして室内を覗いており、その様子を見ていたコウが尋ねていた。

「あの早瀬中尉…それって一体何です？」

「マイクロビデオよ…小さいおかげで彼らに見つからなかったみたい…」

「だけどなあ早瀬君…そんな物で撮っても何の役にも立たないとは思うけどなぁ…」

古代の指摘に未沙はなおも室内を撮りながら呟いた。

「まだ逃げ出せないって決まった訳でありませんよ古代大佐…これに録画しておけば、万一帰還出来た時の資料になるんですから……でもそれにしても一体どこまで行くのかしら？もう1時間以上もフォールドしている…ロンド・ベルじゃ半月たった頃かしら…」

未沙が窓外を見ながら呟いていると、コウが彼女に驚きの表情で問い返した。

「半月って…フォールドするとそんなに時間が経過しちゃうんですか中尉？」

「ええ…私もよくは知らないけど、フォールド航行中の空間ともといた空間との時間差が異なるらしいの…」

未沙が説明していると、窓外が再び白く輝き通常の宇宙空間が再び姿を現していた。
そして次の瞬間、三人は信じられないものを目にしていた。

「な、何だ!?窓の外は巨人の宇宙艦だらけじゃないか!?」
「一体…どれだけの数なんですかね…」

古代の呟きに未沙も同意しつつ、ビデオカメラを回し続けていた。
コウも遠くで行われている戦闘を呆然と見つめていた。

「あれを見て下さい…局地戦のようです…」
「いいえ…近寄れば相当大規模な戦闘のようね…」
「ああ…それも地球を丸ごと飲み込むくらいのな…」

―同日　同時刻　機動要塞フルブス・バレンスメインコア―

全長６０００キロを越えるゼントラーディ軍機動要塞フルブス・バレンスのメインコアでは総司令である、ゴル・ボドルザーがモニターを介して入港したブリタイと通信を行っていた。

「久しぶりだなブリタイ…お前から提出された資料には全て目を通した…」
『それで閣下、いかがなさるおつもりで…?』
「うむ…幻の反応兵器の存在といい、男と女が一緒に乗り込んでいる戦艦の存在といい……我々は良からぬ者と接触してしまったようだな…」
『良からぬ者…と言いますと?』
「詳しい話は後だ…捕虜との会見はお前の艦で行う…謁見室を用意

しろ…」

『了解しました…閣下のお越しをお待ちしております…』

ボドルザーは通信を切り、ブリタイ艦へと向かうべくメインコアから連絡艇で飛び立ち、途中である考えが浮かび上がっていた。

（もしかして彼らは…“プロトカルチャー”ではあるまいな……）

第１０話―ファースト・コンタクト―（その９）（前書き）

同じ頃のユキの様子を描きます…と言っても内容はグダグダです…

第１０話―ファースト・コンタクト―（その９）

―同日　１２：０６　マクロスメインブリッジ―

『スカルリーダーよりデルタ１へ！これより偵察任務に出発する！指示頼んますよユキちゃん！』

「了解！フォッカーさん気をつけて下さいね！」

『分かってるよユキちゃん！後で気持ちいい事しようぜ！ガハハハ！』

「あ…あのぅ……」

フォッカーの下ネタに相変わらずユキは顔を赤くしていた。その様子を隣席のクローディアは微笑ましく見つめていた。

マクロスメインブリッジの勤務を始めてから半月余りが過ぎ、ユキはようやく仕事に慣れて来たように見えた。

「ユキさん、そろそろお昼行きませんか？もうすぐ交替要員が来ますから…」

ヴァネッサが後方のオペレーター席から声をかけると、ユキは即座に切り返していた。

「私は大丈夫！あなた達こそお腹空いてるんでしょ？ここは私が見てるから先に行ってらっしゃい！」

「はい…でも…」

ヴァネッサがそれでも何か言いたげにしていると、二人の会話を聞

いていたグローバルが助け舟を出した。

「森君、君も行きなさい…無理はしちゃいかんよ…」

「はい…しかし艦長…」

「これは艦長命令だ…一時的とはいえ、君は私の部下だ…何かあったらヤマトクルーに申し訳がたたなくなるしな…」

グローバルはあえて古代の名前は出さずにいた。それはユキに対する思いやりから出たものだった。

「はい、そうします艦長…」

ユキがグローバルに答えると、シャミーが立ち上がって催促に来ていた。

「じゃあユキさん、いつものカフェテリアに行きましょ！？今日はランチにケーキセットが付くんですよ～！」

「ええ行きましょシャミー、でもたまにはおごりなさいよ！」

「ええ～っどうして～～っ！？」

シャミーが半泣きになっていると、キムが合いの手を入れていた。

「そうよシャミー！あんたいつも私達に払わせてるクセに！」

「どうしてキムまでそんな事言うのよ～～～！」

さすがにシャミーが可哀相になったと見えて、ユキが助け舟を出していた。

「いいわシャミー！今回は私がおごるから！さあ行きましょ！」

ユキと三人娘がブリッジから連れだって出て行くと、グローバルはパイプをくわえながらぽつりと呟いた。

「やれやれ……ここは女子校か……？」

―同日　１３：２２　市街地カフェテリア―

「あ～美味しかった！ユキさんご馳走様でした～～。」

いつものカフェテリアで、シャミーは腹を撫で回しながらユキにお礼を言っていた。
そんなシャミーを、遅れてやって来たクローディアが呆れ果てた表情で呟いた。

「よく食べるわねシャミーは…」
「だってぇ～お腹空いてたんですからぁ～～～」

シャミーの発言に一同が爆笑していると、佐渡と愛猫のミー君、それにアナライザーがやって来た。

「佐渡先生にアナライザー、それにミー君も！」

ユキがそう言うとミー君は彼女の膝上に乗り、久しぶりに甘えていた。それを見ていたシャミーがうらやましそうに呟いた。

「わぁ～超カワイイ！ユキさん、ちょっと抱っこさせてくれます？」
「ええいいわよ！」

ユキはミー君を抱き抱えてシャミーに手渡すと、ミー君は嫌がるそぶりも見せずに昼寝を始めていた。
そんなミー君の姿を横目に見ながら、佐渡はユキに話しかけていた。

「ユキ、元気そうじゃの！仕事には慣れたんか？」
「はい先生、おかげ様でなんとか…」
「そりゃ良かった！ヤマトの方でもみんな何とか頑張っておるからの。ところでフォッカーの奴がおらんが……？」
「ロイだったら先程から偵察任務に出てますけど…もしかして彼と飲むつもりだったんですか先生？」

クローディアが佐渡に答えていると、佐渡の口から意外な返事が返って来ていた。

「実はな…ワシはしばらく酒断ちしとるんじゃ…古代達が帰って来るまでは禁酒しとる…」

「あら先生もなんですか…実はロイもここ半月ばかり、一杯も飲んでいないんですよ…」

実を言えば、古代達が行方不明になった原因が自分にあると思ったフォッカーは、古代達が帰って来るその日まで禁酒禁煙を誓ったのであった。それを初めて聞いたユキは思わず涙ぐみながら呟いた。

「すみません…みんな…」

そんな様子を見たクローディアは、その場の重い空気を取り払うべくある話題を切り出していた。

「そうだ…ちょうどアナライザーがいるから聞きたかったんだけど

…」

「何デスカ、クローディアサン？」

「ここにいる五人の女性の中で、スカートめくりしたいって人がいる？」

クローディアの発言を受け、アナライザーはしばらくテーブルの周囲を周り始め、そのうちユキの席の後ろにつくなりおもむろに彼女の胸をわしづかみしていた。

「いやぁ～～～ん！！！！」

「僕ニハヤッパリユキサンデナイト物足リナイ……」

アナライザーのとんでもない発言にその場にいた一同はみんな脱力していた……

第１０話―ファースト・コンタクト―（その９）（後書き）

二ヶ月目でＰＶが４００００を越えました！これもひとえに皆さんのおかげです！
これからもグダグダ感ありだと思いますが、飽きずにお付き合い下さいませ……

次回、古代達がボドルザーと会見……

第１０話―ファースト・コンタクト―（その１０）

―同日　１２：５６　ブリタイ艦内ブリーフィングルーム―

古代達三人は、ブリタイ艦内のブリーフィングルームに連れて来られていた。そこにはブリタイとエキセドルがおり、それに以前の戦いでマクロス艦内に侵入した三人（ロリー、ワレラ、コンダ）も同席していた。

（これから何が始まるんだ……もう何を見ても驚かないぞ……）

古代がそう思って周囲を見ているうちに敵のボスらしき男が入り、巨人達五人がその男に敬礼するのを見ていた。

「私はゼントラーディ軍第１１８基幹艦隊司令、ゴル・ボドルザーだ…お前達に尋ねたい事がある…」

自分達と同じ言葉を話すボドルザーを見て、三人は困惑していた。

「俺達と同じ言葉を話すなんて…」

「どうなってるんでしょうね…」

古代達三人の様子を見ていたエキセドルは、テーブル上の機械の調子が順調に作動しているのを確認するとボドルザーに報告し、彼は満足そうな表情で古代達三人に質問をしていた。

「では改めて尋ねる…お前達の所属先はどこだ……？」

ボドルザーの問い掛けに、三人は顔を合わせ相談を始めた。

「大佐…どうしますか？」

「相手が名乗りを上げているんだ…ここは俺達も名乗らないと相手に失礼だからな…」

「さすが大佐…何度も異星人と戦って来てるだけの事はありますね…」

相談を終え三人は、改めてボドルザーの方に向き直っていた。

「自分は地球連邦軍所属、ロンド・ベル隊司令並びに宇宙戦艦ヤマト艦長、古代進だ…」

「同じく、私はＳＤＦ－１マクロスチーフオペレーター、早瀬未沙です…」

「自分はロンド・ベルパイロット、コウ・ウラキ…」

三人が自己紹介を終えたのを確認したボドルザーは、改めて彼らに問い掛けていた。

「……お前達はいつから監察軍と接触したのだ？」

初めて聞く“監察軍”という名前に三人は困惑していた。

「ウラキ、お前はそんな軍隊の名前を聞いた事はあるか？」

「いえ…自分は軍に入ってまだ二年ちょっとなんで…」

古代とコウの話にブリタイとエキセドルが即座に反応し、すぐさまコウに問い掛けていた。

「軍に入って日が浅い！？」

「軍に入る前は何をしていたのだ…？」

「何って……民間人に決まってますが……」

「民間人!?それはどんな者なのだ?」

「戦争に行かない人達の事ですよ……」

コウの発言にエキセドルが驚愕の表情を浮かべ、思わず叫び出していた。

「戦争をしない人間だと!馬鹿な!宇宙は戦いに満ち溢れ、戦いある所にこそ命があるはずだ!」

この発言を聞いた未沙は秘かに思っていた。

(戦いある所に命がある……一体どういう事かしら……)

そんな中、ボドルザーがしばらく考えた後にある質問を投げ掛けていた。

「――お前達の艦隊に戦争をしない人間が存在するのか……そして、男と女が何故一緒にいられるのだ…?」

「男と女が一緒にいて何が…」

「ウラキ少尉、ここは私に任せて…」

コウが反論しようとする所に未沙がそれを制し、ボドルザーの前に進んで言い放った。

「これ以上あなた達の質問に答えるつもりはありません!!!」

第１０話―ファースト・コンタクト―（その１１）

―同日　１３：０１　ブリタイ艦内ブリーフィングルーム―

「これ以上、あなた達の質問に答えるつもりはありません！！！」

未沙の気迫に満ちた発言に、古代は困惑しつつ思っていた。

（早瀬君…それは少し言い過ぎだ…）

そしてボドルザーはというと、未沙の発言にも余裕の笑みを浮かべながら切り出していた。

「フン……お前達は今の状況を分かっておらんようだな……これを見るがいい……我々はお前達の惑星や艦隊を一瞬のうちに滅ぼせる１０００万隻の艦隊を有している……」

「い…１０００万隻……！？」

あまりの艦隊の数に古代達が言葉を失っていると、パネルには宇宙空間を埋めつくす１０００万隻のゼントラーディ艦隊が映し出され、その艦隊がある惑星を攻撃している場面が現れ、攻撃を受けた惑星は一瞬のうちに死の星へと変化していった。

「ひどい…何て事を……」

未沙の発言を受け、ボドルザーは勝ち誇るような笑みを浮かべていた。

しかし未沙には、このような映像を見せられたもののある疑問が浮かんでいた。

（……おかしいわ…これだけの戦力がありながら、何故ロンド・ベルや地球圏を全面攻撃して来ないのかしら…？）

「もう一度尋ねる…民間人は実在するのか？そして男と女は何故一緒にいられるのだ！」

ボドルザーの問い掛けに未沙はさらに考えに及んでいた。

（民間人…男と女……私達には彼らにはない何かがあるのかもしれない…）

「どうした！答えなければ、お前達の艦隊や惑星を滅ぼしてやる！」

ボドルザーの更なる脅しにも屈することなく、未沙は切り出していた。

「出来るものならやってご覧なさい！これだけの戦力があるんですからやってみればいいじゃないですか！それに私達にはあなた達の知らない特別な力があります！」

「ええい！黙れ！」

ボドルザーはそう言うと拳でテーブルを殴りつけ、未沙を捕まえてそのまま上に持ち上げた。

「……！！！」

捕まえられ身動きがとることが出来ない未沙に、古代とコウは駆け寄ろうとしたものの、ボドルザーに止められていた。

「動くな!!……フン、こんなマイクローンが我々に盾突こうと言うのか…何故わざわざマイクローンになったのだ…マイクローンになった訳を言わなければこの女を握り潰すぞ!」

ボドルザーが未沙を握る手に力を込めると、古代が叫んでいた。

「止めろ!俺達は生まれた時からその体だ!」

「生まれた時から…それはどこから生まれると言うのた?」

「母親からに決まってるだろう!」

「母親……?」

後ろで聞いていたコンダが古代に話し掛けると、古代は多少苛立ちながらも答えていた。

「女親の事だ!」

古代の答えにエキセドルも反応し、さらに問い掛けていた。

「女から…?お前達は女から生まれたと言うのか?一体どうやって?」

「男と女が愛し合う事によって生まれるんだ!」

「一体どうやって…?」

「それはその…キスしたり抱き合ったりだ…」

古代との押し問答に対してボドルザーは彼らの言う事に次第に興味を持ち、ある提案を持ち掛けた。

「なるほど…ではお前達のどちらか一人、この女と“キス”と言うのをやってみろ……やらねばこの女を握り潰すぞ！」

ボドルザーの問い掛けに、古代とコウは戸惑っていた。だが沈黙を破り、古代が意を決してボドルザーに切り出していた。

「俺がやる！だからその人を離してくれ！」

「大佐！あなたには森大尉が…」

「ウラキ、ここはとにかく俺に任せろ…」

古代がコウを諭しているうちに未沙が下に降ろされていた。

「早瀬中尉、これから俺とキスをしてくれ…」

「えっ…しかし…」

未沙が躊躇していると、古代は未沙の耳元でそっと呟いた。

「これは敵の反応を見るチャンスなんだ…早くしないと奴らに殺されるぞ…」

「はい…分かりました…」

古代と未沙は互いに抱き合って体を密着させ、唇を重ねようとしていた。

古代は一瞬ユキの顔を思い浮かべていた。

（ごめんよユキ…君以外の人とキスするつもりはなかったのに…これも任務のうちだ…仕方ない……）

やがて二人の唇が重なると、それを見ていたボドルザー達は全員が驚愕の表情を見せ、思わずボドルザーが口走っていた。

「――――!!!プロト…カルチャー……!!誰か、こいつらをさっさと連れ出せ!!!」

第１０話―ファースト・コンタクト―（その１１）（後書き）

ボドル基幹艦隊の総数を原作の５００万隻から１０００万隻に増やしました！（↑しかしこの作品、戦艦の大きさや数が多過ぎ……）

そしてついに、古代と未沙がキスしちゃいました……キーワードにもあった異作品間恋愛第１号と言う事でいいかな～？

森　ユキ

「いいわけないでしょ！」

第11話―ビッグ・エスケープ―（その1）

―A．D．２２０５　９．１１　１３：３２　ブリタイ艦内―

古代達三人は、ボドルザーとの会見後再び艦内の一室に閉じ込められていた。そして話題は自然と先程の古代と未沙がキスした事により、彼らゼントラーディ人が何故あれだけの事で驚いたのか…と言う話になっていた。

「しかし…大佐と中尉がキスしたくらいであの連中驚いてたんですかね？」

「本当ね…星の一つや二つくらいあっという間に潰せるくらいの戦力を持っているのにね…」

「あの時、連中が言ってた“プロトカルチャー”って一体何でしょうかね？」

「分からないわ……とにかくロンド・ベルに戻れてこのデータを分析できればいいけど……」

「戻れたら……か……」

未沙とコウの会話を聞きながら、古代はしばらく考えていた。あの時未沙を助けるためとはいえ、キスをしてしまった事に後悔の念に苛まれつつあった。

（例え帰れたとしても、この事に関してはユキに口が裂けても言えやしない……それよりもどうやってここから逃げ出せるかを考えないと……）

―同日　同時刻　ブリタイ艦内ブリーフィングルーム―

「さっきのは一体何だったのだ…」

「何故あれほどの事を見てショックを受けるのでしょうか？」

ボドルザーとブリタイは、先程見た古代と未沙のキスについて話をしていた。彼らにとって初めてみる行為はかなりのショックな出来事であった。

そんな中、落ち着きを取り戻したエキセドルは冷静に先程の事を分析していた。

「我々の眠っていた潜在意識が反応するのかもしれないですな…」

「なるほど…潜在意識か…」

ボドルザーが答えるのと同時に、ロリーが質問を始めた。

「ボドルザー閣下…プロトカルチャーとは一体何ですか…？」

「うむ…プロトカルチャーと言うのは我々の遠い祖先の事だ…」

「祖先……！？」

「そうだ……プロトカルチャーの時代には我々のサイズはマイクローンのサイズだった……男と女が共に暮らし、“文化”と言うものがあったそうだ…しかしそれがどのような世界であったかは記録が失われたために、はっきりした事が分からんのだ…そしてプロトカルチャーと接触した艦隊は戦闘能力を失い、滅びてしまったと言う事だ…」

ボドルザーの説明に一同は思わず沈黙していた。

――もしかしたら自分達も同じ道を歩みつつあるのか――

一同の不安が高まりつつあった時、ボドルザーがある提案をあげて

いた。

「この際だ…我々の敵であるマイクローン部隊……“ロンド・ベル”にスパイを送ってみようと思う…」

「スパイですか？お言葉ですが、わざわざマイクローンになって“ロンド・ベル”に潜入できる者がおりますかな？」

エキセドルが不安気な面持ちでボドルザーに進言していると、ロリー達三人が立ち上がっていた。

「その役目、是非私達にやらせて下さい！」

第11話―ビッグ・エスケープ―（その1）（後書き）

37年前（1974年）の昨日10月6日は、宇宙戦艦ヤマトパート1の初放映の日でした…

と言ってもその当時、ヤマトのヤの字も知らずに裏番組（アルプスの少女ハイジ）を見ていたのを記憶しています。

ヤマトを初めて知ったのは本放映から三年後…

たまたま見た特番でヤマトをやっており、その内容に衝撃を受けたのがきっかけで現在に至っています……

次回、タイトル同様古代達の脱出劇が開始されます！

第11話―ビッグ・エスケープ―（その2）

―同日　13：39　ブリタイ艦内―

「――とにかく、ここから脱出しましょう……」

しばらくの間考えていたコウが、意を決して古代と未沙に切り出していた。

「それはいいんだが、どうやって…？」

「さっきの会見で大佐と中尉がキスさせられた時、巨人達がもの凄く驚いてましたよね…“プロトカルチャー”って…」

「ああ…驚き過ぎて動けない状態だったよな…」

「ええ…それを利用するんです…いくら巨人達でも食事の差し入れはするでしょうから、その時を狙ってもう一度大佐と中尉がキスすれば…」

「それはいい名案ね…」

コウの提案に未沙が同調したものの、古代が慌てふためいて反対していた。

「ちょっと待て！そのためにもう一度俺と早瀬君がキスするのか？冗談じゃない！いいか、キスってのはな愛し合う者同士がするもんなんだ！好きでもない人とそうそう出来るものじゃないんだ！」

「それはまあ…そうです…」

古代の話にコウは思わず納得したものの、未沙はなぜか顔を赤くしながら切り出していた。

「私は別に構いませんよ…ここから逃げ出せるのであればもう一度大佐とキスしても……それにこのマイクロビデオを重大な証拠として持ち帰るのが私達の重要な任務なんですから……」

「まあ…確かに早瀬君の言う通りだな…とにかくやるしかないな…」

未沙の説得に古代も渋々同意したものの、今度はコウが心配顔をしておりそれを見た未沙が尋ねていた。

「どうしたのウラキ少尉？」

「いえ…今ふと思ったんですが…巨人達の食事ってどんなのが出るんでしょうね？まさかニンジン出て来ませんよね？」

「……お前…こんな所に来てもニンジンの心配か……？」

コウの余計な心配に古代が思わず呆れ果てていると、“ドスン”という物音が外から聞こえていた。

「予定よりも早いな！ウラキ、君はドアの側に！」

「了解！」

「早瀬君…いつでもいいな？」

「はい…大佐……」

古代と未沙が唇を重ねるのと同時にドアが開き、立っていた敵兵は驚いたかのように動く気配を見せようとはしなかった。

「やった！！！」

「よし今だ、脱出するぞ！」

古代達三人は敵兵が動揺している隙に外に出ようとした時、上から

聞き覚えのある声が聞こえて来た。

『大佐、僕です！マックスです！』

そこにいたのは敵兵の制服を上から着込んだマックスのバルキリーであった。

マックス機はフォッカー達と別れた後、ブリタイ艦の破損箇所から内部に侵入し、たまたま出くわしたゼントラーディ兵を倒してその制服を身にまとい、古代達の救出時期を伺っていた。

「それにしてもマックス、何て格好しているんだ？」

『詳しい話は後です！』

古代の問い掛けにマックスが答えると、倒した兵士を部屋の中に入れて自機もドアを閉めていた。

『しかし意外ですね…古代大佐には森大尉と言う婚約者がいるのに……早瀬中尉とそんな関係にあったなんて……』

「おいマックス！それは誤解だって！」

「そうよ！これは逃げ出すための作戦……」

古代と未沙が慌てて否定したものの、マックスは何やら意味あり気に切り返していた。

『大丈夫ですよ大佐！この事はロンド・ベルに戻っても内緒にしておきますよ…とにかくポケットの中に隠れてもらえますか…』

マックス機は右ポケットにコウを、左ポケットには古代と未沙を入れ、そのままドアを開け外へと歩き始めた。

すぐさま一人のゼントラーディ兵とすれ違い、何事もなくその場を

やり過ごすかと思った時、今までいた部屋を開けたその兵士が何事かを叫んでいた。

『見つかったようです！揺れますので辛抱して下さい！』

マックスは手元のレバーを押してガウォーク形態に変形させ、飛び交う銃弾の中をかい潜りブリタイ艦内をひたすら逃避行していた。

第11話―ビッグ・エスケープ―（その2）（後書き）

ここでもニンジンの話題が出ました。
それにしてもゼントラーディ人がニンジンを食べているとしたら、
大きさはどのくらいになるやら……

第11話―ビッグ・エスケープ―（その3）

―同日　13：45　ブリタイ艦内メインブリッジ―

ブリタイ艦内のメインブリッジでは、ブリーフィングルームから移動したボドルザーがブリタイとエキセドルにある不安を切り出していた。

「――あの三人で大丈夫なのかブリタイ？」

「一度でも敵の様子を垣間見たのであれば大丈夫でしょう…あの三人ならば必ずやり遂げるはずです…」

「ふむ…それならばいいのだが…」

その時ブリッジ後方にあるモニターに通信が入っていた。

『ブリタイ司令！マイクローンの捕虜が脱走しました！』

「何だと！？直ちに捕まえるんだ！」

その兵士からの通信が終わりかけた時、何やら戦闘機の轟音が鳴り響き、ブリタイ達が周囲を見渡しているとモニターを突き破り、マックスのバルキリーが出現しそのまま飛び去って行った。それを見たボドルザーは直ちに指令を下していた。

「奴らは一体何をしでかしやがる！何が何でも捕まえるんだ！」

―同日　13：56　ブリタイ艦内―

マックス機は銃弾を浴びつつ艦内をあちこち飛行していたものの、たまたま入ったエレベーター内で動かなくなっていた。

「ダメです、全然動きません！」

「分かった！こうなったら強行突破するしかない！エレベーターが止まったら走るぞ！」

「了解！！！」

古代の決断に全員が同意し、エレベーターが止まると同時に走り出そうとした時、待ち構えていたゼントラーディ兵が飛び掛かる所をすんでの所で四人はすり抜け、古代と未沙、コウとマックスの二組に別れて逃走を開始していた。

同時にマックスのバルキリーは大爆発を起こし、その兵士も巻き添えになっていた。

―同日　１４：０２　ブリタイ艦内メインブリッジ―

その頃、ブリタイ艦内のメインブリッジでは、ボドルザーが苛々した様子で椅子に座りブリタイを叱責していた。

「奴らはまだ見つからんのか！？」

「はい…何しろ奴らは小さすぎるので捜索に困難が出ているようで…」

「ブリタイ…この責任、取らければならんようだな……しばらくの間第一線を退いて貰おう…」

「……はい…」

「それではスパイを送り込む作戦はどうするおつもりで……？」

エキセドルが疑問をぶつけると、ボドルザーは即座に切り返していた。

「直衛艦隊のラプラミズ隊にでも当たらせるつもりだ…それだけこの作戦は重要なのでな……」

第11話―ビッグ・エスケープ―（その4）

―同日　14：09　ブリタイ艦内―

古代と未沙はブリタイ艦内をひた走り、ある一室に身を潜めていた。

「ウラキ少尉達、大丈夫かしら…」

「あいつらなら大丈夫だろう…それにしてもここは一体……早瀬君、あれを!?」

未沙は古代の指差す方向に目を向けると、思わず息を飲みつつもマイクロビデオを操作していた。

「巨人が小さくなって行く…」

それはゼントラーディの所有しているマイクローン装置であり、スパイに志願したロリー達三人が装置内で巨人の姿から古代達と同じサイズへと縮小されていた。

二人はもっとその様子を見ようとした時、ゼントラーディ兵がその装置に近付きつつあったため、足早にその場を離れ再び艦内を歩き始めていた。

やがて二人は武器倉庫らしき場所にたどり着き、身を潜めていた。

「――あれが巨人達の言ってた“マイクローン”何ですね…」

「ああ…大変なデータを手に入れたようだな…」

「大佐、私思うんですけど…あの巨人達は元々私達と同じサイズじゃなかったんでしょうか…そして監察軍と言う敵と戦うために自分

達の体を改造したんでしょうね…」
「まさか…そんな事がある訳が…」
「いいえ…ありえると思います…そうでなければバルキリーやガンダムと互角に戦える人間が、自然に生まれる訳がないんですから…」
「もしかして遺伝子改造でもしたんだろうか？」
「おそらくは…こうして巨人からマイクローンが作れるのなら、反対に私達のサイズから巨人が作れてもおかしくないはずです…そしてもしかしたら巨人達の言う“プロトカルチャー”って、彼らがまだ私達と同じサイズだった頃の文明の事を言うのかも……――――！！！？」

その時、未沙の後ろからゼントラーディ兵の手が伸び、彼女を掴み持ち上げようとしていた。
古代は、果敢にもそのゼントラーディ兵に立ち向かっていたものの、足で蹴り飛ばされていた。
その様子を見た未沙は、ふとした弾みで手にしていたマイクロビデオを落としていた。

そのゼントラーディ兵が立ち去ろうとした時、古代が自分の体よりも大きなライフルを持ち上げ、全身の力を込めて引き金を引いて銃弾を何発か発射すると、ゼントラーディ兵は床に倒れ込んでいた。
それを確認した古代は未沙の元へと駆け寄っていた。

「未沙！大丈夫か！」

古代は自分でも気付かないうちにいつもの“早瀬君”ではなく“未沙”と呼んでいた。

「……古代さん…私はもう駄目…あなただけでも逃げて下さい…」
「何を言うんだ！敵がやって来る！早くしないと…」

「ビデオカメラを落としてしまって……データが無くなったら私、助かっても仕方がない…」
「そんな物が無くても、俺達自身が見たり聞いたりした物をそのまま報告すればいいじゃないか!?」

「だったら尚の事…あなただけでも逃げて下さい…」

「馬鹿!諦めるな!こんな時こそ、生き抜かなければならないんだ!だから早く!」

古代は未沙をゼントラーディ兵の手の中から救い出すと、手を取り合って走り出していた。後方からは複数のゼントラーディ兵が銃撃を加え、二人は銃撃によって生じた破壊口から下へと落ちていった。

第11話―ビッグ・エスケープ―（その4）（後書き）

本日10月9日、ガンダムシリーズ最新作「機動戦士ガンダム揚げ」……もとい、「機動戦士ガンダムAGE」の初OAの日です。
親子三世代に渡る初の“大河ガンダム”……さてどうなりますやら……

それはともかく、劇中の古代が久々に“熱かった”……
未沙を助けようと自分の危険も顧みずに行動する所は、ヤマトパート1をイメージして描きました。

未沙との仲は今後どうなるか……是非お楽しみに……

第11話―ビッグ・エスケープ―（その5）

―同日　15：02　ブリタイ艦内―

どれくらいの時間が経過したのか、古代はようやく目を醒ましていた。かたわらには心配そうな表情の未沙が覗き込んでいた。よく見ると二人共、体がずぶ濡れになっていた。

「だいぶうなされてましたけど、大丈夫ですか…」
「……ここは一体…？」
「どうやらエンジンルームのようですね…冷却水が結構溜まってたようで…」
「ここに俺達落ちたって訳か…」
「ええ…古代さんを引っ張り上げるのに苦労しました……もっとも、そのおかげで私達助かったんですけどね…」
「溺れないで済んだって事は、君に借りを作ってしまったかな…」
「上官を見捨てる訳には行きませんから…これでおあいこ……貸し借りなしと言う事です…」
「早瀬君……すまん…」

古代が頭を下げると、未沙はようやく笑顔を見せていた。

「……しかし、よく考えて見ればおかしいよな…あれだけの大艦隊を持ちながら、自分の艦の修理も満足に出来ないなんて…」
「やりたくても出来ないんじゃないですか？彼らは自分達の体を巨大化させて最高の力を手に入れた…だけどその代わりに失った物も多いんじゃないかしら…」
「失った物か……」

「ええ…今の彼らに民間人の存在や男女の関係がないのがその証拠かと…」
「あまりにも強い身体能力を手に入れたおかげで、戦う事しか出来なくなった……と言う事か……」
「ええ…あれだけの大艦隊同士の戦いは、ものすごいんでしょうね…そのせいでどれだけの星が滅ぼされ、どれくらいの数の文化が失われたのかしら…」
「失われた文化……それが“プロトカルチャー”と言う事か…」

未沙の推測に古代は思わず納得していた。それと同時に、自分達が今まで接触して来た異星人達の事が思い出されていた。

（俺達が今まで戦って来た異星人も“プロトカルチャー”の一種だったのだろうか…だとしたら俺達もゼントラーディ軍と一緒で、ただ相手を全滅させる存在なのだろうか…）

「あの…古代さん…どうしたんですか？急に黙って…？」

未沙の発言に、古代はふと我に返っていた。

「あ…ちょっと考えてたんだ…彼らゼントラーディは、戦争しか知らない哀れな種族じゃないかってね…」
「そうですね…まるで私みたいで…」
「君が…？」
「私の家は、もう３００年前から軍人の家系なんです…だから私も中学を出てから軍に入ってひたすら任務の事ばかり…戦いの事しか頭にありませんでした…」

未沙の思いがけない発言を受け、古代も自分の身の上を告白していた。

「それを言ったら俺だってそうさ…俺の家はごく当たり前の一般家庭だった…だけど１０年前にガミラスの遊星爆弾で両親を失って以来、すでに軍に入っていた兄貴を頼って俺もこの道に入る事になってしまった…その兄貴も三年前の暗黒星団帝国との戦いで戦死して…その際、兄貴とスターシャさんの間に生まれた娘…俺にとっては姪のサーシャも亡くなって……今じゃ俺は一人ぼっちさ……」

「でも古代さんにはユキさんがいるじゃないですか……私から見てもユキさんは古代さんの事を一途に想ってますよ……」

「ああ…あの子は今時の女性にしては、一人の男に尽くしてくれる…」

「だからですか？さっき寝言でユキさんの名前を連発してたのは…？」

未沙の発言に古代は思わず顔を赤くしていた。

実を言えば、ユキがボドルザーに捕まえられている夢を見てうなされていたのであった。

「いや…さっき君があの男に捕まえられてたから…それがユキと重なったんだろうな…」

古代が頭をかきながら言い訳していると、未沙は淋しげな表情で呟いていた。

「そうですよね…それに比べて私なんか任務が恋人代わり…」

「そんな事はない…君だってそのうちいい人見つかると思う…どうせなら一条なんかがいいんじゃないか？よく言うだろ…“喧嘩するほど仲がいい”って…」

輝の名前を出され、未沙は思わず反論していた。

「冗談やめて下さい…あんな命令違反常習者は…それに年下だし…ついでに言いますけど、一条中尉をヤマトで引き取ってもらえますか?彼は元々ヤマトに配属を希望していたらしく、何かある度に“ヤマトに行けばよかった!こんなおばさんの元で働くのは嫌だ!”ってフォッカー少佐にこぼしてるんです……って笑わないで下さい古代さん!」

未沙の話を聞いた古代は思わず爆笑していた。
輝のヤマト配属の件は、フォッカーの余計な圧力によってマクロスに配属変更されたと、以前人事担当から聞いていたが、まさかここまでおかしな事になっているとは思ってもみなかった。

「……いやぁ悪い!君がおばさんなら、俺やユキはどう呼ばれるかと思うと……」
「いいんです…もう慣れましたから…でも、とにかくここから脱出しない事には…」
「ああ…そうだな…全ては始まらないしな…」

第11話―ビッグ・エスケープ―（その5）（後書き）

森　ユキ
「ちょっと作者さん！これ以上古代君と未沙との仲が進展したらどうするのよ！？」

一条　輝
「そうですよ！あくまで原作に忠実にして下さい！」

作者
「こういう展開もありと言う事です！ちゃんとラストはくっつく所はくっつきますから御心配なく！」

第11話―ビッグ・エスケープ―（その6）

―同日　15：52　ブリタイ艦内―

古代と未沙はエンジンルームから抜け出し、再びブリタイ艦内をひた走っていた。そんな中、生暖かい空気の流れを二人は感じていた。

「何かしら…風が吹いてる…」
「もしかしたら出口があるのか…？」

二人は風が吹いている方向を目指してひた走り、やがて舷側にある開け放たれたエアロックにたどり着いていた。

「やった！出口だ！」
「ええ！それにしてもすごい数の艦隊ね…」

エアロックから見えるメインコア内に停泊しているゼントラーディ艦隊の姿を見て、古代と未沙は深い溜め息をついていた。

「こんなすごい数の艦隊を相手にしても、まず勝ち目はないな…」
「そうですね…何とかして戦いを回避する方法を考えないと…」

未沙がその様子を見ながら話していると、後方から何やら足音が聞こえて、思わず二人は身を隠していた。
やがてその足音は止まり、「やった！出口に着いたぞ！」「やりましたね！」の声がして、古代と未沙が見てみるとコウとマックスが立っていた。

「ウラキ、マックス！」
「無事だったのね！」

「古代大佐に早瀬中尉も！」
「よくご無事で！」

四人は手を取り合い、お互いの無事を確認していると、マックスが隣の物資搬入口からブリタイ艦の横に停泊している小型艦に伸びているコンテナを発見していた。

「あの船、出港するようですよ…」
「あの船が出て行くと言うなら…あの船に潜り込むためとにかくここから脱出しよう！」
「了解！！！」

古代達四人は急いで行動を起こし、搬入口付近で警戒しているゼントラーディ兵の目をかい潜り、コンテナの間にどうにか身を潜んで出港しようとしている小型艦に潜り込んでいた。

―同日　１６：１１　ラプラミズ艦メインブリッジ―

「スパイを送り込むなんて、実に消極的な作戦ですね…」

ラプラミズ艦のメインブリッジでは、歴戦の勇士であるミリア・ファリーナが艦隊司令であるラプラミズに意見を切り出していた。

「言うなミリア…今度の敵であるマイクローン部隊“ロンド・ベル”は監察軍よりも手強いかもしれない…充分心してかからねばなな…」

ラプラミズの警戒するそぶりにミリアは安心感のある発言を切り出していた。

「司令、御心配なく……相手はたかがマイクローン…この私がいる限り、ロンド・ベルなぞひとひねり致します……」

「さすがは“エースのミリア”……頼もしいな…」

―同日　１６：５６　ゼントラーディ小型艦内―

古代達四人はゼントラーディ兵に見つかる事なく、バトルポッド格納庫に身を潜めていた。

「早瀬君、これからどうする？」

「そうですね…あのバトルポッドを奪うってのはどうでしょうか？」

未沙の思いがけない提案に、古代を始めとする一同は納得していたものの、ある疑問が浮かんでいた。

「それはいいアイデアだが…どうやって動かすんだ？我々のサイズでは動かしようがないんだけど？」

「そんなの簡単ですよ…優秀なパイロットが三人もいますから！」

「え…もしかして俺も…？」

「当然ですよ！それとも何？愛する誰かさんのいるヤマトに帰れなくてもいいのかなぁ～～？」

思いがけない未沙の茶化しぶりに、古代は思わず困り果てていた。

「分かりましたよ中尉殿…これじゃどっちが上官か分かりゃしない…」

そう言いながら古代は、マックスとコウでバトルポッドの操作方法を確認していた。
やがて小型艦を含むラプラミズ艦隊はフォールド航行を開始していた。古代の心の中にはある想いが出ていた。

（もしかしたら俺達は帰れるかもしれない…もしそうならユキ…待っていてくれ…）

第11話―ビッグ・エスケープ―（その6）（後書き）

“エースのミリア”ことミリア・ファリーナの初登場でした。

マクロスＴＶ版と劇場版では類い稀に見る強さでマクロスを翻弄した彼女でしたが、この作品でもその強さを見せてくれるはず…

次回、時間はさらに半月後に移ります……

第11話―ビッグ・エスケープ―（その7）

―A．D．２２０５　９．２５　１３：１８　マクロスメインブリッジ―

『バーミリオンリーダーよりデルタ１へ！艦隊周囲１００宇宙キロまでの偵察完了！これより帰還します！』

「こちらデルタ１、ご苦労様一条君！随分遠くまで行ったのね？」

未沙が行方不明になってほぼ一ヶ月、彼女に代わり航空管制業務についていたユキの笑顔も良かったが、何故か物足りなさを輝は感じていた。

「どうしたの一条君、私の顔に何かついてる？さっきからぼんやりしてるようだけど…」

『いえ…今ちょっと早瀬中尉の事を考えてたんです…早瀬中尉なら必ず文句を言っていたのにって…あのおばさんいつもそうでしたから…』

「まあ…未沙がおばさんなら私はどうなるの一条君？私は未沙よりも三つも年上なのよ！」

ユキの発言に、モニターの向こう側で輝は思わず驚きの声を上げていた。

『え…そうなんですか！？森さんが中尉よりも年上だったなんて…なんせ森さんは凄く綺麗だし…』

輝の発言を受けて、横で二人の会話を聞いていたクローディアが通信に割り込んできた。

「一条君！この私なんかユキよりさらに二つ上なんですからね！後で私達に何かおごりなさいよ！」
『そんなぁ…クローディアさんまで…』

輝がパネルの向こう側で恐縮しているとメインレーダーに反応があり、ヴァネッサが報告を入れていた。

「艦長！艦隊進行方向に重力震確認！デフォールド反応です！およそ５００隻の艦隊が急速接近中！」
「何だと！直ちに戦闘配備！森君、全バルキリー隊並びにＭＳ隊に出撃命令を出してくれ！」
「了解！デルタ１よりロンド・ベル全艦隊へ！直ちに戦闘配備をとって下さい！」

グローバルの命令を受け、ユキが全機に指示を出していると、アームド０２から出撃しようとしているフォッカーから通信が入っていた。

『こちらスカルリーダー！ただ今から出撃する！ユキちゃん待ってろよ、今夜はいいコトしようぜ！』
「は～い、お待ちしてま～す！部屋の鍵開けて待ってま～す！」
『……了解…出撃する…』

いつものように下ネタでユキの反応を見ていたフォッカーは、意外な反応に言葉を失っていたがそれと同時にひと安心していた。

（ユキの奴…やっと俺の冗談についてこれるようになったな…まあこれなら安心だ…）

―同日　１３：２５　ゼントラーディ小型艦内―

「とっくにデフォールドしているんですよ！早く何とか出来ないんですか！？」

ゼントラーディ小型艦内の格納庫のバトルポッド内では、未沙が古代達を急かしていた。コウはエンジンチェックをしながら未沙を諭していた。

「まあ焦らずに早瀬中尉…」

「ウラキの言う通りだぞ早瀬君…焦ってもいい事はないぞ…ん！？これなら行けるはず！」

古代がレバーを動かすと、そのバトルポッド“リガード”は動き出し、それに気づいたゼントラーディ兵が何事かとこちらの様子を伺っていた。

「敵兵が気づいたわ…」

「当たり前だろ…マックス、行けるか！？」

「いつでも…発射します！」

マックスがスイッチを押すとガトリング砲が発射され、側に近付きつつあったゼントラーディ兵を吹き飛ばし、さらに壁面を破壊すると破損箇所から艦外へと飛び出した。

周囲は既に戦闘が始まっており、その様子を見た未沙は一言呟いていた。

「ここが…太陽系かアルファ星系ならいいんだけど……」

第11話―ビッグ・エスケープ―（その8）

―同日　13：31　ミリア専用バトルスーツコクピット―

「フン…“ロンド・ベル”とやら、たいした事はないな…これのどこが手強い敵なのか…」

ミリアは愛機である深紅のバトルスーツ“クァドラン・ロー”のコクピットで呟いていた。
クァドラン・ローは両腕にロリー達三人を載せたカプセルを抱えており、ロンド・ベルの迎撃部隊を蹴散らしつつ目標であるマクロスに向けて飛び続けていた。

「あれか…“民間人”とやらが乗るマクロスと言う戦艦は…」

コクピット内のモニターでマクロスを捉えたミリアは、自分の機体を巧みに操作してマクロスの対空砲火をかい潜り、艦後方の外壁に取り付き、装甲を引きはがしてカプセルを投げ入れるとすぐさまその場から離脱して行った。

「こちら一級空士長ミリア！作戦完了、これより帰還します！」

ミリアが通信を送ると、モニターにはラプラミズの姿が映し出されていた。

『ご苦労…我々も戦線を離脱する…合流ポイントに向かえ…』

「了解！直ちに向かいます！」

―同日　１３：３６　古代達のバトルポッド内―

その頃、古代達四人の乗っているバトルポッドは今だに漂流を続けていた。
ポッド内ではマックスがロンド・ベルと連絡を取ろうと通信機器を操作していた。

「マックス、まだ連絡は付かないのか？」
「はい…やっているんですが……えっ…これは！？」

「どうしたマックス！？」
「かすかではありますが反応が……これは……ミンメイさんの歌だ！」

マックスが機器を操作すると、スピーカーからはミンメイの歌“私の彼はパイロット”が聞こえていた。それを聞いた四人は思わず叫び出していた。
「…と言う事は……ヤマトが…！」
「マクロスが…！！」
「ロンド・ベルが…！」
「「「「近くにいる！！！！」」」」

四人は手を取り合い、帰還の喜びに浸っていた。やがてマックスが調整の済んだ通信機を古代の前に差し出した。

「大佐！軍用周波数キャッチしました！いつでも通信可能です！」
「これで…本当に帰れるのね…」

未沙が涙を浮かべていると、古代はそれを見咎めていた。

「早瀬君泣くな…泣くのは地球に無事帰ってからだ…」
「そう言う大佐だって…泣いてるじゃないですか……」
「何を言う…これは目にゴミが入っただけだ…」
「あの…そんな事よりも早く連絡を……」
「そうですよ大佐…」

コウとマックスもうっすらと涙を浮かべながら古代に通信を催促していた。

「こちら宇宙戦艦ヤマト艦長古代進以下四名、敵バトルポッドを奪取して漂流中……直ちに救援願います……」

第11話―ビッグ・エスケープ―（その8）（後書き）

ミリア搭乗の深紅のバトルスーツ“クァドラン・ロー”は、マクロス劇場版に登場した機を出しました。

TV版も劇場版も、彼女の類い稀に見る機動性は他を圧倒させるには十分な機体でした。

この作品中、もしかしたらもう一人の深紅の機体が似合う男との対決もあるかも……

第11話―ビッグ・エスケープ―（その9）

―同日　13：39　ヤマト艦内―

この通信を最初に傍受したのは相原であった。
初めはノイズ混じりで聞き取れなかったものの、次第にクリアになるにつれ彼の顔は晴れやかになっていた。

「真田さん！古代さんから…艦長から通信が入ってます！」
「本当か！？メインスピーカーに切り替えろ！」

相原がメインスピーカーに切り替えると古代の救援要請が流れ、第一艦橋の中は歓喜の渦で満ち溢れていた。
南部達“スリーアミーゴ”と土門は万歳三唱を繰り返し、山崎は珍しく涙を浮かべて古代帰還を喜び、島と真田は握手を交わしていた。

「真田さん…やっぱり古代はたいした奴ですね！」
「ああ、これでマクロスにいるユキも喜ぶだろう…」

古代帰還の知らせは、たちまちのうちにヤマト艦内に広がり、中でも佐渡はアナライザーと共に医務室で祝杯を上げていた。

「佐渡センセイ！古代サン帰還ヲ祝ッテ乾杯シマショウ！」
「そうじゃな！今日はめでたい！久々に一杯やるかの！……おっとその前に…」

佐渡は自室のテーブルに置いてあった初代艦長沖田十三の写真にコ

ップ酒を供え、一言呟いた。

「沖田艦長…古代が帰って来た…さすがにあんたの息子じゃないか…ワシは今日ほど嬉しい事はない……」

―同日　１３：４０　アルビオンＭＳ格納庫―

その頃アルビオンのＭＳ格納庫では、シナプスからの連絡を受けたニナがモーラと共にマクロスに向かうべく、連絡機へと乗り込んでいた。

「コウが…帰って来るなんて…夢じゃないわよね…」

連絡機の席で涙ながらにニナが呟いていると、アルビオンに帰還途中のバニングから通信が入って来た。

『ニナさん聞いたか！？ウラキの奴が帰って来たぞ！これも古代のおかげだな…さすが俺の教え子だ……』

（バニングはロンド・ベル配属以前、地球本星で士官学校の教官を勤めており、古代や島を育て上げていた事もあり、今回思いがけない出来事とはいえ、彼らと再会を果たしていたのであった。）

「そうですねバニング少佐…」

ニナが涙ながらに答えていると、スターク・ジェガンに搭乗しているキースからも通信が入って来た。モニターに映ったキースの顔はヘルメット越しとはいえ、涙でひどい有様であった。

モーラは呆れ果てた表情でキースに切り出していた。

「ちょっとキース…あんたなんて顔してんの…！？」
『だってモーラ…こんな嬉しい事はないじゃないかぁ～～～！？』
「……駄目だこれは…完璧に自分を見失ってる…」

第11話―ビッグ・エスケープ―（その9）（後書き）

今回の作品限定で、バニングの設定を変更しました。
古代達の教官をしていたという設定は、いささか強引でしたがその点に関してはご容赦を…

また、キースの愛機をジム・キャノン＝から、最新作、「機動戦士ガンダムUC」に出て来るスターク・ジェガンに変更しました。
これも一応援護タイプと言う事なので、キースなら乗りこなせるはず…

次回、古代とユキが久々の再会……

第１１話―ビッグ・エスケープ―（その１０）

―同日　１３：４３　マクロスメインブリッジ―

古代帰還の通信が流れたメインブリッジでも、その場にいた一同は歓喜の渦に見舞われていた。中でもユキは、古代の声を聞いた時から嬉し涙に暮れていた。
そんな中、シャミーは泣きじゃくりながらユキに抱きついていた。

「ユキさぁん！本当に良かったですぅ～！」
「ちょっとシャミー！あんた何泣いてんのよ！」
「そうよ！一番泣きたいのはユキさんでしょうが！」

キムとヴァネッサの突っ込みにもかかわらず、シャミーはひたすら泣きじゃくっていた。

「みんなありがとう……私……こんな嬉しいことない……」

ユキが涙に暮れているとフォッカーから通信が入り、古代達の乗ったバトルポッドを確保したと報告が入った。

『これよりアームド０２に帰艦する……ユキ、指示頼むぞ…』

涙声になりつつあるフォッカーの様子をモニター越しに確認したクローディアは、すかさずフォッカーに突っ込みを入れていた。

「ちょっとロイ…あなた何泣いてんのよ…」
『クローディア…これが泣かずにいられるか…今夜は久々に上手い

酒が飲めるぞ……』

「全くロイったら……さあユキ、最後のひと仕事……お願いね……」

クローディアに促され、ユキは溢れる涙を拭い去り、管制指示を出していた。

「はい…こちらデルタ１……スカルリーダー及び捕獲したバトルポッドは……直ちにアームド０２に着艦して……下さい…」

管制指示を出した後、ユキはその場の一同に促され、アームド０２の格納庫へと走り出していた。

（古代君が…帰って来る……夢じゃないわよね…）

―同日　１３：５２　アームド０１格納庫―

古代達四人は、輝のバルキリーによってバトルポッドから降ろされると、そこには連絡を受けた藤堂長官とアルビオンから着いたばかりのニナとモーラが待ち受けていた。

「古代…無事だったか…」

「はい…ロンド・ベル司令並びに宇宙戦艦ヤマト艦長古代進以下四名、敵陣よりただ今帰還しました…」

「ご苦労だった…詳しい報告は後にして、まずはゆっくり休みたまえ…」

古代と藤堂が話している横ではコウとニナ、未沙、マックスと輝、柿崎がそれぞれお互いの再会を喜び合っていた。

そんな中、ブリッジからひた走ってきたユキが現れると、古代はすぐさまユキを見つけていた。

「ユキ……」

「古代君…会いたかった…」

ユキは古代の側に駆け寄り、彼に抱き着いて胸の中で泣きじゃくっていた。

周囲にいた者全ては、思わずもらい泣きをして二人の再会を祝していた。

そんな中、未沙だけは複雑な心境で古代とユキの姿を見つめていた。

ゼントラーディに捕らえられ、数日間――正確にはほぼ一ヶ月――行動を共にして、不本意ながらゼントラーディ人の前で古代とキスした事により、未沙の中では自分でも気付かないうちに古代に対するほのかな想いが芽生え初めていた。

（一体何かしら…古代さんに対するこの想いは…昔、ライバーに同じような想いをしたけど…）

第１１話―ビッグ・エスケープ―（その１０）（後書き）

未沙の古代に対する想いが芽生え初めました…
この先一体どうなる!?
未沙は自分の想いを古代に伝える事が出来るのか…?

それはまた後のお楽しみ…

第12話―ブラインド・ゲーム―（その1）

―A．D．２２０５　９．２５　２２：５６　ゲストルーム―

「全く…古代の奴は飲み過ぎだ…これじゃこの前の逆パターンだ…」
「仕方ないですよフォッカー少佐…古代さんは三人を守ろうとして立派に責任を果たしたんですから…」

文句を言うフォッカーに、アムロが答えていた。
二人は古代をソファに寝かせると、後ろから心配そうな表情のユキに話し掛けていた。

「とにかく良かったユキちゃん、今日から安心して眠れるな…」
「そうですよ森さん…とにかくひと安心して下さい…」
「フォッカーさんもアムロ君も本当にすいませんでした…モンシア中尉が散々飲ませるからこうなってしまって…」
「な～に、モンシアの奴には後できつくお灸を据えるさ！まあそのおかげで……」
「ちょっとフォッカーさん！その先は言っちゃダメ！んもぅ…相変わらずエッチなんだから～！？」

ユキの発言にフォッカーは思わず笑い出し、アムロはニュータイプの直感でその事に気付いて顔を赤くしていた。

「んじゃ、俺は帰るからよ！」
「僕もこれで失礼します…明日の朝古代さんによろしく伝えて下さい…」
「ええ…二人とも遅くまでごめんなさいね…」

二人を見送ったユキは部屋に戻り、ソファで相変わらず気持ちよさ気に寝息を立てている古代を見つめていた。

（はぁ…せっかく帰ってきてくれたのにこんなのじゃ…もういい！お風呂に入ってさっさと寝よう！）

早速ユキはバスルームに行き、シャワーを浴びてバスタブに浸かりながらこの一ヶ月の事を思い起こしていた。

輝とミンメイを連れ戻しに行った未沙がゼントラーディに襲われ、彼女達を救うべく出撃したまま行方不明になった古代の事を思い出さない日はなかった。

昼間は任務に明け暮れていたものの、夜眠る時に枕を涙で何度濡らした事か…

（それが今日、無事に帰還して二人で過ごせるかと思ったら……もう！古代君のバカ！）

あまり考えてものぼせるだけなので早々にバスタブから上がり、用意していたお気に入りのピンクのシースルーのネグリジェに着替えてバスルームのドアを開けた時、ソファで眠っているはずの古代が立っていた。

「ちょっと古代君…寝てたんじゃなかったの？」

「ああ…寝てたけどバスルームから水音がしたんで目が覚めて…一緒に入ろうとここまで来たら君が出て来たんで…」

古代はそう言うとユキを抱きしめ、耳元で囁いた。

「ユキ……君が欲しい…」
「……私も…古代君が…」

ユキが最後まで言おうとした時、古代はユキを抱き上げそのままベッドへと連れて行った……

―同日　２３：３１　ゲストルーム―

ひとしきり愛しあった後、ユキは古代の胸の中でまどろんでいた。

「私…ずっと寂しかった…あなたがこの一ヶ月いなかったおかげで…」
「敵に捕らえられている間、ずっと君の事を考えてた…それよりも少し痩せた？」
「大丈夫…いつも通りちゃんと食べてたし…それにブリッジのみんなも親切にしてくれて…」
「後でグローバル艦長にお礼言わなくちゃな…それよりもあれから一ヶ月たってたなんて……まるで浦島太郎になった気分だ…」

古代の発言にユキは思わず吹き出していた。

「やぁね古代君たら…もしかして一気に年取った気分？」
「おいおい…何て事言うんだユキは……」
「冗談よ…でも未沙達を守るの大変だったでしょ？」

“未沙”と言うユキの発言に、古代は思わずびくりとしていたが、あえてそんなそぶりは見せずにユキに切り返していた。

「いや……それより早瀬君と話して気付いたが…彼女は結構いい人だったよ…」

「前に言ったでしょ？未沙は普通の子だって…だからって未沙に浮気なんかしちゃだめよ…」

再び古代はびくりとしたものの、そんなそぶりも見せず今度は何も言わずにユキの唇にキスをしながら囁いた。

「大丈夫…僕が愛しているのは君だけさ…それよりもさユキ……」

「もう…古代君たら……」

第１２話―ブラインド・ゲーム―（その１）（後書き）

劇中、ユキの着ていたピンクのネグリジェ…
ヤマトパート１第１９話に出て来ましたが、これに関しては数多くの方が二次創作で取り上げていますが今回の作品でも取り上げました。

しかしユキってもしかして……出したがり？

森　ユキ
「いいじゃない！たまにはサービス、サービス！」

古代　進
「君は他のアニメキャラか！？」

第１２話―ブラインド・ゲーム―（その２）

―Ａ．Ｄ．２２０５　９．２６　１０：４１　マクロス艦内市街地カフェテリア―

翌朝、古代とユキは遅い朝食を取るために、いつものカフェテリアを訪れていた。
（実を言えば朝方まで愛しあったおかげで１０時過ぎまで寝ていたせいもあるが…）
カフェテリアのドアを開け、中に入ろうとした古代は思わず目を丸くしていた。
そこにはプルとシンタ、クムの三人が走り回り、その後をファが止めようと躍起になっていた。

「プルプルプルプル～～～～～！！！！！」
「いやっほ～～～～い！！！！！」
「アハハ～～～なんか面白～～～い！！！」
「こら～～っ！プルにシンタにクムっ！周りの迷惑考えなさ～～～い！」

この様子を見た古代は、そばにいたユキに思わず問い掛けた。

「……ここっていつから小学校になった……？それに奥のテーブル席に学生らしい集団がいるんだが……」

絶句している古代を見て、ユキは改めて事情を説明していた。

「そういえば古代君は知らなかったのよね…あの子達もロンド・ベルの一員なのよ…古代君達が帰ってくる五日前に合流した、ネェル・アーガマ艦隊に乗り込んでいる子達なのよ…それも戦いで親兄弟を亡くした子達がほとんどで、平均年齢が１５歳前後と言う話よ…」

ユキが説明していると、二人の姿を見たプルが近付き声をかけてきた。

「お姉さん、隣にいるおじさんって誰なの？」

「お…おじさん！？」

プルのとんでもない発言に、古代は思わず絶句していた。

これまで“おじさん”と呼ばれたことはなく、（例外としては、三年前の暗黒星団帝国戦で散った姪のサーシャに“叔父様”と呼ばれた事はあるが…）

自分でもまだまだ若いと言う自負はあったが、さすがにプルの突拍子もない発言には白旗を上げるしかなかった。

そんな時一人の女性士官が近付き、プルをたしなめていた。

「プル、この人はおじさんじゃないのよ！ヤマトの古代艦長よ…」

「あの…あなたは？」

「申し遅れました…私はドック艦ラビアンローズ艦長を務めるエマリー・オンス大尉であります…あの……お会いしたかったです古代艦長！」

エマリーはそう言うと、いきなり古代の両手を取り、握り締めていた。

「な……なんですかエマリー大尉！？」

「私、歴戦の英雄である古代大佐にお会いしたかったんです！こうやってお会いできるなんて夢のようだわ！」

エマリーの発言に古代はうろたえ、横にいたユキは思わずムッとした表情浮かべていた。

（何よ古代君！美人に言い寄られてデレデレしちゃって！）

そんなユキの様子に気づいた古代は慌てふためいて、エマリーの手を離してユキの事を切り出そうとした時、当の彼女が先に切り出していた。

「大佐！私はこれからメインブリッジに行って、早瀬大尉との事務引き継ぎがありますのでこれで失礼しますっ！」

そう言うなりユキは早足でカフェテリアを出て行き、メインブリッジへと向かって行った。

その様子を見ていた古代は冷や汗をかきながら考えていた。

（……どうすりゃいいんだ…後で謝らないとこれからが大変だ…）

一方、テーブル席でこの様子を見ていたジュドー達は顔を付き合わせ、何事かを話していた。

「あれ見てどう思う？」

「何か…ブライトさんの時より凄い事になりそうだ…」

第12話―ブラインド・ゲーム―（その2）（後書き）

エマリーさん、ブライトに代わって古代に乗り換えました。
これから先、どのような展開になるかぜひお楽しみに！

第１２話―ブラインド・ゲーム―（その３）

―同日　１０：５２　マクロス艦内―

その頃、ロリー達スパイ三人はマクロス艦内を当てもなくさまよっていた。
前日、ミリアの駆るクァドラン・ローがカプセルをマクロス艦内に投げ入れたのはいいが、目標地点の市街地からかなり離れたエアロックだったため、この日はその場に留まり、一夜明けてから行動を開始していた。

「なぁ……どうでもいいがこの格好何とかならないのかよ…」

ワレラが情けない声でロリーに切り出していると、コンダも同調していた。

「ロリーの言う通り…いくらマイクローンに関する資料が足りないからって、こんな格好では落ち着けないよ…軍服が欲しい…」

この時、彼ら三人が着ていたのは黒い一枚の布であり、地球人から見れば怪しまれる事一目瞭然と言ういでたちであった。
そんな中、人が来る気配を感じた三人は物陰に隠れていた。
現れたのはこのマクロスに乗艦している男性士官であり、その男はある部屋…更衣室に入り、しばらくして私服に着替えた彼は携帯電話片手に何かを話しながらその場を去って行った。

「……おい…見たか？」
「ああ…あの男、さっきと違う軍服を着ていたぞ…」

「……って事は…あの部屋に軍服がある！」
「よ～し！早速あの部屋の中に入って軍服探そう！」
「「お～～っ！！」」

―同日　１１：０１　マクロスメインブリッジ―

（……ユキさん、ゆうべどんな顔して古代さんと……）

メインブリッジでユキとの事務引き継ぎの最中、未沙はそんな事を考えていた。

「……で、引き継ぎは以上です、早瀬大尉。大尉？聞いてるんですか？」

ユキの問い掛けに未沙はようやく我に返り、その様子を見ていたユキは未沙にそっと囁いていた。

「ちょっと未沙…疲れてるの？なんかさっきからぼんやりしてるようだけど大丈夫？」
「え…大丈夫ですよユキさん…」
「それならいいんだけど…でもあなた昇進して大尉になったんだから、しゃきっとしなきゃ！」
「了解です…でも不思議なんですけど、私と同時にウラキ少尉とマックス少尉が揃って中尉になったのに、どうして古代さんだけが昇進しないんでしょうね？」
「そうよねぇ…敵陣から無事帰還したんだから特別昇進の対象になってもいいはずなのに……それよりもみんな聞いてくれる！？ラビ

アンローズのエマリー艦長が古代君に言い寄るの！古代君たら満更でもない表情してたし、私もう腹立てちゃって！」

凄い剣幕でまくし立てるユキに、ヴァネッサが衝撃的な発言をしていた。

「あの…聞いた話しなんですが…エマリー艦長ってロンド・ベル副司令のブライト大佐と以前不倫関係にあったとか…」

その爆弾発言に一同はどん引きし、中でもユキは今にも泣き出しそうな表情で呟いた。

「古代君に限ってそんな事はさせないわ…あの女がそう言う事するなら私にだって考えがあるわ……」

そのユキの表情を見ていた未沙はひそかに思っていた。

（恋する女って…命懸けなのね…いずれ私もそうなるのかしら……）

第12話―ブラインド・ゲーム―（その3）（後書き）

ロリー達スパイ三人組がマクロス艦内に侵入して初めての仕事が服探し……
ＴＶ版では何故か女子更衣室に忍び込んだ揚げ句、ロリーがスカートを履いてしまい再び着替える始末……
今回は彼らのために、男子更衣室にしました。これで彼らもひと安心！

次回、揚羽会長が久々の登場！
古代に対して進退問題を突き付ける……
どうする古代！

第12話―ブラインド・ゲーム―（その4）

―同日　13：08　マクロス艦内大会議室―

この日の午後、ロンド・ベルの緊急ミーティングが開かれ、ゼントラーディに捕らえられた古代達四人による報告会が行われた。各艦の艦長並びに主なスタッフは、古代の報告にただ呆然とするしかなかった。

何しろ今まで接触して来た異星人とは異なり、文化を持たないただ戦うためだけの種族だけに、彼らの受けた衝撃は並々ならぬものがあった。

（ただし、古代と未沙がキスした件に関しては四人の暗黙の了解で伏せられていた……）

大会議室の中は重苦しい雰囲気に包まれていたが、話を黙って聞いていた藤堂が切り出していた。

「諸君！いたずらに不安な気持ちになっても仕方ない！ここはとにかく冷静になって考えてみようではないか？」

この藤堂の発言を受け、一同は彼の意見に賛同していた。
だが、この会議にオブザーバーで参加していた揚羽会長が挙手して発言を始めていた。

「一通り話を聞かせてもらったが、私からある提案を出そうと思う……特に古代艦長……あなたの責任問題についてだ……」

「責任問題…それはどう言う事ですか？」

古代がいぶかしげな表情で問い返すと、揚羽会長は不敵な笑みを浮かべていた。

「要するにだ…君はロンド・ベルの司令であるにも関わらず、この一ヶ月もの間ずっと不在だった…それもゼントラーディと言う異星人の捕虜と言う形でな…」

勿体振る揚羽会長に周囲は“またか”と呆れ始めていた。

シナプスはそんな一同の代表として揚羽会長に切り出していた。

「……それで会長、あなたは何が言いたいのですか？」

揚羽会長はシナプスをジロリと睨みながら爆弾発言をしていた。

「ここにいるロンド・ベル司令、並びに宇宙戦艦ヤマト艦長古代進の解任と地球連邦軍からの退役を要求する！」

大会議室内はこの発言に対する抗議で満ち溢れ、逆に揚羽コンツェルンに対する非難までが続出する始末であった。

そんな中、揚羽会長はその周囲の抗議を一喝していた。

「諸君、黙りたまえ！私は経営者であると同時に、連邦軍の最高顧問でもある！君達のような者をすぐにでもクビに出来るのだぞ！……とにかく、古代艦長は今回の件に関しては全責任を取らなければならんのだ！何しろ連邦軍が保有するバルキリーやガンダムといった特一級の兵器を敵に破壊されたのだからな！」

揚羽会長の発言を受け、コウと未沙が反論に転じていた。

「会長、それは違います！ガンダムフルバーニアンを破壊されたのは自分の腕が未熟だったからであります！責任は自分にあるのに、どうして古代大佐が責任を取らなければならないんですか！？」

「そうです！元はと言えば、ミンメイさんを連れて勝手に飛び出した一条中尉にも責任があるはずです！」

揚羽会長は二人の反論にも動じる事なく、さらに発言を続けていた。

「君達は黙りたまえ！とにかく全責任は古代大佐にあるのだ！この際だ…古代大佐、君の意見を聞こうではないか？」

今まで全員の意見を黙って聞いていた古代は、立ち上がって切り出していた。

「自分は辞めるつもりはありません！これまで通り、この艦隊の総数１０万人の人々を守らなければならないのです！それをあなたは途中で投げ出せと言うのですか！？　会長の意見はあまりにも横暴です！この要求の撤回を求めます！」

古代の力強い発言に、揚羽会長を除く一同から拍手喝采が浴びせられていた。

それでも揚羽会長は不敵な笑みを浮かべつつ、さらにある提案を切り出していた。

「あくまで解任要求を撤回しようと言うのか…ならば条件がある…今から８時間以内に、このロンド・ベル艦隊全将兵、並びにマクロスにいる民間人の総計１０万人全員の署名を集めれば解任要求を撤回してもいいのだがね……」

突然の揚羽会長の要求に、その場にいた一同は思わず絶句していた。
そんな雰囲気の中、揚羽会長は不敵な笑みを浮かべつつ呟いていた。

「何も全地球圏の総人口３０億人分とは言っておらん…さっきも言ったように１０万人分だけでいい……たやすいはずだ……」

第１２話―ブラインド・ゲーム―（その４）（後書き）

前回の後書きで“ロリーがスカート…”と書きましたが、正しくは“ワレラがスカート…”でした……

度々の誤字、深くお詫びします……

次回、署名運動に奔走するロンド・ベル一同の姿を描きます……

第１２話―ブラインド・ゲーム―（その５）

―同日　１３：５９　アームド０１格納庫―

「そんな…冗談じゃないですよ！本来なら僕が責任を取らなければならないのに、どうして古代先輩が…」

アームド０１の格納庫で輝が自機を整備中、フォッカーと柿崎から古代解任の件を聞かされ、唇を噛み締めつつ呟いていた。

「それで隊長は、当然古代大佐の解任に反対っすよね！？」

「当たり前じゃないか！今古代先輩を解任したらこれから先どうすりゃいいんだ！何なら今から揚羽会長に直談判しに行って来る！」

柿崎の問い掛けに輝が答えると、フォッカーが即座に切り返していた。

「まず無理だな…あの会長は事前にアポイントを取らないと会えそうもない…輝のようなペーペーから連邦政府のお偉方…揚げ句の果てには、自分の家族にまで事前のアポイントを強要しているらしい…」

フォッカーの発言に輝と柿崎が絶句していると、アームド０１にヤマトの連絡機が到着していた。

連絡機のゲートが開くと、中から坂巻、仁科、太助、土門、それに揚羽会長の息子である揚羽　武が下りて来た。

「何だ？ヤマトの若手連中勢揃いでどうした？」

フォッカーが不思議そうな表情で呟くと、一同を代表して坂巻が切り出していた。

「少佐！俺達五人が手分けして、ヤマトクルー６００人分全員の署名と血判状を集めて来ました！」

「血判状って……お前らそこまでして…」

坂巻の発言にフォッカーが絶句していると、揚羽が切り出していた。

「少佐…親父は昔からヤマトの活躍を疎ましく思っていたのはご存知ですよね……」

「ああ…本来ならＡＳＳ－１…今のマクロスの修復を揚羽コンツェルンが独占し、対ガミラス戦に投入するはずだったのが、作業が遅れたおかげで中断の憂き目にあってしまった…そのうちにイスカンダルからのメッセージが届いて、南部重工で建造していたヤマトが出発したのはみんな知っての通りだ…要するにお前の親父さんの頭は、ヤマトに対する嫉妬心で一杯なんだろう…」

「ええ…その事については親父に成り代わり謝罪します…」

揚羽が頭を下げようとすると坂巻が彼を一喝していた。

「おい揚羽！そんなに頭を下げるな！さっきも言ったろうが！お前はお前、親父は親父だってな……とにかくこの件に関しては気にするな！それよりも少佐、みんなで手分けすれば１０万人分なんてあっという間ですよ！早いとこやって古代艦長のクビを繋げないと！なぁみんな！」

坂巻の発言（と言うよりは演説…）を聞いた一同は頷き合うと、ア

ームド０１の格納庫を後にして市街地へと向かって行った。
この様子を見ていたフォッカーは目頭を熱くしながら呟いていた。

「さすがヤマトクルーだ…古代もいい部下を持ったな……輝、俺達も市街地に行くぞ！」
「了解です先輩！あ…その前にこの事をブリッジの早瀬大尉にも知らせて来ます！」
「ああ！人数は多い方がいい…頼むぞ！」

第１２話―ブラインド・ゲーム―（その６）

―同日　１４：０８　マクロスメインブリッジ―

「冗談じゃないわよ！こんな要求ってありなんですか！？」

「そうですよ！どうにかなりませんか艦長！？」

メインブリッジでキムとシャミーが揚羽会長の発言に憤り、グローバルに抗議していた。

「しかし…あと7時間以内に１０万人分の署名が集まるかどうか…」

グローバルが不安気に火のついていないパイプを握り締めながら呟いていると、未沙が固い決意をぶつけていた。

「艦長、私は可能だと思いますよ…ここで諦めている場合じゃないんです…私達がゼントラーディに捕らえられた時、古代大佐に“諦めるな…最後の最後まで信じていれば道は開かれる…”と励まされました…ですから私達も最後の瞬間まで諦めちゃいけないんです！」

未沙が涙混じりにグローバルを説得している所に、輝がブリッジに息せき切って入って来た。

「早瀬大尉！今ヤマトの坂巻大尉達がやって来てるんですが、ヤマトクルー全員の署名を五人で手分けして、たった３０分で集めたそうです！」

「一条君、それ本当なの！？」

「ええ！だからやってやれない事はないんです！あの会長の鼻を明かすには、みんなの力が必要なんです！」

輝の必死の説得に、ようやくグローバルも腹を決めていた。

「分かった！とにかく今からでもやってみよう！早瀬君、君はキム君とシャミー君と一緒に市街地で署名活動に行ってくれ！もう既に森君達もやっているはずだ…私もすぐに行く！それと万一の事を考えて、クローディア君とヴァネッサ君は残ってくれ…後を頼む！」

「了解！！」

―同日　１４：２１　マクロス艦内市街地―

輝、未沙、それにシャミーとキムの四人が市街地に着くと既にユキを始め、ユキの両親の浩二と晴美、ジュドー達シャングリラチルドレン……その他大勢のロンド・ベルメンバーが署名活動を行っていた。その中にはミンメイとカイフンもおり、特にミンメイはサングラスもかけず、私服のままでいるのに道行く人々に大声で叫んでいた。

「ロンド・ベル司令並びに宇宙戦艦ヤマト艦長古代進さんの解任に反対の方！こちらに名前を書いてくださ～～い！」

そのせいもあってか、署名運動をしているメンバーの前は大勢の市民でごった返していた。

輝と未沙は何とかミンメイの側に来ると、彼女に問い掛けていた。

「ミンメイ、どうして君が…」
「ホント……そんなに大声出したら歌えなくなるわよ…」

「輝…それに早瀬さん…今回の件は全て私のわがままから起きた事なの…あの分からず屋の会長をギャフンと言わせる事が出来るなら歌えなくなってもいい…そう思ったらいてもたってもいられなくて……」

「そうか…ありがとうミンメイ…よ～し！それじゃ俺も！宇宙戦艦ヤマト艦長古代進さんの……」

一方、ようやく市街地にたどり着いたロリー達スパイ三人は、ごった返す市民の姿を見て一様に驚きを隠せずにいた。

「な、何だこの混雑は…」
「分からん…何かの集会か？」
「前にも見たけど、大勢の男と女が混ざってる…」

三人が呆然と立ち尽くしていると、ユキの母である晴美が側にやって来た。

「すみません！私の義理の息子になる予定のヤマト艦長古代進さんの解任要求に反対する署名活動をしているの！お兄さん達、ここに名前を書いて下さいな！」

いつもの如くまくし立てる晴美に圧倒された三人は、仕方なく覚えたての地球文字でそれぞれの名前を書くと、晴美は一礼してその場を後にしていた。

三人はそんな晴美を見送ると、ある事に気付いていた。

「なあ…“コダイススム”って名前、聞いた事ないか…？」
「ああ…あの時の捕虜の名前だろ？それがどうかしたのか？」
「ああ…ちょっと気になって……っておい！もしかしてあそこにいる女…あの時の……」

コンダが指した方向に、署名活動に取り組んでいる未沙を見つけ、三人は呆然としていた。

「あいつらどうやって脱出したんだ……？」
「分からん……これも“プロトカルチャー”の力か……」

第１２話―ブラインド・ゲーム―（その６）（後書き）

前回、坂巻が“ヤマトクルー６００人分…”と言ってましたが、本当ならこれくらいの人数がベストかと…

ヤマト本編で設定されていた“１１４人”では少なすぎて、何かあった時に色々と大変じゃないかと思います。

（しかし当時のヤマトの制作者は何を考えてクルーの数を決めていたのか…）

次回、モンシアが署名活動に駄々をこねます…
その理由とは！？

第12話―ブラインド・ゲーム―（その7）

―同日　16：06　アルビオンMS格納庫―

「ふざけるな！何で俺が署名しなきゃならねぇんだ！あのミニスカねーちゃんの彼氏が辞めさせられようと、俺の知った事じゃねぇ！」

アルビオンのMS格納庫でモンシアが署名用紙を前にコウを相手に毒づいていた。

「モンシア中尉！この艦で署名していないのはあなただけなんです！とにかくお願いします！」

「モンシア！いい加減ダダこねるのはやめろ！今ここで古代大佐が辞めちまったら、誰がこの難局を切り抜けるんだ！？」

「そうですよ中尉！ここは素直にサインして下さい！」

ベイトとアデルがモンシアに抗議し、周囲ではアルビオンクルーが事の推移を見守っていたものの、それでもモンシアは断固拒否を続けていた。

「いいか、大体ウラキの奴がガンダムで出撃したのがいけねぇんだよ！揚げ句の果てにガンダムをゼントラーディとやらに破壊されちまってよ！本当ならお前も一緒にクビになるべきなんだよ！」

「しかし中尉！」

「しかしも糞もあるか！いい気味だ、これであのミニスカねーちゃんをギャフンと言わせられるぜ！」

モンシアの発言に、コウは思わず腹の中が煮え繰り返っていた。

（サインを拒否する理由が森大尉だなんて…こうなったらぶん殴ってでもサインを書いて貰おうか…それが元で退役するはめになったって構うもんか！）

コウはそう思い行動に移そうとした時、ニナがモンシアの前に立ちはだかり、いきなり彼の頬に平手打ちを食らわしていた。この様子を見ていたアルビオンクルーは呆然とし、殴られた当のモンシアは憧れのニナから受けた仕打ちに圧倒されていた。

「ニ…ニナさん…」

「モンシア中尉…あなたは森さんがどんな思いで古代大佐を待っていたか分かりますか……あの人は、何ヶ月でも何年でも待つつもりだったんですよ……それをあなたは……」

そう言うとニナはその場で泣き崩れていた。そこへ今まで一部始終を見ていたシナプスがモンシアの前に姿を見せた。

「モンシア中尉…ニナ君の気持ちも分かってやりたまえ…いくらこの前の件があるからとはいえ、森大尉の事を考えたらそのような事は言えないはずだ…」

「はあ…分かりました艦長…ニナさん…あんたにゃ負けたよ…」

モンシアはそう呟くと、コウの持っていた用紙にサインすると一同から拍手喝采が沸き上がっていた。シナプスはそんな一同に切り出していた。

「とにかく、非常要員以外は今からマクロスに行って署名活動をしたまえ…あの揚羽会長の鼻をへし折ってやらんとな……」

第12話―ブラインド・ゲーム―（その7）（後書き）

次回、いよいよ古代の運命が決まる…

果たしてどうなる！？

第１２話―ブラインド・ゲーム―（その８）

―同日　２１：１５　マクロス艦内大会議室―

広大な大会議室には、古代と揚羽会長の二人だけが相対していた。
古代は揚羽会長をじっと見据えながら考えていた。

（あと１５分か…果たして間に合うんだろうか…署名は集まるんだろうか…）

古代がそう思っていると、今まで黙想していた揚羽会長がおもむろに口を開いた。

「さて時間だ！古代艦長、君の処分は決まったな！」

「会長！時間はまだ１５分あります！何故待てないんですか！？」
「確かに時間はまだある…だが今だに誰も来ないではないか？署名が集まらないのでみんなとっくに諦めてしまったのだよ！」
「会長！自分はどんな状況にあろうと、諦めるつもりはありません！例え残り一分一秒だとしても！」

古代が力強く切り返していると、クワトロを始めとするロンド・ベルのメンバーが大会議室に入って来た。

「みんな…来てくれたのか！」
「済まない…集計に手間取ってな…それで遅くなった…」

古代の問い掛けにブライトが答え、アムロとヘンケン、それにフォ

ッカーが山ほどある集計用紙の束を揚羽会長の机上に載せていた。
それでもなお不敵な笑みを浮かべた揚羽会長は、ブライトに問い掛けていた。

「それで…結果は出たのかねブライト大佐…？」
「もちろん全員一致です…古代大佐解任要求に全員が“ノー”と言う回答がありました！」

ブライトの発言で、今の今まで余裕の表情を浮かべていた揚羽会長の顔がひきつり、慌てて机上の用紙をめくり始めてチェックを開始していたが、どれも古代を支持する旨ばかりが目立ち、中には揚羽会長個人に対する批判も書かれている始末であった。

「そ、そんなバカな事が…誰か一人でも賛成の人がいるはずなんだが…」

慌てふためいている揚羽会長の前に、その場にいた一同の中からモンシアが現れ、怒りをぶちまけていた。

「いるワケねーよバカ会長！大体な、どこの世界に歴戦の英雄をクビにしろって奴がいるんた！？　大佐はな、俺達ロンド・ベルの希望の星だ！」

モンシアの発言にロンド・ベル一同から拍手喝采が寄せられ、揚羽会長はますます頭に血が上っていた。

「ええい…貴様ら…全員この場でクビにしてやろうか……！？」

揚羽会長が怒りに身を任せていると、クワトロが静かに語り始めていた。

「会長…あなたのやり方は横暴過ぎる…これだけ多くの人々が古代大佐を支持しているのだから素直に認めて頂きたい…その中にはあなたの側近も含まれているんですがね……」

「な…何だと…」

揚羽会長が驚くと、側近の一人が前に出て辞表を突き出し、何も言わずにその場を立ち去って行った。

その様子を見たクワトロはさらに揚羽会長に切り出していた。

「もしこの結果にご不満があるのならこのマクロスを降りても構いませんよ…どうせあと二日でリンボスに到着するのですから…」

「言われなくともそうさせて貰う！貴様らの顔を見るつもりもない！」

そう言い放った揚羽会長は、大会議室を出て行く前にクワトロの耳元で呟いていた。

「私はお前の正体を知っているぞシャア・アズナブル…覚えてろよ…」

「知っておいででしたか会長…ロンド・ベルの人間はみんなとっくに私の正体を知ってますがね……」

クワトロの意外な反撃に何も言わず、揚羽会長はその場から退出して行った。

「ありがとうみんな…どうにかクビは繋がったようだな…」

古代はそう言うと、ブライトやクワトロ達と握手を交わし、ユキの側に来ると思わず彼女を抱きしめていた。ユキも涙を流しながら古代にそっと囁いていた。

「良かった…あなたが辞めさせられなくて…」
「ユキ…君にも迷惑かけてゴメン…」

今にもキスしそうな雰囲気の二人に、フォッカーが咳ばらいをしながら呟いていた。

「あ～……その……お前ら公衆の面前でラブシーンやるつもりか？ここにはジュドー達未成年もいるんだぞ……他でやれ！」

フォッカーのその一言で古代とユキは体を離し、思わず顔を赤らめると周囲はたちまち笑い声で溢れ返っていた。

第１２話―ブラインド・ゲーム―（その８）（後書き）

気が付けば今回で１００話目……
作者の下手くそな文章なから、ご愛読いただきありがとうございます。

これからもこの物語は続きますので、飽きずにお読み下さいませ…

次回、コウとケリィが久々の再会……

第12話―ブラインド・ゲーム―（その9）

―同日　21：46　マクロス艦内展望室―

コウとニナは、マクロス艦内の展望室で窓外に広がる星空を眺めつつ、先程までの出来事を話していた。

「とにかく良かったわね…古代大佐がクビにならなくて…」
「ああ…あの人をクビにするなんて、あの会長何考えてるんだか…」
「ホント…でもあの顔見た？“このままでは済まさんぞ”って…
…クワトロ大尉にまで凄んでたわよ…」
「ああ…でも大尉は軽く受け流してたけど？」
「さすが“赤い彗星”だけあるわね。」

ロンド・ベルのほとんどの者が、クワトロの正体がシャア・アズナブルである事を知っていた。ニナのような外部の人間でも彼の正体を知っているくらいであるため、それほど彼の知名度は高かったのである。

「でもさ…あの時まさかニナがモンシア中尉を殴るなんて、夢にも思わなかったよ…あれがなければ僕が中尉を殴ってたかも…」

コウの発言を受け、ニナはその時の事を思い出し、思わず顔が真っ赤になっていた。

「だって…あの状況じゃああするしかなかったのよ…私、人を殴るなんて初めてだったから…とにかく中尉はショックみたいだったけど…でも、私だったから良かったけどコウだったら上官侮辱罪で訴

えられるわよ！」
「……」

ニナの発言にコウは思わず押し黙っていた。モンシアを殴って退役しても構わないと思っていたのに、いざ他人からそんな罪名を言われるとは思ってもみなかった。
そんな中コウは後ろから肩を叩かれ、振り向くとケリィが立っていた。

「ようウラキ、久しぶりだな…」
「ケリィさん！お久しぶりです！……って言うよりどうしてここに…？」
「“奴ら”……じゃなかった…ゼントラーディとやらに捕まっていたそうだな…お前がいない間に、俺もロンド・ベルに参加するはめになってな…」
「あの…ラトーラさんはどうしたんですか？確かあの後結婚したって聞いたんですが…」

コウの問い掛けに、ケリィは一瞬躊躇したものの、静かに語り始めた。

「ラトーラは…シーマの手の者によって殺された……だから俺はシーマに復讐するために、ロンド・ベルに参加する事にしたんだ…」
「……そうだったんですか……あれ？ケリィさん…左腕が……ありますけど…？」

コウがよく見ると、以前出会った時に無かったはずの左腕がある事にようやく気付いていた。
ニナはクスクス笑うとコウにその理由を説明していた。

「実はね…ヤマトの真田副長がわざわざネェル・アーガマに来て、“右腕だけでは何かと不便だから義手を作ろう”なんて言って…たった一日で作ってくれたんですって…真田副長も幼い時に事故で両手両足を失って、それ以来義手義足だけどなんの問題も無いそうよ…」

「そうだったんですか…ケリィさん、使い勝手はどうですか？」

「ああ…悪くない…とにかく今まで何かと不便だったからな…その分これから先頑張るつもりだ…俺はシーマをこの手で討ち果たすまで生き延びて見せる……」

第12話―ブラインド・ゲーム―（その9）（後書き）

この話の後日談……

コウ・ウラキ
「真田さんの義手義足って爆弾なんだそうですが、ケリィさんの義手も、外すとライフルが現れたり、腕自体を飛ばせるとか武器になって……」

ケリィ・レズナー
「そんな事ある訳ない！」

……ベタな寸劇でした…

次回、シーマ様再び登場！

第１３話―暗礁空域にはご用心！？―（その１）

―Ａ．Ｄ．２２０５　９．２７　９：０１　暗礁空域“茨の園”―

暗礁空域――ここはかつての一年戦争…そして様々な戦いによって発生したコロニー及び艦船の残骸が自然に集まっている場所である。その中にある二年前の“星の屑作戦”の立役者だったネオ・ジオンのエギーユ・デラーズ中将が設置した基地“茨の園”では、シーマ率いる艦隊が次なる作戦に向けて鋭気を養っていた。

旗艦リリーマルレーンのブリッジでは、シーマが副官のコッセルから報告を受けていた。

「……で、それは本当なのかい…ロンド・ベルの連中がこの空域に近付きつつあるってのは？」

「はい…連中は本拠地であるロンデニオンに向かうには、この空域を通るのが一番の近道と言う事だそうです……」

コッセルの報告を聞いたシーマは持っていた扇子を口元に近づけ、しばらく思案すると不敵な笑みを浮かべながら切り出していた。

「フン…ここはとにかく小手調べと行くか……全艦に通達！直ちに出撃してロンド・ベルを牽制する！」

「了解しました！」

シーマの命令は直ちに通達され、準備が完了した艦は順次出撃していった。

―同日　同時刻　ヤマト第一艦橋―

その頃、古代とユキは一ヶ月ぶりにヤマトに帰艦していた。
格納庫から第一艦橋へと向かう道すがら、古代は多くのクルーから熱い歓迎を受け、思わず目頭が熱くなっていた。

そして第一艦橋に着くと、艦長席エレベーター脇に掲げられている初代艦長沖田十三のレリーフに向け敬礼していた。

（沖田さん…僕は敵陣から無事に帰って来ました…これもあなたのおかげです……）

そんな彼の元に第一艦橋メンバーが近付き、改めて帰還を喜んでいた。
中でも土門は涙を流しつつ古代の手を握り締めていた。

「艦長、よくご無事で…」
「土門…それにみんな…この一ヶ月間ヤマトを…ロンド・ベルを守ってくれてありがとう……」

返答する古代の目にも涙がうっすらと光り、それにつられてメンバーも目頭を熱くしていた。
そんな中、通信が入ったシグナルが点灯し、相原がそれを受けていた。

「艦長、アルビオンより入電！“これより先、暗礁空域につき、本艦とクラップ級巡洋艦五隻が先行する”との事です！」
「分かった！シナプス艦長によろしく伝えてくれ！土門！これより先、何があるか分からない…全艦隊に戦闘配備を命じてくれ！それから太田にユキ、この先ミノフスキー粒子が濃い場所を通るからレ

ーダーに気をつけてくれ！」

「了解！！！」

矢継ぎ早に出される古代の命令を聞いていた島は、操縦桿を握りながら思っていた。

（さすがロンド・ベル司令だけの事はある…一ヶ月いなかったブランクを全然感じさせない…それでこそいつもの古代だな…）

第１３話―暗礁空域にはご用心！？―（その２）

―同日　９：２５　アルビオンメインブリッジ―

ロンド・ベル本隊より先行していたアルビオン艦隊は、暗礁空域に差し掛かるやいなやネオ・ジオン艦隊らしき反応を捉えており、アルビオンのブリッジではモニターを監視していたレーダーオペレーターのシモンが報告を始めていた。

「艦長！前方３０宇宙キロにネオ・ジオン艦隊展開中！数およそ１０隻前後です！」

「やはりな…連中がこの辺りで待ち伏せしているだろうとは思っていたが案の定……しかし数は少ないな、本隊はどこかにいるに違いない……総員第一級戦闘配備！各ＭＳ隊は発進準備を急げ！それからモーリス、この事をヤマトに打電してくれ！」

「了解！」

シナプスは各部署に指示を出し、一息つくと思いを巡らせていた。

（……しかし、これまで異星人と戦って来た古代大佐はどう思っているのだろうか……同じ地球人同士が争うこの星系の現状を見て何を感じるのだろうか……）

だが、その思いはもう一人のレーダーオペレーターのスコットの報告によって掻き消されていた。

「敵、ザンジバル級巡洋艦が砲撃開始！当艦隊到達まであと３０秒

！」

「そんなものただの脅しに過ぎん！無視しろ！」

シナプスの叫び声と同時に、リリーマルレーンが放ったエネルギー弾は艦隊をかすめ、同行のクラップ級巡洋艦５隻のうちアルビオンの前方に展開していた２隻…ナッソ―とエムデンが独自の判断で砲撃を開始していた。

「モーリス！ナッソーとエムデンに打電しろ！こちらの位置が分かってしまう…直ちに止めさせろ！」

シナプスがモーリスに指示していると、スコットがさらに報告していた。

「砲撃第二弾、来ますっ！あと２０秒！」

「パサロフ！直ちに回避！左１５度転舵！」

「了解！左１５度転舵！」

シナプスの指示のもと、アルビオン艦隊は回避運動に入ったものの、回避が間に合わなかったエムデンはまともにリリーマルレーンからの砲撃を浴びて轟沈していた。

―同日　９：３１　リリーマルレーンメインブリッジ―

「敵巡洋艦一隻、撃沈を確認！」

リリーマルレーンのブリッジでは、観測員がシーマに報告を入れていた。

「フハハハハッ！見たかい？連中は大慌てじゃないか！前衛艦隊があの調子じゃロンド・ベル本隊も似たようなもんさね！ＭＳ隊の発進準備が出来次第、さっさと出撃してあいつらを蹴散らしてしまえ！」

シーマは指示を出すと、ソファでくつろぎながら思っていた。

（……どうやら今回は私の出番はなさそうだねぇ……）

第１３話―暗礁空域にはご用心！？―（その２）（後書き）

今回の話は“００８３”第５話を元にしております

これからも原作を彷彿とさせるシーンを描くと思うので、似たようなシーンが出て来たらぜひともその場面を想像して下さいませ…

ウケる事間違いなし……

第１３話―暗礁空域にはご用心！？―（その３）

―同日　９：３５　ヤマト第一艦橋―

ヤマトでもアルビオン艦隊とシーマ艦隊の交戦の様子が捉えられていた。

「艦長！アルビオンより入電、救援要請です！既にクラップ級巡洋艦一隻撃沈されたそうです！」

相原の報告に、古代は躊躇する事なく決断していた。ブライトとの部隊司令引き継ぎの際、“ネオ・ジオンと戦う事になっても迷ってはいけない…”と申し送りされていたのだった。

「全艦隊戦闘配備！直ちにアルビオン艦隊に救援を送る！土門、主砲発射準備！」

「了解…でも艦長、相手は同じ地球人ですよ…」

「土門…迷っている暇はない…何もしなければこちらがやられてしまう…分かるな……？」

「分かりました…主砲発射準備！」

迷いから解放された土門は、テキパキと各部署に指示を出していた。そんな中古代は、遥か後方に展開しているであろうゼントラーディ軍の動向が気になるのか、レーダー席のユキに問い掛けていた。

「ユキ、ゼントラーディ艦隊の様子はどうだ？」

「今の所艦隊後方２００宇宙キロ地点に展開中！速度変わりありません！」

ユキの報告に、古代は思いを巡らせていた。

（ゼントラーディの奴ら、俺達をプロトカルチャーだと思って手を出して来ないようだ……だが、いつまでこのままの状態が続くんだろうか…？）

―同日　９：３７　マクロスメインブリッジ―

「デルタ１より艦隊所属全機へ！直ちに出撃してアルビオン艦隊を援護して下さい！」

マクロスメインブリッジでは、いつもの未沙らしい的確な管制指示が響き渡り、それを見ていたクローディアは合間を見て彼女に話し掛けていた。

「いつもの調子に戻ったようね未沙？」

「そりゃそうよ。いつまでも休んでられないから…それに一ヶ月もユキさんに迷惑かけたから……」

未沙が恐縮していると、間もなく発進しようとしていたフォッカーより通信が入っていた。

『こちらスカルリーダー！これより発進する。指示頼んますよ、お・ば・あ・ち・ゃ・ん・！』

フォッカーのその発言に未沙は思わず絶句していた。“おばさん”ならともかく、年寄り扱いされるとは思っても見なかったからであった。

「ちょ…ちょうど少佐！どういう事ですかっ！？人を年寄り扱いしないで下さい！」

『ジョークだよ早瀬！なんせこの前の帰還パーティーの席でお前さん“浦島太郎の気分です”って言ったろうが！それに下ネタじゃ、お前さん嫌がるだろうしよ！』

「少佐聞きましたよ！私がいない間、ユキさんを下ネタで困らせてたそうですね！？　この事を古代大佐には後で報告しますので！」

『いいじゃね～か！これもユキに対する俺流の愛情表現だ！あいつも分かってくれるって！んじゃ行きまっせ！』

そう言うが早いが、フォッカーはさっさと自機を発進させて行った。

第１３話―暗礁空域にはご用心！？―（その４）

―同日　９：４６　暗礁空域モンシアのジェガンコクピット―

「あ～ったく！敵の数が多過ぎだ！何とかなんねぇのか！？」

モンシアは自機のコクピットで叫んでいた。先に撃沈されたエムデン以外にクラップ級巡洋艦のうち残っているのは二隻のみで、その艦も中破状態でまともに無事なのは旗艦のアルビオンのみと言う有様であった。

『ぶつくさ言うなモンシア！そのうちロンド・ベル本隊から援護が来る！それまでもたせるんだ！』

バニングの激励に、モンシアは溜め息をつきつつ切り返していた。

「……そりゃそうですがねぇ少佐…それよりウラキの奴はコアファイターで出撃したのはいいが、どこにいるんですか！？」

『心配するな…ウラキは今ある所で索敵中だ…それともまた逃げちまったと思ってたとか！？』

「……当たりです少佐……！！敵ＭＳ第二弾接近中ですぜ！」

モンシアが指した方向には、ネオ・ジオンのギラ・ドーガが大挙に来襲しつつあった。

しかしその時、攻撃を加えようとしたギラ・ドーガ部隊が突然爆発を起こし、それを見ていたモンシアは思わず呆然としていた。

「……何だぁ～！？奴らいきなり爆発しちまったぞ…一体何が…？」

『ヤッホー！どうにか間に合ったみたい！ヒゲのおじさん達大丈夫！？』

「やいプル！ヒゲだけは余計だっつーの！」

相変わらず天真爛漫なプルに、モンシアが噛み付いていた。先程の攻撃は、プルとプルツーが駆る二機のキュベレイから放たれたファンネルによるオールレンジ攻撃であった。

モンシアとプルの掛け合いに、プルツーまでが加わっていた。

『まあここはうちらに任せときなヒゲ親父殿！』

「おいプルツー！俺はどこぞのアニメキャラか！？」

『いや…どちらかと言えば某ゲームに出てきそうなキャラだな…』

二人の会話に、ようやく追い付いた百式を駆るクワトロまでもが加わると、それを聞いていたバニングが機内で頭を抱えていた。

（……こいつら何考えてるんだ……戦闘の最中だってのに、よくそんな事が言えるもんだ…しかもあの“赤い彗星”まで……）

第１３話―暗礁空域にはご用心！？―（その４）（後書き）

劇中、クワトロが言っていた某ゲームのキャラとは、言わずと知れたあのロールプレイングゲームのヒゲ男です……

モンシアに赤い帽子をかぶせたら何となくあの男に似ていると思ったのは自分だけ…？

第１３話―暗礁空域にはご用心！？―（その５）

―同日　９：４９　暗礁空域コアファイターコクピット―

その頃コウはコアファイターを駆り、シーマ艦隊の正確な位置を探るべく暗礁空域を飛行していた。
高度をとりつつも残骸に紛れて目立たないようにしていたおかげで、敵からの攻撃にも逢う事もなかった。

（ネオ・ジオンの奴ら、暗礁空域のおかげで目立たなさ過ぎだ…とにかく正確な位置を早いとこ掴んでヤマトに打電しなければ…でも仮に連絡出来たとしても攻撃出来るのか……ここからどう見ても本隊までは１００宇宙キロ以上あるぞ…）

コウがコクピット内で周囲に目を配りながら思いを巡らせていると、眼下の暗礁空域の隙間にシーマ艦隊が待機しているのを発見していた。

（いた！敵はザンジバル級巡洋艦を中心としておよそ１０隻前後…ロンド・ベル本隊からの位置、１０４宇宙キロ…１０時方向か…奴らに気付かれないように暗号電で報告だ……）

―同日　９：５１　ヤマト第一艦橋―

その頃、コウからの暗号電文をキャッチしたヤマトでは全主砲の発射準備が行われていた。

『一番主砲発射準備完了！』
『二番主砲発射準備完了！』
『三番主砲発射準備完了しました！』

全砲塔からの報告が第一艦橋になされ、艦長席の古代は土門に発射命令を下していた。

「土門、全主砲直ちに発射だ！」
「了解！全主砲目標地点、１０４宇宙キロ先のネオ・ジオン艦隊に向け発射！」

土門が発射ボタンを押すと、九門の主砲からエネルギー弾が発射され、遥か先のネオ・ジオン艦隊へと向かって行った。

―同日　９：５３　リリーマルレーンメインブリッジ―

一方、リリーマルレーンメインブリッジでは、なかなか進展のない戦況にシーマが次第に苛立ちを募らせていた。

「一体どうなってるんだい！？前衛艦隊を壊滅させられないなんて！」
「はあ……こんなはずではなかったんですが…」

コッセルが困惑の表情でシーマに言い訳をしていると、観測員から驚愕の報告がなされていた。

「シーマ様！高エネルギー弾反応多数、当艦隊に向かって来ます！」

「何バカな事言ってんだい！何かの間違いじゃ……」

シーマが言い終わらないうちに、遥か先から伸びて来たエネルギー弾がネオ・ジオン艦隊に突き刺さり、リリーマルレーン以外の艦全てが爆発四散していった。

「本艦以外の艦は全滅です！」

観測員の報告にシーマは言葉を失い、茫然自失となっていた。

（一体どこから…あんな遠距離から正確に撃ち抜く事が出来る艦と言えば……ヤマトか！？）

一瞬のうちに悟ったシーマは直ちに通達を開始していた。

「……一旦撤収だ……“茨の園”に進路を取れ…」

―同日　９：５５　ヤマト第一艦橋―

「ネオ・ジオンの残った艦が戦闘空域から離脱の模様です！」

第一艦橋でユキが報告すると、その場にいた一同は安堵の表情を浮かべていた。

「戦闘配備を解除する……しかし、こう何度もネオ・ジオンを相手にするのはどうかと思うがな…」

艦長席から古代が下りて来て、島と真田に切り出していた。

「俺もそう思った…同じ地球人同士が争うのはそろそろ止めないとな古代……」

「島の言う通りだ…今の我々にとって重要なのは、全地球圏が一致団結してゼントラーディに備えなければならないんだ…」

「ええいずれ何とかしなければならないのは確かです真田さん……とにかく今から善後策を考えますので艦長室で打ち合わせしましょう……島、後を頼む…」

「了解！」

古代と真田が第一艦橋から出て行くと、島が一言呟いた。

「……しかし古代も大変だな…あまり根を詰め過ぎて倒れなければいいが……」

第１３話―暗礁空域にはご用心！？―（その５）（後書き）

この話、ヤマト完結編をベースにしました…

完結編よりは距離は短いものの、遥か先から正確に敵艦を撃ち抜くヤマトの強さにはシーマ様も驚いた事でしょう……

次回以降、アルビオンに配属される予定の新型ガンダムを巡って、またもやモンシアがひと騒動！？

第１４話―新型ガンダムは誰の物？―（その１）

―Ａ．Ｄ．２２０５　９．２９　１２：３２　リンボス　ネオ・ダカール宇宙空港―

ネオ・ダカール……ここはリンボスの首都であり、南半球最大の街でもある。
ここにある宇宙空港は民間は元より、リンボス駐留の連邦軍艦隊の基地もあり、絶えず大勢の人々で賑わっていた。
そんな中、空港ロビー受付前では三人の男女が何やら揉め事を起こしていた。

「冗談じゃないわよ！何でこんな女と一緒に行かなきゃならないのよ！？」
「私だって嫌よ！こんな分からず屋の小娘と宇宙に行くくらいなら残ります！」
「じゃあそうしなよ！？」
「こらこら…二人ともよしなさい……」

リンボス自治政府代表のアデナウアー・パラヤは、二人の女……娘のクェスと愛人のキャシーとの間で右往左往していた。

彼は翌日に迫ったネオ・ジオンとの秘密会合に出席するためにこの宇宙空港を訪れ、ついでに二人にコロニー内を見せようと連れ出していたのだった。
だが、愛人の元に入り浸りでめったに家に帰って来ないアデナウアーに反発していたクェスにしてみればはた迷惑な話で、どうにかし

て邪魔なキャシーを追い出せるかを画策していたのであった。

「あっ…痛いっ！あなたぁ～クェスが私の足を踏んだのよ！」

「こらこらクェス、止めなさい……」

「アタシ踏んでなんかないしぃ～！」

クェスのとぼけた返事に、キャシーはついに堪忍袋が切れていた。

「もういい！私帰りますっ！」

キャシーはそのままスーツケースを転がしてロビーから外に出て行ってしまった。

その様子を見たアデナウアーは、深い溜め息をつきつつカウンターへと向かって行った。

そのカウンターでは、ブライトの妻であるミライ・ノアが係官を相手に押し問答をしていた。

「正式な航空券ですよ！それに連邦駐留軍の紹介状だってあるんですよ！？」「しかしですねぇ…今度の便は一般客は乗せられなくなったと…」

係官が汗を拭きつつミライに説明していると、アデナウアーが横から割り込んで来た。

「君、悪いが一人分キャンセルだ……ところで、あのご婦人の言っていた紹介状とは誰からのなんだ？」

「はい…連邦駐留軍司令のジョン・コーウェン中将からのだそうで…あの三人様はロンド・ベルのブライト・ノア大佐の御家族だそうです…」

その係官の言葉を聞いたアデナウアーはしばらく考えた後、おもむろに切り出していた。

「仕方ない…コーウェンには借りがあるしな…それにロンド・ベル関係者ならなおさらだ…君、あの三人を乗せてあげなさい…それと一般客もだ……」

アデナウアーの発言にその係官は心の中でひそかに困惑していた。

（……全く…これだから政治家ってのは気まぐれなんだから……）

第１４話―新型ガンダムは誰の物？―（その１）（後書き）

“逆襲のシャア”宇宙空港のシーンの再現でした。

ただし原作と違い、ミライ達親子三人をシャトルに乗せる事にしました。

それにしてもアデナウアーって女性に頭が上がらず、愛人を引き止める事すら出来ない……

普通なら首に縄つけてでも引き止めるはずです。

次回、モンシアの暴走が止まらない……

第１４話―新型ガンダムは誰の物？―（その２）

―同日　１３：０６　アルビオンＭＳ格納庫―

「ニナ、本当なのか？新しいガンダムが配備されるって！？」

ＭＳ格納庫で定例会議のためにマクロスに向かうシナプスを護衛するため、コアファイターの発進準備をしていたコウが、ニナからの情報を聞き思わず興奮気味に問い返していた。

「ええ、明日ロンデニオンコロニーに着いてからの話なんだけど。今さっきラビアンローズのエマリー艦長から連絡が入ったの。」

「エマリー艦長ねぇ……」

ニナからエマリーの名前を聞いたコウは、首を傾げて何かを考えるようなそぶりを見せていた。

「どうしたのコウ？」

「いや……聞いた話によると、エマリー艦長は古代大佐の事をえらく気にしてるって聞いたから…」

「大丈夫でしょ、古代大佐は森さん一筋だから……それよりもそろそろ行くんでしょ？艦長の護衛でマクロスに…」

ニナがコウに聞いたそばからモンシアが横から現れ、彼女の目の前に顔を近付けて切り出していた。

「ニナさ～ん！俺も行って来るぜぇ～！それより新型ガンダムのパイロットはと～ぜんこの俺様だよなニナさん？」

「あの中尉…その事に関しては…」
「おっと、その先は言わなくても分かっておりますぜ！んじゃ俺は先に行きますぜ！」

モンシアはそう言うと、そそくさとジェガンに乗り込み、一足先に出発して行った。その様子をそれとなく見ていたモーラは溜め息をつきつつ思っていた。

（あのスケベ親父、何か企んでそうね…）

―同日　１３：３６　マクロス艦内市街地カフェテリア―

「なあ聞いたか？新型ガンダムがアルビオンに配備が決まったって……」
「おう、俺も聞いたぜ！一体どんなヤツなんだろうな？俺も乗りて～よな～！」

いつものカフェテリアでは、ビーチャとモンドが新型ガンダムに関する話題で盛り上がり、エルまでがうらやましそうな表情で会話に加わっていた。

「そうよね～！今回私達はほとんどメカニック担当だし、出撃するのはＺＺに乗るジュドーやＭｋ－Ⅱに乗るルーばっかだもんねぇ～！」

（現在の時点で、本来の搭乗者だったエマは副長に昇格してネェル・アーガマブリッジ勤務になり、ガンダムＭｋ－Ⅱはルーが搭乗していた…）

「仕方ないわよ…メカニックの数が足りないんだから…ジャンク屋経験者のあなた達に頑張ってもらわないと…ね、バーニィ？」

クリスが会話に加わりバーニィに話を振ると、当の本人は椅子にもたれ掛かって居眠りをしていた。それを見たクリスが呆れ果てている所に、モンシアが一同の側にやって来てその新型ガンダムの件を切り出していた。

「何だ、お前さん達も新型ガンダムの話をしてたのか？ちょうどいい！これから新型ガンダムのパイロットをこの中から決める！」
「えっ…決めるって…新型ガンダムのパイロットは必然的に僕じゃないんですか中尉！？」
「バカ野郎！振り出しに戻ったんだよ！テメェがフルバーニアンをぶっ壊したからな！一からやり直しだ！」

コウの抗議にモンシアが言い放つと、その場にいた一同からもブーイングが浴びせられていた。

「何でモンシア中尉が決めるんだよ！」
「そうよ！決着は二年前についたはずよ！」

そんな一同の抗議を受け流し、モンシアはさらに切り出していた。

「とにかくだ！今からこの場にいる全員が参加だ……っておいバーニィ！起きろ！お前さんの探してる赤ザクがあるぞ！」

モンシアはバーニィに耳元で怒鳴ると、彼は見事に“赤ザク”と言う言葉に反応して目を覚ましていた。

「えっ……どこですかっ……って中尉～いい加減にして下さいよ～！」

「やっと目が覚めたか！おいバーニィ、お前さんも新型ガンダムに興味あるだろ？ザクばっかり追いかけないで、後学のために新型ガンダムに乗ってみたいだろうが？」

モンシアに言い寄られたバーニィはしばらく考えていたが、やがて結論が出たようであった。

「そうですねぇー……たまにはそう言うのもいいかもしれませんねぇ…」

「ようし決まりだ！そうと決まれば……ついでにあいつらも誘うか……」

ちょうどそこに、偵察任務から帰って来た輝達バーミリオン隊が店内にやって来たのを見たモンシアが早速声をかけると、マックスと柿崎は快諾したものの輝だけが拒んでいた。

「い・ち・じ・ょ・う～～～！部下がやる気になってるのに、隊長のお前が参加しないとは何事かぁ～～～！？」

「は…はい…じゃあ自分も…」

結局、輝も参加するはめになり、モンシアは一同を引き連れてカフェテリアを後にしたが、“既にガンダムパイロットだから”という理由で外されたクリスだけが一人ぽつんと残されていた。

（全くもう…みんな何考えてるのかしら……ってそんな場合じゃない！とにかくこの事を早瀬大尉に連絡しないと…）

第１４話―新型ガンダムは誰の物？―（その３）

―同日　１３：４３　マクロスメインブリッジ―

「はい、こちらメインブリッジです！」

メインブリッジでは、非番の未沙に代わりシャミーが管制業務についていた。未沙のいなかった一ヶ月間、ユキが付きっきりで管制業務を教えたおかげで何とか業務をこなせるようになっていた。（ただし、多少の混乱はあるが……）

『こちらアルビオン所属のモンシアだ……ってなんだ…この前の泣き虫娘かよ……』

モニターに写し出されたモンシアの姿を見たシャミーは、思わず顔をひきつらせていた。

（何しろ彼から受けた仕打ちがトラウマになり、少々男性恐怖症になりかけていた…）

「あ…あのぅ…何でしょうか……」

『これから俺以下６名で哨戒任務に出る！バルキリー６機をちょっくら借りて行くぜ！それから、バーミリオン隊も連れて行くからよろしくな！』

「そ、そんなモンシア中尉～～～っ！勝手にバルキリーを持ち出さないで下さ～～い！」

シャミーは半分涙目になりつつモンシアに抗議したものの、逆に彼から物凄い形相で反撃されていた。

『おいコラ！これは上官からの命令だ！それとも何か！？またこの俺様に泣かされてぇのか！？』
「わ…分かりましたぁ…ご自由にどうぞ…」

シャミーは半泣きになりながら承諾すると、満足気な表情をしたモンシアの姿がモニターから消え、アームド０１から計９機のバルキリーが発進して行った。
それと入れ違いにブリッジに未沙とクローディアが慌ただしく入って来て、シャミーを問い詰めていた。

「ちょっとシャミー！何でモンシア中尉達を発進させちゃったの！？」
「だってぇ…あの飲ん兵衛中尉の顔が怖かったんですものぉ～……ふえ～～～ん！！！」

未沙の叱責にシャミーはとうとう泣き出していた。
未沙は呆れ果てながらも、何とかモンシアに連絡をとろうとしていたが相手側が通信機を切っているらしく、全然連絡の付けようがなかった。

「ダメね、通信機を切られてる…全くモンシア中尉ったら何考えてるのかしら…新型ガンダムのパイロットを決めるのにバルキリーを持ち出すのかしら？」
「そんな事よりもどうにかして彼らを止めないと…私はロイに連絡するから、あなたは大会議室にいる古代司令に連絡して！」
「分かったわ、頼むわね！」

未沙は大会議室にいるはずの古代に連絡をとろうと、端末を操作しながら思いを巡らせていた。

（どうして次から次へと問題が出て来るのかしら？これじゃ古代さんも大変ね……）

第１４話―新型ガンダムは誰の物？―（その３）（後書き）

前回、モンシアが口にしていた“赤ザク”とは、１ｓｔガンダムに出て来たシャア専用ザクの事です。

バーニィがザクに憧れる理由の一つにこのシャア専用ザクの存在があり、その行方を探している訳ですが、実は物語中盤に意外な形で出て来るので是非お楽しみに……

次回、モンシア達のガンダム争奪戦が開始されますが、事態は思わぬ方向に……

第１４話―新型ガンダムは誰の物？―（その４）

―同日　１４：０２　ロンデニオンコロニー近辺―

ロンデニオンコロニーに程近い小規模な暗礁空域で、モンシア達による新型ガンダム争奪戦……正確には模擬戦が行われていた。
条件は、二年前にトリントン基地近辺で繰り広げられたコウのＧＰ―０１（フルバーニアン換装前）と、モンシアのジム・カスタムとの間で行われた模擬戦と同じで、相手にペイント弾を先に付けた方が勝ち……と言う方式で繰り広げられた。

今回は、開始からわずか三分でバーニィが脱落、続いてその二分後にはビーチャ、モンド、エルが脱落、開始から十分後には輝と柿崎が脱落していた。
結局残ったのは言い出しっぺのモンシア、前回辛くも勝ったコウ、それにたった十分で前述の六人にペイント弾を命中させたマックスであった。

モンシアは残骸にバルキリーの機体を潜めながらマックスの戦いぶりを見て舌を巻いていた。

「マックスの野郎！なかなかやるじゃねぇか！伊達にバルキリーのパイロットをやってる訳じゃねぇな…」

モンシアが一人呟いていると、機内のモニターに映し出されていたコウの乗るバルキリーの識別信号が消えたのを見て驚愕していた。

「あのヒヨッ子野郎までが…なんて奴だマックスの眼鏡野郎…あい

つは化け物か！？」

そんな事を呟いていると間近にマックス機の反応があり、慌てたモンシアは急いで自機を別の残骸に身を隠そうとした時、いきなり目前にマックス機が現れていた。

「わぁ～～～っ！んなバカなぁ～～～～っ！？」

『これでジ・エンドですよ、モンシア中尉！』

マックスがそう言ってペイント弾入りのガトリング砲をモンシア機に向けた時、その場にいた全員に通信が入っていた。

『よ～しそこまでだお前ら！お遊びはそこまでにしろ！』

の声と共に全機のモニターにフォッカーの姿が現れていた。

「ゲッ……フォッカー少佐……何でばれちまったんだ……」

モンシアが思わず呆然としていると、フォッカーから叱責が飛んでいた。

『お前達なあ！ガンダムのパイロットを決めるのに何でバルキリーを持ち出すんだ！とにかく今すぐマクロスに帰れ！古代の奴がカンカンになって怒ってるぞ！』

フォッカーの発言に、モンシアを除いた一同が思わず身震いしていた。

古代の裏の通り名である“鬼の古代　”と言うのを知っていたからであった。

そんな中、マクロスにいる未沙から緊急通信が出されていた。

『こちらデルタ1！リンボスの宇宙空港からロンデニオンコロニーに向かっている民間宇宙船が、ゼントラーディ軍に襲撃されているそうです！全機、直ちに救援に向かって下さい！』

『了解！スカルリーダーより各機へ！聞いての通りだ、これより民間宇宙船を救援に向かう！これより部隊を二つに分ける！輝！お前はビーチャ達を率いて民間宇宙船の護衛に当たれ！俺はモンシア、ウラキ、マックス、柿崎、バーニィを率いて敵の目を引き付ける！』

『了解！』

フォッカーの指示のもと、輝は直ちにビーチャ達に指示を出していた。

「バーミリオンリーダーよりビーチャ達へ！これより民間宇宙船の救援に向かう！急いでくれ！」

『そ…そんな事言ったって…』

『そうよ一条中尉！ペイント弾しか無いのにどうやって戦うのよ！』

ビーチャとエルの抗議に、思わず輝は叫んでいた。

「お前達、何のためにブースターパック付きのバルキリーに乗ってるんだ！？ガトリング砲が無くてもミサイルがあるだろうが！」

『あ、その手があった！』

「そう言う事だ！おそらく本隊からも増援があると思う！急ぐぞ！」

『了解！！！』

輝達の会話を聞いていたフォッカーは、自機のコクピット内て思っていた。

（輝の奴……一人前の指揮官らしくなって来たな…そのうち俺を追

い越すかもな……）

第１４話―新型ガンダムは誰の物？―（その４）（後書き）

結局この勝負、フォッカーの介入がなければ勝者はマックスでした。

マックスがガンダムに乗っても、彼の天才ぶりは変わらないはず……

第１４話―新型ガンダムは誰の物？―（その５）（前書き）

場面転換がせわしないですが、平にご容赦を……

第１４話―新型ガンダムは誰の物？―（その５）

―同日　１４：０９　ロンデニオンコロニー空域、カムジンのバトルスーツコクピット―

民間宇宙船“エウロパ”を襲っていたのは、カムジン率いるバトルスーツ隊であった。彼は偵察と称して自分の部隊を率い、たまたま出くわしたエウロパを格好の獲物としていたのであった。

「いいか野郎共！このマイクローンの宇宙船を煽るだけ煽れ！そのうちロンド・ベルの連中がやって来る……その時を狙って一網打尽にしてやる！」

『了解！！！！』

―同日　同時刻　エウロパ客室内―

そのエウロパの客室内では、乗客達が恐怖に見舞われていた。バトルスーツが近くをかすめる度に大きく振動し、シートベルトをしていない乗客は客室内を転げ回る状態であった。

「ちょっと船長！もう少し進路を右！そうすれば敵から逃げ切れる！」

クェスがその場にいないはずの船長に向かって叫んでいるのを見たブライトとミライの息子ハサウェイ・ノアは、ある思いが浮かんでいた。

（もしかしてこの子ニュータイプ？そうじゃなければ、こんな事は言わないはず……）

そう思っているうちにクェスが飛ばされそうになり、通路側にいたハサウェイが彼女を受け止めていた。

「君…大丈夫？」

「ええ…ありがとう…」

クェスはそう呟きながら父であるアデナウアーの方を見ると、彼は頭を抱えて恐怖のあまりに何事かを呟いているのを見て深い溜め息をついていた。

（……ったく……これでも自治政府の代表かしら……情けない…）

―同日　１４：１２　νガンダムコクピット―

一方、民間宇宙船エウロパを救うべくロンド・ベル本隊から、アムロの駆るνガンダムとプル＆プルツーの二機のキュベレイが先行していた。

アムロはコクピット内で状況を確認すると、プル＆プルツーに指示を出していた。

「プルにプルツー、準備はいいな！？」

『いつでもＯＫだよ、アムロのおじちゃん！』

『おいプル！おじちゃんじゃねぇ、少佐だろうが！？』

「……」

プル&プルツーのいつもの掛け合いにアムロが呆然としていると、ようやくファンネルの有効射程距離に近付くとプルがまず先手を取っていた。

『よ～し、行け～～っ！ファンネル達～～っ！』

『それじゃウチも……行って来い！ファンネル達！』

「それでは俺も…行けっ！フィン・ファンネル！」

二機のキュベレイがファンネルを放ったのを確認したアムロもやや遅れてフィン・ファンネルを放ち、ゼントラーディ部隊に対してオールレンジ攻撃を開始していた。

―同日　１４：１３　カムジン機コクピット内―

それは突然の事だった。カムジンが率いる部隊のいくつかの機が突然爆発を起こし、しかもどこから攻撃して来るのかエネルギー弾の束が降り注ぎ、部隊をパニックに陥らせていた。

「一体どこから攻撃して来るんだ！ひょっとしてロンド・ベルの奴ら“プロトカルチャーの力”とやらを使ってるのか！？」

オールレンジ攻撃を知らないカムジンは、見えない敵の恐怖を味わっていた。するとそこにラプラミズからの怒りの通信が入って来た。

『カムジン、なぜ勝手な行動を起こす！ボドルザー閣下はロンド・ベルへの攻撃は許可していない！直ちに帰還せよ！』

「……了解……」

ラプラミズからの通信が切れると、カムジンは部隊に撤退命令を出

すと思いを巡らせていた。

（……ったくラプラミズのババァ…いい所で出て来やがって……）

―同日　１４：１８　マクロスメインブリッジ―

カムジン達ゼントラーディ軍が撤退して行くのを、マクロスメインブリッジで見ていた古代は不思議な表情を浮かべていた。先程まで大会議室で今後の事について打ち合わせをしている最中にモンシア達の件を聞かされ、急いでグローバルと共にメインブリッジに移動していたのであった。

（その前に、シナプスとヘンケンからの平謝りはあったが……）

「……何でゼントラーディ軍は撤退して行くんでしょうか？戦況は圧倒的に彼らが有利だったはずなのに…」

「おそらく彼らにも何らかの事情があるのだろう…とにかくこちらも撤退命令を出そう…」

「そうですね…それと民間宇宙船をマクロスに誘導するようにと連絡してくれヴァネッサ君……それとモンシア中尉達にブリーフィングルームに出頭するようにと伝えてくれ……」

「了解！」

矢継ぎ早に指示を出す古代にグローバルは思わず頭を下げていた。

「いや済まんな古代君…本来なら私が指示しなきゃならんのに……そこまで頭が回らなかった……」

「いえ…こちらこそ出過ぎた事をしてしまって……とにかく自分は今から民間宇宙船受け入れのため、アームド０２に向かいますので

後の事よろしくお願いします。」

そう言うと古代はメインブリッジを後にして、アームド０２へと向かって行った。その様子を見ていた未沙はひそかに思いを巡らせていた。

（ロンド・ベル司令ってホントに大変なのね……古代さん大丈夫かしら？）

第１４話―新型ガンダムは誰の物？―（その６）

―同日　１４：３０　アームド０２格納庫―

民間宇宙船エウロパの乗客はアームド０２の格納庫に避難誘導されていた。ブリッジから下りて来た古代は、乗客の安否確認を行っていたブライトを見つけて問い掛けていた。

「乗客の様子はどうですか？」

「今の所、怪我をしたり具合が悪くなった人はいない様子だ。宇宙船の方も大した損傷も無いようだ。」

二人が話している所にミライ親子が近付き、それに気付いたブライトが声を掛けていた。

「ミライ…それにハサウェイにチェーミンまで…宇宙船に乗っていたのか？」

「ええ、あなたも元気そうね…」

「ああ、何とかな…そうだ紹介しよう。この度私に代わりロンド・ベル司令になった、宇宙戦艦ヤマト艦長の古代進大佐だ…」

ブライトから紹介を受けた古代は、ミライと握手をしながら自己紹介していた。

「初めまして、古代です…奥様の事はブライト大佐から聞いております。」

「ブライトの妻、ミライと申します…お話は主人から聞きましたが大変な思いをされましたね…」

そんな中、アデナウアーがやって来てブライトに問い掛けていた。

「ブライト司令、久しぶりだな…誠に申し訳ないのだがロンデニオンコロニーに進路を変えてもらえないかね？」

「これはどうもアデナウアー代表…どのみちロンド・ベルはロンデニオンに向かうつもりでしたから……それから代表、私は今は副司令です。新しい司令はこちらにいる宇宙戦艦ヤマト艦長の古代大佐です…」

ブライトから紹介を受けた古代はアデナウアーに敬礼したものの軽く会釈されて、思わず面食らっていた。そんな中、クェスは古代の姿を見るなり思わず一目惚れしていた。

（ふ～ん…あれが歴戦の英雄、古代進か……割とイケメンだしカッコイイじゃん！）

クェスが思っていると、その場にいた一同のもとにユキがやって来て古代に報告を入れていた。

「古代大佐、モンシア中尉達がブリーフィングルームに集合しました…すぐにお出で下さい。」

「分かった、すぐに行く…ではアデナウアー代表、私はこれで失礼します。」

古代はアデナウアーに敬礼すると、ユキを伴ってブリーフィングルームへと急ぎ足で向かって行った。

その様子を見てクェスは思いを巡らせていた。

（何なのよあの女…私より歳食ってるのにあんなミニスカート履い

て…いかにも色気で男を誘惑しそうじゃない……バカみたい！）

第１４話―新型ガンダムは誰の物？―（その６）（後書き）

クェスと古代＆ユキのファーストコンタクトでした。

実はこれ、“逆襲のシャア”におけるクェスとアムロ＆チェーンの立ち位置を変えただけのものでしたが、いかがだったでしょうか？

次話以降、面白い展開があるかも…？

次回、モンシア達に古代がある処罰を下しますが、果たしてその内容は！？

第１４話―新型ガンダムは誰の物？―（その７）

―同日　１４：４１　マクロス艦内ブリーフィングルーム―

ブリーフィングルームでは、モンシアを始めとするガンダム争奪戦に参加したメンバーが古代から叱責を受けていた。

「しかしお前達は何考えてるんだ！？特にモンシア中尉とウラキ中尉！二年前にも同じような事をしたと先程バニング少佐から聞いたが、何故ガンダムにこだわるんだ！？」

古代の発言にも関わらず、モンシアは臆する事もなく平然と切り返していた。

「戦艦乗りのアンタにゃ分からんのさ！ガンダムってのは俺達ＭＳ乗りの憧れなんだよ！こんなヒヨッ子が乗るより、俺みたいなベテランが乗った方がいいのさ！」

「モンシア、お前大佐に向かって何て事言うんだ！いくらお前より年下でも上官なんだぞ！？」

バニングが古代を気遣いモンシアに注意したが、当の古代はバニングを制していた。

「あの少佐、それはいいですから……とにかく新型ガンダムのパイロットの件に関しては、今まで通りウラキ中尉にやって貰う事にする……これはロンド・ベル司令としての俺の命令だ…いいなウラキ中尉？」

「分かりました…古代司令の命令なら喜んで引き受けさせて頂きま

す！」

コウが古代に敬礼するのを見たモンシアは怒りの思いを巡らせていた。

（フン…あの熱血野郎、勝手に決めるな！いくらミニスカねーちゃんの前だからってカッコ付けてんじゃねぇ！）

そんなモンシアの思いも露知らず、古代は改めて一同に切り出していた。

「それはともかく、今度の件に関して全員それなりの覚悟はあるんだろうな！？」

古代の発言を聞いたビーチャ達は顔を合わせ、ひそひそと話し始めていた。

「おい…まさか…」

「ひょっとして…」

「噂に聞いた…あれか？」

一同の顔を見渡した古代はひと呼吸置くと、ある処罰を口にしていた。

「お前達全員これよりノーマルスーツを着用の上、マクロス艦内一周だ！」

古代のその発言に一同は仰天し、早速ビーチャが異を唱えていた。

「あ…あのぅ古代さん？まさかヘルメットまで付けろってんじゃな

いですよね？」

「当たり前だ！……と言いたい所だが今回は勘弁してやる……それを付けて走ったんじゃ重いだろうし酸欠になりそうだからな……とにかくこれより３０分後に開始するからな、早いとこ準備するように！以上、解散する！」

第１４話―新型ガンダムは誰の物？―（その８）

―同日　１５：４５　マクロス艦内市街地―

モンシア達９人は、ノーマルスーツを着た状態でマクロス艦内を走り抜け市街地に差し掛かっていた。
市街地では噂を聞き付けた市民が野次馬と化しており、その中にはロリー達スパイ三人組も含まれていた。

「い…一体何だこの人混みは！？」
「分からん……また何かの集会か…？」
「いや違う……道路の真ん中を集団で走ってる奴らがいる…」

三人が目を向けると、ちょうどその前をモンシア達が走り抜けて行った。

「……しかし、あいつらなんで宇宙服着たまま走ってるんだ？」
「分からん…これもやはり“プロトカルチャーの力”なのか……」

一方モンシアはと言えば、ほとんど最後尾を走っており、ビーチャとモンドによって引っ張られている状態であった。

「……もうダメだぁ～～…疲れたぞぉ～～」
「モンシアさん大丈夫ですか？」
「そうそう…この９人の中じゃ最高齢なんだから…あまり無理しちゃダメですよ…」
「うるせぇ……これでも俺様は……２８歳だぞぉ…まだまだ…若い…」

今にも倒れそうなのに、相変わらず口が減らないモンシアであった。
そんな中、一同の目の前に飲料水を入れた箱を抱えたミンメイが現れていた。

「皆さんご苦労様！あと一息だから頑張って！これ飲んで水分補給して下さい！」

９人が各々好みの飲み物をミンメイから受け取ったものの、最後に受け取ったモンシアが彼女の手を握りつつ叫んでいた。

「ミンメイちゃ～～ん！アンタはいい子だぁ～～っ！今度俺とデートしようねぇ～～～！」

モンシアのこの発言を聞いたミンメイは困惑し、さらに一同は頭の中でモンシアにツッコミを入れていた。

（アンタがそんな事言っても、ミンメイさんがデートしてくれる訳ないでしょーが！！！！！！！）

―同日　同時刻　アームド０１格納庫―

「すごいなぁ～！バルキリーってこうなってるんだ！」

アームド０１の格納庫で、クェスが整備中のバルキリーを見て喜びにあふれていた。傍らではアデナウアーがハラハラしながら娘の様子を心配そうに見てぽつりと呟いた。

「しかし…あの子がこんな物に興味があるとは思わなかった…」

その発言を受け、案内役で付いていたフォッカーがアデナウアーに切り返していた。

「あなたの娘さんはパイロットのセンスがあるようです。さっきもコクピットに座っただけで動かし方が分かったくらいですから……」

「じゃあ次は、あそこにあるジェガンでも見て来る！」

「お～いクェス！あまり他の人に迷惑かけるなよ！？」

その場から走り出そうとするクェスにアデナウアーが声を掛けたが、当のクェスには届いてはいなかった。

（何さ……人がいるからっていい父親演じて…バッカみたい！）

そう思っているうちに、知らずに一般人立入禁止区域に入ってしまったらしく、クェスの背後から女性の声が聞こえていた。

「そこのあなた、これより先は立入禁止よ！」

「あ…すいません…」

クェスが振り返るとユキが立っており、ヤマトに帰艦するため既にタイトミニの制服からノーマルスーツに着替えていた。

そんなユキの姿を見たクェスは、ふと浮かんだ思いを彼女にぶつけていた。

「……それよりもちょっと聞きたいんだけど…あなた、あの古代進とはどういう関係なのよ？」

突然のクェスの質問に、ユキは困惑しつつも当たり障りのない答えを切り出していた。

「古代大佐は私の上官よ…」

「そう言う答えじゃなくて…さっき見たけど何であなたみたいな人が、あの人にべたついてるのよ……もしかしてイケナイ関係?」

「彼とは婚約者の間柄なの…別にやましい関係じゃありません……」

さすがのユキもこれ以上答えようがないと思っている所に、クェスを探しに来たフォッカーが声をかけて来た。

「お〜いユキちゃん、どうした?」

「あ…フォッカーさん!実は……」

ユキはフォッカーにクェスとの間に交わされた話をすると、彼は笑い出していた。

「ハハハハ!何だそんな事か?しかしユキちゃんもこんな小娘相手に大変なこった!」

その発言にクェスは不機嫌になり、その場を離れつつ思いを巡らせていた。

(何よあの男まで……これだから大人って……)

第１４話―新型ガンダムは誰の物？―（その８）（後書き）

ユキとクェスのシーン…「逆襲のシャア」におけるチェーンとクェスの立ち位置を変えてみました…

これがきっかけでロンド・ベルに対する不信感が芽生え始めるのは原作と同じですが、この先どうなる事やら……

次回、アナハイム本社でオサリバン常務と揚羽会長が出会いますが、何やら不穏な動きが……

第１５話―ターニング・ポイント―（その１）（前書き）

ティターンズのバスク・オムが初登場。オサリバン常務と揚羽会長と顔合わせしますが……

第15話―ターニング・ポイント―（その1）

―A．D．２２０５　９．３０　９：１５　アナハイム本社重役室―

「――しかし、こんな所であなたとお会いできるとは思いませんでしたな、揚羽会長……」

アナハイム本社の重役室で、オサリバン常務は揚羽会長と対面していた。

彼は古代の解任決議失敗の翌日、チャーターした機に一人乗り込みマクロスを離れ、グラナダの中心都市フォン・ブラウンに向かっていたのだった。

お互いライバル企業とはいえ、考え方が同じオサリバン常務とは何故か気が合っていた。

「私もですオサリバン常務……マクロスのフォールド失敗が無ければ、私はここにはいなかったのですからな……」

「話は聞きましたよ会長…あのヤマト艦長古代進の解任に失敗したと言う事を…」

いかにも興味津々のオサリバンに対し、その時の事を思い出していた揚羽会長は苦々しい面持ちで呟いた。

「全くロンド・ベルの連中は何を考えているやら…とにかく彼らを一泡吹かせてやろうと思ってな、あなたの元を訪ねた次第だ……」

「そう言う事ですか…実はあなたに引き合わせたい男がいましてな…ティターンズ所属のバスク・オム大佐だ…」

オサリバン常務は別室にいたバスクを呼び寄せ、揚羽会長と引き合わせていた。

「初めまして揚羽会長…私がティターンズのバスク・オムであります…あなたの噂はかねてから聞いておりますぞ……」

「ティターンズ…あのエリート部隊か……」

ティターンズ……元々は連邦軍の単なる治安維持部隊であったが、強硬派であるジャミトフ・ハイマンが代表になってから、“エリート”による地球圏支配”を掲げてリンボス自治政府の大半の政治家を買収、さらには連邦駐留軍の一部の部隊をも支配下に置いて着実に影響力を増大しつつあった。

（当然の事ながらこれに反発する者もおり、ヤマト、マクロス合流前のロンド・ベルもその一つだった……）

「私共の部隊ならば、ロンド・ベルを潰す事は造作ない……ジャミトフ閣下の命令があればいつでも動き出せますからな……ましてやあのヤマトには、私は二年前にひどい屈辱を受けましたからな…それはともかく、協力していただけますかな揚羽会長…？」

「もちろんだバスク大佐…資金面は私が引き受けよう…」

そう言うと揚羽会長はバスクと固い握手を交わしていると、部屋の入口からシーマが入って来ていた。

「ロンド・ベルを叩きのめす話…私も乗らせてもらおうかねぇ？」

「シーマ・ガラハウ…ここに何しに来た！？」

シーマの発言を受けてバスクが彼女に詰問していると、オサリバンが間に入って切り出していた。

「私が呼んだのだよバスク大佐……ここはとにかく、ティターンズとネオ・ジオンが手を携えて忌ま忌ましいロンド・ベルを叩いて頂きたい……」

オサリバン常務がそう発言した時、外から何か割れる音が聞こえバスクが外に出ると、そこにはコーヒーを入れたトレイを落としたアナハイム女子社員のポーラ・ギリッシュが立ち尽くしていた。

「貴様…今の話を立ち聞きしていたのか!?」

「い…いえ…私はただ…」

バスクに問い詰められたポーラは恐怖におののき、思わずその場にへたり込んでいた。

「フン…話を聞いてしまったようだな…お前などこの場で始末してくれる…」

バスクは不敵な笑みを浮かべ、自分の配下の者を呼び寄せてポーラを始末しようとした時、一人の男が現れてバスク配下の男達に殴り掛かり、彼らが怯んだ隙にポーラを連れ出して、その場を去って行った。

バスクはコスモガンを取り出して二人を追いかけようとした時、オサリバンに止められていた。

「お止め下さいバスク大佐……ここで騒ぎ立ててもまずいでしょう……」

「いや…しかし……」

「放っておきましょう…相手はたかが小娘だ……」

このオサリバンのいらぬ決断が、ティターンズの衰退に繋がる事に

なろうとはこの時点では誰も知る由もなかった。

―同日　９：３３　フォン・ブラウン宇宙港―

その頃、男の手によって救い出されたポーラはフォン・ブラウン宇宙港に到着していた。

「――ここまで来れば安心だ……俺はここから宇宙（そら）に出るが、あんたはどうする？」

「あの……それよりもあなたのお名前は……？」

「ああ、失礼……俺は元ロンド・ベル所属、強襲揚陸艦ホワイトベース元クルーのカイ・シデンだ…」

「ホワイトベースって、一年戦争で沈んだ艦…その元クルーですか…？」

ポーラの問い掛けにカイは微笑みながら切り返していた。

「ああ…もっとも今は退役してフリーのジャーナリストをしているがね。そう言うあんたの名前は？」

「アナハイム・エレクトロニクス、システムエンジニアのポーラ・ギリッシュです……それよりも私、オサリバン常務達の話を聞いてしまいました…このままここにいれば絶対殺されると思います…」

「じゃあ一緒に来るか？俺はこれからロンデニオンコロニーに向かうんだが…」

「ロンデニオンコロニーって確かロンド・ベルの本拠地ですよね…私も連れて行って下さい！ロンド・ベルには私の同僚が出向しているんです！」

「へぇ、その人の名前は？」
「ニナ・パープルトン…二年前からロンド・ベルに出向しているんです。」
「そうか、なら話は早い！それでは行きましょうかポーラさん…」
カイはそう言うとポーラを伴い、ロンデニオンコロニー行きの連絡機へと乗り込んでいった。」

第１５話―ターニング・ポイント―（その１）（後書き）

ストーリーに関係ありませんが、来年４月７日にヤマトパート１のリメイク版“宇宙戦艦ヤマト２１９９”が公開決定！

旧作が最新の技術で蘇るのはいいのですが、その前に“復活編の第２部はどうした！”と思ったヤマトファンは数多くいるはず……

（作者もその一人…）

第15話―ターニング・ポイント―（その2）

―同日　9：32　ロンデニオンコロニー内宇宙港―

「いやぁ～どうもありがとう！おかげで時間通り間に合ったよ！」

ロンデニオンコロニー内の宇宙港で、アデナウアーがブライト達ロンド・ベルスタッフに感謝の意を伝えていた。

「いえ…我々は当然の事をしたまでです…それよりも交渉の成功をお祈りしています…」

「交渉？一体何の事かね？」

ブライトの発言に対しアデナウアーがわざと答えをはぐらかすと、横にいたアムロが切り返していた。

「自治政府代表であるあなたが、わざわざこんなコロニーに来るにはそれなりの理由があるはずです。交渉の相手はネオ・ジオン関係者…ですよね？」

アムロの指摘にアデナウアーは思わず動揺しつつも、あえて平然とした表情で切り返していた。

「とにかく！公式発表があるまで、この事は内密にな！それとクェスは君達に預けるからよろしく頼む！」

「分かりました。ちょうど同じくらいの年齢の子供達と仲良くやっているようなのでご安心を。」

アデナウアーがその場から離れ、出迎えの車に乗って宇宙港から去って行くとブライトはアムロに問い掛けていた。

「なあアムロ…どうして相手がネオ・ジオン関係者と分かったんだ？」

「ただの勘さ艦長……それより先程から古代大佐の姿が見えないが？」

「ああ、彼は新型ガンダム受け取りのため、アルビオンに行ったんだが…そのおかげで森大尉はおかんむりさ……何でも昨夜このコロニーでデートしようと約束したのに今朝になってキャンセルされて、さっき俺の所に怒りのメールが届いた訳さ…」

その時の様子を思い出して苦笑するブライトを見ながら、アムロは思いを巡らせていた。

（……しかし古代さんも真面目過ぎるくらい仕事熱心だな……あまり熱心過ぎて森さんとの仲が悪くなるとロンド・ベルの士気に影響するぞ……）

アムロは古代とユキの仲については以前、島や真田から聞いているだけに、思わず要らぬ心配をしていた。

―同日　９：４０　アルビオンＭＳ格納庫―

「いやぁ凄いなぁ～今度の新型ガンダムは！」

アルビオンの格納庫で、搬入されたばかりの新型ガンダムを見たコウが思わず叫んでいた。

そのかたわらには、古代を始め、ニナとモーラ、それにニナの後輩エンジニアであるミリィ・チルダーが新型ガンダムを見上げていた。

「どうですかこの新型ガンダムは？」

「もちろん気に入りましたよ！それでこの新型ガンダムの名称は何ですかミリィさん？」

興奮覚めやらぬコウを尻目に、ミリィは落ち着き払った表情で説明を始めた。

「形式番号ＭＳＡ－００１１…Ｓ（スペリオール）ガンダムです…主要兵器として、一般パイロットでも扱える準サイコミュ兵器のインコムを2基装備しています…」

「はあ……アナハイムも凄いもん作ったもんだねぇ……」

ミリィの説明にモーラが溜め息をついていると、さらにミリィは説明を続けていた。

「実はこれだけではないんです…このＳガンダムはほんの一部なんです。今アナハイムの工場で、本体とも言える“アームドベース”を建造中なんです。大きさは全長２００メートル程近くになります…」

「その大きさって…下手すりゃ小型艦艇並だな…」

ミリィの説明に古代は思わず溜め息をついていた。

「でもこのＳガンダム単体でも凄いですよね……いいのかなぁ、自分がこんなのに乗っても…？」

コウが不安気に呟くと、古代はそんな彼を激励していた。

「大丈夫だウラキ！失ったＧＰ―０１だって上手く扱う事が出来たんだ、今度だって扱えるはずだ！」

「そうですね大佐！是非頑張らせていただきます！」

二人の会話を聞いていたモーラはニナにそっと囁いていた。

「ウラキ中尉もなかなかのもんじゃないニナ？」

「ええ…これでニンジンが食べられたらねぇ……あ、そうそう…古代大佐！いいんですか、森さんの事をほっといても？」

突然ニナにユキの事を振られた古代は思わずドキリとしていた。何しろデートをすっぽかして任務に没頭していたので驚くのは当然であった。

「あ、あのぅニナさん？ユキから何か言って来たんでしょうか？」

「さっき私の所にメールが来ましたよ…“任務が終わったら早く来てくれ”って…」

「そうか…君にまでメールしていたなんて…じゃあ後の事はよろしくお願いします…」

そう言うと古代は格納庫から一目散に走り去り、その様子を見ていたモーラは苦笑しながら呟いていた。

「ありゃ大変ね…森大尉に高い物ねだられそうだわ…」

第15話―ターニング・ポイント―（その2）（後書き）

劇中に登場したSガンダム（スペリオール）…

Zガンダム外伝ともいうべき作品（……と言っていいのか？）“ガンダム・センチネル”に出て来た物を登場させました。

このガンダム、ゲームの第4次スーパーロボット大戦に初登場した時に、コウを乗せてそこそこ活躍させていたので、今作品でも登場させました。

物語後半、Sガンダムをコアにしたアームドベースが登場しますので、ぜひご期待を……

次回、アデナウアー・パラヤとネオ・ジオンの総帥が話し合いのテーブルにつきますが、その人物に要注目！

第15話―ターニング・ポイント―（その3）

―同日　10：00　ロンデニオン市内高級ホテル会議室―

「これはアデナウアー閣下、よくおいで下さいました。」

ロンデニオン市街地にある高級ホテル“コンコード”にある大会議室で居並ぶネオ・ジオン関係者のうちの一人が、アデナウアー一行を丁重に出迎えていた。

「これはどうも、皆さんお揃いで…」

「はい…それと実は、私共の最高責任者である方も来ているのであります。」

「……と言うと、もしや…」

アデナウアーが問い掛けるとその高官は別室にいるその最高責任者を呼び寄せていた。

「初めましてアデナウアー閣下…私はネオ・ジオンの総帥、パプティマス・シロッコです…アデナウアー閣下、わざわざご足労頂きありがとうございます。」

「いやぁ～総帥自らおいでになるとは…これで交渉もスムーズに行くというものです……」

アデナウアーがシロッコを称賛して交渉を開始していたものの、当の彼はニュータイプの勘でアデナウアーの本心を見抜いていた。

（フン…バカな連中だ……我々が本気で和平交渉しに来たと思って

るらしいな…いずれそのツケが大きかった事を思い知らせてやる…
…）

そんなシロッコの想いも知らず、アデナウアーは話を続けていた。

「――停戦交渉に関する議決書類の交換並びに、小惑星アクシズ譲渡の代金を確かに受け取りました…代金の確認については、こちらにいる連邦会計監理局の監査官カムラン・ブルームが担当いたします。」

自治政府側から紹介を受けたカムランは、代金を確認しつつ思いを巡らせていた。

（……なぜネオ・ジオンの連中はこの時期にアクシズを手に入れようとするのだ…？）

―同日　１０：４２　高級ホテル“コンコード”スィートルーム―

リンボス自治政府側とネオ・ジオン関係者との秘密会談が終了し、シロッコはホテルのスィートルームで休息を取りながら想いを巡らせていた。

（バカな連中だ…あれで片が付いたとでも思っているのか…？アクシズさえ手に入ればこちらのものだ……）

そんな中、シロッコの元に作戦士官であるナナイ・ミゲルが部屋に入って来ていた。

「お呼びでしょうか総帥閣下？」
「ああナナイ大尉、私はこの後“連中”との交渉に出向く…またしばらくこの星系を離れるつもりだから後の事を頼む…」
「了解しました。後はお任せ下さい…」

返事はしたものの、ナナイはこのシロッコを余り快く思っていなかった。
前回までの戦いで、ジオンにゆかりのある人物…ハマーン・カーンやエギーユ・デラーズと言った者達が軒並み戦死し、ザビ家直系の娘であるミネバ・ラオ・ザビの行方に至っては今だ分からず仕舞いの現状において、部外者であるシロッコがネオ・ジオン総帥である事に大きな不満を抱いていた。
そして、一年戦争で活躍したシャアも名前を変えてロンド・ベルにいる事も彼女の不満に拍車を掛けていたのであった。

（この男ではいずれネオ・ジオンは終わってしまう…せめてシャア大佐がネオ・ジオンの総帥であったなら、何も“連中”に頼らなくても……）

第15話―ターニング・ポイント―（その3）（後書き）

ネオ・ジオンの総帥を、パプティマス・シロッコにしてみましたがいかがだったでしょうか？

Zガンダム本編ではジャミトフ暗殺後にティターンズの総帥になっていましたが、今作品限定でそういう設定にしました。

それよりも劇中に出て来た“連中”の正体……

どんな組織なのかはまだここでは明らかに出来ませんが、いずれ判明しますのでご期待下さいませ…

第15話―ターニング・ポイント―（その4）

―同日　11：05　ロンデニオンコロニー内草原地帯―

「うわぁ～！空気がおいしぃ～！」

クェスはミニバン型のエレカの窓から顔を出し、大地の息吹を感じ取っていた。ジュドー達シャングリラチルドレン、カミーユとファ、それにハサウェイがミニバン型エレカ2台に分乗して宇宙港から散策がてらここまで来ていたのだった。

「おいクェス！あまり窓から頭出すなよ！ケガするぞ！」
「ちょっとカミーユ！別に頭出したっていいじゃない！」

憮然とした表情でクェスに注意したカミーユに、助手席のファが彼をたしなめていた。
注意されたクェスの方も、憮然とした面持ちで座席に座り居眠りを始め、ハサウェイの方はカミーユにまた何か言われやしないかとハラハラしていた。
ファはその様子を見て、ハンドルを握っているカミーユにそっと囁いていた。

「カミーユ、さっきから機嫌悪そうだけどどうかしたの…？」
「……別に……何でもないよ…」

カミーユは無難にファの質問をかわしていたものの、先程からある想いが浮かびつつあった。

（何だこの感じは……もしかしてこのコロニーにあの男がいるのか……？）

カミーユがそう思っている所に車の前を二頭の馬が横切り、思わず急停車させたカミーユはその二頭の馬に乗っている二人の人物を見て呆然としていた。

「あれは…パプティマス・シロッコ…それにサラ……」

思わずカミーユはエレカから下りてシロッコを問い詰めていた。

「シロッコ！なぜお前がここにいる！？」

「久しぶりだなカミーユ・ビダン…どれくらい振りかね……」

「話をそらすなシロッコ！それよりもなぜ戦いを続ける！これ以上罪のない人々を苦しめるな！」

コスモガンを抜きつつカミーユはシロッコに問い掛けると、彼は馬上から不敵な笑みを浮かべつつ切り返していた。

「そんな事を言われても困るのだがね……我々人間は戦わなければならないのだよ……人間から戦う意欲を取り去れば、後はただの人形に過ぎん…だから私はあえて憎まれ役をかっているのだ…」

「だからって……これ以上愚かな争いを続けるつもりか！？」

二人の会話を聞いていたクェスは、次第にシロッコの独特の理論に納得しつつあった。

（確かに……シロッコって人の言う事は当たってる…そんじょそこらの大人より、この人は頼りがいがあるかも……）

そう思ったクェスは、カミーユがシロッコにコスモガンの銃口を向けるのを確認すると、彼に体当たりを食らわしてコスモガンを奪い、逆に銃口をカミーユに向けていた。

「カミーユ！あんたちょっとセコ過ぎるよ！」

クェスの突然の行動にカミーユはもちろんの事、その場にいた一同を呆然とさせていた。

「クェス、何やってるんだよ！？」

ハサウェイがクェスに近付こうとした時、物凄い轟音と突風が起こり、上空から一機のホビー・ザクが現れていた。
そのホビー・ザクは一同の間に着陸し、コクピットから一人のネオ・ジオン兵――ギュネイ・ガスが姿を見せ、シロッコに叫んでいた。

「総帥！ご無事ですか！？」

「済まんなギュネイ！……それよりもそこのお嬢さん…一緒に来るかね？」

シロッコに問い掛けられたクェスはしばらく考えた後、彼の話に乗る事にした。

「ええ、そうします！ロンド・ベルには嫌な奴がゴロゴロいるので！」

クェスはそう言うと、シロッコとサラと共にホビー・ザクの手に乗り込むと、ギュネイは直ちにホビー・ザクを動かして再び上空に向け飛び立って行った。

第15話―ターニング・ポイント―（その4）（後書き）

この話、“逆シャア”の草原地帯でのシーンを再現、アムロとシャアの立ち位置をカミーユとシロッコに置き換えました。

それにしても、劇中出て来たホビー・ザクはバーニィが見たらどう思うやら……

次回、ブライトとカムランが再会……ミライの現在の夫と元婚約者の対決が……

ブライト&カムラン
「「ある訳ないだろーが!!」」

第１５話―ターニング・ポイント―（その５）

―同日　１１：２８　ラー・カイラム士官食堂―

ラー・カイラムの士官食堂で、ブライトはカムランと１０数年振りに再会を果たしていた。
何しろ一年戦争時、当時の所属艦であった強襲揚陸艦ホワイトベースで操舵士を務めていた妻のミライの元婚約者と言う事で、多少の緊張感でカムランを迎えていたものの、当の彼が何事もなかったように振る舞っているのを見てホッとしていたのであった。

「……実はご相談がありまして…誰に話せばいいか迷っていたのですが、このロンデニオンコロニーにネオ・ジオン総帥のパプティマス・シロッコが来ているのです……」
「何だって……それは本当なんですか！？」

カムランが散々迷って相談しに来た話の内容に、ブライトは驚きの声をあげていた。
自分達の本拠地であるこのコロニーに敵の総大将が現れるとは夢にも思わなかったからであった。

「それでカムランさん、シロッコとアデナウアー代表達は何を話していたんですか？」
「和平に関する議決書類の交換と、かつてハマーン・カーンの本拠地であった小惑星アクシズのネオ・ジオンへの再譲渡です…自治政府側は完全に和平が成立したと思い込んでいるんです…」
「そんな……地球本星政府と協議せずに勝手に話を進めるなんてどういうつもり……」

ブライトが言いかけた時、ジュドーが慌てて士官食堂に駆け込んで来た。

「ブライトさん大変だぁ～～～！」

「ジュドー、来客がいるんだ！少しは静かにしろ！」

「す、すいません！それよりも大変なんだよ、クェスがシロッコに付いて行ったんだ！」

「何だと！？本当なのか？」

「ああ！カミーユさんとシロッコが揉めてる時にクェスが急にカミーユさんのコスモガンを奪ってシロッコと一緒に行ってしまったんだよ！“ロンド・ベルには嫌な奴ばっか”なんて言って……」

ジュドーの話にブライトは思わず頭を抱え、改めてカムランに問い掛けていた。

「カムランさん、アデナウアー代表の居場所は分かりますか？」

「代表なら先程コロニーを出て行きましたよ…停戦交渉の確認をするとかで…」

カムランが答えていると一人の士官が近付き、ブライトに切り出していた。

「艦長、面会の方が二人お見えなんですが…カイ・シデンという方と女性の方がお会いしたいと…」

「カイが……分かった、ブリーフィングルームに通してくれ……ああ、それとヤマトの古代艦長に連絡を取ってくれ…私の携帯端末を使ってくれて構わないから……それと、メインスタッフをブリーフィングルームに集合させてくれ…」

「了解！」

ブライトはこの時、何かが起こりそうな予感がしていた。それは長年の経験から来る不安感がそうさせたと言っても過言ではなかった。

（……何かが起こりそうだ…それもかなり大規模な何かが…）

―同日　１１：３３　ホテルロンデニオンカフェテリア―

その頃古代は、ホテルロンデニオンのカフェテリアのテーブル席で疲労困憊しつつ一息入れていた。

アルビオンを出てから、このホテルで待ちくたびれたユキに散々拗ねられた揚げ句、市街地のブティックやアクセサリーショップをはしごしてユキの買い物に付き合わされたのであった。

（はぁ……疲れた……こんな事になるんだったら初めからデートすればよかった…おかげでいくら金使ったやら…）

そんな事を思いつつ、テーブル上のレモンティーに口を付けると、席を外していたユキが戻って来ていた。

「お待たせ古代君。じゃあ行きましょうか？」

「へっ！？　行くってどこに……？まだ欲しい物でもあるのか？」

古代は慌ててレモンティーを飲み干すと、ユキに切り出していた。

「うん…実はね、ここのホテル空室確認したら空いてるって……もしよかったら……今から…ね？」

ユキの思いがけない発言に古代は思わず呆然と立ち尽くしていた。

（ひょっとしてユキが欲しいのって俺!?……いくらなんでも昼間から……でも下手に断ったらさっき以上に機嫌悪くなるし……）

そう思いを巡らせている所に、二人の携帯端末に緊急のメールが入って来ていた。

「ユキ、見たか?ブライトさんからの緊急連絡…」

「ええ、ロンド・ベルメインスタッフは緊急集合ですって……何かあったのかしら?」

「分からん……とにかくラー・カイラムに急ごう!」

「了解……」

ユキはそう答えたものの、何か物足りなさそうな表情で思いを巡らせていた。

（ま、いいか…この埋め合わせはこの次の休暇の時に……その時には古代君に今日の分も頑張ってもらおうっと……）

第15話―ターニング・ポイント―（その5）（後書き）

次回、ジョン・コーウェンとジャミトフ・ハイマンが登場……コーウェンの身に危険が迫る！

第１５話―ターニング・ポイント―（その６）

―同日　１１：４６　ネオ・ダカール連邦駐留軍司令部―

リンボスの首都ネオ・ダカール市内にある連邦駐留軍司令部の一室で、司令であるジョン・コーウェンがロンド・ベルから送られて来たゼントラーディ軍に関する報告書を見て、深い溜め息をついていた。

（――しかし、これだけの大艦隊に太刀打ちできる訳がない……ここは地球本星と協議したい所だが……）

コーウェンはそう思いつつも、地球の連邦軍総司令部との連絡手段が無い事を悔やんでいた。

実を言えば、この三ヶ月の間にネオ・ジオンとの交戦の激化のおかげで通信施設が破壊されたままで、修理のメドがつかないのであった。

おまけに太陽系とアルファ星系とを結ぶ航路も、ゼントラーディ軍の出現のおかげで閉鎖されたままであった。

（……とにかく、ここはロンド・ベルに頼らざるを得ない……あのヤマトと新造艦のマクロスもいるしな……）

コーウェンが思いを巡らせていると、秘書官が部屋の中にやって来ていた。

「司令、自治政府のドーリアン外務次官が応接室でお待ちです…」

「ああ、すぐに行く。先に行っててくれ……」

秘書官が先に部屋を出ると、コーウェンは机上の書類を整理して外に出ようとすると室外からおびただしい銃声が聞こえていた。
コーウェンが急いで室外に出ると、血だらけで倒れている秘書官の脇にライフルを手にした兵士達が立っていた。

「貴様ら何をやっている！」
「ジョン・コーウェン中将…あなたを国家反逆罪で身柄を拘束させて頂きます……」

コーウェンが兵士達に叫ぶと、その中の一人がライフルを身構えたままで彼に切り返していた。

「何を言うか！反逆しようとしているのはお前達の方だ！」

毅然とした態度でコーウェンが反論していると、ティターンズ代表のジャミトフ・ハイマンが現れていた。

「ジャミトフ…これは一体どういうつもりだ…？」
「コーウェン中将…この駐留軍司令部は我々ティターンズが管理する事になった……従ってあなたは本日付けで駐留軍司令を解任し、身柄を一週間拘束させて貰う……愚かな真似をしなければ身の安全は保障する……」
「分かった…それよりもドーリアン外務次官だけは見逃してもらえないか……？」
「悪いがそういう訳にはいかん…彼女はカリスマ的存在だ…下手に見逃す訳にはいかないのでな、同じく身柄を拘束した……」

コーウェンはジャミトフの発言に怒りを表す訳にいかず、あくまでも平静を保ちながら切り出していた。

「分かった…ここはおとなしく従わせて貰う…ただし、１０分ほど時間をくれ……」
「いいだろう……」

部屋からジャミトフと兵士達が出て行くとコーウェンは手早く必要なものをまとめ、さらに携帯端末からロンド・ベル宛ての緊急連絡を入れていたが、ある思いが彼の中に芽生えていた。

（あの男、一週間ほどと言ったが……そう言えば一週間後には州議会が開かれるはずだが……まさか彼らは……！）

―同日　同時刻　第２惑星跡アステロイドベルト―

その頃、アデナウアー達自治政府関係者を乗せたクラップ級巡洋艦ロングビーチは、リンボスからワープして小惑星アクシズがある第２惑星跡アステロイドベルト空域に到着していた。

「ワープ終了！アステロイドベルトまで１２０宇宙キロ地点に到達しました！」

航法士官の報告にアデナウアーはぐったりした表情でベルトを外し、ロングビーチ艦長のイートン・ヒースローに話し掛けていた。

「艦長…ワープはやっと終わりかね……」
「もう終わりですよ閣下…ワープに慣れないようでは地球本星には行けませんぞ……あのヤマトはこんなワープを何度も繰り返して地球とイスカンダルを一年で往復したのですからな…」

その言葉を聞いたアデナウアーは思わず絶句しつつも、目前に迫りつつあるアステロイドベルト空域に目をやりながら呟いていた。

「まあ……ネオ・ジオンとの和平が結ばれるのだから…これくらい我慢しないと……」

アデナウアーがそう言ったのと同時に、レーダー要員が報告を入れていた。

「艦長、前方５０宇宙キロに艦影確認！」

「ほう…どうやらネオ・ジオン関係者を乗せた船のようだな…約束した時間には少し早い気もするが……」

「いえ…それがネオ・ジオンの船ではなく、ティターンズ所属のアレキサンドリア級巡洋艦なんです…」

「……？何でこんな所にティターンズがいるのだ？」

しかし次の瞬間、ティターンズ所属のその艦は突然砲撃を始め、放たれたエネルギー弾がロングビーチをかすめて行った。

「な…何だ！とにかく応戦だ！総員戦闘配……」

ヒースローが命令を下そうとした時、砲撃の第二弾がブリッジを直撃…さらに次の攻撃でロングビーチは撃沈し、アデナウアー達一行を含む全員が星屑となった。

第１５話―ターニング・ポイント―（その６）（後書き）

劇中に名前が出て来たドーリアン外務次官は、「新機動戦記ガンダムW」に出て来たヒロイン、リリーナ・ドーリアンです。

今後物語の進行と共に、ガンダムWのキャラクターが出て来ますので是非ご期待を……

次回、ティターンズの魔の手がロンド・ベル一行に伸びる……

第15話―ターニング・ポイント―（その7）

―同日　12：04　ラー・カイラムブリーフィングルーム―

「何だって…アナハイムのオサリバン常務がティターンズとネオ・ジオンと繋がっているだと…おまけにその場に揚羽会長が同席していたなんて…」

ブリーフィングルームで、カイとポーラから一通り話を聞いたブライトは思わず絶句し、アムロが疑問をカイに投げかけた。

「しかし、どうしてカイさんはこの情報を掴んだんですか？」

「以前からオサリバン常務に関して黒い噂が流れてね、独自に俺が調べたらあの男は大分前からネオ・ジオンと密接な関係にあったらしい。一ヶ月前の件……波動エネルギーコンバータの製造ライン爆破事故も彼が関わったらしい…それに大量にあったはずの在庫もネオ・ジオンに全て横流ししたそうだ……あの男はいずれアナハイムを乗っ取るつもりらしいからな……」

「そんな…あのオサリバン常務が…」

ニナが今にも泣き出しそうな表情で呟くと、カイはさらに続けていた。

「……とにかく俺は常務の行動を逐一記録しようと思ってな、出入りの清掃業者を装って常務のいない時を見計らって隠しカメラをひそかに取り付けた…これに今までの記録が残ってる…」

カイはそう言うと、スーツのポケットから記録の入っているメモリ

ーカードを取り出していた。
その時ブライトの所持していた携帯端末にメールが入り、それを確かめたブライトの表情が険しくなるのを見た古代は彼に問い掛けた。

「どうしたんですかブライトさん？」

「ああ、大変な事になった……駐留軍司令のコーウェン中将が身柄をティターンズに拘束されたそうだ…その上駐留軍司令部も奴らに占領されたそうだ…」

この発言にその場にいた一同からどよめきが発せられ、カイは来るべきものが起こったかと言う表情で呟いた。

「これで一連の件は繋がったようだな……それも一週間後に州議会が開かれると言うこのタイミングで……」

「カイ、詳しく話してくれ…奴らの狙いは…？」

「奴らは一週間後の州議会でクーデターを起こして、地球連邦からの分離独立を宣言……いずれ地球本星を占領して全地球圏の支配を目論むはずだ……」

カイの爆弾発言にその場にいた一同からさらにどよめきが起こり、古代はそれを制しながら切り出していた。

「とにかく、奴らの行動を止めるには我々ロンド・ベルが動かなければならないようだな…今からでもここを出発して州議会のあるネオ・ダカールに向かわないと…」

「でも古代さん、州議会を目指すのはいいけど、ただ占領するだけではティターンズやネオ・ジオンの連中と同じだぜ！それに議員達の中にはロンド・ベルや地球本星の事を快く思ってない奴らが大半を占めてるんだ…どーするつもりなんだよ！？」

ジュドーの問い掛けに古代が答えに詰まると、カイがある提案を切り出していた。

「なに、簡単な事さ！さっき言った記録を見せればいいだけの事さ…常務達の悪事を議員連中に見せれば納得するだろうしな。」

「しかしカイさん、誰がこの記録を見せるんですか？それなりの人でないと彼らは納得しませんよ？」

カミーユの疑問を予想していたのかカイは表情を緩め、ある人物の名前を挙げていた。

「幸いこのロンド・ベルにはカリスマ的存在が二人いる…一人は宇宙戦艦ヤマト艦長古代進大佐だ。何しろあなたは地球本星を何度も危機から救った英雄だからな…」

「……カイ君、悪いが俺は英雄でも何でもない…それに政治家連中を相手にする度量もないしな…」

古代の答えをカイは思わず苦笑しつつ、さらに切り出していた。

「まあ、あなたならそう言うだろうと思いましたよ…それはともかくもう一人の人物なんだが…」

「私の事だろう？カイ君…」

カイがその名前を言う前にクワトロが切り出していた。

「さすがクワトロ大尉…いや…元ジオン公国軍エースパイロット、シャア・アズナブル大佐…その名前も偽名だと言う事はとっくに調べ上げてるんだがな、キャスバル・レム・ダイクン殿…」

カイの発言に古代は強い衝撃を受けていた。クワトロがあの“赤い彗星”ことシャア・アズナブルである事は聞いていたものの、一年戦争のきっかけとなったジオン・ズム・ダイクンの忘れ形見である事実までは知らなかったのであった。

（それにしても…何故彼はダイクンの名前を名乗ろうとしないんだ…何か深い事情でもあるのか…？）

古代が思いを巡らせていると、ラー・カイラムの当直士官が慌てふためいてブリーフィングルームに入って来た。

「ブライト艦長大変です！今入った情報で、アデナウアー代表達の乗ったクラップ級巡洋艦ロングビーチがアステロイドベルト空域で事故を起こして沈んだそうです！」

「何だって…それは本当なのか！？」

「ええ…その事に関して……ってちょっとお待ち下さい…」

その当直士官の後ろから三人の兵士がいきなり現れ、その中のサングラスをかけた男が切り出していた。

「私は連邦駐留軍、第４警備中隊の責任者ナカッハ・ナカト中佐である！ただ今よりここにいるロンド・ベル諸君の身柄を拘束させて頂く！」

第１５話―ターニング・ポイント―（その８）

―同日　１２：０９　ラー・カイラムブリーフィングルーム―

「ただ今より、地球連邦政府に対する反逆罪によりここにいるロンド・ベル諸君の身柄を拘束させて頂く！」

第４警備中隊のナカッハ・ナカトから発せられた発言に、その場にいた一同から抗議の声を上げていた。その声を無視するかのように、ナカトは不敵な視線をサングラスの奥から浴びせつつ切り出していた。

「理由を言う必要はない……とにかく、諸君達は今からコロニー内にある収容施設に移送する…特に次に名前を読み上げる者は本日１５時に裁判を行う……古代進大佐、アムロ・レイ少佐、クワトロ・バジーナ大尉…この三人は特に重罪だ！」

この発言に一同は激しく動揺し、中でもユキは今にも倒れそうになる所を、エルとルーによって何とか支えられつつ思いを巡らせていた。

（どうして……古代君達がなんで重罪なのよ！）

そんなユキの不安気な表情を見た未沙はナカトに詰め寄っていた。

「ナカト中佐、古代大佐達が何故重罪なのですか！理由を聞かせて下さい！」

「教えてやろう……まず古代大佐だが、四年前に廃艦処分が決まっ

ていたヤマトを元クルーと共謀して奪取、当時の連邦軍の命令を無視して発進させた罪だ……そしてアムロ少佐は一年戦争当時、民間人であるにも関わらず、新鋭ＭＳであるＲＸ－７８を勝手に動かした罪だ……そして問題はクワトロ大尉…いや、キャスバル・レム・ダイクン……貴様は身分を偽り、地球連邦軍に潜入した罪だ！」

ナカトの発言に対して、古代とアムロは怒りを表し激しく抗議していた。

「何故今さら過ぎた事を言うんですか！あの時ヤマトを出していなければ地球…いや、銀河系全体が今頃あの白色彗星帝国によって蹂躙されていたでしょう！」

「そうです！自分があの時“ファーストガンダム”に乗ってなければ、あれ以上の犠牲者が出ていたはずです！それを何故今頃追求するんですか！？」

二人の抗議を聞いたナカトは、クワトロが一言も話さないのに気付き、不敵な笑みを浮かべつつ問い詰めていた。

「クワトロ大尉、あなたは反論しないのかね？それとも私の言った事が図星だと認めるのかね？」

ナカトの挑発とも取れる発言にも関わらず、クワトロは無言を貫いていた。

（……確かにこの男の言う通りだ……当たっているだけに反論もできん…）

「よろしい！ではこの三人を別室に移動させる！ヤザン大尉、この三人を連行しろ！」

「了解しました中佐！」

ナカトから指名されたヤザン・ゲーブルは、古代達三人を連行しようとした時、ユキが古代の前に走り寄って来た。

「おいそこの女！邪魔だ！」

ヤザンはユキを振り払うと三人を連行しながら思いを巡らせていた。

（……フン…なかなかいい女じゃないか…この男には悪いが、後であの女をモノにしてやろうか…）

古代達が連行されて行くと、ナカトは残った一同を引き連れて収容施設へと向かって行った。

―同日　１２：２０　ネオ・ダカール市内駐留軍司令部改めティターンズ本部―

「ジャミトフ閣下、ロンデニオンコロニーにいるナカト中佐から入電！ラー・カイラム艦内にいるロンド・ベルスタッフの身柄を確保したそうです。それと古代大佐、アムロ少佐、クワトロ大尉の三人は別室に移動との事です！」

通信士の報告にジャミトフは不敵な笑みを浮かべ、グラナダから帰還したばかりのバスクに切り出していた。

「バスク、作戦の第一段階は成功したようだな…」

「はい…アデナウアー代表を処分したように、あの三人も同様に処

分すればいいだけの事です…特にあの古代進には、二年前にしてやられましたからな…」

その時の事を思い出したのか、バスクは激しい怒りを見せていた。

「まあ落ち着きたまえ…どうせあの男の命もあと三時間だ……そしてロンド・ベルをティターンズに編入し、一週間後に開かれる州議会を占拠して地球連邦に対して独立を宣言するのだ…」

「果たして上手く行くでしょうか…？しかもあのネオ・ジオンと行動を共にするのは気が進みませんが…致し方ありませんな……」

第１５話―ターニング・ポイント―（その８）（後書き）

劇中、バスクが言っていた“二年前の出来事”に関しての話は、いずれ外伝としてまとめたいと思います。
（果たしていつの事になるやら…）

次回以降、古代達三人の運命やいかに……

第15話―ターニング・ポイント―（その9）

―同日　12：29　コロニー内収容施設―

古代、アムロ、クワトロの三人はコロニー内にある犯罪者収容施設の独房に入れられていた。
独房の外には不敵な表情を浮かべていたヤザンが三人に切り出していた。

「悪く思うなよ！これも運命だと思って諦めるんだな！残り少ない時間でやりたい事やっとくんだな…って言ってもここには何もねぇがな！フハハハハハ！」

ヤザンの高笑いを古代は不快な思いで見つめ、険しい視線をヤザンに向けると、彼はユキの事を切り出していた。

「そう言えばあんたの彼女、スゲー色っぽいじゃねぇか？あんたが死んだ後は俺に任せとけ…せいぜい可愛がってやるからよ！」

ヤザンが高笑いを残して去っていくと、古代は拳でドアを殴りつけながら叫んでいた。

「おい！待て！ユキはお前に渡さん！」
「古代さん落ち着いて下さい！」
「落ち着いてなんかいられるかアムロ君！ユキをあんな野蛮な男に取られるくらいなら、今すぐにでもここを出てぶん殴ってでも引き止めて見せる！」

興奮覚めやらぬ古代をアムロが止めようとしたものの、それでもドアを叩き続けているのを見たクワトロは静かな口調で語りかけた。

「アムロ君の言う通りだ古代大佐…ここはとにかく冷静になって考えようではないかね？」

その一言で古代は冷静さを取り戻し、独房の床に座り込みしばらく考えた後クワトロに切り出していた。

「クワトロさん…あなたの過去を今さら聞くつもりはない…ただ、あなたがジオン・ダイクンの忘れ形見である以上、表に出るべきだと思います…あの記録とあなたが演説すれば、情勢は一気にこちらに有利に傾くかも知れない…」

「古代大佐…要するに私に道化を演じろとでも言うのかね…？」

「シャア……古代さんはそんな事は言ってないぞ…あなたが舞台に立つ時が来ただけの事だ……僕からも頼む…引き受けてほしい……」

古代とアムロに懇願されたものの、クワトロは自分が矢面に立つべきなのか未だに迷っていた。

（私が前面に立つべきなのだろうか…それで何かが変わるならばそれでいいが、何も変わらなければ地球人類に対して絶望するしかない……）

―同日　１２：３４　ヤマト第一艦橋―

ロンデニオンコロニー宇宙港に停泊中のヤマトの第一艦橋では古代達がティターンズによって拘束された事が報じられ、一同は動揺していた。

「……冗談じゃないですよ！こんな事が許されていいんですか真田副長！？」

土門がどうにか平静を取り戻し、真田に切り出していた。

「とにかく迷っているヒマはない！おそらくティターンズは港に停泊しているロンド・ベル艦隊を接収するに違いない…相原、直ちにヤマト以外の全艦に出港命令を出してくれ！それとコロニー外で待機中のマクロスと残りの艦に警戒体制を敷くように伝えてくれ！それと土門、戦闘班を指揮してタラップ周辺を警戒してくれ！」

「了解！！」

真田の矢継ぎ早の命令でメインスタッフは動き始め、島も発進準備を進めながら思いを巡らせていた。

（古代…ユキ…それにロンド・ベルスタッフのみんな…無事でいてくれ…）

第15話―ターニング・ポイント―（その9）（後書き）

次回、捕われのロンド・ベルメンバーに救いの手が……

第１５話―ターニング・ポイント―（その１０）

―同日　１３：０６　コロニー内収容施設―

「ちょっとぉ～～～っ！いい加減ここから出してよぉ～～～っ！」

収容施設の独房の中でプルが扉を叩きながら叫んでいると、プルツーが床に寝転びながら呟いていた。

「おいプル！んなことしたって無駄だよムダ！これ以上騒いでも体力使うだけだ！」

「あんたねぇ！どうしてそんな言い方しかできないのよ～～～っ！同じアタシだってのによくそんな事言ってられるよね～～！」

「プル、確かにプルツーの言う通り諦めたら！？」

「そうそう！いい加減観念しちまいな！？」

プルツーの意見にルーとエルまでが同調し、それを見ていたプルは当然のように猛抗議していた。

「だってさぁ、古代のおじさんが連れて行かれた時に見たでしょ！？　あのお姉さんの悲しそうな表情！？あのままおじさん達が殺されちゃってもいいの！？おまけにアタシ達も……」

プルの猛抗議にも関わらず相変わらず、プルツーは平然とした表情のまま呟いた。

「まあ落ち着きな……騒いでも仕方ないだろ？いつでも逃げられるように体力を温存しとかないと…」

この発言にさすがにその場にいた一同は驚いていた。まるで何かを待っているようなプルツーに対してエルが切り出していた。

「逃げられるようにって……プルツー、どういう事？」

「アタシには分かるんだよ…そのうち誰かがうちらを助けてくれるってね…それにジュドー達もそのうち動き出すだろうしさ！」

プルツーがそう言ったそばから、外から独房の扉を叩く音が聞こえて来た。

「お～いみんな！無事か！？今からここを開けるから離れてろ！」

その声の主はジュドーであり、彼は持っていたコスモガンで扉の鍵を破壊して中に入る事に成功するなり、プルが泣きながら抱き付いて来た。

「うわぁ～～んジュドー～～～会いたかったよぉ～～～！」

「泣くなプル！それよりもとにかくここを出るぞ！」

「でもジュドー、他の人達は！？」

「心配するな！古代さん達の所やブライトさん達の所にはビーチャやカミーユさん達が向かってる！とにかく追っ手が来ないうちにとにかくずらかるぞ！」

―同日　１３：１７　コロニー内収容施設―

一方、カミーユは古代達三人を助け出した後一緒にひたすら走り続けていたが、施設を出た途端にティターンズのジェリド・メサとマウアー・ファラオと鉢合わせしていた。

「ジェリド、あんたどこまで俺達の邪魔をする!?」
カミーユはコスモガンを引き抜き、古代達を庇う形で相対していた。
それに対しジェリドは困惑しつつ切り出していた。

「ま、待てカミーユ…お前達と争うつもりはない…今後はお前達に協力する…」
「そんな事、信用できるか!?」

なおもコスモガンをジェリドに向けるカミーユを見たマウアーは、ある思いを明かしていた。

「聞いてカミーユ…私達はやっと気づいたの…今のティターンズはネオ・ジオンと同じテロリストになりつつある…今回のように人質を取ってまで地球圏を支配しようとする行為は、許される事じゃないわ…だから私達はティターンズを見限る事にしたの…」

マウアーの告白にカミーユは困惑しきっていた。自分がロンド・ベルに参加するきっかけになったジェリドのあの発言を、今だに忘れる事が出来ていないからであった。
そんなカミーユを見た古代は助け舟を出していた。

「カミーユ、俺はこの二人を信用する…組織を裏切ってまで俺達を助けようと言うのだから、相当な覚悟ができてるはずだ……」
「分かりました古代さん…ジェリド、ここはとにかくお前を信用する…以前の事はお互い水に流そう…」
「分かったよ…それはともかく、この先は俺達の仲間が大勢いる…まともに行けば狙われるのがオチだ…俺は裏道を知ってるからそこを行くぞ…」

一同が裏道を行こうとした時、数名のティターンズ兵が彼らに追い付いていた。それを見たクワトロがある提案を切り出していた。

「ここは私が引き受ける！古代大佐達は先に行ってくれ！」

「しかしクワトロさん…」

「大丈夫だ、早く行ってくれ！」

「分かりました！とにかく港に着いたらヤマトに乗って下さい、無事を祈ります！」

第15話―ターニング・ポイント―（その10）（後書き）

ジェリドのぼやき…

「俺、本当はティターンズを裏切るつもりはなかったんだよな…なのにマウアーが“アタシと一緒に来ないなら一生縁を切るわよ！”って言うから仕方なく……はぁ～……惚れた女が悪かったのかなぁ……」

……実際ありそうな展開かも……

次回、古代達の逃亡劇は続く……

第１５話―ターニング・ポイント―（その１１）

―同日　１３：２３　ロンデニオンコロニー宇宙港近辺―

ジェリドの案内でどうにか宇宙港近くまでたどり着いた古代達はブライトやユキ達と再会を果たしていた。
古代の姿を見たユキは思わず抱きついていた。

「よかった…無事でいてくれて…」
「心配かけたね……それよりもみんな、とりあえずヤマトに向かってくれ。さっき連絡したら、ヤマト以外の艦は全て出港したそうだ…ユキ、みんなをヤマトに案内してくれ。俺も後から追いつく…」
「それはいいけど、後からって…？」
「クワトロ大尉がまだ来ないんだ…彼の事だから必ず来るはずだ…とにかく先に行っててくれ。ブライトさん、ユキ達の事を頼みます！」
「分かった！ヤマトで待っている！」

ブライト達を見送り、古代は周囲を警戒しながら歩き出すとエマリーとミリィが遅れてやって来た。

「エマリー艦長、それにミリィさんも無事でしたか！」
「ええ何とか…それよりも他の人達は？」
「みんなヤマトに向かいました。後はクワトロ大尉だけなんですが…」

古代が周囲を見渡した時、ナカトと数人のティターンズ兵が現れて進路を阻んでいた。

ナカトは怒りの表情で三人に銃口を向けながら切り出していた。

「貴様…このまま無事に逃げられると思うなよ…こうなったらお前達三人だけでもこの場で処刑してやる…」

ナカトの発言を受けて、古代はコスモガンを抜きつつエマリーとミリィを庇う形でナカトに切り出していた。

「ナカト中佐、何故このような事をする！あなたにも分かっているはずだ…我々は一致団結してゼントラーディに立ち向かわなければならないんだ！」

「何を言うか！いつまでも英雄ヅラするな！悪いがお前達はここで死んで貰う！」

ナカトの発言を受けて、ティターンズ兵もライフルの銃口を古代達に向けると、ナカトも持っていた銃の安全装置を解除して不敵な笑みを浮かべていた。

「フン…歴戦の英雄もこれまでのようだな…」

（くそ……本当にここで終わりなのか…？）

古代がそう思った時銃声が響き渡り、反射的に二人を床に寝そべらせつつも撃たれた様子はなく、顔を上げて見るとナカトが右手を押さえてうずくまっていた。

その時、上の通路から聞き慣れた声が聞こえていた。

「おい古代、無事か！」

「フォッカー……それにみんな、来てくれたのか！」

そこにはフォッカーを始め、輝、マックス、コウ、バーニィ、モンシアが立っていた。

「あたりめーだ！あんたみたいな熱血男を失うわけにはいかねーんだよ！それにこんな美人を放っておくモンシア様じゃねーんだよ！」

「……結局、中尉は美人目当てですか……」

「ホント、どうにかならないんですかね？」

輝とバーニィの発言を受け、モンシアがムッとした表情をしていると、キースがライフルとコスモガンを抱えてその場にやって来た。

「モンシア中尉～～っ！森大尉は無事でありますか～～っ！？」

「ぶぁか野郎！ミニスカねーちゃんはとっくにヤマトに乗っちまったよ！」

そう毒づきながらモンシアが下を見ると、コロニーの警備当局がティターンズ兵を拘束しており、それを見て決めゼリフを一言呟いた。

「これにて、一件落着！」

第１５話―ターニング・ポイント―（その１１）（後書き）

この話、「００８３」第１１話を元ネタにしました。

ナカトはそのままで、コウとルセットの立ち位置を古代とエマリー、ミリィに変えて、なおかつ通路からの銃撃シーンもモンシア以外全て一新しましたがどうだったでしょうか？

次回、クワトロとナナイが再会……

ついにあの機体が登場！

第１５話―ターニング・ポイント―（その１２）

―同日　１３：３３　コロニー宇宙港近辺―

その頃クワトロは、追跡して来るティターンズ兵をかわしながら宇宙港に近付きつつあった。
そんな中、人の気配を感じたクワトロはコスモガンを片手にその方向に向けて進むと、ある人物と鉢合わせした。

「お久しぶりですシャア大佐…」
「ナナイ…このコロニーにいたのか…」
「ええ…キグナンから連絡を受けました…それにあなた専用のモビルスーツ“サザビー”をお持ちしました…」

ナナイはそう言うと、クワトロを物資搬入口に案内すると、そこには彼の代名詞である赤いモビルスーツがその威容を見せていた。

「よくこんなコロニーに運び込む事が出来たなナナイ…」

サザビーを見上げながらクワトロが呟くと、ナナイが秘めた想いを彼にぶつけていた。

「大佐、ネオ・ジオンに戻って来る気はありませんか…？」
「ナナイ…悪いがそのつもりはない……今の私は地球連邦軍に所属する身だ、もうネオ・ジオンに戻るつもりはない…私はこれからやらなければならない事があるのだ…」

クワトロはナナイに今の気持ちをぶつけ、さらに彼女に切り出して

いた。

「君の方こそ大丈夫なのか？あのパプティマス・シロッコは危険過ぎる…」

「それは分かっています…それに彼は今この星系にはいません…“連中”との最後の交渉に出向きましたから…」

「……“連中”だと！？　ついに動き出すと言うのか！？」

「ええ…かつてヤマトが戦った異星人の残党と手を組む事になりそうです…ですから大佐達に残された時間はありません…」

「分かった…今はまずネオ・ダカールに降下し、ティターンズの横暴を白日の下にさらけ出すのが先だ…“連中”との事はそれから考えよう…」

そう言うとクワトロはサザビーのコクピットに入り、ここから脱出するために発進準備を始めていた。

ナナイは下からコクピット内にいるクワトロに向けて敬礼を送るとその場を立ち去り、それをコクピット内で見ていたクワトロは想いを巡らせていた。

（ナナイ…あまり無理をするな…どんな事があったとしても生き延びろ…）

第１５話―ターニング・ポイント―（その１３）

―同日　１３：４２　ヤマト第一艦橋―

「島、拘束された人達はクワトロ大尉以外全て乗り込んだ！直ちに発進準備をしてくれ！」
「とっくに準備は出来てる！いつでも発進ＯＫだ……って言うより…お前いつから旅行会社の添乗員に転職した？」

島が第一艦橋に飛び込んできた古代を見るなり呟いていた。
事実、古代の後ろからは拘束されていたジュドーを始めとする一同が第一艦橋に続々と姿を見せていた。

「いやぁ…俺としてはみんなには艦内食堂で待機して欲しかったんだが…」

古代が頭に手をやりながら呟いていると、最後に入って来たフォッカーが一同に切り出していた。

「まあいいじゃないか！みんな一度は歴戦の艦を見たいって言うもんでな。ついでににお前達の働き振りを久々に見てみようと思ってな…それよりも沖田のオヤジに挨拶させてくれ…」

フォッカーはそう言うと、艦長席エレベーター脇に掲げられた沖田のレリーフに向かうと、その場にいた全員がそれに倣い敬礼していた。
それが終わると古代は艦長席に座り、発進命令を下していた。

「よし、直ちにヤマトは発進する！行き先はネオ・ダカールだ！」
「了解！ヤマト発進します！」

波動エンジンが唸りを上げ、ヤマトはロンデニオンコロニー宇宙港を出港して行った。
コロニーを出た所でレーダーを監視していたユキが、近付きつつある一機のモビルスーツを捕捉していた。

「当艦後方より、ネオ・ジオンのものと思われるモビルスーツ一機が急速接近中！」

報告と同時にメインパネルに映し出された映像には、一機の赤いモビルスーツ（クワトロの乗るサザビー）が迫りつつあった。
それと同時に相原がそのモビルスーツからの通信を傍受していた。

「古代艦長、クワトロ大尉から入電……“ネオ・ジオンのモビルスーツだからって間違って撃墜しないでくれ。私が乗っている……”だそうです。」

この報告を聞いた一同は思わず吹き出していた。
そんな中、アムロはパネルを見ながら思いを巡らせていた。

（さすがシャアだな…どんな状況でも必ず生き延びると思っていたよ…）

―同日　１３：５０　ネオ・ダカール市内ティターンズ本部―

「何だと、ロンド・ベルの連中がロンデニオンを出ただと！？」

ティターンズ本部では、バスクがナカト達によるロンド・ベル一同の拘束に失敗したと言う報告を受けていた。

「はい……それにナカト中佐以下全員が逆にコロニーの警備当局に身柄を拘束されたとの事です…」

「全く何をしていたのだ！ロンド・ベルの連中を取り逃がすとはどう言う事か！？おそらく連中はこのネオ・ダカールに向かって来るに違いない！」

「まあ落ち着けバスク…これでロンド・ベル追討の口実が出来た訳だ……」

ジャミトフはバスクを落ち着かせていたものの、彼の中ではある不安感が頭をもたげつつあった。

（しかし、この計画が失敗したら我々はどうなる…逆に賊軍扱いされてしまうぞ……）

第１５話―ターニング・ポイント―（その１３）（後書き）

この話のちょっとした寸劇…

ジュドー
「へぇ～！ここがヤマトの第一艦橋かぁ…古代さん、波動砲のトリガー引いてもいい？」

古代
「勝手に触るな！」

ユキ
「いいじゃない古代君！減るもんじゃあるまいし…」

古代
「まあ…ユキが言うなら…特別だぞジュドー！」

ジュドー
「それじゃ早速…発射１０秒前！対ショック、対閃光防御！……３、２、１、ゼロ……発射ぁーっ……って何だ？トリガーの先から何かが出て来たけど……」

古代
「見せてくれ……えっ……“これにて波動砲は打ち止めです”……
……んな馬鹿なぁ～～～っ！これからどうすりゃいいんだぁ～～～っ！」

……べたな寸劇、どうもすいません…（↑ｂｙ林家三平）

第１５話―ターニング・ポイント―（その１４）

―同日　１４：０５　ヤマト艦内中央作戦室―

ヤマト艦内の中央作戦室では、ロンド・ベルメンバー一同が今後の件について打ち合わせを始めていた。
床面パネルにはリンボスの地図が映し出され、古代とブライトが中心となり一同に作戦の概要を説明していた。

「……と言う訳で、部隊を二つに分けてネオ・ダカールを目指すんだが…」
「あのぅ～ちょっと質問いいですか？」

古代の説明に対し、ビーチャが切り出していた。

「部隊を二つに分けるのはいいとして、このままネオ・ダカールを目指すつもりですか？」
「いや、そのまま降下せずにかなり離れた場所からネオ・ダカールを目指すつもりだ…ヤマトを旗艦とする第一部隊は海上ルート、ラー・カイラムを旗艦とする第二部隊は砂漠ルートを通って行く。砂漠ルートは途中に衛星放送の送信施設があるので、ここを確実に確保する予定だ…」

古代が床面パネルを操作すると砂漠ルート上にある送信施設が映し出されていた。それを見ながらビーチャはさらに質問を切り出していた。

「それともう一つ…結局誰が議会で演説するんですか？やっぱりロ

ンド・ベル司令である古代さんがやるんですか？」

ビーチャの問い掛けに対し、今まで沈黙していたクワトロが切り出していた。

「いや…私がやろう……先程独房で古代司令とアムロ君に説得されたおかげで、私が表舞台に立たねばならないと思ったのでね…」

クワトロの発言で、一同からは拍手喝采が起きていた。そんな中、未沙はある質問をぶつけていた。

「でも、もう一つ問題がありますよね？捕われているコーウェン中将達の救出もしなければなりませんし、その辺りはどうするつもりでしょうか？」

すると今まで一同の話を聞いていたカイが切り出していた。

「その事なら心配なく早瀬大尉……実はかつて俺達と一緒に戦ったハヤト・コバヤシと言う男に連絡をつけましてね、彼が率いる“カラバ”と言う組織がコーウェン中将達の救援に当たる事になってね……」

「カイ、本当なのか？ハヤト達が動いてくれるのは？」

カイの発言にブライトが半信半疑と言った表情で問い掛けると、当の彼はうなずきながらさらに説明を加えていた。

「ええ、しかも彼は新造されたネェル・アーガマ級戦艦の艦長として乗り組む事になってね…しかもその艦の名前が、かつて俺達が乗っていた艦名を受け継いだそうだ…」

「……と言うと…あの艦か？」

「ええ…その名前は“ホワイトベース”ですよ…」

その名前を聞いたクワトロは、かつて戦った因縁浅からぬ艦名に感慨深げに想いを馳せていた。

（ホワイトベース……あの“木馬”の名前を引き継ぐのか……）

そんなクワトロの想いも知らず、古代は決意を切り出していた。

「とにかく、あと一週間しかない…我々は反逆軍の汚名を晴らすために全力を尽くさなければならない……諸君の努力に期待する！」

古代の熱い想いはその場にいた全員に伝わりつつあった。自分達がどうなろうとも、この作戦をやり遂げようという想いに満ち溢れていた。

そんな中、例によってモンシアがある提案を切り出していた。

「なあみんな、どうせなら作戦の成功を祈って前祝いってのはどうだ？」

この発言にバニングは、半ば呆れながらモンシアに問い掛けていた。

「モンシア！お前作戦前だからって何を言い出すんだ？」

「バニング少佐、こんな時だからこそみんなと盛り上がらないと、今後の作戦の成功につながりませんぜ！ここはひとつパーッと盛り上がらないと！」

「いやーモンシアさんいい事言う！」

「ホント！ここはみんなで盛り上がりましょう！」

お祭り好きのビーチャとモンドが、モンシアの意見に同調していた。
そんな二人の様子を見た古代は渋い顔で二人をたしなめていた。

「お前達、いい加減にしろ！作戦前だからって馬鹿騒ぎするのはみっともないぞ！少しは今の状況を考えろ！」

そんな中未沙が口を開き、古代に切り出していた。

「でも古代司令、私はモンシア中尉の意見に賛成です！こんな時だからこそ、部隊間の親睦を温める必要があると思いますが？」
「私も未沙の意見に賛成よ！元・生活班長として言わせてもらうけど、考えてみれば今までこんなコミュニケーションが無かったのが不思議だったのよね。この際いい機会だからやりましょうよ……ね？」

未沙に続いてユキまでが発言し、最後にはいつもの小首を傾げる“お願いポーズ”まで出て来たおかげで、古代はとうとう根負けしていた。

「……仕方ない…今回に限って認めよう…」
「じゃあそうと決まれば早速準備して来ま～す！」

そう言うとユキはさっさと中央作戦室を出て行った。その様子を見ていたキースはある想いを巡らせていた。

（森大尉…いやユキさんって家庭的なんだなぁ……ますますファンになってしまいそうだ……）

第１５話―ターニング・ポイント―（その１４）（後書き）

劇中、ユキが「元・生活班長」と言ってましたが、現在の肩書は“第一艦橋レーダーオペレーター”です。
誰が生活班長の職を引き継ぎしたかは、いずれ判明しますのでお楽しみに……

第１５話―ターニング・ポイント―（その１５）

―同日　２１：３５　ヤマト後部展望室―

ロンド・ベルメンバーが“討ち入りパーティー”と称して右舷展望室で盛り上がっている中、古代は一人抜け出して後部展望室に佇んでいた。窓外には遠くなりつつあるロンデニオンコロニーを始めとするサイド２のコロニー群が見えており、古代はぼんやりとその風景を見ていると、ほろ酔い加減のフォッカーが姿を見せていた。

「やっぱりここだったか…何かあると必ず後部展望室にいるのは昔のままだな古代…一人で何考えてた？」

「ああ…色々考えてた…俺達、この星系に一体何しに来たんだろうってな…本当なら一ヶ月前に到着して、グラナダのアナハイムドックで波動エンジンの修理をして、今頃は地球に帰り着くはずだった……現実は修理どころか反逆軍の汚名を被せられ……おまけに俺はロンド・ベルの司令にまでなって…とてもみんなと馬鹿騒ぎしてる気分になれなくてな……」

古代の独白に、フォッカーはただ黙り込むしかなかった。この三ヶ月間、目まぐるしい思いをしただけに、何も言える状況ではなかったのだった。

しばらくの沈黙の後、フォッカーが重い口を開いていた。

「まあ…お前の言う通りかもな……これも何かの運命だと思うしかないだろう…」

「……運命か……俺は思ったんだが、あの時マクロスが地球に落ち

て来なければ…ガミラスが地球に攻撃を仕掛けて来なければ、俺達は何をしていたんだろうってね…」

古代の発言にフォッカーは再び考えていた。
少なくともフォッカーの場合は連邦軍には入らず、輝の父親が経営していた飛行スタントチームにそのまま所属していたに違いなかった。

そして古代はと言えば、元々生物や植物関係が好きで、今頃の年齢であれば大学の研究室でその方面の研究をしていたはずであった。
それがちょっとした運命の悪戯で、今の道に進む事になろうとは夢にも思わなかった。

「……まああれこれ考えても仕方ないだろう…とにかく、みんなの所に戻って飲み直そう…」

フォッカーがそう言って古代を連れ出そうとした時、ユキが後部展望室にやって来た。

「やっぱりここだったのね？探したわよ…一体二人で何してたの？」
「な～に、単なる男同士の馬鹿話さ…それよりユキちゃん、みんなはどうしてる？」
「もうパーティーはお開きよ。最後のシメを古代君にやって貰いたかったけど、途中でいなくなったから代わりにブライト副司令にやって貰ったわ…」
「す、済まんユキ…」

多少怒りモードのユキに、古代はひたすら恐縮していた。それを見ていたフォッカーはユキの側である話題を振っていた。

「まあここは怒らずに…それよりも今日は怖い思いをしたんだ…今夜は古代に思いっきり甘えろ…何かいい事あるかもな……んじゃ俺は帰るからよ！」

そう言ってなりフォッカーは風の如く後部展望室から去って行くと、残された二人はただ窓外の風景に見入っていた。
沈黙を押し破り、古代がようやく重い口を開いた。

「……ようやく静かになったな…しかしあいつらも余計な事を考えついて…もし沖田さんが生きていたら、この状況を見て何て言っただろう…」
「沖田艦長が生きてらしても、同じ事を提案したと思うわ…あまり堅苦しくしてもみんなついて来ないわよ……」
「それもそうだな…とにかく今夜はもう休もう…明日からは忙しくなるしな…部屋まで送るよユキ…」

―同日　２１：５８　艦内士官居住区―

展望室から古代に送られて艦内の士官居住区に着いたユキは、自分の部屋の前で古代に抱きついていた。

「ねえ古代君…今夜一晩だけ私の部屋にいてくれる？昼間怖い思いをしたから眠れそうにないの…」

ユキの告白に古代も根負けし、耳元でそっと囁いていた。

「分かった…君が眠るまで側にいてあげるから安心しなユキ…」

――結局、古代はユキの求めるまま愛を交わすはめになった。
ユキが満ち足りた表情で寝息を立てている横で、古代は思いを巡らせていた。

（しかし、ユキも最近求め方が巧妙になって来たな…出来る限り要求に応えないと機嫌悪くするし…惚れた相手が悪かったかな……）

第１５話―ターニング・ポイント―（その１５）（後書き）

次回、スパロボやガンダムシリーズでお馴染みの、大気圏突入時の戦闘が繰り広げられます。

ただし、相手は……

是非ご期待下さい！

第16話―ブルー・ウィンド―（その1）

―A．D．２２０５　１０．４　１６：２１
リンボス衛星軌道上ヤマト第一艦橋―

「大気圏突入まであと４０分！現在の所、各艦に異常ありません！」

第一艦橋で端末を操作しながらユキが報告していた。
ロンデニオンコロニーを出発して以来、ロンド・ベル艦隊はネオ・ジオンやゼントラーディ、さらにティターンズを警戒しながら航行していたため、本来なら一日でリンボス衛星軌道上に着くはずが三日目でようやくたどり着いていた。

「とにかくあと四日しかない…これ以上の遅れは作戦の失敗に繋がるんだ！」

艦長席で古代が焦りの表情を見せていた。
その時、ロンド・ベル艦隊の前方に見慣れない宇宙船が突然ワープアウトして来た。

「艦長、前方２０宇宙キロに正体不明の宇宙船がワープアウトです！」

メインパネルには船体の所々がひどく損傷している宇宙船が映し出されていた。

「太田、どこの宇宙船か分かるか？」
「いえ…従来のデータにはない宇宙船です…」

「それにしてもひどく傷ついてるな…あれでよくワープ出来たものだ…」

パネルを見ながら真田が呟いていると、相原がその宇宙船からの救援信号をキャッチしていた。

「艦長、救援信号を傍受しました！」

「よし、直ちに救命艇を出せ！護衛として加藤、揚羽の二人はバルキリーで出てくれ！」

『了解！！』

救命艇と共に加藤と揚羽のバルキリーがヤマトから発進して行くと、レーダーを監視していたユキが報告を入れていた。

「艦長！艦隊より１時方向に重力震確認！ワープアウト反応多数！……え…これは……」

「ユキ、どうした！？」

「あ、すいません…艦籍判明したんですが……ボラー連邦の艦隊です…」

ユキの発言に第一艦橋のスタッフは言葉を失っていた。

実を言えばボラー連邦は前年の１２月から２２０５年の2月にかけて、ガルマン・ガミラスのデスラー総統の後押しを受けた反ベムラーゼ派が決起して反乱を起こし、当時のベムラーゼ政権を崩壊させる事に成功した後は軍備を放棄して完全な民主国家に生まれ変わったはずだった……

（そう言えば、あの時デスラーからの通信では“ボラーの脅威は無くなった……”とあったが、あれから何かあったんだろうか？）

古代が思いを巡らせていると、戦闘指揮席の土門が問い掛けてきた。

「艦長、とにかくどうします？」

「今はとにかく戦闘を避けるべきだと思う……相原、ボラー連邦艦隊に打電してくれ！」

「了解！」

―同日　１６：２４　ボラー連邦艦隊旗艦ブリッジ―

一方、ボラー連邦艦隊の旗艦では司令であるハーキンスが、憮然とした表情で前方に見えるロンド・ベルを見据えていた。

「司令！宇宙戦艦ヤマトの艦長から通信が入っています！」

「直ちに繋げ…それにしても何故この星系にヤマトがいるのだ…それにあの馬鹿でかい戦艦は何だ？まるで山のようだ…」

ハーキンスが言った山のような戦艦…マクロスを見て、その場にいた一同も言葉を失っていると、ヤマトから通信が入って来た。

『私は地球連邦軍所属、第１３独立機動艦隊ロンド・ベル司令、並びに宇宙戦艦ヤマト艦長の古代進です…あなた方とは戦うつもりはありません。直ちにこの空域より撤退して下さい！』

「私はボラー連邦軍第３艦隊司令ハーキンスだ…我々の目的は前方の宇宙船の拿捕にある！諸君らの救援は我がボラー連邦に対する内政干渉だ、即刻中止されたい！」

ハーキンスの恫喝にも似た発言に、古代はすかさず反論していた。

『救援信号をキャッチしたのは我々です！助けを求めている人を見殺しにはできません！』
「ええい！問答無用だ！全艦直ちに戦闘配備！目標、前方のロンド・ベルと呼ばれる艦隊！」

―同日　同時刻　ヤマト第一艦橋―

ヤマトの第一艦橋では、ハーキンスからの通信が一方的に切られた後、ボラー連邦艦隊が行動を起こしたのを確認していた。

「……全く…何を考えているんだボラーの連中は…やむを得ない！全艦戦闘配備！バルキリー隊並びにモビルスーツ隊は直ちに発進！ただし、大気圏突入までには時間がない…出来るだけ防戦に努めてくれ！」

古代は各部署に指示を出すと、思いを巡らせていた。

（しかし…俺達はどれだけの敵を相手にすればいいんだろうか……）

第16話―ブルー・ウィンドー（その1）（後書き）

劇中、“反ベムラーゼ勢力による反乱”とありますが、これは今年実際にあった出来事…北アフリカ諸国で起こった事をモチーフにしております。

それにしても何故ボラー連邦が復活したのか…
これに関しては作品中にて明らかにしたいと思います。

そして、デスラー総統の登場はあるのか……
これも是非ご期待下さい！

第１６話―ブルー・ウィンド―（その２）

―同日　１６：４９　リンボス衛星軌道上―

「おらおらぁ～～っ！ほら吹き野郎！かかってきやがれってんだ！」

ジェガンのコクピットでモンシアがボラー連邦艦隊相手に息巻くと、それを聞いていたＺＺのジュドーから突っ込みが入っていた。

『ちょっとモンシアさん！“ほら吹き野郎”じゃなくてボラー連邦でしょうが……』

「いいじゃねーかよ！俺にとっちゃあ相手が誰だろうと成敗しなきゃならんのだ！」

『はいはい…何とでも言って下さい…』

半ば呆れ気味のジュドーを見て、モンシアはさらに切り返していた。

「しかし…あの“赤い彗星”が乗ってた百式がジェリドの野郎に回るなんて俺は納得いかねぇ！あれだって一応はガンダムタイプだってのに、何で元ティターンズ野郎が乗るんだ！？そいつに回すくらいなら俺に寄越せってーの！」

『モンシア中尉、文句言わずに！とにかくそろそろ帰還しないと大気圏突入できなくなりますよ！？』

Ｓガンダムに乗るコウから通信が入ると、モンシアは憮然とした表情で切り返していた。

「ウラキぃ～！んなこたぁ分かってるって～の！あっちを見て見ろ

！一条のバルキリーやカミーユのZガンダムはまだまだ頑張ってんのによ！」

モニターを見ると、輝のバルキリーやカミーユのZガンダムがそれぞれ戦闘機モードとウェイブライダー形態に変形しつつ、なおもボラー艦隊と交戦しているのを捉えていた。

『あちらは単独でも大気圏に突入できるようになっているんです…我々のような機体では大気圏には突入できませんからね…とにかく……え…ボラー艦隊が消えた…！？』

―同日　１６：５５　ヤマト第一艦橋―

「ボラー艦隊、ワープして逃走した模様！」

ヤマト第一艦橋でユキが報告すると、パネルを見ていた南部が首を傾げながら呟いた。

「……何だ？ボラーの奴らはどうして急にいなくなったんだ？」

「考えるのは後だ！今は大気圏に突入する事が先だ！太田、全機帰還したか？」

古代が太田に問い掛けると、モニターを見ながら太田が確認していたが、不安な面持ちで艦長席の古代に切り出していた。

「いえ、マクロス所属の一条中尉のバルキリーがまだです……機体の損傷が激しく、マクロスに帰還出来るかどうか……」

太田の発言に第一艦橋のメンバーは、激しく動揺していた。特にユ

キは気が気ではない様子でパネルをじっと見据えていた。
一ヶ月近く未沙の代行で管制業務をこなして来た彼女にとっても、
輝の操縦技術には目を見張る物があった。

（……一条君…無事でいて…）

第16話―ブルー・ウィンド―（その2）（後書き）

次回、輝の運命は!?

そして救助された宇宙船の生存者の意外な正体は…?

第16話―ブルー・ウィンド―（その3）

―同日　17：01　ヤマト第一艦橋―

「大気圏突入します！これより通信及ぶ映像は3分ほど中断します！」

「よし！総員衝撃に備え、ベルト着用！」

ロンド・ベルは二つの部隊に分かれて大気圏に突入した。その中でも、ヤマトを旗艦とする第一部隊では輝の無事を祈りつつ、焦るような3分間を待ち続けていた。

やがて高度1万メートルに達するとメインパネルの映像が回復し、輝のバルキリーが映し出されていた。

それを見た古代は、相原に輝への通信を開くように指示すると通信機のスピーカーからは途切れ途切れになりつつも、輝の声が聞こえていた。

『……ちら……一条……より……出……す』

「こちらヤマト、古代だ！一条聞こえるか！？」

古代は思わず叫び、メインパネルにはバルキリーから脱出し、パラシュートで降下しようとする輝の姿が確認されていた。

「救命艇を出せ、一条を救出するんだ！」

古代が命令を下していると、第一艦橋に揚羽が一人の女性を伴って

姿を見せていた。

「艦長、あの宇宙船の生存者はこちらの女性ただ一人だけでした…」

「そうだったのか…それで何か分かったのか？」

古代が艦長席から降りて二人の前に立つと、揚羽はその女性の意外な正体を明らかにしていた。

「ええ、この方はシャルバート星のルダ王女だそうです…」

「シャルバート星！？」

古代は元よりその場にいた第一艦橋のメンバーは驚愕していた。

二年半前、ヤマトは人類の新たに居住可能な惑星探査のため銀河系内を航行中、シャルバート星を探す巡礼者と接触してその星の存在を知ったものの、単なる伝説ではないかと言う結論になっていた。しかし、実際にこの星の王女である彼女を目の前にすると、ただの伝説として片付ける訳には行かなくなりつつあった。

「……しかし、そのシャルバート星の王女が何故この空域に来たんだろうか？」

「ルダ王女の話によると、捕われていた流刑地から逃れようとわずかな従者と共にあの宇宙船に乗り込んだ所をボラー艦隊に追撃され、一度はワープでこのアルファ星系最外縁部に到達したそうです。しかし、ワープアウトして来たボラー艦隊に再び攻撃された時に偶然二機の人型機動兵器が現れて交戦している隙に再びワープしてここまでたどり着いた…と言う訳です。」

揚羽はルダ王女の宇宙船から抜き取ったデータをユキに渡し、それを彼女が再生するとメインパネルにはニ機のモビルスーツが映し出されていた。

「モビルスーツか…一機はジェガンタイプだが、もう一機は何だ？まるで一角獣を思わせる頭部を持っているが……」

古代がもう一機のモビルスーツの正体が何であるかを考えていると、真田が横から彼に切り出していた。

「艦長、このデータを至急アルビオンのニナさんに見てもらおう…アナハイム社員の彼女なら何か分かるはずだからな…」

真田はそう言うと、早速データをアルビオンに転送していた。

「……とにかく、ルダ王女の身柄をマクロスのゲストルームに移送しよう。ユキ、クローディアさんにゲストルームの確保を頼む…それと揚羽、君をルダ王女の護衛に付けようと思うんだが、引き受けてくれるか？」

「それは構いませんが艦長……」

揚羽が何か言いたげな表情をしていると、古代が先手を切っていた。

「お前の言いたい事は分かる……我々はもしかしたらティターンズを援助している君の親父さんと戦うかも知れないんだ……親子で殺し合いをするのはできれば避けたいんでな…」

「分かりました…では早速ルダ王女をマクロスに案内します。」

古代の提案に納得した揚羽は、ルダ王女を伴い第一艦橋を後にした。

そんな中、相原が救命艇からの通信をキャッチしていた。

「艦長、救命艇の佐渡先生から入電！一条中尉を無事救出、そのままマクロスに向かうそうです。それとアルビオンにいるニナさんか

らも通信が入っています。」

相原が通信機を操作すると、メインパネルにはニナの姿が映し出されていた。

『古代司令、先程送られたデータをアナハイム本社に照会したのですが、そのモビルスーツに関しては誰も心当たりがないとの事です…』

「そうか…アナハイムでも知らないとなると、一体どこで造られたんだろうな…」

古代はニナとの通信が終わると、第一艦橋の窓から差し込む夕日を見つめながら思いを巡らせていた。

（あと四日か…これから先どうなるんだろうか…？）

第16話―ブルー・ウィンドー（その3）（後書き）

劇中出て来た“一角獣を思わせる頭部を持ったモビルスーツ”……

それが何かはこれからのお楽しみと言う事で、ひらにご容赦を……

次回、あるガンダムシリーズのキャラクターが登場……

番外編（その４）―現時点のロンド・ベル戦力―

西暦２２０５年１０月４日現在のロンド・ベルの戦力は次の通り…

第一部隊

旗艦…宇宙戦艦ヤマト

所属艦…ＳＤＦ－１マクロス
強襲揚陸艦アルビオン
ドレッドノート級戦艦８隻

クラップ級巡洋艦６隻

合計１７隻

※アルビオンとクラップ級以外は、旧第一軌道艦隊で占められてはいるが、ヤマトとドレッドノート級戦艦が波動砲使用不能のため、最大兵器はマクロス所有のマクロスキャノンのみと言う現状である…

第二部隊

旗艦…機動戦艦ラー・カイラム

所属艦…機動戦艦ネェル・アーガマ

クラップ級巡洋艦１０隻

合計１２隻

※こちらも最大兵器はネェル・アーガマのハイパーメガ粒子砲のみであり、ラー・カイラムにもハイパーメ粒子砲の搭載が欲しい所である。

（実は建造中のラー・カイラム級には、順次ハイパーメガ粒子砲の取り付けが進みつつある…）

ただし“ニュータイプ部隊”と噂されるだけあって、各モビルスーツの攻撃力は充実している。

番外編（その４）―現時点のロンド・ベル戦力―（後書き）

ふと思い付いたので、とりあえずこんな感じでまとめてみました。
（多分説明不足かと…）

次回、機動戦士ガンダム第０８ＭＳ小隊のキャラクターが登場します！

是非ご期待下さい！

第17話―パラダイス・ロスト―（その1）

―A．D．２２０５　１０．４　１７：３１
連邦駐留軍ヒューエンテン基地―

リンボスの首都ネオ・ダカールから約１０００キロ離れた場所にある連邦駐留軍ヒューエンテン基地……
ここはモビルスーツ地上部隊の基地の一つであり、その司令室に部隊長代行を含めた四人が召集されていた。

「失礼します！第８モビルスーツ小隊隊長代行カレン・ジョシュワ少尉以下四名、ただ今参りました！」
「ご苦労、相変わらずエアコンのない部屋で済まんな諸君…」

この基地の司令であるコジマ大佐はうちわ片手に呟いていた。
彼は極度のエアコン嫌いで有名で、この基地が赤道直下にあるにも関わらず、窓を開け放してうちわ一つで暑さをやり過ごすという一風変わった男であった。

「――それでだ……早速だが君達第８小隊に新しい任務に着いて貰う事になった…既に君達も知っている通り、駐留軍司令であるコーウェン中将を始め大勢の人達がティターンズによって拘束された…そこで君達はロンド・ベルと共に拘束された人々の救出に当たってほしい…」

コジマが発言するのと同時に、エレドア・マシスの表情が一変していた。

「マジかよ……あのカタブツのブライト大佐や飲ん兵衛のモンシア中尉と一緒だと思うと……」

「エレドア軍曹、これは任務だ、諦めるんだな……それはともかく、間もなくこの基地に君達が乗艦する戦艦が到着予定だ…」

コジマの説明にエレドアはさらに顔色を変えていた。

「あの…もしかしてラー・カイラムとか…？」

「安心しろエレドア軍曹。これから来る艦はネェル・アーガマ級戦艦であるホワイトベースだ。」

「ホワイトベースって、あの一年戦争で沈んだ伝説の艦ですよね…あれの二代目ですか？」

コジマの説明に、ミケル・ニノリッチが思い出したように呟いていた。

「そうだ…君達にはこの艦に乗って貰う。それに新型モビルスーツもホワイトベースに積んであると言う事だ…」

「新型モビルスーツ…それってどんな物なんですか？」

「この度ロールアウトされたばかりの可変式モビルスーツだ…形式番号ＲＧＺ－９５“リゼル”だ…」

コジマが持っていた資料を一同に手渡していると通信機に反応があり、モニターにはネェル・アーガマ級戦艦ホワイトベース艦長であるハヤト・コバヤシの姿が映し出されていた。

『こちらホワイトベース艦長、ハヤト・コバヤシ中佐であります。当艦はただ今到着しました。』

「ご苦労。早速だが君の艦に、ここにいる第８小隊のメンバーが乗

り込む事になった…くれぐれもよろしく頼む…」

『了解しました。それと明日この基地でブライト大佐率いるロンド・ベル第二部隊と合流して、最終打ち合わせを行いますのでよろしくお願いします…』

「分かった…とにかく今夜はゆっくり休みたまえ…」

ハヤトからの通信が切れると、テリー・サンダースはコジマにある質問を切り出していた。

「司令、少しお聞きしたいのですが……アマダ大尉の行方は相変わらず分かりませんか…？」

第８小隊の隊長であったシロー・アマダは、二年前のネオ・ジオンとの戦いの時、巨大モビルアーマー“アプサラス”と交戦している最中、以前ふとした事で知り合った敵の女性兵士であるアイナ・サハリンと共にこのモビルアーマーを破壊した際に爆発に巻き込まれ、今もなお行方不明の状態になっていた。

「……その事なんだが、未だに分からないのだよ……噂ではどこかのコロニーにいるとか、グラナダで似たような人を見たとか…果ては地球本星で見掛けたとか……」

その話を聞いたミケルは思いを巡らせていた。

（アマダ隊長、もしかしたらあの女の人とどこかでひっそりと暮らしてるんだろうか……）

第17話―パラダイス・ロスト―（その1）（後書き）

機動戦士ガンダム第０８ＭＳ小隊が作品初登場でした。

前隊長であるシロー・アマダはどこにいるのか……

いずれ登場する予定ですので、是非ご期待下さい。

次回、マクロスＴＶ版第１８話をほぼ再現します……

第17話―パラダイス・ロスト―（その2）

―A．D．２２０５　１０．５　９：２６
マクロス艦内市街地中央病院個室―

「あ～あ、ザマぁねぇなぁ～……」

中央病院の個室で輝はベッドに横になって呟いていた。傍らでは佐渡が彼のぼやきを聞きながら脈拍を計っていた。

「まあそうぼやくな。お前さんほどの操縦技術があったからこの程度で済んだんじゃ！並の人間ならとっくに死んどるぞ！」

「そんなぁ～脅かさないで下さいよぅ先生～！」

泣き言を言う輝の顔を、佐渡の愛猫のミー君はニヤリとした表情でベッドの下から見上げており、それを見た輝はさらに泣き言を繰り出していた。

「猫にまで馬鹿にされちゃ俺もおしまいだな…」

「まあそう言うな…とにかくまた後で来るからおとなしく寝ておれ…」

佐渡が部屋を出て行こうとした時、古代とユキ、それにフォッカーとモンシアがやって来た。

「なんじゃお前さん達、揃いも揃ってお見舞いか？」

「ええ…僕とユキはロンド・ベルの打ち合わせでマクロスに来たついでって事で…」

「俺は当直明けなんで、部屋に戻る前に輝の様子を見に来たんですが…意外に元気そうで安心したぞ！」

古代とフォッカーがそれぞれ安心した表情で呟いていると、モンシアは持参していた袋の中からウィスキーを取り出して輝の目前に差し出した。

「一条～！これ飲んで元気出せ！ほら吹き野郎やティターンズなんか吹き飛ばしてしまえ！」

「あ、あのぅ中尉…それ貰っても、僕は飲めませんけど……」

輝がそう言って断るのと同時に佐渡がモンシアを一喝していた。

「おいモンシア、お前さん何考えとんじゃ！？怪我で入院しとる患者に酒を持ってくるとは！？これはわしが預かっとく！」

「そ、そりゃないですぜ先生～！」

情けない声を出したモンシアに一同が爆笑している所に、未沙が花束を持って病室に姿を現していた。

「あれ……早瀬大尉まで…どうしたんですか？」

意外そうな表情で輝が呟くと、未沙は何とか笑顔を作り、輝に話しかけていた。

「一条君、大丈夫…？とにかく今回の件は私にも責任があるの……もう少し早く帰還命令を出していれば…」

「いえ…最後まで粘ってた自分も悪いんです……何しろ初めて戦う敵でしたから…」

輝も未沙を気遣って弁明していた。今まで戦ったゼントラーディやティターンズ、ネオ・ジオンとは違った未知の敵であるボラー連邦を知るために、最後まで粘っていた自分にも非があると思っていたためであった。

そんな中古代は重い空気を感じたのか、一同を促していた。

「……とにかく、あまり長居するのも何だからもう帰るとしよう……じゃあ一条、俺達帰るからゆっくり休めよ……」

「はい…皆さん心配かけて済みませんでした……」

一同が個室を出て廊下を歩きながら、ユキとフォッカーが輝の様子を話しあっていた。

「一条君、かなり落ち込んでいるみたいね…」

「ああ…かなり精神的に参っているようだな…」

二人の会話を聞いた古代は、何かを思いついたらしく、ユキにある事を切り出していた。

「ユキ、ミンメイの今日のスケジュールは分かるか?」

「え…そんなの調べてどうするの古代君?」

「あいつを元気づけるにはミンメイの力が必要だと思ってね…とにかく調べてくれないか?」

古代の要望で、ユキは持っていた携帯端末でミンメイのスケジュールを調べていた。

「えーと……今日のミンメイは年末公開予定の映画撮影が入ってる……」

「そうか……じゃあ今からでも撮影所にでも行ってみるか…」

「でも古代君、ミーティングの方はどうするの?それにああいう撮影所って綺麗な女優さんがたくさんいるし…古代君その人達に見とれるんじゃないかしら…?」

ユキの心配をよそに、古代は悪戯っぽく笑って切り返していた。

「な~に大丈夫!少しくらい遅れてもいいじゃないか?それに撮影所で綺麗な女優さんを見たって、君には遠く及ばないよ!だから君はシャミー君達とお茶でも飲んでりゃいいさ。」

「そう言ってくれるのはいいんだけど…やっぱり心配だわ……この前の写真週刊誌の件もあるし…」

それでもユキが心配そうな表情をしていると、それを見ていた未沙が切り出していた。

「じゃあ私が一緒に行きます!古代さんのお目付け役と言う事で!」

第17話―パラダイス・ロスト―（その3）

―同日　9：42　マクロス艦内市街地映画撮影所―

「初めてこういう場所に来たけど、かなり広いのね…」

古代の浮気防止（もっとも古代本人は最初からするつもりもないが……）と言う名目でユキの代わりについて来た未沙は、撮影所に着くなり溜め息をつきながら呟いていた。

「確かに…誰がどこにいるやら全然分かりゃしない…」

古代も未沙の意見に同意しつつ周囲を見渡していると、カイフンがスタッフと打ち合わせしながら歩いているのを見掛けて声を掛けた。

「お～いカイフン！」

「ああ古代さん、お久しぶりです！」

「元気そうじゃないか。ところでミンメイは？」

「ええ、ミンメイはリハーサル中で間もなく終わるみたいで……あ、いたいた！おいミンメイ、こっちに来てくれ！」

リハーサルを終えたミンメイが歩いているのを見たカイフンが声を掛けると、彼女は走って三人の元にやって来た。

「古代さんごぶさたです！あら？早瀬さんまで一緒だったんですか、ユキさんはどうしたんですか？」

「ああ、ユキだったら用事があるって言うんでね、代わりに早瀬君が行くって言うんで連れて来たんだ。それも浮気防止って言う名目

で……」

古代の発言にミンメイは思わず爆笑していた。

「アハハ～！なんかおかしい～～！でも、ここには綺麗な女優さんがいますから古代さんもその人達に目移りしそうだし！」

「おいおい…そりゃないよミンメイ…」

古代が呆れているとミンメイは舌を出して平謝りしていた。

「すいませ～ん！ところで今日はどうしたんですか？」

「ああ、実は一条の奴が戦闘中にケガしてね…」

「え…輝、そんなに悪いんですか？」

「いや、ケガ自体はたいした事はないんだが精神的にかなり参ってるんだ。君が行けば元気になるんじゃないかと思ってね…」

「そうなんですか……分かりました、とにかく今からでもお見舞いに行って来ます！ねぇ兄さん、いいでしょ？」

ミンメイがカイフンに手を合わせて頼み込むと、彼はスケジュール帳を見ながら仕方無しに許可すると、彼女は早速中央病院へと向かって行った。その一部始終を見ていた一人の女優が、一同の前につかつかと歩いてやって来た。

「最近の若い子ってどうしてこうなのかしら？時間があると現場を抜け出して遊びに行っちゃうし！そんなヒマがあったら台本の台詞覚えなさいって！それにお二人さん、軍関係者だからっていい気にならないでね！」

「済みませんジャミスさん…ミンメイの知り合いが入院したもので……」

ジャミスの発言でカイフンはひたすら恐縮し、彼女の名前を聞いた古代はある事を思い出していた。

（ジャミス・メリン……確かハリウッドの人気女優だったな……そう言えばユキが大ファンって言ってたよな…）

「あの済みませんジャミスさん…サインを頂けますか？」

古代が恐る恐る問い掛けると、ジャミスは彼の顔をキッと睨みつつ切り出していた。

「あなた、ヤマトの古代艦長よね。私のスポンサーである揚羽会長を追い出しておいて、何が“サイン下さい”よ！虫が良すぎるわ！」

この発言に未沙は何か言いたげな古代に代わって反論していた。

「何を言うんですか！？私達は揚羽会長を追い出した訳ではありません！会長が自分から出て行ったんですよ！それにあなただって古代司令解任に反対したじゃないですか？」

「確かに反対したわよ！でも揚羽会長が追い出されるなんて夢にも思わなかったわ！」

ジャミスの発言を聞いた古代は、揚羽会長の事を力説する彼女の姿を見てある思いが浮かんでいた。

（そうか……揚羽会長は彼女のスポンサー…いや、愛人だったと言う訳か……だから彼女は俺達を憎んでいるのか…）

―同日　同時刻　リンボス衛星軌道上ゼントラーディ艦隊・カムジン艦ブリッジ―

「ふざけるな！どうしてロンド・ベルを攻撃しちゃいけないんだ！？」

リンボス衛星軌道上に展開しているゼントラーディ・カムジン艦隊旗艦のブリッジで、カムジンがモニター中のミリアに怒りを表していた。

『何度も言うように、スパイ作戦が完了するまではロンド・ベルに対して行動を起こさぬようにとの通達が来ているのだ…お前には何故それが分からないのだ？』

モニター中のミリアが呆れ顔でカムジンに説教をしていたものの、当の彼はどこ吹く風と言う表情をしていた。

「フン…エースだからって偉ぶるんじゃねぇ！この際だ、一つ教えてやる……ロンド・ベルにはお前さん以上の凄腕がいるって事をな！」

『私以上の凄腕だと…？』

カムジンの挑発的な発言にミリアはすぐさま反応していた。彼女が自分よりも優れた腕前を持つ相手がいるほど燃えやすいと言う性格をカムジンは知っていたからでもあった。

「そうだ…お前さん以上の凄腕があのロンド・ベルにいるのさ…まさか黙って見過ごす訳じゃねぇよな？」

『当たり前だ！やってやろうじゃないか…“エースのミリア”の名

に賭けて…』

第17話―パラダイス・ロスト―（その3）（後書き）

劇中登場したジャミス・メリン…マクロスＴＶ版で二回登場しましたが、かなりインパクトのある人でした。

もしこの人がミス・マクロスに選ばれていたら、確実にマクロスは負けていたでしょう。（まさにミンメイ様々です…）

次回、マクロスメインブリッジでユキと三人娘のドタバタ劇が展開！

第17話―パラダイス・ロスト―（その4）

―同日　9：56　マクロスメインブリッジ―

その頃ユキはカフェテリアでケーキを買い、メインブリッジにたどり着いていた。

「みんなお疲れ様！差し入れのケーキ持って来たわよ！」

ユキの一言で三人娘は狂喜乱舞して彼女の元にやって来た。

「うわぁ～ユキさん、ありがとうございますぅ～！」

シャミーはユキの手からケーキの箱を引ったくるように受け取ると、早速中を確かめていた。

「うわぁ～色々入ってるぅ～！」

「全くシャミーったら食いしん坊なんだから…あれ？そう言えばクローディアさんは？」

クローディアの姿が見えないのに気づいたユキが尋ねると、箱の中を物色していたヴァネッサが答えていた。

「クローディア大尉ならさっき勤務を終えて帰りましたよぅ～。」

「ああそうか…そう言えばフォッカーさんも当直明けだって言ってたし…ひょっとして今頃……」

「ユキさ～ん、何赤くなってんですかぁ～～？」

ユキが赤くなって呟いている所に、キムが意味あり気な表情で突っ込みを入れていた。
何しろユキは、数日前にヤマト艦内の自室で古代と愛を交わし合った事を思い出し、今頃はフォッカーとクローディアが……と想像していたのであった。
そんな中、大好物のチョコレートケーキを食べながらシャミーがユキに切り返していた。

「そーですよ～！ユキさんだって古代司令と……ってそう言えば今日は古代司令はどうしたんですかぁ～？」
「実はね、彼ったらケガで入院した一条君の事が心配で、ミンメイを呼んで元気付けようとして撮影所に行ったのよ…なんせあそこには綺麗な女優さんがいるでしょ？だからお目付け役として未沙が付いて行くって言うんで一緒に行ったって訳！」

そんなユキの発言に三人娘は、意外な反応を見せていた。

「ええ～～っ！いいんですかぁ～～？」
「そうですよ！早瀬大尉だって年頃なんですよ！」
「下手したら古代司令を取られちゃいますよ！」

三人娘が口々に叫ぶようなそぶりを見せる中、ユキは落ち着き払った表情で切り返していた。

「大丈夫！彼だってその辺りはわきまえてるし、私はいつでも彼の事を信じてるから！」
「はいはい！ケーキ共々ご馳走様で～す！」

ヴァネッサがそう言うのと同時にメインレーダーに反応があり、慌てて自席に戻った彼女が操作すると驚愕の表情で報告を入れていた。

「上空１万メートル付近にゼントラーディのバトルスーツ隊が降下中！その数およそ５０機、ロンド・ベル第一部隊に向かって急速接近中です！」
「そんなぁ！艦長も早瀬大尉もクローディア大尉もいないのにど～すればいいんですかぁ～～！？」

ヴァネッサの報告にシャミーがうろたえているのを見たユキはある決意を固めて三人娘に切り出していた。

「とにかくみんな落ち着いて！慌ててもロクな事はないから！ここは私が指揮を執ります！」
「ええっユキさん！大丈夫なんですかぁ！？」

シャミーの発言にユキは落ち着き払って切り返していた。

「大丈夫よ！これでも指揮官教育は受けてるから！シャミー、あなたは未沙の席に、キムとヴァネッサは敵の動きを逐一報告して！」
「了解！！！」

ユキはそう言うと艦長席に腰を下ろし、気持ちを落ち着けようとしていた。

（大丈夫…いつも古代君がやっている事を見ているから同じ事をすればいい…それにこんな事もあろうかと受けていた指揮官教育を試すチャンスね…）

ユキはそう思っていたものの、実際はかなり違ったものになりつつあった。シャミーが未沙の席に着くなり、いきなりトランスフォーメーションの指示を出していた。

「ぜ、全艦トランスフォーメーション直ちにして下さ～い！」
「ちょ、ちょっとシャミー！あなた早過ぎよ！ちゃんと市民に伝えたの！？」

これにはユキも面食い、さらにシャミーから返ってきた発言に驚かされていた。

「済みませんユキさん…実はさっきから艦内マイクのスイッチが入りっぱなしで……それもどこか故障しているのかスイッチを押しても切れないんですぅ……」
「ええっ…じゃあ私達のさっきまでの会話……もしかして今も流れっぱなし！？」
「はい…多分……」

シャミーの答えにユキは内心頭を抱えたい気分になっていた。

（……どうしよう……とにかく古代君…助けてぇ～……）

第17話―パラダイス・ロスト―（その4）（後書き）

劇中、マクロスメインブリッジで指揮を執る羽目になったユキ……

実はこれ、ヤマト復活編であったシーンを再現しました。
復活編では大した活躍も出来ずに行方不明になってしまったので、
せめてこの作品では指揮官としてのユキを描きたいのですが……

果たしてどうなることやら……

次回、急なフォーメーションのおかげで閉じ込められた古代と未沙
の姿を描きます…

第17話―パラダイス・ロスト―（その5）

―同日　１０：０２　エンデバー海上空ミリア機コクピット―

ロンド・ベル第一部隊に接近していたのはミリア率いるバトルスーツ隊であった。

彼女はカムジンの挑発に乗り、上官であるラプラミズには“大気圏内での戦闘訓練”と称して出撃許可を貰い（とは言ってもラプラミズは渋々だったが…）、自分の部隊を引き連れて出撃したのであった。

「ミリア機より全バトルスーツ隊へ！今回の目的はロンド・ベルの“凄腕”を見つける事だ…奴を見つけ次第、その者と一対一で戦う状況を作ってもらいたい！決してロンド・ベル本隊には手を出すな！」

『了解です！！！』

ミリアは通信を終えると、まだ見ぬその相手に向かって思いをはせていた。

（来るなら来てみろ…どちらが真の“エース”か思い知らせてやる…）

―同日　同時刻　マクロス艦内閉鎖区域―

その頃古代と未沙は、急なトランスフォーメーションのおかげで避

難する時間もなく閉鎖区域に閉じ込められていた。
それだけならまだしも、先程からブリッジの様子が艦内放送の不調のおかげで流れっぱなしで、未沙は思わず頭を抱えていた。

「い、一体何やってるのかしらあの娘達…ブリッジに帰ったら少しお灸を据えなきゃ……」
「まあ…そこまでしなくても早瀬君…あの三人娘やユキだって一生懸命やってるんだからさ……」

古代はそう言ったものの、内心では自分も頭を抱えたい心境であった。

（大丈夫かなユキは…俺のやり方をいつも見ているはずなんだけど…）

そんな古代の思いも知らず、未沙がぽつりと呟いていた。

「こうやって閉じ込められていると、あの時の事を思い出しませんか古代さん？」
「ああ…だけどここはゼントラーディ艦内じゃない、何と言ってもマクロスの中だ…そのうちフォーメーションも解除されるさ…」
「そうですね……それよりもどうしてゼントラーディ軍は散発的な攻撃を仕掛けるのでしょうか？」
「……これは君も多分聞いていると思うが、ゼントラーディには二つの勢力があると推測されている…… 一つは俺達を“プロトカルチャー”だと恐れて攻撃を控えようとする勢力と……」
「逆にそれを潰そうとする勢力ですね……」
「ああ…今の所は指揮系統が混乱して、散発的な攻撃しか出来ないんじゃないかと…」
「いつまで続くんでしょうね、この状態……」

未沙はそれだけを呟くと下を向き、古代も床に寝転び、ひたすら攻撃が止むのを待っていた。
艦内放送の方はと言えば、メインブリッジのユキとジェガンで出撃しているモンシアとの口論が始まっていた。

―同日　１０：０９　マクロスメインブリッジ―

『一体どうなってやがる!?管制指示が泣き虫娘のおかげで大混乱じゃねぇか!』

ロンド・ベル第一部隊周辺を、サブフライトシステムに載せた愛機ジェガンのコクピットでモンシアは、マクロスメインブリッジのユキと激しいやり取りをしていた。

「だって仕方ないじゃないですか!グローバル艦長が不在だし、ブリッジの中で指揮権限を持っているのは私だけなんですから!」

ユキも負けじとモニターに映るモンシアに反論すると、さらに輪を掛けてモンシアが文句を垂れ流していた。

『おい、大尉殿!指揮権限持っているならどうして急にフォーメーション許可しやがったんだ!?そのおかげでマクロスから発進したバルキリーがほんのわずかってどういう事だ!?』
「その分ヤマトのバルキリー隊や、あなた方アルビオン隊が出てるからいいじゃないですか!?」

ユキの発言にモンシアは思わず我を忘れ、彼女に向かってブチ切れ

ていた。

『何だとこの！いくら年下で階級が上だからっていい気になるんじゃねぇ！大体な、安全な所から命令してんじゃねぇ！モビルスーツやバルキリーにも乗った事もねぇくせに！そんな奴に限って車の免許も持ってねぇんじゃないか？例え持ってもペーパーじゃねぇのか！？』

さすがにこの発言が効いたとみえ、ユキは抑えていた感情を爆発させていた。

「あの！私だって車の免許は持ってるしペーパーじゃありません！それに戦闘機や偵察機だって操縦した事はあるんです！何でそんな事言うんですかっ！？もう知らない！」

そう言うとユキは艦長席のコンソールに突っ伏して啜り泣き始め、見ていた三人娘はただオロオロするだけであった……

第17話―パラダイス・ロスト―（その5）（後書き）

モンシアとの口論の揚げ句、とうとう泣き出したユキ……

次回、彼女は立ち直る事が出来るのか？

そして、ミリアには宿命のライバルとの出会いが待ち受ける……

第17話―パラダイス・ロスト―（その6）

―同日　10：11　エンデバー海上空―

エンデバー海上空は混戦の様相を見せていた。ロンド・ベルとゼントラーディ軍の両部隊が乱舞する中、ミリアはカムジンが言っていた“凄腕”が誰であるかを見極めていたが、青い機体の戦闘機（マックスのバルキリー）の戦い振りを見てすぐさまこれではないかと直感していた。

「フン……あれか…“凄腕”とやらは……なかなか見事な戦い振りじゃないか…それでこそ私の相手にふさわしい！行くぞ！」

ミリアは巧みに自機クァドラン・ローを操作し、マックスのバルキリーに肉薄してミサイルやビーム砲を乱射したものの、全てマックスにかわされていた。

「……！？　何て奴だ…私の攻撃を全て避け切るとは…」

歯痒い思いをしつつ、ミリアはなおもマックス機を標的にしつこく攻撃を繰り広げていた……

―同日　同時刻　マクロスメインブリッジ―

メインブリッジでは、ユキが艦長席のコンソールに突っ伏したまま啜り泣きしていると、やっとの事でクローディアが姿を見せていた。

「やっと着いた……とにかく艦内放送スイッチは中のコードを後で直すから……それよりもユキ、お疲れ様…後は私がやるからあなたはそこで休んでなさい……」

クローディアの掛けた口調に安心したのか、ユキはようやく顔を上げていた。
それを見たクローディアがユキにハンカチを渡しながら、モニターに映るモンシアに言い放っていた。

「ちょっとモンシア中尉！あなた女の子を泣かすなんて最低よ！この事はロイと古代司令に後で報告しますのでそのつもりで！」

この発言を受けたモンシアは、モニターの中で慌てふためいていた。

『そ…そんなぁクローディア大尉…いくら何でも……』

そこに二人の会話を聞いていたバニングが加わっていた。

『モンシア！下手な言い訳をするな！後で古代とフォッカーに怒られるんだな！……それよりも気にならないか？ゼントラーディの奴ら……少しはロンド・ベルに向かって来てもいいはずなのに、さっきから見ていると何だか敵はマックスばかり狙ってるように見えるが…』

バニングの推測通り、ロンド・ベルにはゼントラーディのバトルスーツが一機も襲来せず、マックスばかりを狙っている様子であった。
不審に思ったクローディアはマックスを呼び出していた。

「デルタ1よりマックス機へ！とにかく逃げてみてくれる？」
『逃げる？どういう事なんですかクローディア大尉！？』

「いいから説明は後！」
『了解……』

―同日　１０：１６エンデバー海上空バニング機―

デルタ１からの通信が切れるとマックスは自機を動かし戦場から離脱していたが、その後を追って敵の指揮官機らしきバトルスーツが追撃を開始していた。
その様子をジェガンのコクピット内のモニターで見ていたバニングは思わずうめき声を上げていた。

「……やはり、敵の標的はマックスか……」

―同日　同時刻　ミリア機コクピット―

一方ミリアは、ようやく見つけた“凄腕”が逃走を図るのを見て直ちに追撃体制に入り、ミサイルを乱射したもののことごとく回避されてしまい、揚げ句の果てに“凄腕”に後ろを取られていた。

「私の後ろに付いただと……ふざけるな！」

ミリアはコクピット内で叫ぶと、直ちにフルスロットルで“凄腕”から離れ、相手の攻撃を回避しつつマクロスの方向へと進路を取っていた……

第17話―パラダイス・ロスト―（その6）（後書き）

ミリアはついにライバル（…そう言っていいのか？）であるマックスと対戦……

原作通りの展開になるかどうか、是非ご期待下さい！

次回、輝の入院先にミンメイがお見舞いにやって来ますが……

そして、閉じ込められた古代と未沙は……

第17話―パラダイス・ロスト―（その7）

―同日　10：15　マクロス艦内中央病院―

「なんかメインブリッジが大変な事になってるな…森さん大丈夫なんだろうか？」

病室で輝が上を見上げながら呟いていた。先程から艦内放送が流れっぱなしでケーキがどうの、古代の事がどうのとユキと三人娘の会話がそのまま流れた上に、モンシアとの口論まで流されたので、輝としてはユキは勿論の事、大会議室にいるであろう古代の事（輝はこの時点で古代と未沙が一緒に閉じ込められている事は知る由も無かったが…）を心配していた。そんな輝をよそに、ベッドの上ではミー君が動じずに朝寝を決め込んでいた。

「しかし…こんな状況で良く寝てられるよなミー君は…」

輝がそう呟いた時、病室にミンメイが息を弾ませてやって来た。

「ミンメイ！どうしたんだよ？」

「はあ～やっと着いた！来る途中フォーメーションに危うく巻き込まれそうになったけど、どうにかたどり着いたわ……あら輝、いつ猫なんか飼い始めたの？」

「ああ、この猫はヤマトの佐渡先生の猫でね、ミー君って言うんだ。飼い主に似て酒好きでね…」

「アハハッ！面白いじゃない酒好きの猫なんて～！」

輝の話を聞いたミンメイは思わず吹き出し、ベッドの上のミー君を

撫で回していた。

「それよりどうして僕が入院してるって知ったの？」

「それがね、今撮ってる映画の撮影現場に古代さんと早瀬さんが来てくれて…」

「え？古代先輩と早瀬大尉が？妙な取り合わせだなそれは……」

ミンメイの発言に、輝は意外な反応を見せていた。普通なら古代の隣には必ずユキがいるのに、今回何故未沙が一緒なのか皆目見当も付かなかった。

そんな中、空襲警報が突然鳴り響き、クローディアの声で警告がなされていた。

『敵バトルスーツ1機が艦内に侵入しました！市民の皆さんは至急避難して下さい！』

その放送を聞くや輝は思わずベッドから飛び起きていた。

「何だって！ちょっと様子を見てくる！ミンメイはここにいてくれ！」

「ちょっと輝！どこ行くのよ！？」

ミンメイが病室の外に出ようとする輝を止めようとした所に、佐渡がやって来て鉢合わせ状態になった。

「こら一条、どこ行くんじゃ！」

「ああ先生…ちょっと様子を見に行きますんで、ミンメイの事を頼みます！」

輝が病室から出て行くのを憮然とした表情で見送った佐渡は半ば呆

れながら呟いていた。

「全くなんちゅう奴じゃ！無鉄砲な所は、昔の古代そっくりじゃ！」

「えっ…古代さんってそんな所があったんですか！？あの人とてもそんなふうには見えませんけど…？」

ミンメイが驚きの表情で呟くと、佐渡は昔を懐かしむように語り始めた。

「お前さんが知らんのも無理ないわい…古代は今でこそ落ち着いてはいるが、昔はあんなもんじゃなかった…上官に盾突いたり、命令違反や喧嘩はするやらとんでもない男じゃった…」

「私、全然知りませんでした…古代さんがそんな態度を取っていたなんて…」

「フォッカーも言っとった…“輝を見てると昔の古代を思い出す”とな…」

―同日　１０：１９　マクロス艦内―

その頃、閉鎖区域に閉じ込められたままの古代と未沙は、何も出来ないままただ時間だけが過ぎて行った。そんな中、未沙が不安気に呟いていた。

「これからどうなるんでしょうね私達…」

「急にどうしたんだ早瀬君？」

「今回の作戦だってどうなるか分からないのに、この状態でゼントラーディの基幹艦隊が侵攻して来たらと思うと…」

「大丈夫だ、何とかなるさ…」

古代は未沙を安心させるように諭していたが、当の彼女はそれでも不安な気持ちで溢れていた。

「確かにそう思いたくなりますけど…でももしそうなったら、古代さんとユキさんだって助からないかも知れないんですよ…」

「……俺達はこれまで何度も死ぬような思いをした…だけど今回も何とかなると俺は信じている…」

「これまではそうでしたけど…でも今のヤマトはワープも出来ず、切り札の波動砲も撃てないんですよ！このマクロスだって重力制御システムは相変わらず不調だし、メインエンジンだってやっと動いてる状態だと言うのに…そんな状況で私達、どうやってあのゼントラーディの大艦隊と戦えばいいんですか…？」

未沙は堪え切れずに涙を流し始め、古代はどうする事も出来ずただ彼女を見つめる他無かった。

その時、二人が閉じ込められている区域の上をミリアのバトルスーツが、マックスのバルキリーに追われる形で通過すると、古代はその爆風から未沙を庇うように覆い被さっていた。

爆風が収まると古代は身を起こし、未沙に問い掛けていた。

「大丈夫か早瀬君？」

「はい…何とか…」

未沙はそう言ったものの、目前の古代の顔を見るなり思わず自分の唇を彼の唇に重ねていた。当の古代は驚きのあまり、しばらく動く事が出来る状態ではなかった。

（……！何やっているんだ早瀬君…さっきまで俺達の事を心配していたのに…何故だ？）

古代がそう思っているのも知らず未沙はふと我に返り、呟いていた。

「……ごめんなさい…今の事は忘れて下さい…」

第17話―パラダイス・ロスト―（その7）（後書き）

劇中、未沙が古代に自分からキス……

今後の展開としては面白いものになりそうな予感…
（……と言っても大した事にはならないと思いますが…）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4770v/

銀河伝説―鋼鉄の咆哮―

2011年12月17日08時46分発行